秋田県文化財調査報告書第329集

大 平 遺 跡

―日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ―

２００１・10

秋田県教育委員会

大平遺跡

おおひらいせき

— 日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ —

２００１・10

秋田県教育委員会

1　空中写真（北→）

2　空中写真（南→）

1　空中写真（西→）

2　空中写真（真上から）

序

本県にはこれまで発見された約4,500カ所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や文化を理解し、未来を展望した香り高い文化を育んでいくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車をはじめとする高速交通体系の整備は、ゆとりと活力に満ちた新しいふるさと秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。

本教育委員会では、これら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保護し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、日本海沿岸東北自動車道建設に先立って、平成11年度に秋田市・昭和町で実施した大平遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査では、縄文時代中期後半と奈良時代末～平安時代初めの集落跡が見つかり、当時の人々の生活の一端などが明らかになっております。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本書の刊行にあたり、ご協力をいただきました日本道路公団東北支社秋田工事事務所、秋田市教育委員会、昭和町教育委員会など関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成13年10月

秋田県教育委員会

教育長　小　野　寺　清

例　　言

1．本報告書は、日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本報告書は、1999年(平成11年度)に調査された秋田市・昭和町に所在する大平遺跡の調査結果を収めたものである。なお、本遺跡は平成６年に発掘調査が実施され、報告書が刊行されている(秋田県文化財調査報告書第264集『秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－大平遺跡－』 1996 秋田県教育委員会)。

3．調査の内容については、すでにその一部が報告会資料・年報などによって公表されているが、本報告書を正式なものとする。

4．本報告書に使用した空中写真は、株式会社ハイマーテックに依託し、撮影したものである。

5．第５章「自然科学的分析」は、第１節「樹種同定」をパリノ・サーヴェイ株式会社に依託した報告であるが、遺構の名称など一部を補訂している。

6．本報告書の作成にあたり、以下の方々からご教示をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・所属は平成12年度のものである）

秋田城跡発掘調査事務所　日野久、秋田市佐竹資料館　石郷岡誠一

7．本報告書の草稿執筆は、下記のように分担したが、加筆は柴田陽一郎・児玉準・松本昌樹が行った。

第１章……松本昌樹
第２章……藤原有希
第３章……松本昌樹
第４章　第１節……松本昌樹・伊藤攻・小西秀平・伊藤一彦・奥山寛人
小塚裕姫子・永澤智子
第４章　第２節……柴田陽一郎
第６章……柴田陽一郎

8．本報告書の編集は、柴田と松本が行った。遺物写真撮影は藤原堅晃が行った。

凡　　例

1．挿図中の遺構平面図・土層図・エレベーション図は縮尺40分の１を原則としたが、炉・カマドについては20分の１とした。また、土器・剥片石器の平面図・断面図は、縮尺２分の１を原則としたが、石鏃は等倍とした。なお、それぞれの図にスケールを付した。

2．遺構番号は、その種類ごとに略記号を付し、検出順に全て通し番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。なお、遺構には下記の略記号を使用した。

ＳＩ----竪穴住居跡	ＳＫＩ----竪穴状遺構	ＳＢ------掘立柱建物跡
ＳＫ----土坑	ＳＫＦ----フラスコ状・袋状土坑	ＳＮ------焼土遺構
ＳＤ----溝跡	ＳＲ------土器埋設遺構	ＳＫＰ----柱穴様ピット
ＳＸ----性格不明遺構		

なお、遺構図面中に記したＰは竪穴住居跡・竪穴状遺構・掘立柱建物跡にともなう柱穴、ＲＰは土器、ＲＱは石器・剥片、Ｓは礫を示している。

3．土層番号に用いた数字は、ローマ数字を遺跡基本層位に、算用数字を遺構土層に使用して区別した。

4．本報告書に使用した地図は、国土地理院発行の5万分の1『五城目』と2万5千分の1『大久保』、日本道路公団提供の１千分の１の地形図である。

5．遺跡基本層位と遺構中の土色、土師器・須恵器の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』1994版によった。

6．挿図中の遺物番号は、遺構内外の出土を問わず、また土器、石器を問わず、すべて通し番号を付してあり、その番号は挿図の遺物番号と対応している。また、挿図番号は文章や表中で「第１図１」を「１－１」と略記したものもある。

また、遺物実測図の真下に記しているアルファベットと算用数字の組み合わせは、グリッド名もしくは遺構名を表わしている。

目　　次

巻首図版
序
例言
凡例
目次
表目次、
挿図目次、図版目次
第１章　はじめに
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査要項 …… 1
第２章 遺跡の立地と環境
　第１節　遺跡の位置と周辺地形 …… 5
　第２節　周辺の遺跡 …… 5
第３章　発掘調査の概要
　第１節　遺跡の概観 …… 12
　第２節　調査の方法 …… 12
　第３節　調査の経過 …… 13
第４章　調査の記録
　第１節　基本層序 …… 17
　第２節　検出遺構と遺物
　　1　縄文時代～弥生時代
　　（1）竪穴住居跡 …… 18
　　（2）土坑 …… 22
　　（3）フラスコ・袋状土坑 …… 23
　　（4）焼土遺構 …… 24
　　（5）土器埋設遺構 …… 28
　　2　奈良時代～平安時代
　　（1）竪穴住居跡 …… 28
　　（2）土坑 …… 54
　　（3）竪穴状遺構 …… 59
　　（4）焼土遺構 …… 60
　　（5）土器埋設遺構 …… 61
　　（6）掘立柱建物跡 …… 61
　　（7）溝　跡 …… 61
　第３節　遺構外出土遺物
　　（1）縄文時代 …… 63
　　（2）縄文時代後半～弥生時代の土器 …… 63
　　（3）奈良時代～平安時代の土器 …… 64
　　（4）中世の遺物 …… 64
第５章　自然科学的分析
　第１節　大平遺跡から出土した炭化材の樹種 …… 92
第６章　まとめ …… 96
報告書抄録

挿図目次

第１図　大平遺跡位置図
第２図　大平遺跡調査範囲図
第３図　遺跡周辺地形図
第４図　遺跡周辺地質図
第５図　周辺遺跡図
第６図　遺跡基本土層図
第７図　ＳＩ18竪穴住居跡
第８図　ＳＩ18遺跡分布図、炉
第９図　ＳＩ21竪穴住居跡・遺跡分布図
第10図　ＳＩ22竪穴住居跡・SN54焼土遺構
第11図　ＳＩ27竪穴住居跡
第12図　ＳＩ46・50竪穴住居跡
第13図　ＳＩ52竪穴住居跡・炉
第14図　ＳＫ34・36・51・ＳＫＦ23・48土坑
第15図　ＳＮ05・06・07・08・09・10
　　焼土遺構
第16図　11・53・28焼土遺構、
　　ＳＲ49土器埋設遺構
第17図　遺構内出土遺物（１）
第18図　遺構内出土遺物（２）
第19図　遺構内出土遺物（３）
第20図　縄文時代遺構外出土遺物（１）
第21図　縄文時代遺構外出土遺物（２）
第22図　縄文時代遺構外出土遺物（３）
第23図　縄文時代遺構外出土遺物（４）
第24図　縄文時代遺構外出土遺物（５）
第25図　縄文時代遺構外出土遺物（６）
第26図　縄文時代遺構外出土遺物（７）
第27図　縄文時代晩期末～弥生時代遺構外
　　出土遺物
第28図　ＳＩ01竪穴住居跡
第29図　ＳＩ04竪穴住居跡
第30図　ＳＩ04竪穴住居跡カマド、炭化材
　　出土状況
第31図　ＳＩ12竪穴住居跡
第32図　ＳＩ12カマド
第33図　ＳＩ20竪穴住居跡、カマド分布図
第34図　ＳＩ20カマド
第35図　ＳＩ25竪穴住居跡、カマド
第36図　ＳＩ44竪穴住居跡
第37図　ＳＫ13土坑
第38図　ＳＫ17・19・24・33・38土坑
第39図　ＳＫ35・37土坑、ＳＮ42焼土
　　遺構、ＳＲ29・32土器埋設遺構
第40図　ＳＫ39・40・41土坑
第41図　ＳＫ43・45・47土坑
第42図　ＳＫＩ02・03竪穴状遺構
第43図　ＳＢ03建物跡
第44図　ＳＤ31・55・56溝跡
第45図　古代遺構内出土遺物（１）
第46図　古代遺構内出土遺物（２）
第47図　古代遺構内出土遺物（３）
第48図　古代遺構内出土遺物（４）
第49図　古代遺構内出土遺物（５）
第50図　古代遺構外内出土遺物（１）
第51図　南斜面の沢
第52図　北東斜面の沢

表目次

第１表　周辺遺跡一覧表（１）
第２表　周辺遺跡一覧表（２）
第３表　柱穴様ピット一覧（１）
第４表　柱穴様ピット一覧（２）
第５表　樹種同定結果

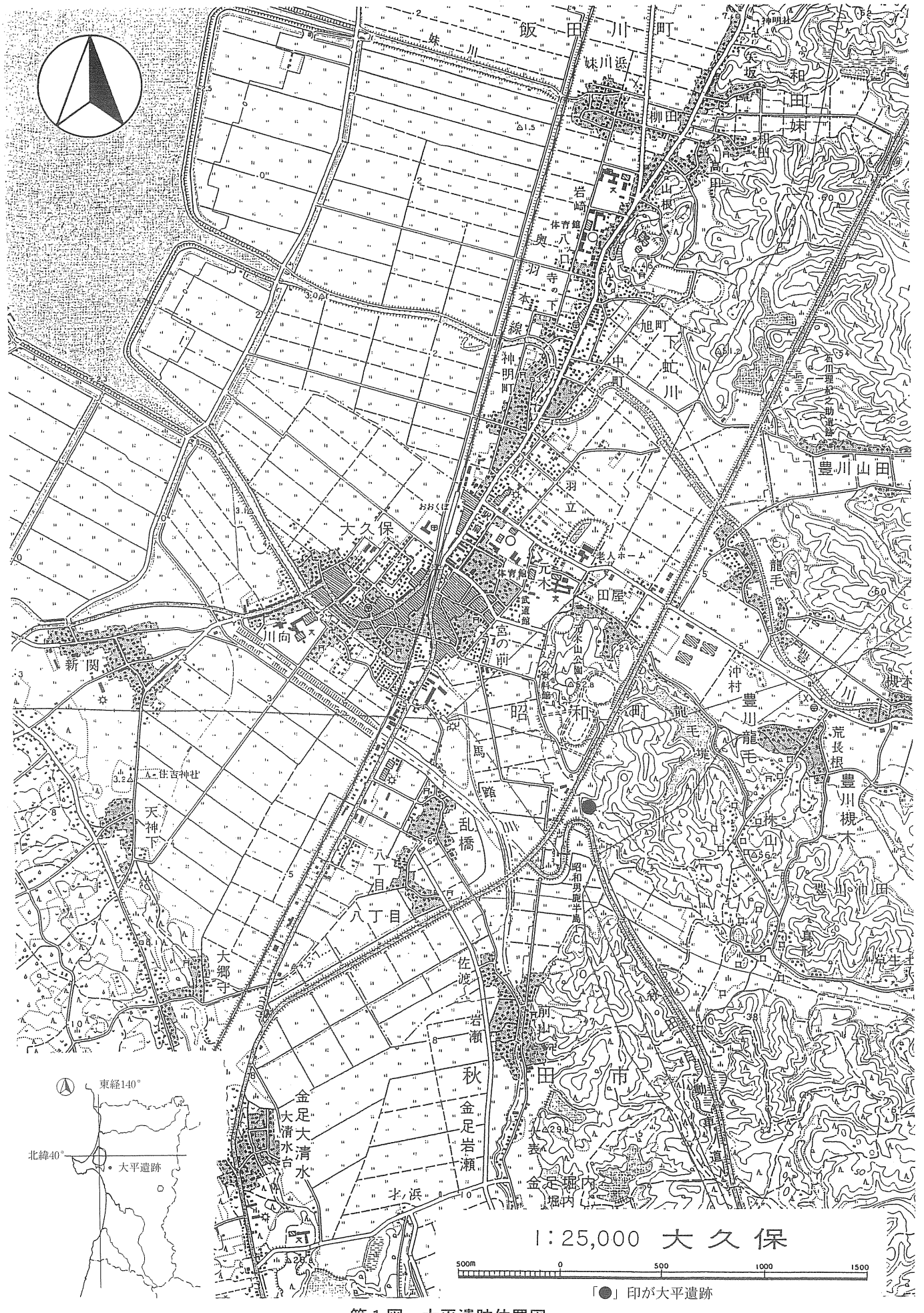
図版目次

巻頭図版１　１．空中写真（北→）
　　２．空中写真（南→）
巻頭図版２　１．空中写真（西→）
　　２．空中写真（真上から）

図版１　１．調査区遠景（北→）
　　２．調査区遠景（南→）
図版２　１．調査区南全景（南東→）
　　２．作業風景（北西→）
図版３　１．ＳＩ18　完掘（北→）
　　２．ＳＩ18　炉確認（南→）
　　３．ＳＩ18　石囲炉・土器埋設
　　状況（南西→）
　　４．ＳＩ18　炉断面（南→）
　　５．ＳＩ18　出土土器（南→）
図版４　１．ＳＩ18　完掘（北→）
　　２．ＳＩ18　焼土半裁途中（東→）
　　３．ＳＩ18　焼土断面（西→）
　　４．ＳＩ18　焼土炉断面（西→）
　　５．ＳＩ18　焼土炉完掘（西→）
図版５　１．ＳＩ21　完掘（南→）

2．ＳＩ21　土層断面（東→）
3．ＳＩ21　土層断面（東→）
4．ＳＩ21　焼土確認（南北→）
5．ＳＩ21　焼土断面（東→）
図版６　1．ＳＩ27　完掘（北→）
2．ＳＩ27　確認（南→）
3．ＳＩ27　北西断面（南→）
4．ＳＩ27　炉（南→）
図版７　1．ＳＫＩ03　完掘（西→）
2．ＳＫＩ03　確認（西→）
3．ＳＫＩ03　土層確認（西→）
4．ＳＫＩ03　床面焼土（北→）
図版８　1．ＳＫＩ02　完掘（西→）
2．ＳＫＩ35　完掘（南東→）
図版９　1．ＳＩ46　完掘（東→）
2．ＳＩ46　土層断面（東→）
3．ＳＩ50　炉（南→）
図版10　1．ＳＫ43　完掘（南→）
2．ＳＫ34　土層断面（南東→）
3．ＳＫ34　完掘（南東→）
4．ＳＫ36　土層断面（北→）
5．ＳＫ36　完掘（北→）
6．ＳＫＦ37　土層断面（東→）
7．ＳＫＦ37　完掘（南東→）
8．ＳＫ48　土層断面（南→）
図版11　1．ＳＫ48　完掘（南→）
2．ＳＫ51　土層断面（東→）
3．ＳＫ51　完掘（東→）
4．ＳＫＦ23　土層断面（東→）
5．ＳＫＦ23　完掘（東→）
6．ＳＫ49　完掘（南→）
7．ＳＲ49　土器検出（南→）
8．ＳＲ49　土層断面（南→）
図版12　1．ＳＮ05　土層断面（東→）
2．ＳＮ07　埋石状況（東→）
3．ＳＮ08　土層断面（北→）
4．ＳＮ09　埋石状況（北→）
5．ＳＮ10　土層断面（北→）
6．ＳＮ11　土層断面（南西→）
7．ＳＮ11　土器状況（南→）
8．ＳＮ11　完掘（南→）
図版13　1．ＳＩ01　完掘（北東→）
2．ＳＩ01　確認（南西→）
3．ＳＩ01　土層断面（西→）
4．ＳＩ01　炭化材・焼土（北→）
図版14　1．ＳＩ64　完掘（北→）
2．ＳＩ04　確認（南西→）
3．ＳＩ04　完掘（南東→）
4．ＳＩ01　炭化材・焼土（北東→）
5．ＳＩ04　甕（東→）
図版15　1．ＳＩ12　完掘（南→）
2．ＳＩ12　確認（南→）
3．ＳＩ12　土層断面（北→）
4．ＳＩ12　カマド土器出土状況（南西→）
5．ＳＩ12　カマド完掘（西→）
図版16　1．ＳＩ20　完掘（北西→）
2．ＳＩ20　土層断面（南東→）
3．ＳＩ20　土層断面（北→）
4．ＳＩ20　カマド内土器出土状況（南→）
5．ＳＩ20　カマド内須恵器（南東→）
図版17　1．ＳＩ25　完掘（真上）
2．ＳＩ25　確認（西→）
3．ＳＩ25　土層断面（南西→）
4．ＳＩ25　カマド完掘
5．ＳＩ25　焼土（南→）
図版18　1．ＳＩ44　完掘
2．ＳＩ44　確認（西→）
3．ＳＩ44　土層断面（南→）
4．ＳＩ44　完掘（東→）
5．ＳＩ44　完掘（北→）
図版19　1．ＳＫ17　完掘（北→）
2．ＳＫ17　半裁（北→）
3．ＳＫ19　完掘（南→）
4．ＳＫ33　完掘（西→）
5．ＳＫ24　完掘（北→）
6．ＳＫ24　半裁（南→）
7．ＳＫ38　完掘（北→）
8．ＳＫ38　土層断面（北→）
図版20　1．ＳＫ39　完掘（北西→）
2．ＳＫ39　完掘（北西→）
3．ＳＫ　完掘（東→）
4．ＳＫ41　炭確認（南→）
5．ＳＫ40　完掘（北→）
6．ＳＫ43　完掘（南→）
7．ＳＫ45　完掘（東→）
8．ＳＫ47　完掘（南→）

図版21　1．ＳＢ30　柱穴と溝（西→）
2．ＳＤ30　土層断面（東→）
3．ＳＲ29　埋設土器（北→）
4．ＳＲ29　埋設土器完掘（真上）
図版22　1．ＳＲ32　確認（西→）
2．ＳＲ32　土層断面（西→）
3．ＳＮ28内ピット（東真上→）
4．ＳＮ28　土層断面（南東→）
5．ＳＮ42　確認（南東→）
6．ＳＮ42　土層断面（北→）
7．ＳＤ16　土層断面（北→）
8．ＳＤ14　須恵器出土状況（北東→）
図版23　1．縄文時代遺構内出土遺物（1）土器
2．縄文時代晩期末～弥生時代遺構外出土遺物　土器
図版24　縄文時代遺構内出土遺物（2）土器
図版25　縄文時代遺構内出土遺物（3）石器
図版26　縄文時代遺構外出土遺物（1）土器
図版27　縄文時代遺構外出土遺物（2）石器
図版28　縄文時代遺構外出土遺物（3）石器
図版29　縄文時代遺構外出土遺物（4）石器
図版30　縄文時代晩期末～弥生時代遺構外遺物土器
図版31　古代遺構内出土遺物　土器・石器
図版32　古代遺構内・遺構外出土遺物　土器
図版33　古代遺構外出土遺物　土器
図版34　炭化材（1）
図版35　炭化材（2）
図版36　炭化材（3）


飯田川町
妹川
妹川浜
柳田
和町
妹
岩崎
体育館
八ツ口
奥羽本線
寺の下
神明町
旭町
下虹川
中町
羽立
大久保
元木
老人ホーム
田屋
武道館
宮の前
川向
新関
元木山公園
昭和
馬場川
乱橋
八丁目
天神下
大郷寺
佐渡
岩瀬
秋田市
金足大清水
大清水台
金足岩瀬
北浜
金足堀内
堀内
昭和男鹿半島
前山
表
豊川山田
龍毛
沖村
豊川龍毛
荒長根
豊川槻木
株山
豊川沖田
真形
生子
住吉神社
東経140°
北緯40°
大平遺跡
1:25,000 大久保
500m
0
500
1000
1500
「●」印が大平遺跡

第１図　大平遺跡位置図

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

秋田市内の交通混雑の解消、高速交通体系の形成、交通量増加に伴う国道沿線の生活環境の改善等のため、建設省東北地方建設局秋田工事事務所から秋田外環状道路の建設計画が提示された。それにしたがって、昭和61年４月、秋田市上北手古野から昭和町豊川龍毛にかけて26.2kmの路線が決定された。路線決定の後、秋田県教育委員会ではルート上での遺跡分布調査および範囲確認調査を行い、６カ所の遺跡を確認した。大平遺跡を含む上新城道川から金足岩瀬のルート北側については、昭和63年度から平成元年度に分布調査ならびに範囲確認調査を行った。そのうちの１カ所が大平遺跡であり、計画路線上最北端の遺跡である。本遺跡については、平成元年の範囲確認調査の結果、11,500㎡の範囲を確定した。その後、平成６年に遺跡範囲のうち工事に係る西端部分1,300㎡を発掘調査した(第１次発掘調査)。

その後、平成９年、秋田外環状道路は東北横断自動車道に直結し、秋田自動車道と名称変更され、同年11月秋田南～昭和男鹿半島間(25.7km)の開通に至った。

一方、昭和男鹿半島ＩＣ以北は、日本海沿岸東北自動車道として平成３年12月に整備計画区間となり、平成５年12月に実施計画が認可された。その後２度の実施計画の変更を経て、平成９年10月着工となった。この間、先に実施された第１次発掘調査対象区域に隣接する遺跡部分についても記録保存調査を行うこととした。そして、平成11年５月17日～９月10日の発掘調査を行うに至った(第２次発掘調査)。

第２節　調査要項

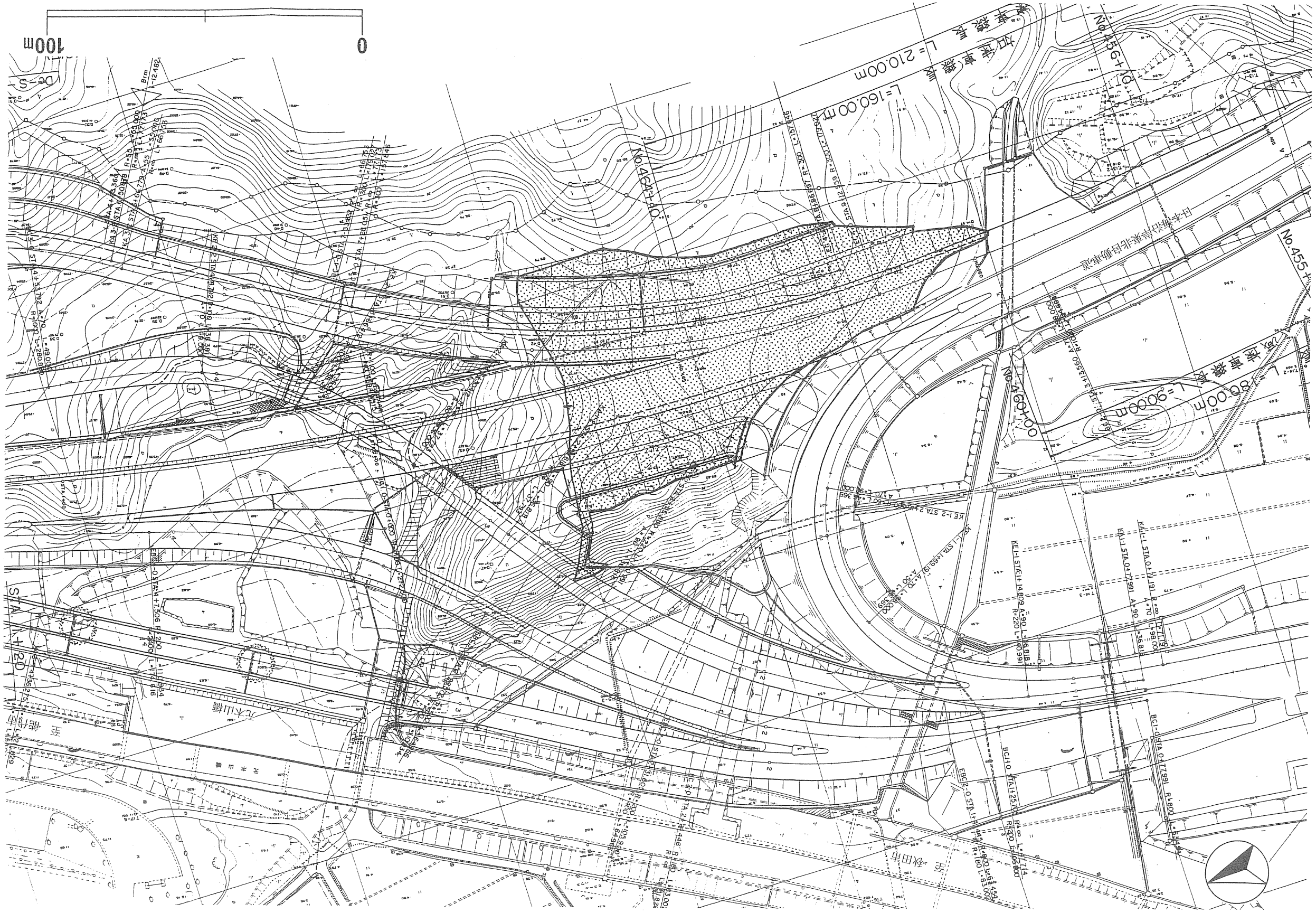
遺　跡　名	大平遺跡（おおひらいせき－略号５ＯＨ）
遺跡所在地	秋田県秋田市金足岩瀬字松館大平28－５外
調査期間	平成11年５月17日～９月10日
調査面積	6,900㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	柴　田　陽一郎　(秋田県埋蔵文化財センター調査課課長補佐兼調査第２科長)
(調査当時)	松　本　昌　樹　(秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第２科学芸主事)
	小　山　有　希　(秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第２科文化財主事)
	伊　藤　　攻　(秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第２科非常勤職員)
	伊　藤　一　彦　(秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第２科非常勤職員)
	小　塚　裕姫子　(秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第２科非常勤職員)
	小　西　秀　平　(秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第２科非常勤職員)
	永　澤　智　子　(秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第２科非常勤職員)

総務担当者	菅　原　　晃	（秋田県埋蔵文化財センター総務課主査）
（調査当時）	佐々木　敬　隆	（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）
	八文字　　隆	（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）
調査協力機関	日本道路公団秋田工事事務所	
	秋田市教育委員会	
	昭和町教育委員会	

参考文献

１．秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第200集　1989(平成元年)

２．秋田県教育委員会『秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－大平遺跡－』
秋田県文化財調査報告書　第264集　1996(平成８年)



第2図　大平遺跡調査範囲図

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の位置と周辺地形

大平遺跡は秋田市の最北端にあり、東経140°２′27″、北緯39°51′20″に位置する。八郎潟残存湖の南東部、出羽丘陵西縁で、国道７号線の東側、日本海沿岸東北自動車道昭和男鹿半島インターチェンジから北に250m付近にある。

遺跡周辺の地形は、八郎潟残存湖岸から出羽丘陵西部に向けて低地（湖岸平野）、段丘（砂礫段丘）、丘陵地、山地に分けられる。残存湖岸の低地は、琴丘町鯉川より秋田市金足まで狭長な沖積低地を形成している。低地側辺の丘陵末端部では段丘が形成されている。

遺跡の乗る丘陵は豊川丘陵と呼称され、東側ほど漸次高度を増し、俎山山地・太平山地へと続く。遺跡地は豊川丘陵の西端部にあたり、標高14～33mで、その西側は馬踏川低地となり、八郎潟干拓低地を経て、八郎潟調整地へと続く。北側の低地を豊川が、南側の低地を馬踏川が流れ、八郎潟残存湖に注ぐ。遺跡の周囲は松林、雑木林が主体で、小灌木や笹竹などが混じる。低地は水田である（第３図）。

周辺の表層地質は、新第三紀中新世の船川層(msF)、天徳寺層(slT)、鮮新世の笹岡層(msS)、第四紀更新世の潟西層(sgK)、段丘堆積物(tr)、沖積低地堆積物(ma、sa3)から構成され、このうち大平遺跡のある丘陵は更新世の泥岩から成り立っている(第４図)。

第２節　周辺の遺跡

秋田市北部から昭和町・飯田川町かけての地域には、縄文時代から中世にかけての遺跡が多く所在する(第５図、第１・２表)。第１・２表に記した地図番号は、『秋田県遺跡地図(中央版)』に準拠する。

縄文時代の遺跡では、現在元木山公園として整備されている元木山Ⅰ・Ⅱ遺跡（26-12・13）のほか、西野遺跡（26-15)、鳥巻Ⅰ・Ⅱ遺跡（26-32・33)、真形尻遺跡（26-34)、松葉沢遺跡（28-6)、上松館遺跡（1-2)、大清水台Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ遺跡（1-3・5・6）等がある。いずれも縄文時代の遺物散布地として知られる。本センターによる元木山根Ⅱ遺跡や後山遺跡の発掘調査でも縄文時代から古代にかけての遺物が出土している。

弥生時代の遺跡は、現在のところ確認されていないが、大平遺跡では弥生時代の土器片が出土しており、この地域での貴重な資料である。

古代に入ると、豊川河岸の丘陵上や馬踏川に遺跡が分布する。豊川右岸の丘陵上には西野遺跡(26-15)、深田沢遺跡(26-21)、千刈田遺跡(26-22)、塔田Ⅰ～Ⅲ遺跡(26-25～27)、槻木盛土墳(26-28)がある。槻木盛土墳は火葬墓として登録されており、須恵器片・壺・葺石が確認されている。

左岸の丘陵上には正戸尻Ⅰ・Ⅱ遺跡(26-41・42)、寸白沢遺跡(26-44)、高野遺跡(26-45)がある。馬踏川右岸には大沢遺跡(1-15)、前山Ⅰ・Ⅱ遺跡(1-9・10)、北田遺跡(1-11)、大表遺跡(1-12)、堀内遺跡(1-13)、草生土沢Ⅰ遺跡(26-38)がある。大沢遺跡では平安時代(10世紀前葉)の竪穴住居跡が１軒検出され、土師器が出土している。

大平遺跡から南約13kmには国指定史跡秋田城があり、1974年以来継続的調査がなされ、古代出羽国の歴史解明に寄与している。

中世には、古代に引き続き丘陵上に遺跡が位置し、館跡が多く確認されている。豊川流域から馬踏川流域にかけては山田館(26-20)、極楽館(26-23)、オオサカ館(26-43)、槐館(26-35)、元木館(26-14)、岩瀬館(1-8)が分布する。他によもみ(ぎ)館(1-16)がある。

中世以降になると、松館遺跡(1-1)において４基の火葬墓群が検出されている。また、昭和町には県指定史跡として登録されている石川理紀之助遺跡がある。

参考文献

１．秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第200集　1989(平成元年)

２．秋田県教育委員会　『秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－大平遺跡－』
秋田県文化財調査報告書　第264集　1996(平成８年)

３．冨樫泰時　『日本の古代遺跡24　秋田』保育社　1985(昭和60)年

４．秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図(中央版)』　1990(平成２)年

５．秋田県教育委員会　『秋田県の中世城館』　1981(昭和58)年

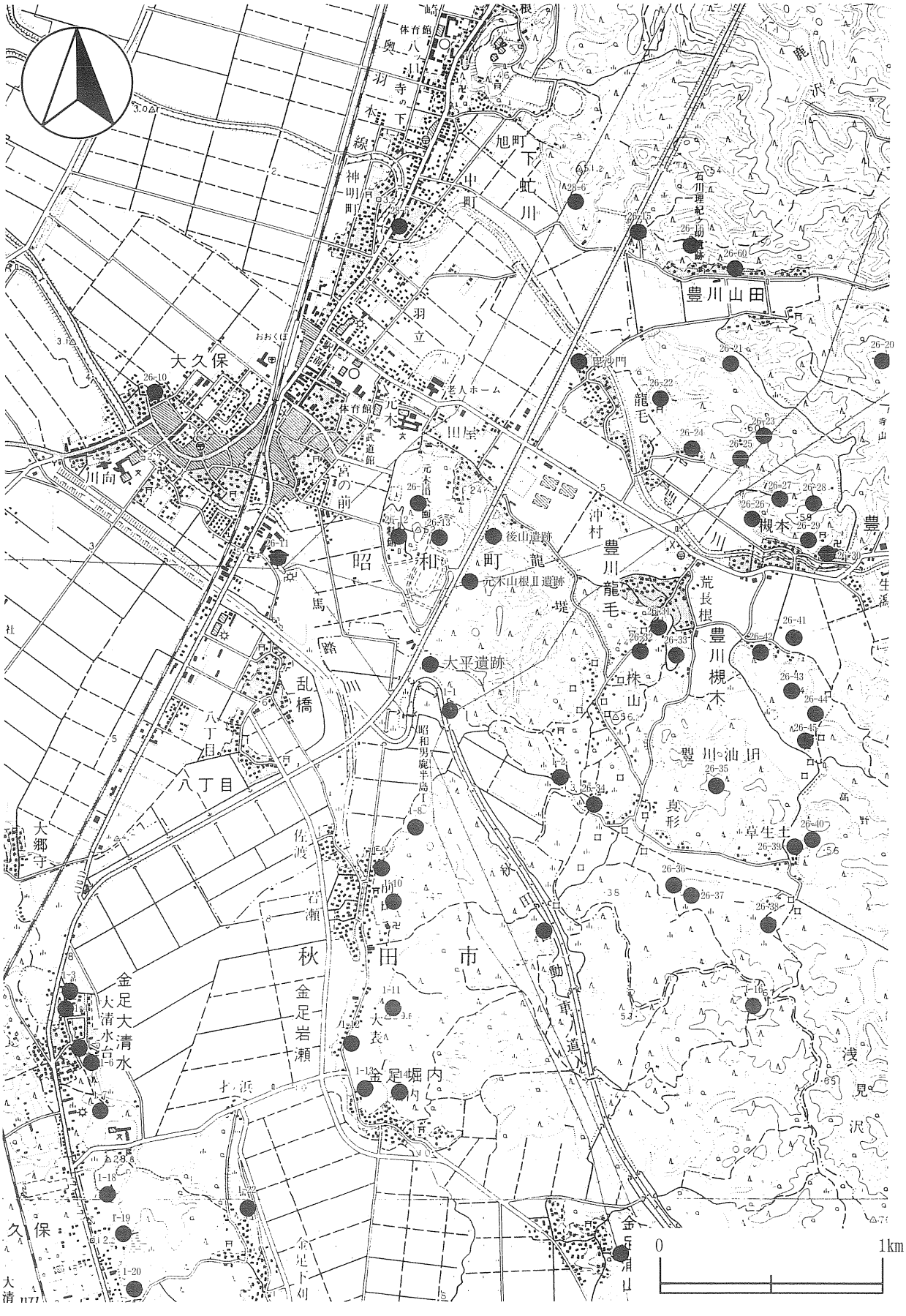
I(湖岸平野)、D(三角州)、R(干拓地)、NI(自然堤防)
Hs(丘陵地Ⅱ)、P(谷底平野)、GtⅢ⁺(砂礫段丘Ⅲ⁺)

第３図　遺跡周辺地形図

ma(泥がち堆積物)、sa3(砂がち堆積物３)、r(泥・砂および礫)、
sgK(砂礫層)、msF(泥岩)、tr(砂および礫)、slT(シルト岩)、msS(泥岩)

0　2.5km

第４図　遺跡周辺地質図


大久保
川向
昭和町
元木山
元木山Ⅱ遺跡
後山遺跡
大平遺跡
乱橋
八丁目
大郷守
金足大清水
金足岩瀬
秋田市
金足堀内
金足下刈
久保
大清
豊川山田
豊川龍毛
豊川槻木
豊川油田
荒長根
株山
真形
草生土
槻木
浅見沢
0
1km

第５図　周辺遺跡図

地図番号	遺跡名	所在	種別	遺構・遺物
秋田市				
１－１	松館	秋田市金足岩瀬字松館大平	館跡	帯郭
１－２	上松館	秋田市金足岩瀬字上松館	遺物包含地	縄文土器
１－３	大清水台Ⅰ	秋田市金足大清水字大清水台73・74・75	遺物包含地	縄文土器
１－４	大清水台Ⅱ	秋田市金足大清水字大清水台63・64・65	遺物包含地	縄文土器、須恵器
１－５	大清水台Ⅲ	秋田市金足大清水字大清水台49	遺物包含地	縄文土器
１－６	大清水台Ⅳ	秋田市金足大清水字大清水台52	遺物包含地	縄文土器
１－７	大清水台Ⅴ	秋田市金足大清水字大清水台	遺物包含地	縄文土器、石鏃、土師器
１－８	岩瀬館	秋田市金足岩瀬字佐渡沢	館跡	
１－９	前山Ⅰ	秋田市金足岩瀬字前山７	遺物包含地	須恵器
１－10	前山Ⅱ	秋田市金足岩瀬字前山	遺物包含地	須恵器
１－11	北田	秋田市金足岩瀬字北田	遺物包含地	須恵器
１－12	大表	秋田市金足岩瀬字大表	遺物包含地	須恵器
１－13	堀内	秋田市金足堀内字神田	遺物包含地	須恵器、赤褐色土器
１－14	堀内館	秋田市金足堀内字堀内、神田	館跡	空掘
１－15	大沢	秋田市金足岩瀬字大沢	遺物包含地	縄文土器、赤褐色土器
１－16	よもみ(ぎ)館	秋田市金足浦山字水上沢	館跡	空掘、土塁
１－18	北野Ⅱ	秋田市金足下刈字北野	遺物包含地	赤褐色土器
１－19	北野Ⅰ	秋田市金足下刈字北野	火葬墓 遺物包含地	縄文土器、土師器、須恵器
１－20	北野Ⅲ	秋田市金足下刈字北野	遺物包含地	縄文土器、瓦
１－22	下刈館	秋田市金足下刈字館越	館跡	珠洲系土器
１－23	蟹沢	秋田市金足浦山字水蟹沢	遺物包含地	須恵器、赤褐色土器
１－27	片田館	秋田市金足片田字待入、黒川字カフラ沢	館跡	
昭和町				
26－10	町後碑	昭和町大久保字町後7	板碑	碑(高57cm、幅42cm、厚24cm) 応永20年
26－11	下畑	昭和町乱橋字下畑115	遺物包含地	須恵器片
26－12	元木山Ⅰ	昭和町大久保字元木山根Ⅰ	遺物包含地	縄文土器片(後期)、土師器、須恵器片
26－13	元木山Ⅱ	昭和町豊川龍毛字開沢	遺物包含地	縄文土器片(後期)、土師器、須恵器片
26－14	元木館	昭和町豊川龍毛字開沢	館跡	
26－15	西野	昭和町豊川山田字家ノ上81	遺物包含地	縄文土器片(後期)、石鏃、土師器、須恵器片
26－16	下台	昭和町豊川山田字家ノ上54	遺物包含地	
26－20	山田館	昭和町豊川山田字滝の沢、砂子沢	館跡	焼米、茶臼受け皿片
26－21	深田沢	昭和町豊川山田字深田沢	遺物包含地	須恵器片
26－22	千刈田	昭和町豊川龍毛字千刈田	遺物包含地	石鏃、須恵器片
26－23	極楽館	昭和町豊川龍毛字塩辛田１、槻木字塔田、山田字深田沢	館跡	主郭、帯郭、空掘等
26－24	塩辛田	昭和町豊川龍毛字塩辛田５～８	遺物包含地	石刀
26－25	塔田Ⅰ	昭和町槻木字塔田	遺物包含地	土師器、須恵器片
26－26	塔田Ⅱ	昭和町豊川槻木字塔田60	遺物包含地	須恵器、土師器片
26－27	塔田Ⅲ	昭和町豊川槻木字塔田12	遺物包含地	須恵器片
26－28	槻木盛土墳	昭和町豊川槻木字塔田７	火葬墓	須恵器片、壷、葺石
26－29	塔田Ⅳ	昭和町豊川槻木字塔田１～２	遺物包含地	土師器片、須恵器片
26－30	大宮	昭和町豊川槻木字大富34	遺物包含地	須恵器壷
26－31	蘭戸下	昭和町豊川槻木字欄戸下53の１	遺物包含地	獣骨

第１表　周辺遺跡一覧(１)

地図番号	遺　跡　名	所　　在	種　　別	遺　構　・　遺　物
26－32	鳥　巻　Ⅰ	昭和町豊川槻木字鳥巻	遺物包含地	縄文土器片(前期、後期)、須恵器片
26－33	鳥　巻　Ⅱ	昭和町豊川槻木字鳥巻35	遺物包含地	縄文土器片(中期、後期)、鉢、アスファルト付着、鉢型土器
26－34	真　形　尻	昭和町豊川槻木字真形尻31	遺物包含地	縄文土器片(中期)、鹿、鳥類骨
26－35	槐　　館	昭和町豊川槻木字高野～真形沢	館跡	本郭、腰郭、空掘
26－36	カ ラ ス 沢	昭和町豊川槻木字カラス沢	遺物包含地	土師器片
26－37	真　形　館	昭和町豊川槻木字カラス沢、草生土沢	館跡	階段状郭、帯郭
26－38	草 生 土 沢 Ⅰ	昭和町豊川槻木字草生土沢	遺物包含地	土師器片
26－39	草 生 土 沢 Ⅱ	昭和町豊川槻木字草生土沢	遺物包含地	石匙
26－40	草 生 土 沢 Ⅲ	昭和町豊川槻木字草生土沢18	遺物包含地	五輪塔頂部、近くに糠塚
26－41	正 戸 尻 Ⅰ	昭和町豊川槻木字正戸尻62	遺物包含地	須恵器片
26－42	正 戸 尻 Ⅱ	昭和町豊川槻木字正戸尻	遺物包含地	土師器、須恵器片
26－43	オ オ サ カ 館	昭和町豊川概木字正戸尻	館跡	
26－44	寸　白　沢	昭和町豊川械木字寸白沢	遺物包含地	須恵器片
26－45	高　　野	昭和町豊川槻木字高野64	遺物包含地	須恵器片
26－60	石川理紀之助	昭和町山田	史跡	尚庵、書庫、郷倉
飯　田　川　町				
26－５	城　の　内	飯田川町下虻川字城の内84	建物跡	碑一基
26－６	松　葉　沢	飯田川町下虻川字松葉沢87	遺物包含地	縄文（中期、晩期）
26－11	鬼　王　館	飯田川町和田妹川字大宮沢５	館跡	帯郭、空掘、段築、焼米、鉄滓、唐津焼、破片、石鏃、縄文(後・晩期)土器

第２表　周辺遺跡一覧（２）

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

大平遺跡は、俎山山地から西側に伸びる豊川丘陵の先端部、標高約26m～30mに位置する。遺跡の位置する豊川丘陵は、東側に向かって漸次高度を増し、俎山山地・太平山地へと続く。遺跡は、丘陵西端部にあたり、その西側は一気に沖積平野に下る。すなわち馬踏川低地となり、八郎潟干拓低地を経て、八郎潟調整池へと続く。周辺の低地には整然とした水田が卓越している。

周辺の地形は、概して東高西低であり、河川は八郎潟調整池に向かって西流する。調査対象範囲周辺は松林・雑木林が主体で、小灌木や笹竹などが混じる。遺跡も、松林であったが、伐採されたあとは笹竹の繁茂する原野となっていた。

遺跡内の西側を秋田自動車道の北端、昭和男鹿半島ＩＣのループがカーブしながら南東から北西に走っている。このループ部分は、平成６年度に発掘調査されている。

遺跡西端部の尾根と沖積面の比高は約21～26m、遺跡南西側～西側は大きく土取りされ、西側は急崖となり、南側斜面と北側斜面はやや急な斜面となっている(第１・２図)。

平成元年度の範囲確認調査の結果から、遺跡の推定面積は約11,500㎡であるが、平成６年度調査面積1,300㎡と平成11年度調査面積6,900㎡を合計すると8,200㎡(71％)の調査が終了したことになる。

第２節　調査の方法

発掘調査はグリッド法を採用した。調査区の設定方法は、大平遺跡内に所在する日本道路公団が打設したＳＴＡ杭465（Ｘ＝－15845.1665、Ｙ＝－64932.8411）を原点とし国家座標系第Ｘ系座標北を求める。このラインを南北基線として延長し、これに直交するラインを東西基線とする。また、この東西南北の基線に沿って４ｍ×４ｍのメッシュを組み、その交点にグリッド杭を打設する。

上記のＳＴＡ杭465（標高27.426m）をＭＡ30とした。そして、グリッド杭には、東から西に向かって東西方向を表すＬＡ・・・・・・ＬＪ・ＭＡ・・・・・・ＭＪとういうアルファベットと、南から北に向かって昇順する南北方向を表す５・６・・・・・・ の数字を組み合わせた記号を記入し、４ｍ×４ｍの方眼杭の南東隅をグリッドの名称とした。

遺構の確認はできるだけ遺構の掘り込み面での検出に努めたが、地山面まで浅いところもあり、地山漸移層もしくは地山面での確認となる遺構もあった。

遺物は、遺構内出土のものは、出土遺構名・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入し、遺構外出土のものは、出土グリッド・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入したラベルとともに取り上げた。基本的に住居跡などの大規模な遺構は十字に土層観察用のベルトを残し、四分割し、土坑などの小規模な遺構は、長軸に沿って二分割して調査した。調査の記録は、主に図面と写真によった。図面は基本的には1/20の縮尺で作図したが、炉・カマドは1/10で、遺物出土状況図は1/10もしくは1/20の縮尺で作図した。写真撮影は、35㎜のモノクロとカラーリバーサルフィルムを使用した。また、遺跡全

体の俯瞰写真はラジコンヘリによる空中写真撮影によった。

室内における整理は、遺構については現場で取った平・断面図より第２原図を作成し、これをトレースし、遺物については洗浄・注記の後に実測図・拓影図の作成、写真撮影を行った。

第３節　調査の経過

５月11日　午後から昭和町役場にて作業員説明会を行った。

５月17日　職員６名で、ハウス設置状況、グリッド杭打設状況を確認した。また、資材搬入を行った。

５月18日　作業員への具体的な作業説明、安全な作業のための諸注意を行い、実質作業を開始した。事務所、器材小屋、休憩所の整備を行った。南端部斜面に１ｍ間隔でトレンチをいれた。調査区西端部は急斜面のため安全柵を設置した。

５月20日　南端部斜面のトレンチが１ｍ間隔だと排土がくずれるため、２ｍ間隔にした。通路に莚を敷いて安全を確保した。

５月21日　南端部斜面のトレンチを精査したが、遺構・遺物はなく、写真撮影を行った。ベルトコンベアー40台を設置した。

５月24日　ベルトコンベアーの稼働を開始した。ＬＦ17グリッドに四角い黒色のプランあり、そこから須恵器が出土した。ＭＣ～ＭＨ・26～30グリッドで竪穴状の落ち込みを検出。

５月26日　24日に確認した四角いプランの他に、ＬＥ～ＬＧ・17～19グリッドで方形の落ち込みを３つ検出した。

５月28日　西部、中央部のジョレンがけを行った。ＬＨ24グリッドで青磁の破片が出土した。昭和町教育委員会　瀬下社会教育主事が現場見学のため来跡した。

５月31日　ジョレンがけした部分の出土遺物をグリッドで取り上げた。遺物は須恵器片（ＬＧ26グリッドで須恵器台付きが底部のみ出土した）、縄文土器片、石器（石鏃含）である。

６月１日　ＬＦ17グリッドで検出した四角いプランをＳＫＩ01とし、ベルトを設定した。発電機が不調のため修理してもらう。

６月２日　ＳＫＩ01で焼土を検出したため、ＳＩ01に変更した。ＬＢ36グリッドに四角い黒色の落ち込みを確認し、サブトレンチをいれた。

６月３日　ＳＩ01で石鏃が出土した。ＬＥ～ＬＧ・17～19グリッドで検出した四角い落ち込み３つをそれぞれ、ＳＫＩ02、ＳＫＩ03、ＳＩ04とした。

６月４日　ＭＨ34、ＭＩ35付近で焼土を確認し、レベルを測った。大野課長補佐が現場視察のため来跡した。

６月９日　ＳＮ05、ＳＮ06、ＳＮ07、ＳＮ08、ＳＮ09、ＳＮ10を検出した。ＬＣ36グリッドから完形の石槍が出土した。

６月10日　沢を確認し、付近を掘り下げた。昭和町教育委員会　瀬下社会教育主事、教育庁文化課武藤学芸主事が現場視察のため来跡した。

６月14日　ＳＩ04から完形の水瓶と、須恵器（高台付坏）が底部のみ出土した。

６月15日　ＳＮ11を検出した。

６月18日　ＳＫＩ02の完掘写真撮影を行い、同遺構の調査を終了した。

６月21日　ＳＮ05、ＳＮ06、ＳＮ10の調査を終了した。昭和町教育委員会　瀬下社会教育主事、十文字町教育委員会　土肥稔氏他が現場視察のため来跡した。

６月22日　ＳＩ12の精査を始める。沢の砂層から須恵器破片が出土した。門間元昭和町教育長が現場見学のため来跡した。

６月23日　ＳＩ12から土師器の破片が出土した。昭和町教育委員会　瀬下社会教育主事他２名が現場視察のため来跡した。

６月25日　ＳＫＩ03で赤色顔料のサンプルを採取した。ＳＩ13を検出した。ＳＮ07、ＳＮ08、ＳＮ09の調査を終了した。能代北高校栗山教諭が遺跡見学のため来跡した。

６月28日　ＳＤ14、ＳＤ15、ＳＤ16を検出した。ＭＨ33、ＭＧ33、ＭＨ32、ＭＧ32グリッド内で丸い黒色の落ち込みを検出した。ＳＫＩ03の調査を終了した。

７月１日　ＭＧ29、ＭＨ29グリッドで丸い黒色のプランを検出した。また、ＭＥ28・29、ＭＦ28・29グリッドでも丸い黒色の落ち込みを検出した。

７月２日　ＳＮ11の調査を終了した。南端部の地山レベリングを行った。

７月５日　ＳＫ17を検出した。ＭＨ33、ＭＧ33、ＭＨ32、ＭＧ32グリッドで確認された円形プランで炉を検出し、ＳＩ18とした。

７月６日　ＳＫ17から多量の炭化物が出土したが、規模は小さく、完掘写真の撮影をして、調査を終了した。ＳＮ19、ＳＮ20を検出した。ＭＣ29グリッド内とＭＣ30グリッド内でそれぞれ方形プランを検出した。追分郵便局　谷口重光氏が遺跡見学のため来跡した。

７月７日　ＭＧ29、ＭＨ29グリッドで確認した円形プランを竪穴住居跡と判断し、ＳＩ21とした。ＭＦ26・27グリッドの不整楕円形プランをＳＸ22とした。ＳＫＦ23を検出した。ＳＤ14の調査を終了した。

７月９日　ＳＩ04で土師器の壺が出土した。ＳＫ24を検出した。

７月12日　ＭＣ29グリッドの方形プランから焼土が検出したので、ＳＩ25とした。ＳＩ12の床面から土坑を検出した。ＳＤ15の調査を終了した。

７月13日　ＬＩ26・27、ＬＪ26・27グリッドで方形の落ち込みを検出した。ＳＫＦ23からアスファルトとアスファルトの付着した石鏃が出土した。

７月14日　ＬＧ34～ＬＦ34に焼土があり、住居跡と思われたので、まわりをジョレンがけしてみた。ＬＨ34グリッドで埋設土器を検出した。また、ＳＲ26、ＳＩ27を検出した。

７月19日　ＬＨ34グリッドの埋設土器をＳＲ29とした。ＳＩ01、ＳＫＦ23、ＳＩ12に伴う土坑の調査を終了した。ベルトコンベアー15台を返却した。

７月21日　ＬＨ29グリッドで焼土を検出した。ＳＤ30を検出した。ＳＲ29の調査を終了した。

７月22日　ＳＤ31、ＳＲ32を検出した。ＳＩ12に伴う土坑をＳＫ33とした。ＳＲ26の調査を終了した。発電機が１台故障した。昭和町教育委員会　瀬下社会教育主事、羽城中学校教諭２名が翌日に行われる遺跡見学の下見のため来跡した。

７月23日　午前に羽城中学校１年生60名が遺跡見学のため来跡した。午後から三浦所長が指導のため来跡した。

７月26日　ＬＧ34～ＬＦ34で住居跡は確認できず、焼土のみと判断してＳＮ28とし、終了した。

７月27日　ＳＩ04から墨書土器が出土した。ＳＮ19には、掘り込みがあり、埋土に焼土が混入していたことが分かり、ＳＫ19に変更した。ＳＩ13、ＳＫ24、ＳＲ32の調査を終了した。ＡＢＳ秋田放送の西田亨氏が取材のため来跡した。

７月28日　ＳＫ34、ＳＫＩ35を検出した。ＳＫ19の調査を終了した。ＳＤ31がＳＩ20の周囲を回ることがわかった。道路公団職員３名が現場視察のため来跡した。

７月29日　ＳＫ36、ＳＫＦ37を検出した。ＳＩ27、ＳＫ34の調査を終了した。

７月30日　ＬＨ38～ＬＩ38グリッドで楕円形のプランを、ＬＩ29で黒色の円形プランを、ＬＧ29で焼土を検出した。また、ＳＫ38を検出した。ＳＫ36、ＳＫＦ37、ＳＫ38の調査を終了した。

８月３日　ＳＫ39を検出した。ＬＨ38～ＬＩ38グリッドの楕円形のプランは、ＬＨ38グリッドの焼土のみと判断し、終了した。

８月４日　ＳＤ30の周辺から等間隔に並んだ柱穴を検出し、掘立柱建物跡になる可能性がでてきた。ＬＩ29の円形プランをＳＫ40とし、ＳＮ20は竪穴住居跡のカマドであることを確認し、ＳＩ20に変更した。ＳＩ04、ＳＫ40の調査を終了した。

８月５日　ＬＧ29の焼土に掘り込みがあることからＳＫ41とした。

８月６日　ＬＨ38グリッドの焼土をＳＮ42とした。ＳＤ16の調査を終了した。

８月10日　ＳＫ39とＳＫ41の調査を終了した。

８月19日　ＳＩ18の石囲炉から縄文時代の深鉢形土器が、ＳＩ25北東部のカマドから完形の須恵器の坏が出土した。ＳＤ31の調査を終了した。ＬＨ29グリッドの焼土の撹乱部分には掘り込みがあることが判明したが、性格不明のためＳＸ43とした。

８月20日　ＳＩ20から大きめの土師器の破片が出土した。ＳＫＩ35の調査を終了した。船木調査課長が指導のため来跡した。

８月25日　ＳＫ45を検出した。

８月26日　ＳＩ46を検出した。ＳＫ45底部から掌大の石が６個出土したので、実測・写真撮影を行い調査を終了した。ＳＩ25、ＳＩ21、ＳＸ22の調査を終了した。

８月27日　長方形のプランを検出し、ＳＫＩ44とした。ＭＣ25グリッドから黒曜石の原石が出土した。

８月30日　ＳＫＩ44の床面から焼土を検出し、ＳＩ44と変更した。ＳＫ47を検出し、この日の内に調査を終了した。また、ＳＲ49を検出した。ＳＩ20からほぼ完形の須恵器の坏が出土した。ＬＪ41、ＭＡ41グリッドで円形のプランを検出したが、撹乱と判明した。昭和町千田町長、桜庭教育長、鈴木公民館長他１名が現場見学のため来跡した。

８月31日　ＳＩ12のカマドから底部に木葉痕のある土師器が出土した。不整円形の落ち込みを検出し、ＳＸ48とした。

９月１日　ＳＸ48を半截し、断面がフラスコ状であることを確認してＳＫＦ48と変更した。

９月２日　南側斜面から地山のレベルを測り始めた。昭和町教育委員会　瀬下社会教育主事、広報担当者１名が広報掲載の取材のため来跡した。

９月３日　ＳＩ50を検出した。ＳＩ18、ＳＩ20、ＳＢ30の調査を終了した。秋田県文化財保護協会の岩見誠夫氏と奥さんが現場見学のため来跡した。

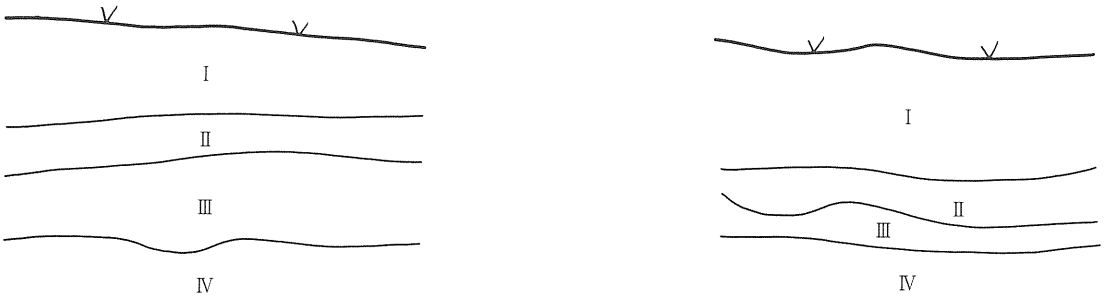
９月６日　ＳＩ12、ＳＲ49の調査を終了した。ＳＫＦ48がフラスコ状よりも袋状に近いことからＳＫ48と変更した。元木山公園管理人　鎌田氏が現場見学のため来跡した。

９月７日　ＭＣ34グリッドでピット状の落ち込みを検出した。ＳＩ46とＳＫ48の調査を終了した。現場の休憩所、ローリングタワーを解体した。堂の下遺跡へ範囲確認調査用器材を運搬した。

９月８日　ベルトコンベアー17台を現場から撤去した。

９月９日　ＳＸ43、ＳＩ44、ＳＩ50の調査を終了した。また、ＭＣ34グリッドのピット状の落ち込みを半截した結果、土坑と判断し、ＳＫ51として調査を終了した。基本土層を２カ所で測った。航空写真撮影のため、調査区をジョレンがけした。

９月10日　空中写真撮影や発掘資・器材を雄和収蔵庫や埋蔵文化財センターに搬出した。午後から、各方面へ発掘調査が終了したことと、調査への協力のお礼を兼ね挨拶して回った。



1　黒(10ＹＲ2/1)　しまりあり、粘性なし
2　黒褐色(10ＹＲ3/2)　しまりあり、粘性なし、(10ＹＲ4/6)の土が混入
3　黒褐色(10ＹＲ2/2)　しまりあり、粘性なし、遺物包含層
4　明黄褐色(10ＹＲ6/8)　しまりやや強、粘性なし、一部灰黄色(2.5Ｙ7/2)の土混入

第６図　遺跡基本土層図

第４章　調査の記録

第１節　基本層序

調査区の基本層序は、調査境界に設定したトレンチなどから、以下のように観察できた。(第４図)

第Ⅰ層　黒色土(10ＹＲ2/1):しまりの弱いシルト質の表土である。草木の影響を強く受けていて腐植含有量の多い黒ボク土壌である。層厚は、15～35cmである。

第Ⅱ層 黒褐色土(10ＹＲ2/2):しまりの弱いシルト質土である。腐植含有量の多い黒ボク土壌である。平安時代の土師器片・須恵器片を含む。層厚は、0～25cmである。斜面下位では、地山粒の混入するところがある。調査区南部では拳大から人頭大の礫が多量に混入する。また、調査区中央北側の稜線上では欠落する。

第Ⅲ層　黒褐色土(10ＹＲ3/3):しまりのやや弱いシルト質土である。腐植含有量のやや少ない黒ボク土壌である。上位に縄文時代の土器・石器を含む。層厚は、0～40cmである。調査区中央北側の稜線上では欠落する。一方、斜面遷移点付近では厚くなる。

第Ⅳ層 明黄褐色土(10ＹＲ6/8):しまりの強い粘土質の地山である。

第２節　検出遺構と遺物

本調査で検出された遺構は、縄文時代中期後半の竪穴住居跡６軒、土坑３基、フラスコ状・袋状土坑２基、土器埋設遺構１基、焼土遺構９基、柱穴様ピット７基と奈良時代末～平安時代前半の竪穴住居跡５軒、竪穴状遺構２基、掘立柱建物跡１棟、土坑14基（このうち土器焼成遺構２基)、溝跡３条、焼土遺構１基、土器埋設遺構１基である。縄文時代晩期末～弥生時代の遺構は竪穴住居跡１軒、土器埋設遺構１基である。

なお、柱穴だけの検出であっても、竪穴住居に伴うと判断されたものは竪穴住居跡として扱っている。また、柱穴様ピットは、建物跡に伴うと判断できなかったものについては記述を省略、一覧表にして掲載した。

縄文時代中期後半の遺構は調査区の中央部北よりの稜線上を中心に広がるが、狭い範囲で、調査区全体の10分の１にすぎない。古代の遺構は上述の稜線からやや下った緩やかな斜面に広がり、その分布範囲も調査区全体の５分の１程度とやや広くなっている。

遺物は、第Ⅱ層および同面を構築面とする遺構覆土中から古代の土器が、第Ⅲ～Ⅳ層および同面を構築面とする遺構覆土中から縄文時代中期の土器・石器が出土した。しかし、遺構は、検出面まで浅いため、樹木によって撹乱されていたり、斜面のために一部または大部分が流失したりしていた。また、遺物も、撹乱や風雨の影響を受けている上、斜面のため流出し再堆積していたものが多かった。

なお、遺構ではなく自然地形であるが、南側と北東側斜面の２個所で自然の沢が検出されたのでこの項で概略を記す。

南斜面の沢は当初、ＳＤ14溝跡として調査していたが、途中で自然の沢であると判明したものである。

長さ64.0m、最小幅4.5m、最大幅13.8m、深さ0.4mで、南西側に下るにしたがって幅を増していきながら自然と消滅する。埋土の１・２層は小石を含み、３層はグライ化し灰色埋。を帯びた粘土層で、４層は砂質土となる。３層から平安時代の須恵器坏が出土している事から、平安時代にはこの沢が形成されていたと推定される。

南東斜面の沢は当初、ＳＤ16溝跡として調査していたが、途中で自然の沢であると判明したものである。長さ25.6㎜、最小幅3.5m、最大幅14.0m、深さ0.5mで、北側に下るにしたがって幅を増していきながら自然と消滅する。埋土は全体的に地山粒子を若干含む層が多く、２・５層は砂を含む為締まりが無い。遺物が出土しなかったことからこの沢が形成された時期は不明である。

１　縄文時代～弥生時代

(1)竪穴住居跡

ＳＩ18　竪穴住居跡(第７図)

〈位　　置〉ＭＧ32・33、ＭＨ32・33グリッドに位置する。

〈確　　認〉Ⅲ層中で、大きな円形の黒色土の落ち込みとして確認した。確認当初は黒色土の中央にベルトを残しサブトレンチを入れて精査を開始した。しかし、トレンチ底面で礫と埋設土器を検出し炉と判断したので竪穴住居跡とした。

〈重　　複〉ＳＩ52竪穴住居跡と重複する。本住居跡が新しい。

〈形　　態〉円形を呈する。

〈規　　模〉長軸（東－西）5.66m×短軸（南－北）4.98m、深さ0.70m。

〈埋　　土〉11層に分けた。そのうち７～11層は炉の埋土である。１～６層は自然堆積と判断した。

〈床　　面〉床面全体は北側と南側で0.30m程の高低差があるが、これは斜面による土の流出のためであり、本来は平坦であったと思われる。

〈　壁　〉北西壁は0.70m、南西壁は0.20mでほぼ垂直に立ち上がる。西壁は削平された後崩落し、東壁は斜面のため流出していた。

〈　炉　〉石囲土器埋設炉で、住居の中央やや東寄りに設けられていた。埋設土器は口縁部の無い粗製の深鉢形土器を正位に埋設したものである。

〈柱　　穴〉９基検出した。主柱穴はＰ１・９と考えられる。

〈遺　　物〉石器は埋土からほぼ均一に出土しているが、土器は特に北東側から集中して出土した。縄文土器（第17図１～７）　１は炉埋設土器である。２～７も深鉢形土器で、埋土から出土した。２・３は粗製で、２は口縁部がやや外反する器形、３は小型の土器である。４は加熱を受け剥落し、文様が不明である。５は沈線で縦位の楕円形文を施文する土器で、楕円形文の外は磨消縄文である。６・７も同じような文様構成の土器と思われる。石器（第18図８～16）は磨製石斧（８・９）、石匙（10・11）、スクレイパー（11・12）、石鏃（13～16）が出土した。15は黒曜石製である。

〈改　　築〉北側の床面の段差と、各々の床面に伴うと考えられる２箇所の炉の存在から１回の建て替えが考えられる。なお、旧住居跡をＳＩ52竪穴住居跡とした。

〈構築時期〉床面出土の土器と炉埋設土器から縄文時代中期後半の大木９式期と考えられる。

ＳＩ21　竪穴住居跡（第９図）

〈位　　置〉ＭＧ29・ＭＨ29グリッドに位置する。

〈確　　認〉Ⅲ層中でほぼ円形の黒褐色土の落ち込みとして確認した。

〈重　　複〉なし。

〈形　　態〉ほぼ円形を呈する。

〈規　　模〉長軸（東－西）2.92m×短軸（南－北）2.83m、深さ0.45m。

〈埋　　土〉２層に分けた。斜面上方からの流入による自然堆積と思われる。

〈　壁　〉北壁は大きく外に傾く。南側半分は残存部分が少ないため不明である。

〈床　　面〉北側と南側で0.10m程の高低差があるが、これは斜面による土の流出のためであり本来は平坦であったものであろう。

〈　炉　〉ほぼ中央に位置する。地床炉である。

〈柱　　穴〉10基の柱穴を検出した。主柱穴はとＰ１・６と思われる。

〈遺　　物〉西側壁近くから同一個体と思われる縄文土器片がまとまって出土した（第19図17）。その他、縄文土器片15点、スクレイパー１点、剥片４点が出土した。遺物は中央から北側半分に偏って出土している。図示した土器の17は、破片で全体の文様構成は不明であるが、沈線によって波涛文を施文した土器であろう。石器の20はスクレイパーである。

〈改　　築〉なし。

〈構築時期〉出土土器から縄文時代中期末葉の大木10式期かと思われる。

ＳＩ22　竪穴住居跡(第10図)

〈位　　置〉ＭＦ26・27グリッドの北側が高い斜面に位置する。

〈確　　認〉遺構確認のためⅢ層を掘り下げ中、平面形が楕円形の黒色土の広がりとして確認した。

〈重　　複〉ＳＮ54と重複し、本遺構が新しい。

〈形　　態〉南側が調査区外であり、斜面による土砂流出のため、全体の形が不整形を呈する。

〈規　　模〉検出状態では、上端約3.00m、下端約2.00mで、深さ0.78m。

〈埋　　土〉２層に分けた。第1層にＳＮ54からの流入と思われる焼土ブロックが混入する。自然堆積である。

〈　壁　〉斜面のため壁は全体的に削平されたと思われ、大きく傾いて立ち上がる。

〈底　　面〉平坦である。

〈遺　　物〉（19図21・22）　21は石匙、22はスクレイパーで、いづれも床面出土である。

〈構築時期〉縄文時代

〈そ の 他〉住居の可能性を考慮して精査を行ったが、斜面による土の流出が大きく、全体の形など不明確であった。また、２層以下は径10cm以上の礫層である。

ＳＩ27　竪穴住居跡(第11図)

〈位　　置〉ＬＣ31・32グリッドに位置する。

〈確　　認〉Ⅲ層下面で、暗褐色土の落ち込みとして確認した。

〈重　　複〉ＳＫ34・ＳＫ36・ＳＫＰ009と重複する。本住居跡が最も古い。

〈形　　態〉ほぼ円形を呈する。

〈規　　模〉長軸（南－北）2.79m×短軸（東－西）2.38m、深さ0.14m。

〈埋　　土〉４層に分けられた。自然堆積と思われる。第１層に炭化物が少量混入するが、他の3層に混入物は見られない。

〈　壁　〉やや外傾する。

〈床　　面〉平坦で、固くしまっていた。

〈　炉　〉地床炉で、住居の中央に位置する、ＳＫＰ009によって中央部を壊されている。

〈柱　　穴〉壁際に配される２基が主柱穴と思われる。いずれも径0.30m、深さ0.42mを測る。遺構の外側にある７基は本遺構と同一面での検出であるが、本住居跡に伴うかどうかは不明である。

〈遺　　物〉出土しなかった。

〈改　　築〉土層断面や床面の精査から改築は認められなかったが、掘り込みの外側から検出した柱穴が、２～３基並列することから、１～２度の改築の可能性がある。

〈構築時期〉埋土中からは時期を特定できる遺物が出土していないため不明であるが、本遺構が確認されたⅢ層で縄文時代の遺構が確認されたので、同時代の住居跡である可能性がある。

ＳＩ46　竪穴住居跡(第12図)

〈位　　置〉ＬＩ33、ＬＪ33・34、ＭＡ33・34グリッドに位置する。

〈確　　認〉地山上で暗褐色土の不整円形の落ち込みとして確認した。

〈重　　複〉ＳＩ50と重複する。本住居跡が新しい。

〈形　　態〉南側は斜面で土が流出し、壁などが良く残っていなかったが、円形の竪穴住居でなかったかと推定される。

〈規　　模〉短軸（東－西）5.84m×長軸（南－北）推定6.00m、深さ0.10m。

〈埋　　土〉３層に分けられた。第３層は溝の埋土である。

〈　壁　〉残りが悪いため、詳細は不明であるが、北～東側0.05mほどの壁の痕跡を検出した。

〈床　　面〉斜面のため南側と西側に向かって少し低くなる。本来は平坦であったと考えられる。

〈　炉　〉床面中央部に硬く締まった焼土の広がりを検出し、地床炉と判断した。

〈柱　　穴〉10基の柱穴を確認したが、主柱穴は特定できなかった。

〈遺　　物〉埋土から弥生土器と思われる破片が数点出土したが、細片で図示できなかった。

〈改　　築〉なし

〈構築時期〉出土した土器片から、弥生時代と推定される。

〈そ の 他〉残存状況が悪いため、大部分の点で不明な点が多い。

ＳＩ50　竪穴住居跡(第12図)

〈位　　置〉ＬＩ33、ＬＪ33グリッドに位置する。

〈確　　認〉ＳＩ46の断面を精査中に確認した。

〈重　　複〉ＳＩ46竪穴住居跡と重複する。本住居跡が古い。

〈形　　態〉炉と壁の一部が検出きただけで、大部分はＳＩ46竪穴住居跡によって破壊されているため、全容は不明である。

〈規　　模〉不明。

〈埋　　土〉４層に分けられた。３層は火の影響を受けた暗褐色土である。４層は火の影響を受けて上部は焼土化して赤くなっているが、次第に下から上に向かって赤くなってきているので、分層できなかった。

〈　壁　〉不明。

〈床　　面〉不明。

〈　炉　〉土器埋設炉である。

〈柱　　穴〉不明。

〈遺　　物〉炉に埋設されていた土器だけである。摩滅が著しく復元できたのは底部だけである。

〈改　　築〉なし

〈構築時期〉出土した埋設土器から、縄文時代と思われる。

ＳＩ52　竪穴住居跡(第13図)

〈位　　置〉ＭＦ31・32、ＭＧ31・32・33、ＭＨ32グリッドに位置する。

〈確　　認〉ＳＩ18竪穴住居跡の床面を精査中、石囲土器埋設炉の他に、別の土器埋設炉を検出し、確認した。

〈重　　複〉ＳＩ18竪穴住居跡と重複する。本遺構が古い。

〈形　　態〉円形を呈する。

〈規　　模〉ＳＩ18により削平され、本来の規模は不明なものの、現存部で長軸（東－西）5.52m×短軸（南－北）4.92m、深さ0.36mである。

〈埋　　土〉６層に分けられた。うち５層は焼土、６層は炭層で、人為的に形成された埋土である。その他の埋土は、自然堆積である。

〈　壁　〉北西側をのぞき、ほぼ垂直に立ち上がる。東南側は斜面のため、床面・壁の確認はできなかった。東側は斜面による土の流出で、壁の立ち上がりは不明である。

〈床　　面〉平坦である。東・南側は斜面となっているが、本来は平坦と思われる。

〈　炉　〉中央部やや南東寄りに土器埋設炉が設けられている。炉内西側に深鉢形土器が埋設され、その土器は表面の摩耗が激しいものの縄文が施されているのが分かる。東側は掘り込みをもつ燃焼部で、硬化した焼土が見られる。

〈柱　　穴〉16基検出した。主柱穴はＰ１・３・14と考えられる。炉周辺のピットのうち、Ｐ８とＰ12、また、Ｐ６とＰ11はそれぞれ対と考え、底面がほぼ同じレベルにより、側柱穴と考えられる。

〈遺　　物〉165点出土した。大木９(新)式に近い文様が施された土器がある。東側から遺物が集中して出土した。

〈改　　築〉北側の床面の段差と、各々の床面に伴うと考えられる２箇所の炉の存在から、１回の立て替えが考えられる。なお、新住居跡をSI18竪穴住居跡とした。

〈構築時期〉縄文時代中期後半の大木９式期と考えられる。

〈そ の 他〉Ｐ１を端とする北西側は幅1.00m程のスロープとなっており、出入口と考えられる。

(2)土坑

ＳＫ34　土坑(第14図)

〈位　　置〉ＬＣ31グリッドに位置する。

〈確　　認〉Ⅲ層下面で、ＳＩ27と重複している円形の落ち込みとして確認した。

〈重　　複〉ＳＩ27と重複する。本土坑が新しい

〈形　　態〉円形を呈する。

〈規　　模〉開口部　長軸（南西－北東）0.71m×短軸（南東－北西）0.64m、底面　長軸0.67m×短軸0.55m、深さ0.08m。

〈埋　　土〉１層のみである。混入物が少なく、斜面から流入した土が一気に堆積したものと判断した。

〈　壁　〉やや外傾しながら立ち上がる。

〈底　　面〉ほぼ平坦であり、固くしまっている。

〈遺　　物〉出土しなかった。

〈構築時期〉確認面の層位から、縄文時代と思われる。

ＳＫ36　土坑(第14図)

〈位　　置〉ＬＣ31グリッドに位置する。

〈確　　認〉ＳＩ27と重複する円形の落ち込みとして確認した。

〈重　　複〉ＳＩ27と重複する。本土坑が新しい。

〈形　　態〉ほぼ円形を呈する。

〈規　　模〉開口部　長軸（北西－南東）0.74m×短軸（北東－南西）0.63m、底面　長軸0.60m×短軸0.57m、深さ0.20m。

〈埋　　土〉１層のみである。混入物が少なく、斜面から流入した土が一気に堆積したものと判断した。

〈　壁　〉やや外傾気味に立ち上がるが、西側は大きく外傾する。

〈底　　面〉平坦で固くしまっている。

〈遺　　物〉出土しなかった。

〈構築時期〉確認面の層位から縄文時代と考えられる。

〈そ の 他〉性格は不明である。

ＳＫ51　土坑(第14図)

〈位　　置〉ＭＣ34グリッドに位置する。

〈確　　認〉Ⅲ層下面で、暗褐色土の円形の落ち込みとして確認した。

〈重　　複〉なし。

〈形　　態〉円形を呈する。

〈規　　模〉開口部　長軸（東－西）0.63m×短軸（南－北）0.62m、
底面　長軸0.46m×短軸0.46m、深さ0.32m。

〈埋　　土〉４層に分けられた。３・４層は粘土質で、地山土が斑点状に含まれていることから人為的に埋め戻されたものと考える。

〈壁・底面〉断面形はボール状である。

〈遺　　物〉なし。

〈構築時期〉確認面の層位から、縄文時代と推定する。

(３)フラスコ状・袋状土坑

ＳＫＦ23　フラスコ状土坑(第14図)

〈位　　置〉ＭＨ30のグリッドに位置する。

〈確　　認〉Ⅲ層中で、黒色土の円形の落ち込みとして確認した。

〈重　　複〉なし。

〈形　　態〉円形を呈する。

〈規　　模〉開口部　長軸（南－北）1.26m×短軸（東－西）1.24m、
底面　長軸1.41m×短軸1.40m、深さ0.69m。

〈埋　　土〉７層に分けられた。４・７層は壁面が崩れたことに由来する埋土と思われる。自然堆積である。

〈　壁　〉底面から内傾気味に立ち上がるが、中位から開口部に向かって、やや外傾しながら立ちあがる。

〈床　　面〉ほぼ平坦である。

〈遺　　物〉(第19図23～25) 34点出土した。流れ込みによるものがほとんどである。縄文土器が多く出土したが細片で図示できなかった。石器の23・24は石鏃で、25はスクレイパーである。

〈時　　期〉形態から縄文時代かと推定する。

〈そ の 他〉口縁部は削平を受け、本来の形は不明だが、側面がくびれており、また埋土の状況からフラスコ状土坑と考えられる。

ＳＫＦ48　袋状土坑(第14図)

〈位　　置〉ＬＨ34・35グリッドに位置する。

〈確　　認〉地山面で何色土の円形の落ち込みとして確認した。

〈重　　複〉なし。

〈形　　態〉平面形はほぼ円形を呈する。断面形は袋状を呈する。

〈規　　模〉開口部　長軸（東－西）0.68m×短軸（南－北）0.67m、
底面　長軸0.54m×短軸0.54m、深さ0.58m。
〈埋　　土〉５層に分けられた。自然堆積か。
〈　壁　〉やや内傾しながら立ち上がる。
〈底　　面〉中央部がやや低いが、ほぼ平坦である。
〈遺　　物〉出土しなかった。
〈構築時期〉地山を相当削ってから検出された。確認状況から、地山面で検出されたＳＩ46竪穴住居跡より古いと考えられ、ＳＩ50竪穴住居跡と同時期の可能性がある。

(4)焼土遺構

ＳＮ05　焼土遺構(第15図)
〈位　　置〉ＭＧ34グリッドに位置する。
〈確　　認〉遺構確認のためⅢ層を掘り下げ中、焼土の広がりを検出した。
〈重　　複〉なし。
〈形　　態〉円形を呈する。長軸方向はＮ－12°－Ｗである。
〈規　　模〉長軸（南－北）0.84m×短軸（東－西）0.78m、深さ0.12m。
〈埋　　土〉３層に分けたが、加熱状況の相違によるものである。
〈底　　面〉底面は平坦である。
〈遺　　物〉なし。
〈構築時期〉検出状況から、縄文時代と考えられる。
〈そ の 他〉掘りこみはなく、また周辺にピットも確認できなかったため、単独の焼土遺構と考えられる。本遺構の北西約２ｍから、ＳＮ06が検出された。

ＳＮ06　焼土遺構(第15図)
〈位　　置〉ＭＧ34グリッドに位置する。
〈確　　認〉遺構確認のためⅢ層を掘り下げ中、焼土の広がりを検出した。
〈重　　複〉なし。
〈形　　態〉円形を呈する。長軸方向はＮ－63°－Ｗである。
〈規　　模〉長軸（北西－南東）0.51m×短軸（南西－北東）0.43m、深さ0.06m。
〈埋　　土〉３層に分けたが、加熱状況の相違によるものである。
〈底　　面〉ほぼ丸底を呈している。
〈遺　　物〉なし。
〈構築時期〉検出状況から、縄文時代と考えられる。
〈そ の 他〉検出位置の西側が調査区外で、崖となっていたものの、周辺からピットは確認できなかった。また、掘り込みもないため、単独の焼土遺構と考えられる。本遺構の南東約２ｍからＳＮ05が検出された。

ＳＮ07　焼土遺構(第15図)

〈位　　置〉ＭＩ37グリッドに位置する。

〈確　　認〉遺構確認のためⅢ層を掘り下げ中、焼土の広がりを検出した。

〈重　　複〉なし。

〈形　　態〉円形を呈する。長軸方向はＮ－45°－Ｗである。

〈規　　模〉長軸（北西－南東）0.67m×短軸（北東－南西）0.58m、深さ0.05m。

〈埋　　土〉２層に分けた。加熱状況の相違によるものである。

〈底　　面〉不整楕円径を呈している。

〈遺　　物〉なし。

〈構築時期〉検出状況から、縄文時代と考えられる。

〈そ の 他〉掘り込みもなく、周辺にピットを確認できなかったため、単独の焼土遺構と考える。確認面は当初からほぼ地山が露出していた。本遺構の地山層は、土の鉄分が酸化し、赤色・硬化した、平坦な石の層を包含しており、焼土層にも混入していた。ＭＩ38グリッド杭を中心として、半径１m以内にＳＮ08・09が検出された。

ＳＮ08　焼土遺構(第15図)

〈位　　置〉ＭＩ36・37グリッドに位置する。

〈確　　認〉遺構確認のためⅢ層を掘り下げ中、焼土の広がりを検出した。

〈重　　複〉なし。

〈形　　態〉円形を呈する。長軸方向はＮ－80°－Ｗである。

〈規　　模〉長軸（東－西）0.88m×短軸（南－北）0.51m、深さ0.02m。

〈埋　　土〉１層である。

〈　壁　〉平坦である。

〈底　　面〉真中がくびれた、不整楕円径を呈する。

〈遺　　物〉なし。

〈構築時期〉検出状況から、縄文時代と考えられる。

〈そ の 他〉掘り込みもなく、周辺にピットを確認できなかったため、単独の焼土遺構と考えられる。遺構確認面は当初からほぼ地山が露出していた。本遺構周辺の地山層は土の鉄分が酸化し、赤色・硬化した、平坦な石の層を包含している。ＭＩ38グリッド杭を中心として、半径１m以内に、ＳＮ07・09・10が検出された。

ＳＮ09　焼土遺構(第15図)

〈位　　置〉ＭＨ37・38グリッドに位置する。

〈確　　認〉遺構確認のためⅢ層を掘り下げ中、焼土の広がりを検出した。

〈重　　複〉なし。

〈形　　態〉不整形を呈する。長軸方向はＮ－68°－Ｅである。

〈規　　模〉長軸（南西－北東）1.08m×短軸（北西－南東）0.60m、深さ0.10m。

〈埋　　土〉２層に分けた。加熱状況にある相違である。
〈底　　面〉東側が口縁径約60cmのほぼ丸底で、西側が上端約50cmでほぼ平坦である。
〈遺　　物〉なし。
〈構築時期〉検出状況から、縄文時代と考えられる。
〈そ の 他〉東側が燃焼部である。掘りこみはなく、周辺にピットを確認できなかったため、単独の焼土遺構と考えられる。地山の状況は、ＳＮ07と同様である。ＭＩ38グリッド杭を中心として、半径１ｍ以内に、ＳＮ07・08・10が検出された。

ＳＮ10　焼土遺構(第15図)
〈位　　置〉ＭＩ37・38グリッドに位置する。
〈確　　認〉遺構確認のためⅢ層を掘り下げ中、焼土の広がりを検出した。
〈重　　複〉なし。
〈形　　態〉ほぼ円形を呈する。長軸方向はＮ－90°－Ｅである。
〈規　　模〉長軸（東－西）0.91ｍ×短軸（南－北）0.83ｍ、深さ0.04ｍ。
〈埋　　土〉１層とした。
〈底　　面〉平坦である。
〈遺　　物〉なし。
〈構築時期〉検出状況から、縄文時代と考えられる。
〈そ の 他〉掘り込みはなく、周辺にピットを確認できなかったため、単独の焼土遺構と考えられる。地山の状況は、ＳＮ07と同様である。ＭＩ38グリッド杭を中心として、半径１ｍ以内に、ＳＮ07・08・09が検出された。

ＳＮ11　焼土遺構(第16図)
〈位　　置〉ＭＨ33グリッドに位置する。
〈確　　認〉Ⅲ層上面で、円形の黒褐色土とそれを囲む土器片、また、それに接する焼土と炭化物の広がりを確認し、土器埋設炉と判断した。
〈重　　複〉ＳＮ53と重複する。土層断面から本遺構が新しいか、または同時と考えられる。
〈形　　態〉掘形の平面形は、楕円形を呈する。長軸方向はＮ－60°－Ｗである。
〈規　　模〉掘形規模　長軸（北西－南東）0.37ｍ×短軸（南西－北東）0.25ｍ、
底面　長軸0.15ｍ×短軸0.13ｍ、深さ0.28ｍ。
〈遺　　物〉埋設土器以外の遺物は出土しなかった。
〈時　　期〉埋設土器から、縄文時代中期後半と思われる。

ＳＮ28　焼土遺構(第16図)
〈位　　置〉ＬＧ34に位置する。
〈確　　認〉遺構検出のためⅢ層を精査中、明褐色の焼土の広がりとして確認した。
〈重　　複〉なし。

〈形　　態〉不整楕円形を呈する。長軸方向はＮ－27°－Ｗである。
〈規　　模〉長軸（南西－北東）0.98m×短軸（北西－南東）0.78m、深さ0.09m。
〈埋　　土〉２層に分けられた。２層は１層の影響を受け、少し赤味を帯びている。
〈遺　　物〉出土しなかった。
〈時　　期〉縄文時代と思われる。

ＳＮ53　焼土遺構(第16図)
〈位　　置〉ＭＨ33グリッドに位置する。
〈確　　認〉遺構検出のため、Ⅲ層を掘り下げ中、円形の黒色土の広がりと、それを囲む土器の上部を確認した。（東側にＳＮ11がある）
〈重　　複〉ＳＮ11と重複しており、本遺構が古い。
〈形　　態〉円形を呈する。長軸方向はＮ－90°－Ｗである。
〈規　　模〉開口部　長軸（東－西）0.21m×短軸（南－北）0.20m、
底面　長軸0.18m×短軸0.18m、深さ0.12m。
〈埋　　土〉２層に分けられた。自然堆積である。
〈　壁　〉西側は外側に開いて立ち上がり、東側はＳＮ11との重複によって、ほぼ垂直に立ち上がる。
〈底　　面〉平坦である。
〈遺　　物〉確認時に灰褐色のほぼ円形に並んだ土器片を取り上げたもので、それには縄文が施されている。
〈時　　期〉縄文時代と思われる。

ＳＮ54　焼土遺構(第10図)
〈位　　置〉ＭＦ27・ＭＧ27グリッドに位置する。
〈確　　認〉Ⅲ層中で、楕円形の黒色土の落ち込みとして確認した。北側が高い斜面である。
〈重　　複〉ＳＩ22と重複し、本遺構が古い。
〈形　　態〉南側はＳＩ22の削平を受け不明だが、本来は円形を呈していたと考えられる。
〈規　　模〉開口部　南西－北東軸2.46m×北西－南東軸推定2.64m、
底面　南西－北東軸2.26m×北西－南東軸推定2.27m、深さ0.48m。
〈埋　　土〉３層に分けられたが、このうち３層は壁の崩落による埋土である。自然堆積である。
〈　壁　〉壁の崩落と斜面による土の流出のため、大きく外傾しながら立ち上がる。
〈底　　面〉平坦である。
〈　炉　〉底面に焼土の広がりを確認した。焼土の北西側から、焼けて赤化した礫が出土した。
〈柱　　穴〉検出されなかった。
〈遺　　物〉埋土から縄文が施された土器が出土した。
〈構築時期〉縄文時代と考えられる。

(5)土器埋設遺構

ＳＲ32　土器埋設遺構(第39図)

〈位　　置〉ＬＥ31グリッドに位置する。長軸方向はＮ－83°－Ｗである。

〈確　　認〉Ⅱ層上面で、円形に巡る土器のまとまりとして検出した。半截後、暗褐色土を掘り込み、正立している土器を確認した。

〈重　　複〉なし。

〈掘形規模〉開口部　長軸（東－西）0.34m×短軸（南－北）0.33m、
底面部　長軸0.25m×短軸0.23m、深さ0.24m。

〈土　　器〉底部・口縁部ともに欠損し、大きさ等不明であるが、無文の深鉢形土器と思われる。摩滅が著しく掲載できなかった。

〈埋　　土〉土器内と掘形の2層に分けられた。いずれもしまりの弱い暗褐色土である。

〈土器内遺物〉なし。

〈時　　期〉縄文時代晩期末から弥生時代と思われる。

ＳＲ49　土器埋設遺構(第16図)

〈位　　置〉ＬＦ28グリッドに位置する。

〈確　　認〉遺構確認のためⅢ層を掘り下げ中、小粒の炭を含む黒色土の広がりとして確認した。

〈重　　複〉なし

〈規　　模〉掘り込み部の上端　長軸（南－北）0.38m×短軸（東－西）0.24m、
底面　長軸0.23m×短軸0.16m、深さ0.18m。長軸方向はＮ－３°－Ｅである。

〈埋　　土〉２層に分けた。人為堆積である。

〈遺　　物〉土器の内側には炭が付着している。平面形では二重であったが、１個体として取り上げた。磨耗が激しいが、縄文かと思われる文様が施文されている。

〈時　　期〉縄文時代と考えられる。

2　奈良時代～平安時代

(1)竪穴住居跡

ＳＩ01　竪穴住居跡(第28図)

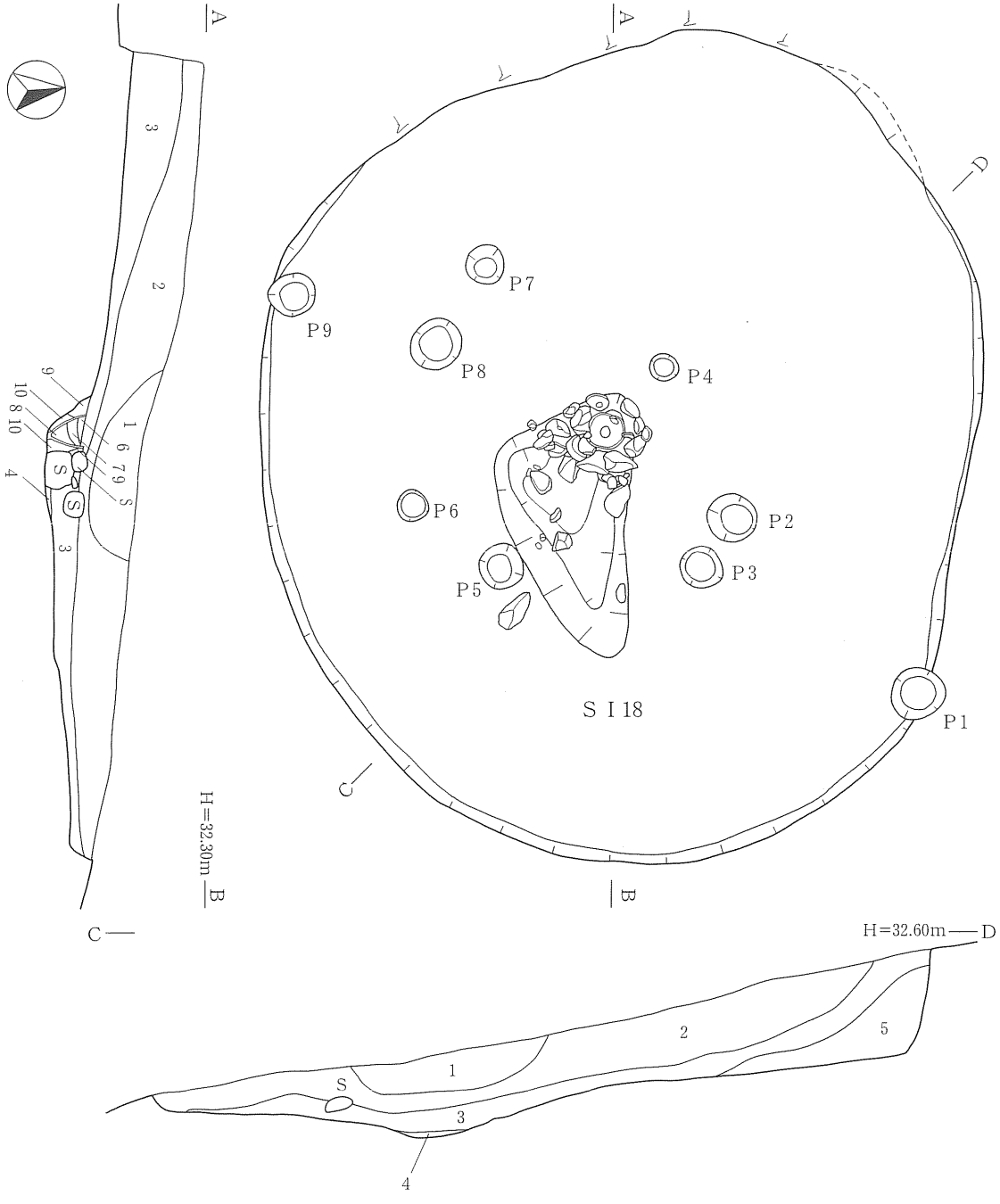
〈位　　置〉ＬＥ16・17、ＬＦ16・17グリッドに位置する。

〈確　　認〉Ⅱ層下面で、黒褐色土の隅丸長方形の落ち込みとして確認した。

〈重　　複〉なし

〈形　　態〉隅丸の台形状を呈する。長軸方向は、Ｎ－55°－Ｅである。南東壁中央外側部分に確認面から８㎝ほどの深さの落ち込み部分を検出した。

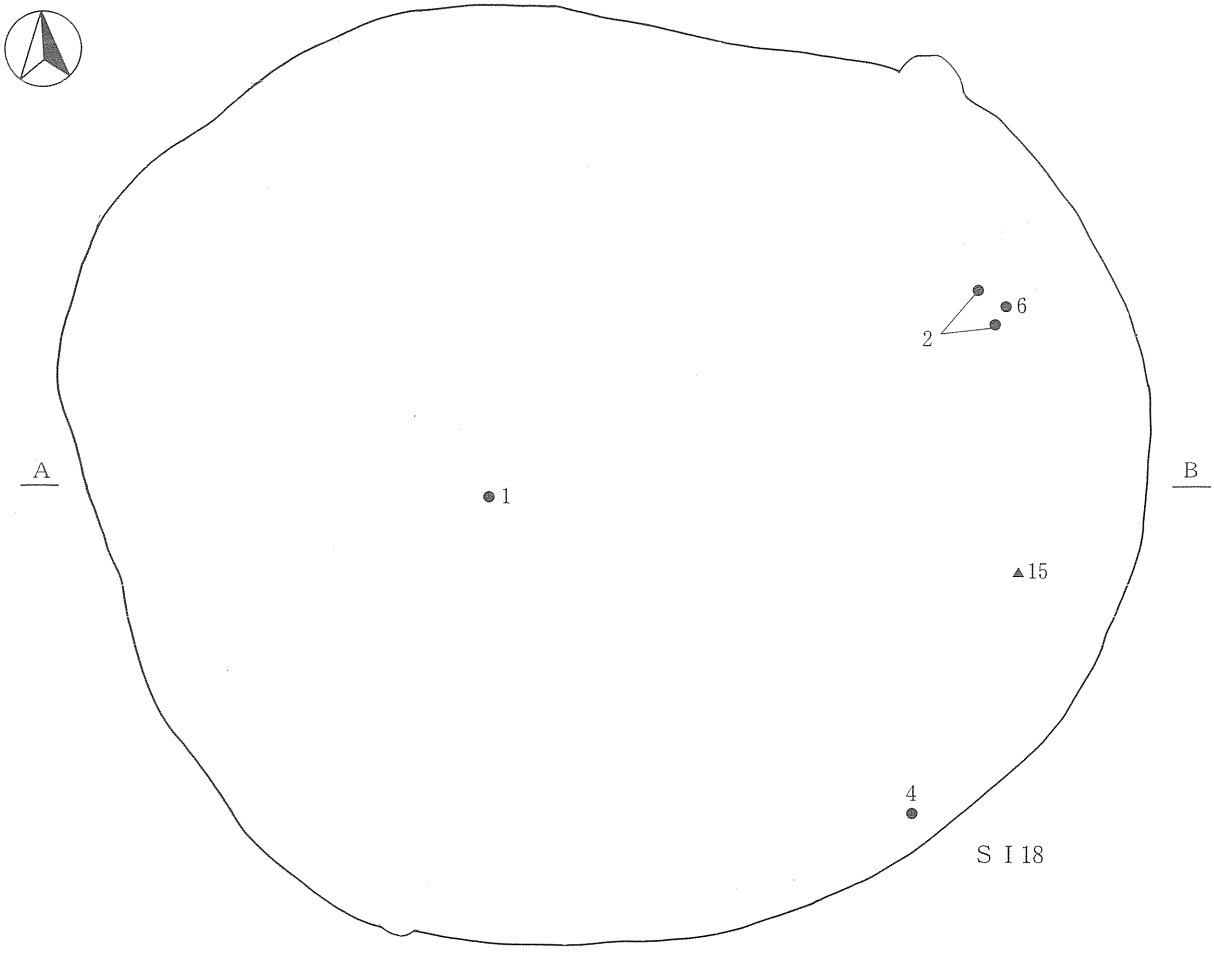
〈規　　模〉開口部は、長軸2.81mで、南東壁3.35m、南西壁3.32m、北西壁3.57m、北東壁1.63mを測る。底面部壁溝及び外辺柱穴内は、南東側2.60m、南西側2.74m、北西側3.02m、北東側1.54m、推定床面積は6.20㎡である。

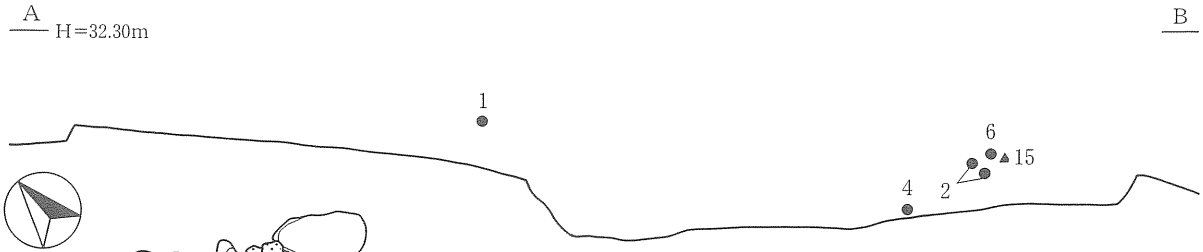


S I 18
1　黒色土(10Y R 2/1)　しまりやや強
2　黒褐色土(10Y R 3/1)　しまりやや強
3　褐色土(10Y R 4/6)　炭化物１％混入、しまりやや強
　褐色土(10Y R 4/4)　炭化物１％混入、５の土塊１％混入、しまりやや強
4　暗褐色土(10Y R 3/3)　しまりややあり、粘性ややあり
5　明褐色土(10Y R 5/6)　炭化物１％混入、しまりやや強
6　黒褐色土(7.5Y R 3/1)　焼土８％混入、しまりややあり、弾力あり、炭層
7　黒褐色土(7.5Y R 2/2)　焼土８％混入、しまりやや強、粘性あり、炭層
8　黒色土(7.5Y R 2/1)　しまりやや強、炭層
9　にぶい赤褐色土(5Y R 4/4)　炭が20％混入、しまりやや強
10　暗赤褐色土(5Y R 3/4)　焼土15％混入、しまりやや強
　焼土～暗赤褐色土(2.5Y R 3/6)

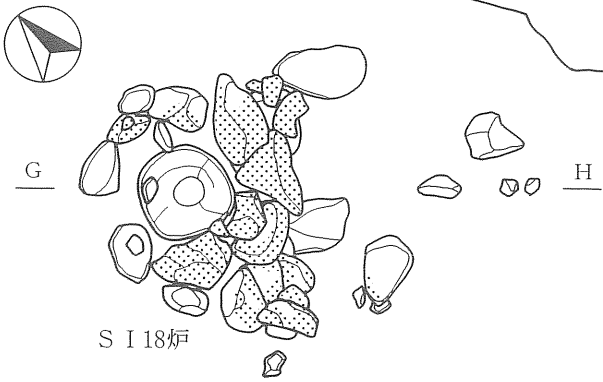
0　2m

第７図　Ｓ Ｉ 18竪穴住居跡

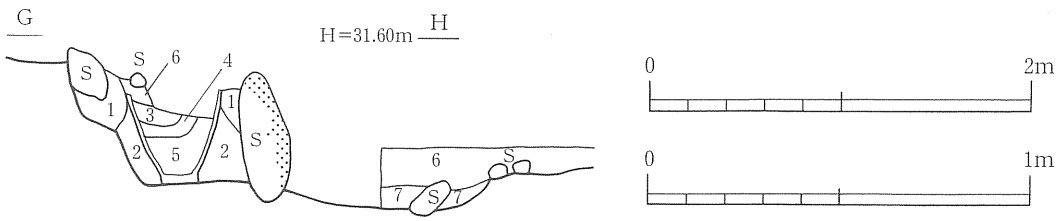




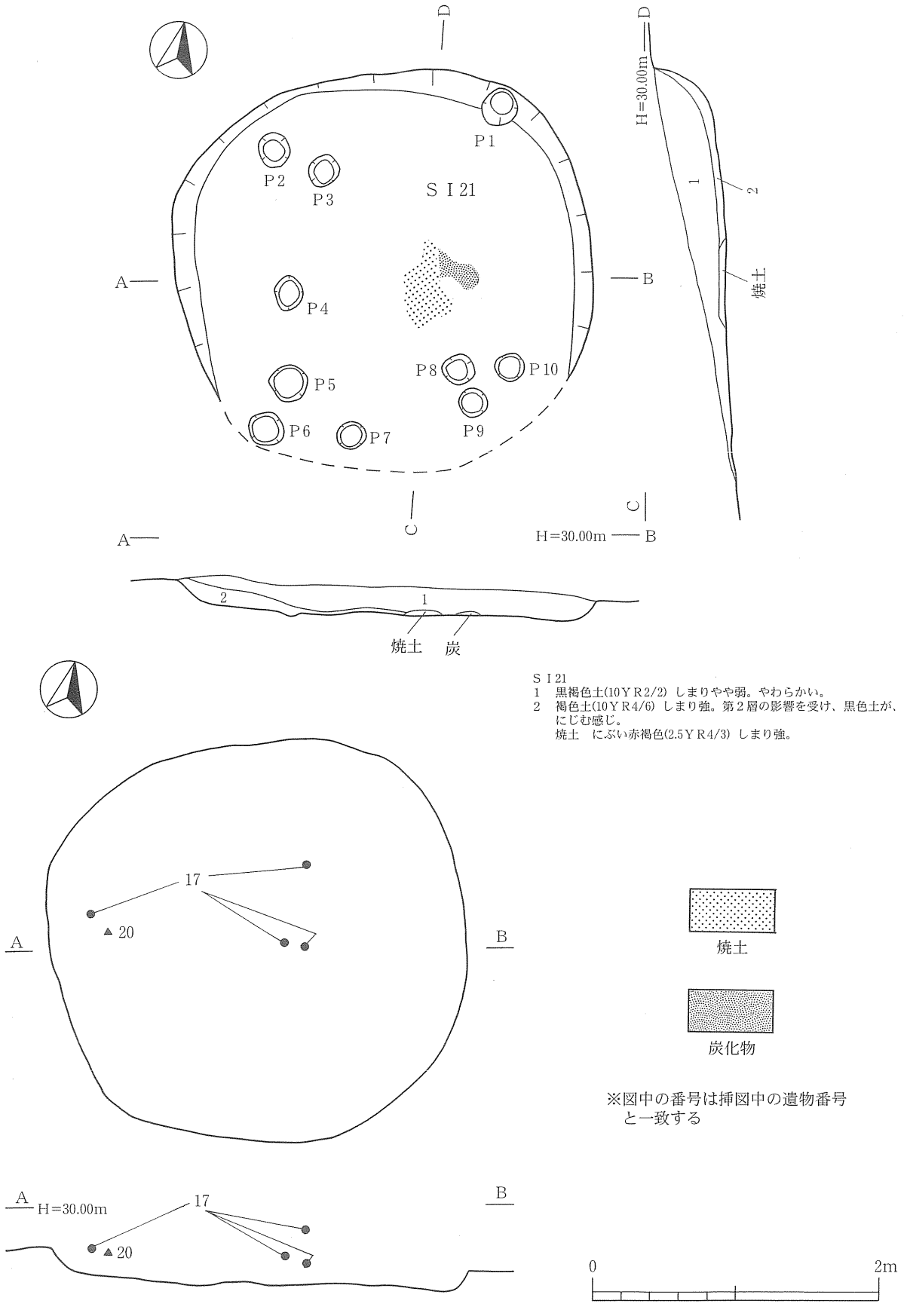
※スクリーントーンは焼けている所



ＳＩ18炉
1　にぶい赤褐色土(5ＹＲ4/4)　炭が20%混入、しまりやや強
2　暗赤褐色土(5ＹＲ3/4)　焼土が15%にじむ、しまりやや強
3　黒褐色土(7.5ＹＲ3/1)　焼土８%混入、しまりやや強、弾力あり、炭層
4　黒褐色土(7.5ＹＲ2/1)　焼土８%混入、しまりやや強、粘りあり、炭層
5　黒色土(7.5ＹＲ2/1)　しまりやや強、炭層
6　褐色土(10ＹＲ4/6)　炭極小塊(５㎜以下)７%混入、しまりややあり
7　暗褐色土(10ＹＲ3/3)　しまりあり、粘りあり
　　焼土～暗赤褐色土(2.5ＹＲ3/6)



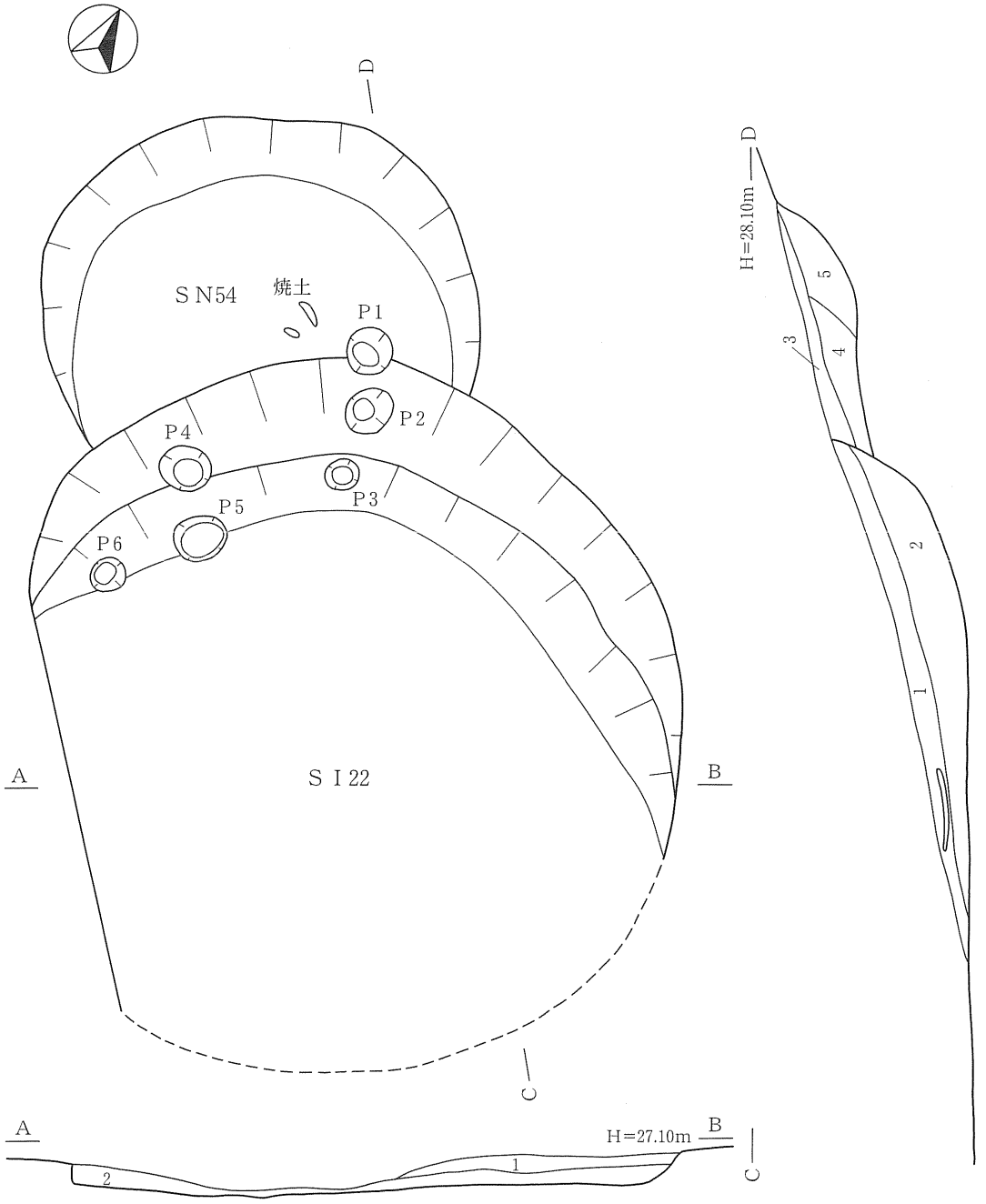
第８図　ＳＩ18遺物分布図、炉



S I 21
1　黒褐色土(10Y R 2/2) しまりやや弱。やわらかい。
2　褐色土(10Y R 4/6) しまり強。第２層の影響を受け、黒色土が、にじむ感じ。
焼土　にぶい赤褐色(2.5Y R 4/3) しまり強。

※図中の番号は挿図中の遺物番号と一致する

第９図　ＳＩ21竪穴住居跡・遺物分布図

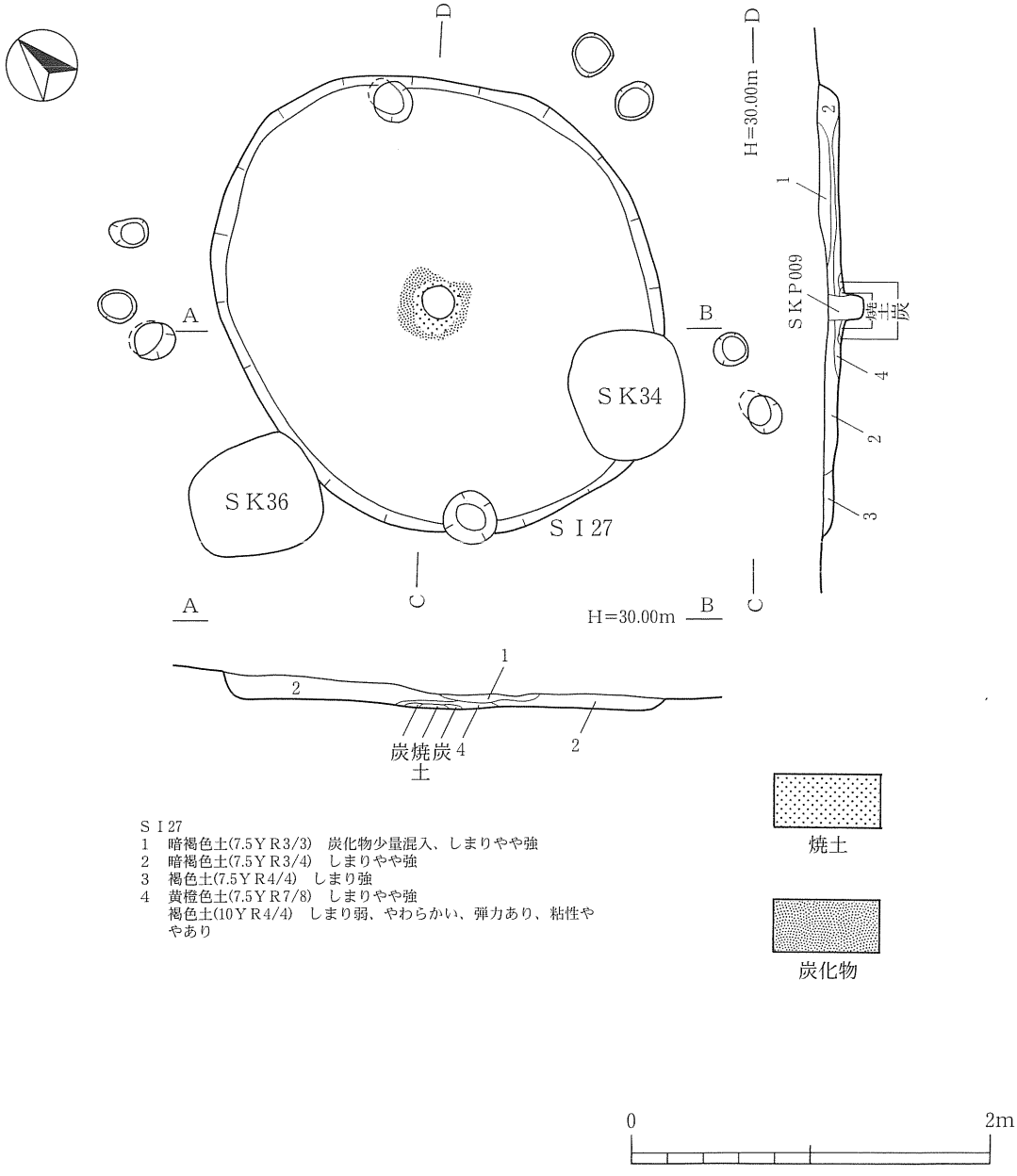


SN54
3　黒褐色土(7.5YR2/2)　しまりあり
4　黒褐色土(10YR2/2)　しまりあり
5　黒褐色土(7.5YR3/2)　しまりあり、地山土がにじむ
　地山土～明褐色土(7.5YR5/8)　しまり強

SI22
1　黒褐色土(7.5YR3/1)　しまりあり
2　黒褐色土(10YR2/3)　しまりあり
　焼土～明赤褐色土(5YR5/8)

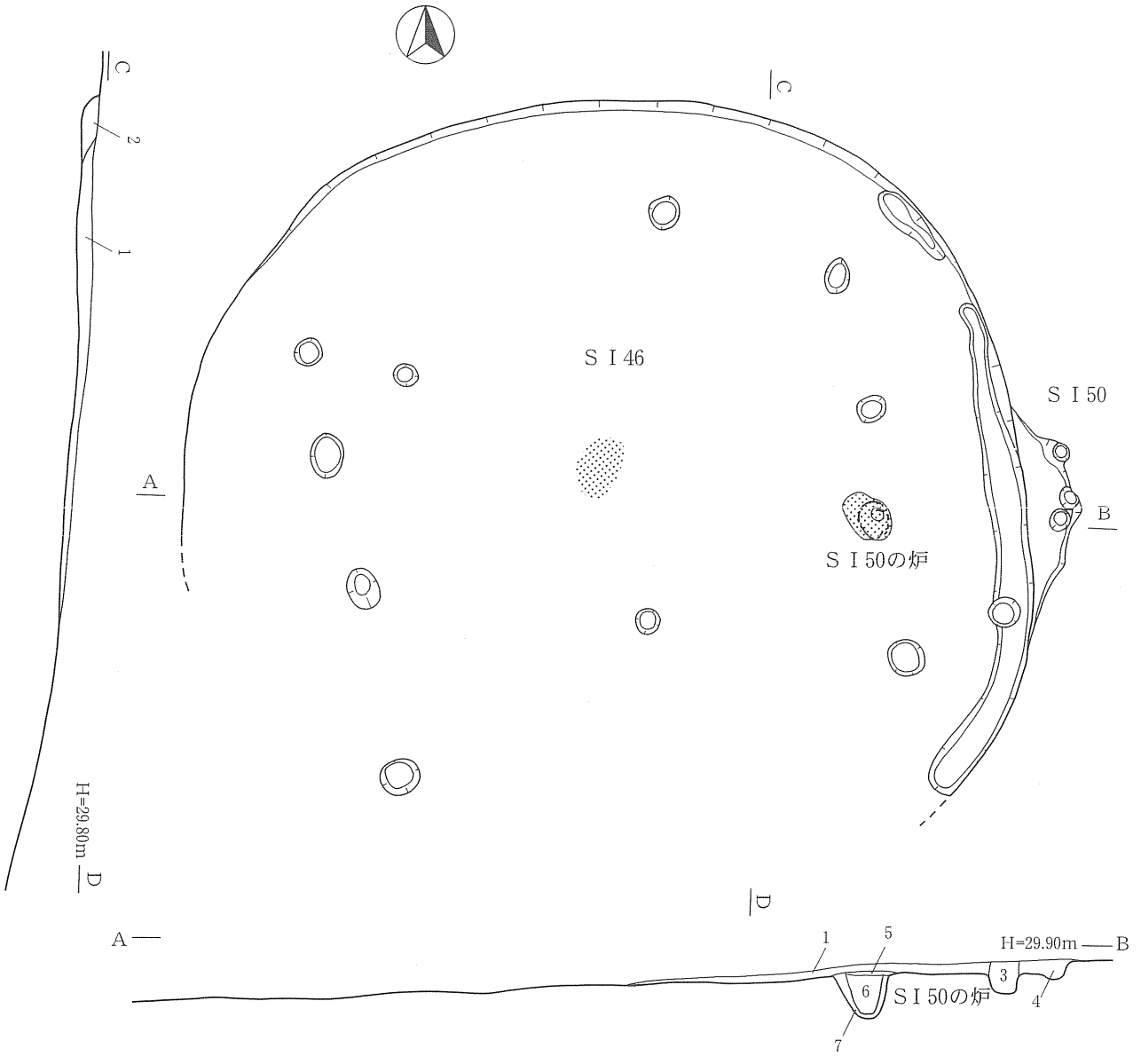
0　2m

第10図　ＳＩ22竪穴住居跡・ＳＮ54焼土遺構



SI27
1　暗褐色土(7.5YR3/3)　炭化物少量混入、しまりやや強
2　暗褐色土(7.5YR3/4)　しまりやや強
3　褐色土(7.5YR4/4)　しまり強
4　黄橙色土(7.5YR7/8)　しまりやや強
　褐色土(10YR4/4)　しまり弱、やわらかい、弾力あり、粘性ややあり

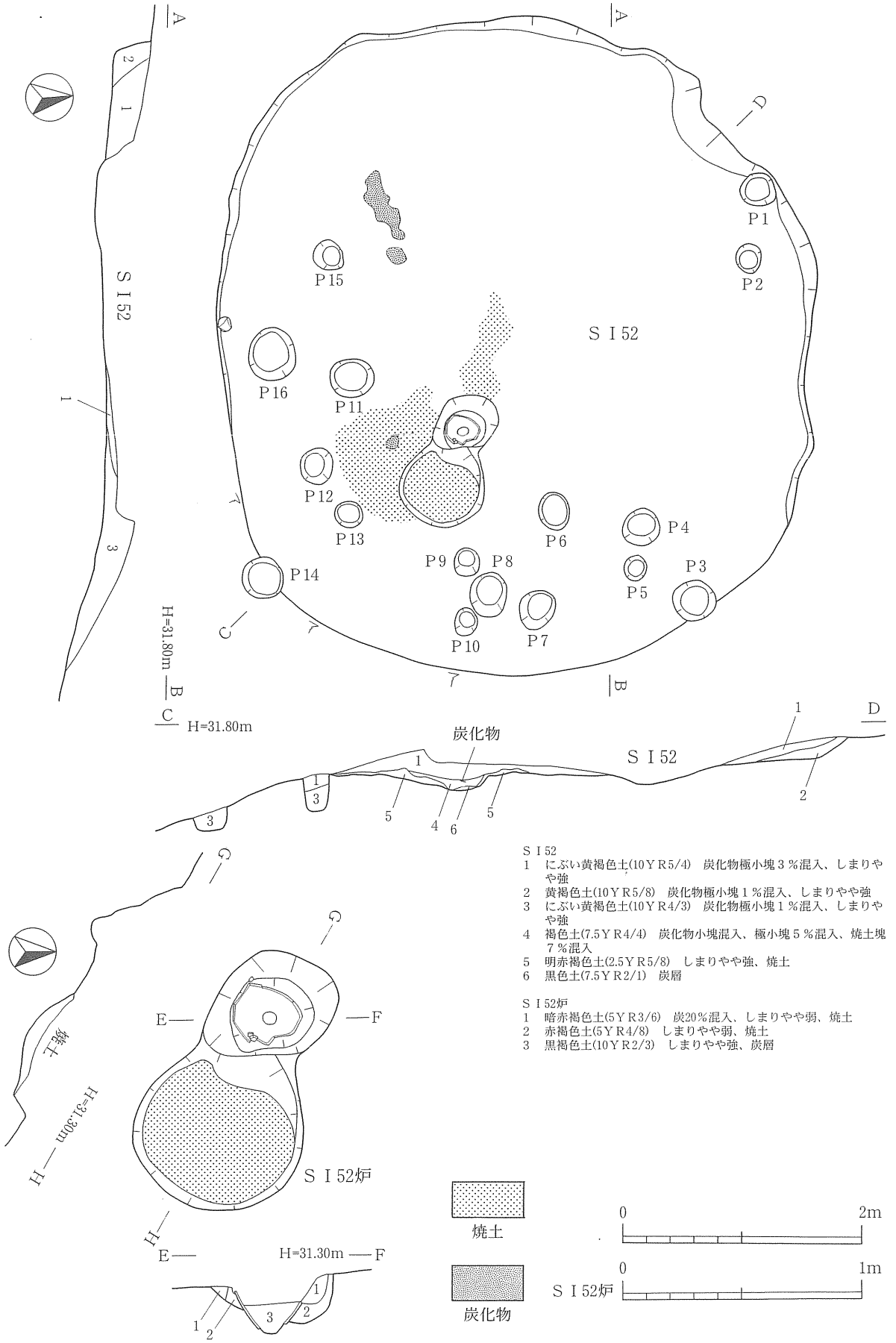
第11図　SI27竪穴住居跡



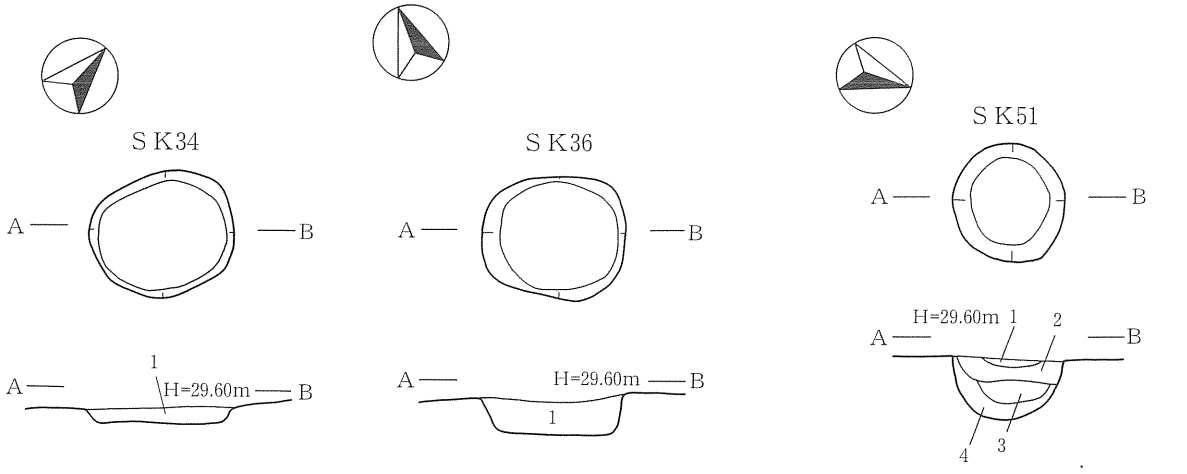
ＳＩ46・50
1　暗褐色土(10ＹＲ3/3)　炭化物２％・地山粒子１％混入、所々に焼土粒が散見される
2　にぶい黄褐色土(10ＹＲ4/3)　地山粒１％混入、しまり強
3　にぶい黄褐色土(10ＹＲ4/3)　炭化物１％・焼土粒１％混入、しまり強
4　にぶい黄褐色土(10ＹＲ5/4)　炭化物１％混入、しまり強
5　暗褐色土(10ＹＲ3/4)　炭化物２％混入、しまりやや強
6　極暗赤褐色土(2.5ＹＲ2/4)　炭化物２％混入、しまりやや強
7　暗褐色土(2.5ＹＲ3/4)　しまりやや強、上部は焼土化している

0　2m

第12図　ＳＩ46・50竪穴住居跡



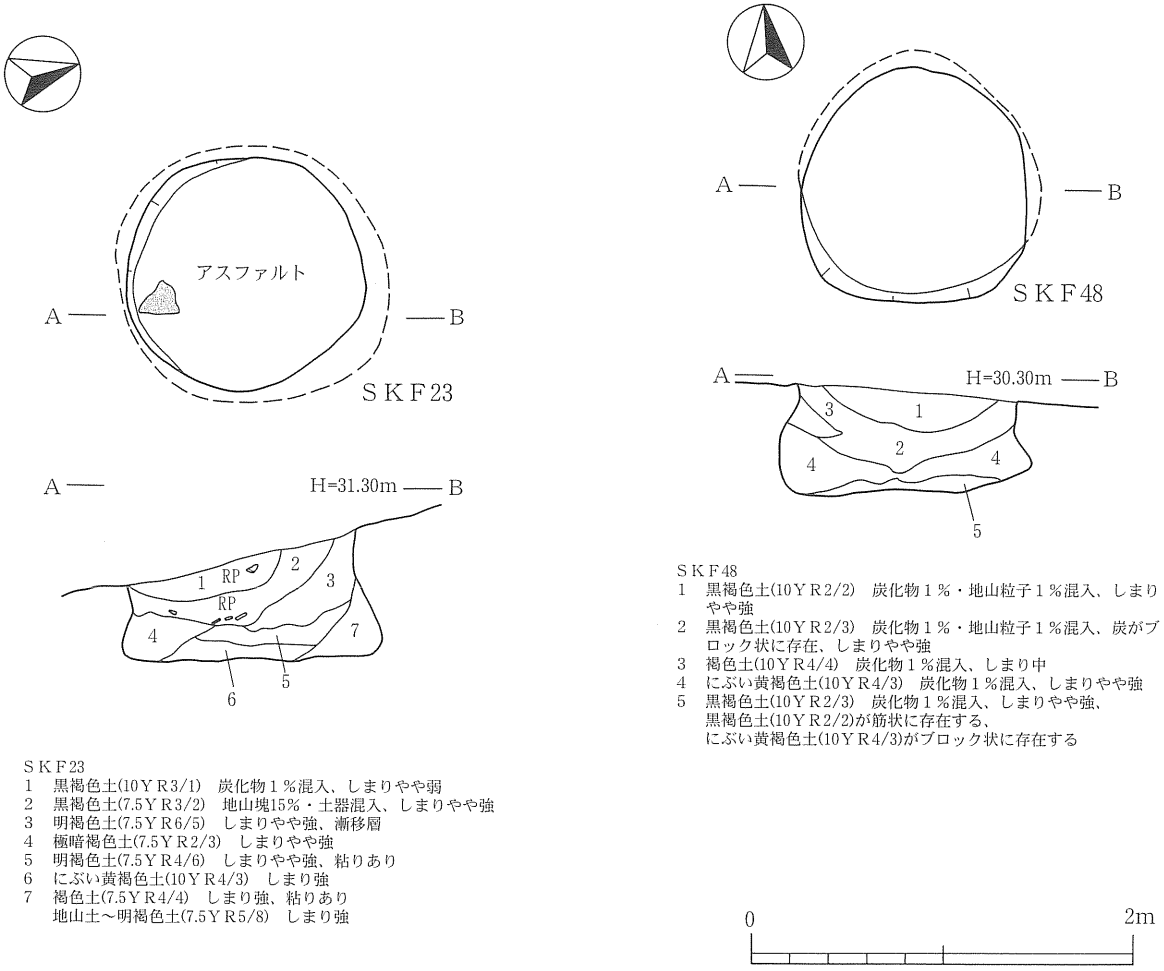
第13図　S I 52竪穴住居跡、炉



ＳＫ34
1　褐色土(10ＹＲ4/4)　径約２～７㎜の炭化粒５％含む、径４㎜の焼土粒10％含む地山塊斑に混入(40％)、硬くしまりあり、粘性なし

ＳＫ36
1　暗褐色土(10ＹＲ3/3)　炭化物最大長８㎜径２～７㎜２％含む、最大長約50㎜、40㎜の焼土塊２つ含む、58㎜の地山塊１つ含む、硬くしまりあり、粘性なし

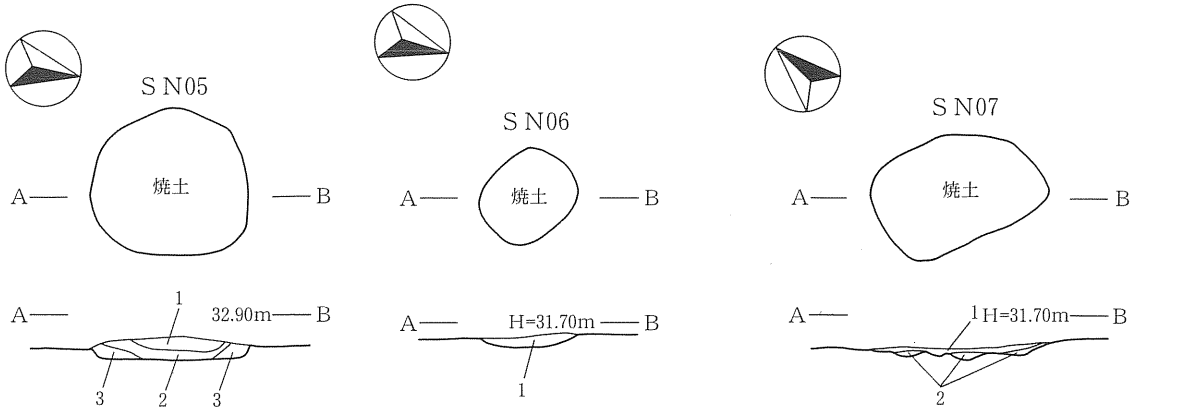
ＳＫ51
1　暗褐色土(10ＹＲ3/3)　しまりあり
2　暗褐色土(10ＹＲ3/4)　しまりあり、南側・北側は褐色強いが、まん中は黒味やや強い
3　黒褐色土(10ＹＲ2/3)　しまりやや弱、粘土質
4　にぶい黄褐色土(10ＹＲ5/4)　地山土を斑点状に含む、しまりやや弱、粘土質
地山土～褐色土(7.5ＹＲ4/6)



ＳＫＦ23
1　黒褐色土(10ＹＲ3/1)　炭化物１％混入、しまりやや弱
2　黒褐色土(7.5ＹＲ3/2)　地山塊15％・土器混入、しまりやや強
3　明褐色土(7.5ＹＲ6/5)　しまりやや強、漸移層
4　極暗褐色土(7.5ＹＲ2/3)　しまりやや強
5　明褐色土(7.5ＹＲ4/6)　しまりやや強、粘りあり
6　にぶい黄褐色土(10ＹＲ4/3)　しまり強
7　褐色土(7.5ＹＲ4/4)　しまり強、粘りあり
地山土～明褐色土(7.5ＹＲ5/8)　しまり強

ＳＫＦ48
1　黒褐色土(10ＹＲ2/2)　炭化物１％・地山粒子１％混入、しまりやや強
2　黒褐色土(10ＹＲ2/3)　炭化物１％・地山粒子１％混入、炭がブロック状に存在、しまりやや強
3　褐色土(10ＹＲ4/4)　炭化物１％混入、しまり中
4　にぶい黄褐色土(10ＹＲ4/3)　炭化物１％混入、しまりやや強
5　黒褐色土(10ＹＲ2/3)　炭化物１％混入、しまりやや強、黒褐色土(10ＹＲ2/2)が筋状に存在する、にぶい黄褐色土(10ＹＲ4/3)がブロック状に存在する

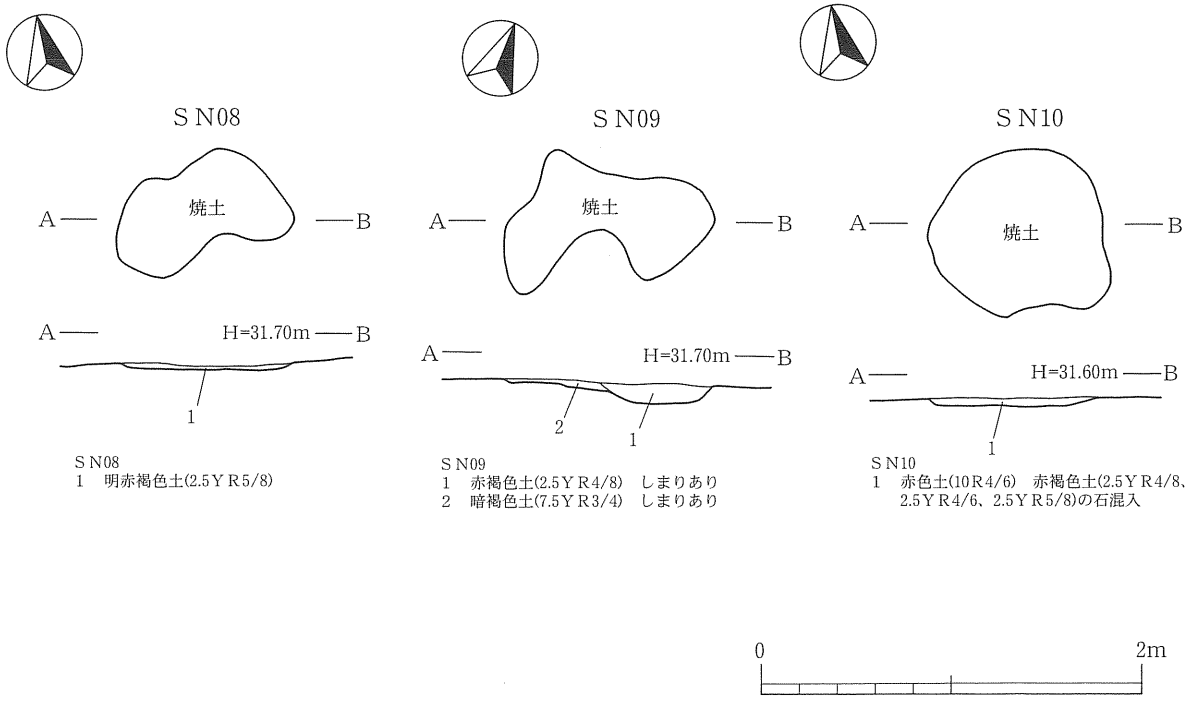
第14図　ＳＫ34・36・51、ＳＫＦ23・48土坑



S N05
1　赤色土(10R4/6)　しまり強
2　明赤褐色土(5YR5/6)　しまり強
3　明赤褐色土(5YR5/8)　しまり強

S N06
1　赤褐色土(2.5YR4/6)　しまりあり

S N07
1　赤褐色土(2.5YR4/6)　暗赤褐色(2.5YR3/6)・明赤褐色(2.5YR8/5)・橙色(5YR6/8)の石混入
2　赤褐色土(2.5YR8/5)　しまり弱

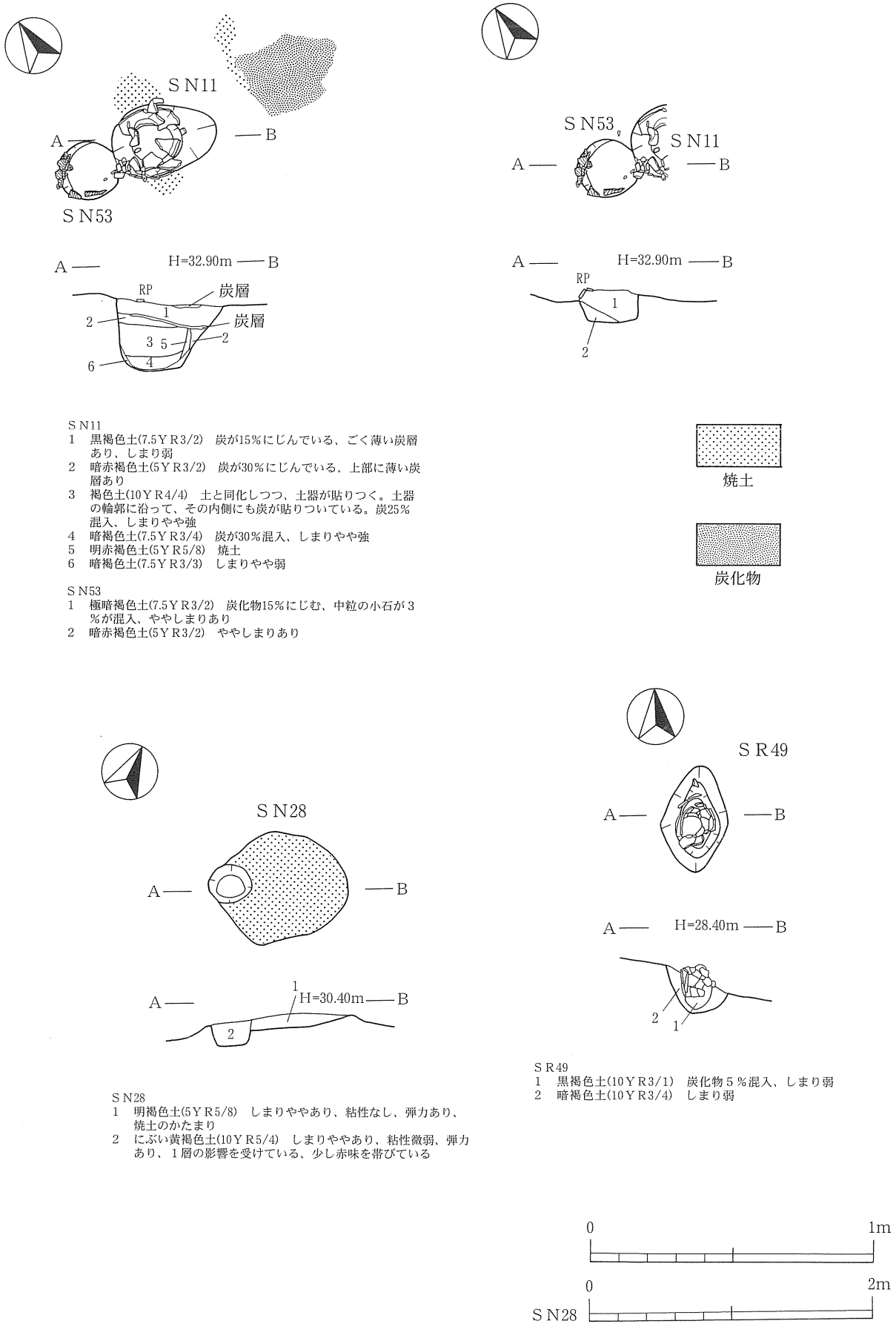


S N08
1　明赤褐色土(2.5YR5/8)

S N09
1　赤褐色土(2.5YR4/8)　しまりあり
2　暗褐色土(7.5YR3/4)　しまりあり

S N10
1　赤色土(10R4/6)　赤褐色土(2.5YR4/8、2.5YR4/6、2.5YR5/8)の石混入

第15図　S N05・06・07・08・09・10焼土遺構



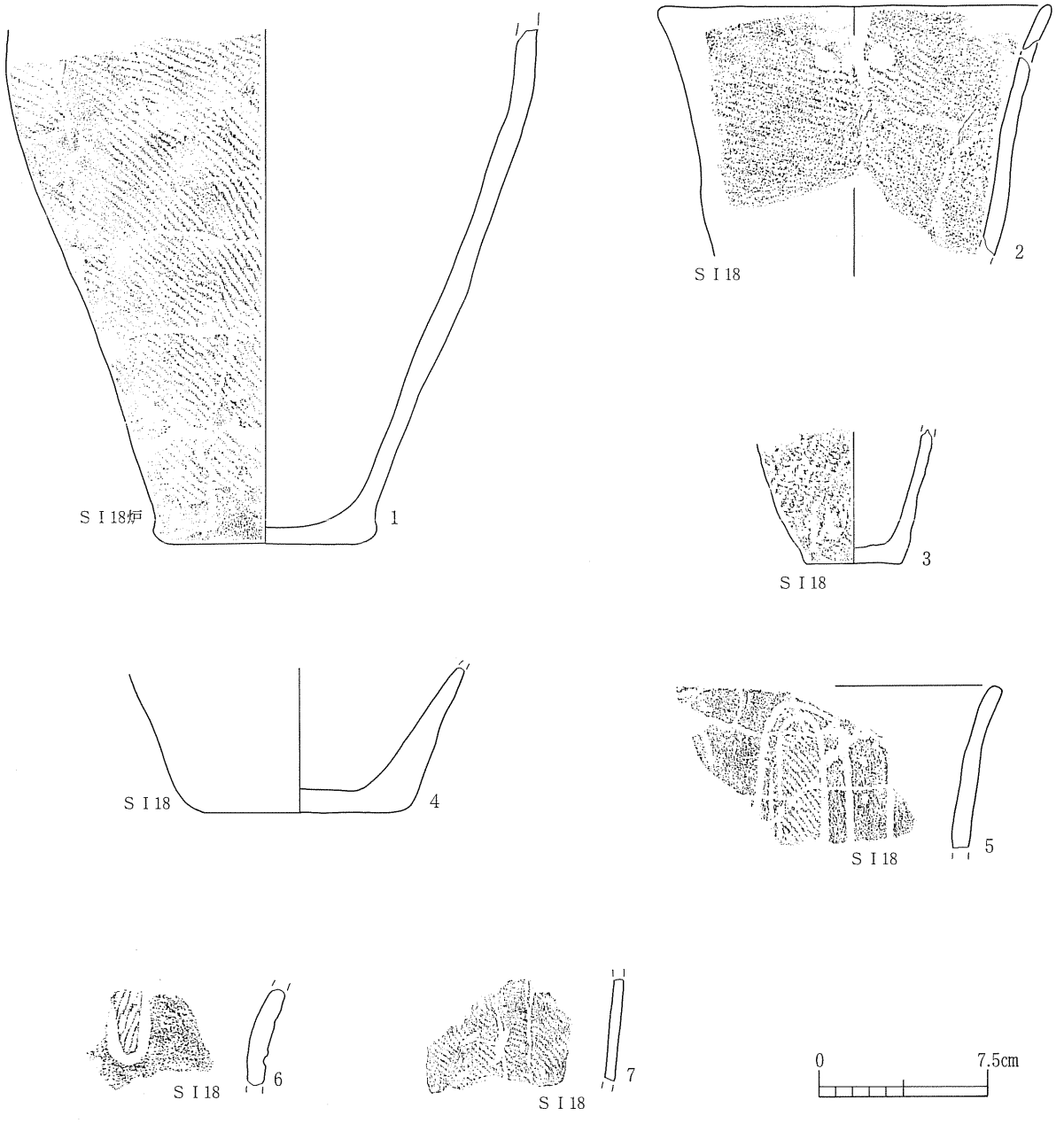
ＳＮ11
1　黒褐色土(7.5ＹＲ3/2)　炭が15％にじんでいる、ごく薄い炭層あり、しまり弱
2　暗赤褐色土(5ＹＲ3/2)　炭が30％にじんでいる、上部に薄い炭層あり
3　褐色土(10ＹＲ4/4)　土と同化しつつ、土器が貼りつく。土器の輪郭に沿って、その内側にも炭が貼りついている。炭25％混入、しまりやや強
4　暗褐色土(7.5ＹＲ3/4)　炭が30％混入、しまりやや強
5　明赤褐色土(5ＹＲ5/8)　焼土
6　暗褐色土(7.5ＹＲ3/3)　しまりやや弱

ＳＮ53
1　極暗褐色土(7.5ＹＲ3/2)　炭化物15％にじむ、中粒の小石が３％が混入、ややしまりあり
2　暗赤褐色土(5ＹＲ3/2)　ややしまりあり

ＳＮ28
1　明褐色土(5ＹＲ5/8)　しまりややあり、粘性なし、弾力あり、焼土のかたまり
2　にぶい黄褐色土(10ＹＲ5/4)　しまりややあり、粘性微弱、弾力あり、１層の影響を受けている、少し赤味を帯びている

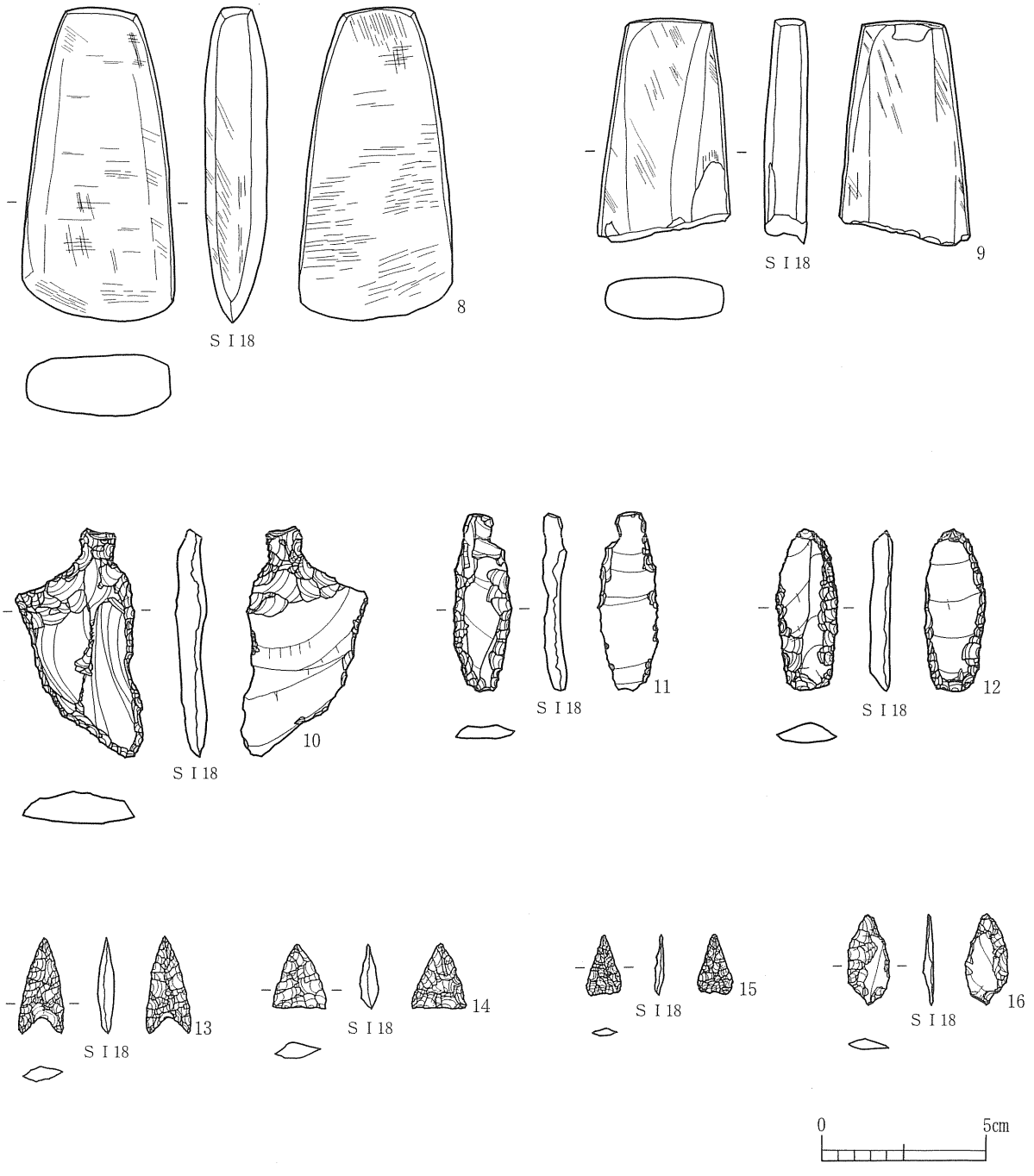
ＳＲ49
1　黒褐色土(10ＹＲ3/1)　炭化物５％混入、しまり弱
2　暗褐色土(10ＹＲ3/4)　しまり弱

第16図　ＳＮ11・53・28焼土遺構、ＳＲ49土器埋設遺構



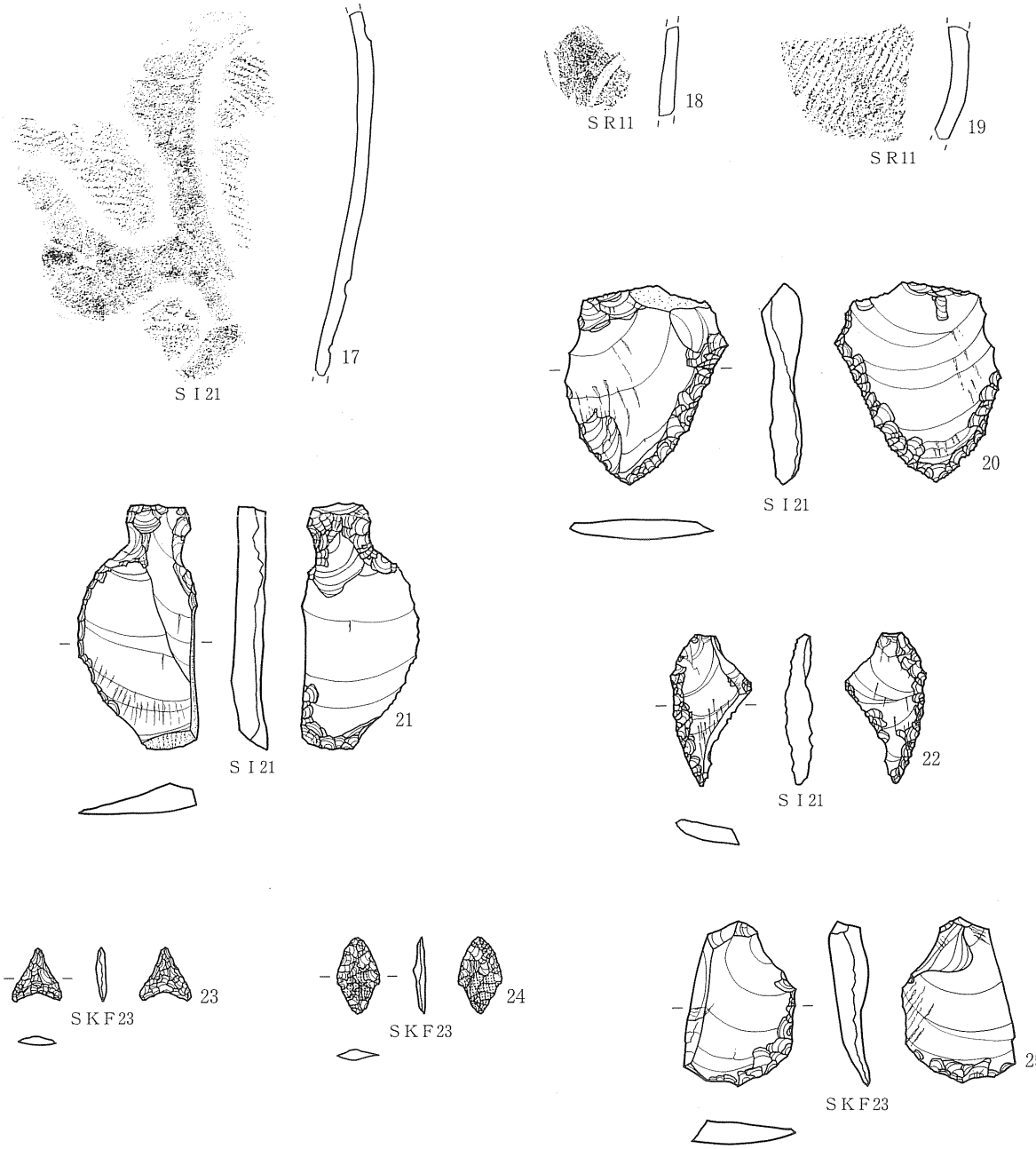
番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)
1	—	8.8	(23.2)
3	—	4.2	(6.0)
4	—	9.0	(6.5)

第17図　縄文時代遺構内出土遺物(1)



番号	遺構番号	器　種	大きさ（cm）			重量(g)	石　質	備　考
			長軸	幅	厚さ			
8	ＳＩ18	磨製石斧	9.6	4.65	2.0	127.9	緑色凝灰岩	ＲＱ368
9	ＳＩ18	磨製石斧(擦切)	6.8	4.0	1.3	63.3	凝灰岩	ＲＱ442
10	ＳＩ18	石　匙	7.0	3.8	0.85	20.5	頁　岩	ＲＱ352
11	ＳＩ18	スクレイパー	5.45	1.75	0.55	5.5	頁　岩	ＲＱ369
12	ＳＩ18	スクレイパー	4.9	1.8	0.65	6.2	頁　岩	ＲＱ340
13	ＳＩ18	石　鏃	3.0	1.4	0.45	1.5	頁　岩	ＲＱ341
14	ＳＩ18	石　鏃	2.0	1.65	0.5	1.3	頁　岩	ＲＱ378
15	ＳＩ18	石　鏃	1.85	1.1	0.2	0.4	黒曜石	ＲＱ51
16	ＳＩ18	石　鏃	2.85	1.3	0.3	1.0	頁　岩	ＲＱ111

第18図　縄文時代遺構内出土遺物(2)



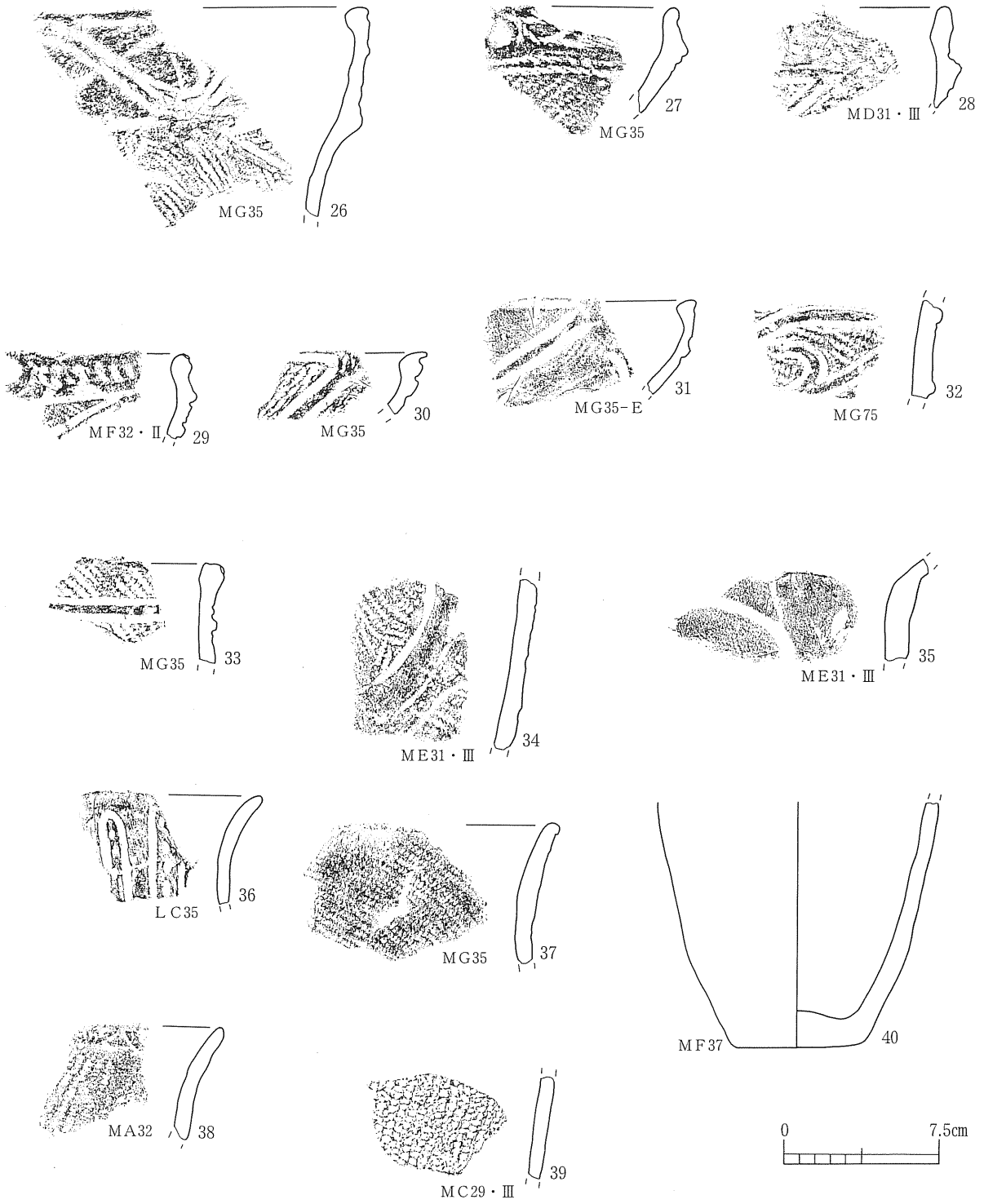
番号	遺構番号	器　種	大きさ（cm）			重量（g）	石　質	備　考
			長軸	幅	厚さ			
20	S I 21	スクレイパー	5.95	4.85	1.0	21.7	頁　岩	R Q18
21	S I 22	石　匙	7.3	3.5	0.8	22.4	頁　岩	R Q7
22	S I 22	スクレイパー	4.5	2.4	0.5	4.5	頁　岩	R Q27
23	S K F 23	石　鏃	1.6	1.5	0.3	0.4	頁　岩	R Q43
24	S K F 23	石　鏃	2.3	1.25	0.35	0.7	頁　岩	R Q31
25	S K F 23	スクレイパー	4.9	3.35	0.9	13.8	頁　岩	R Q13

※24は基部両面にアスファルト付着。

17～19　0　7.5cm

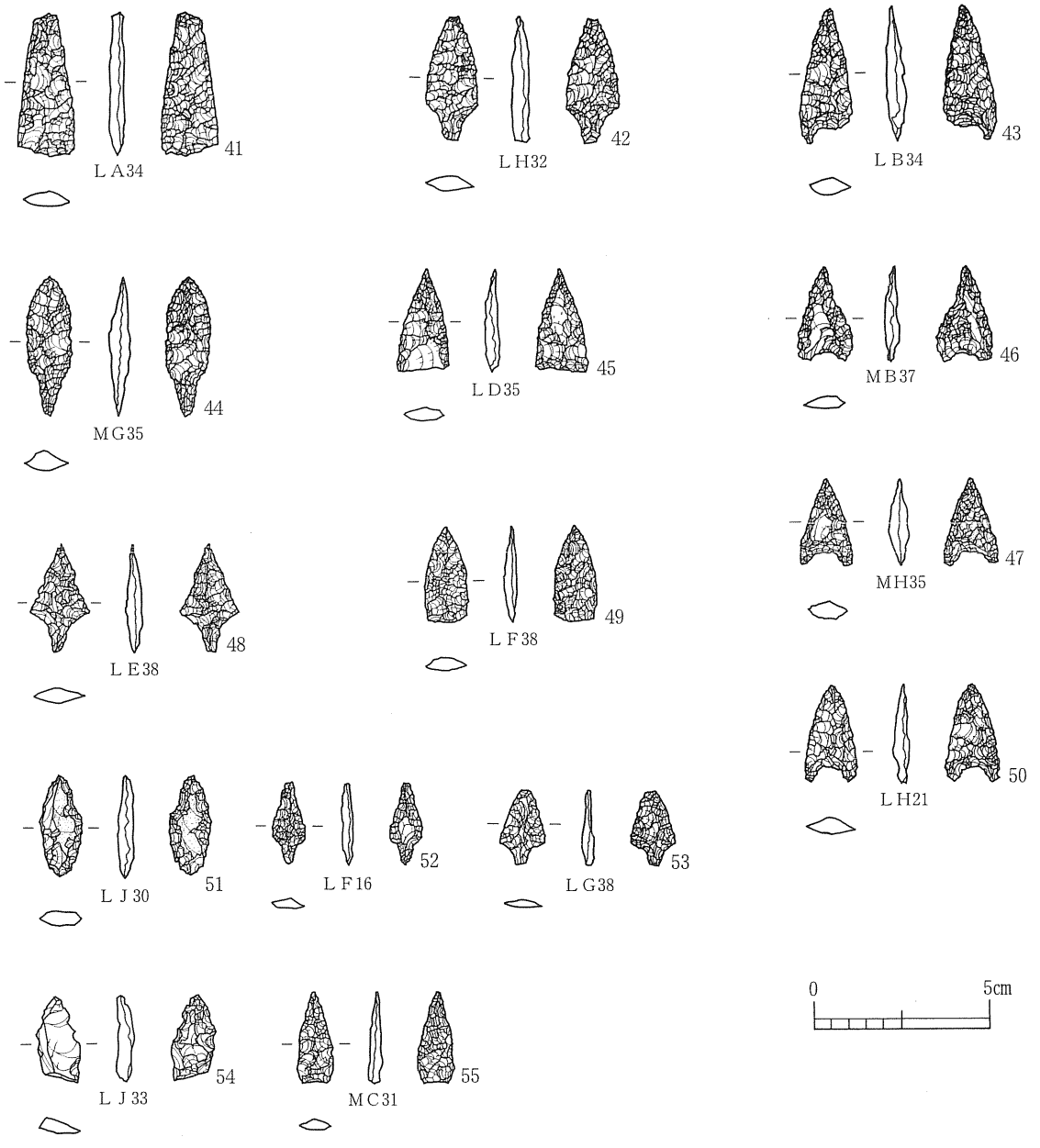
20～25　0　5cm

第19図　縄文時代遺構内出土遺物(3)



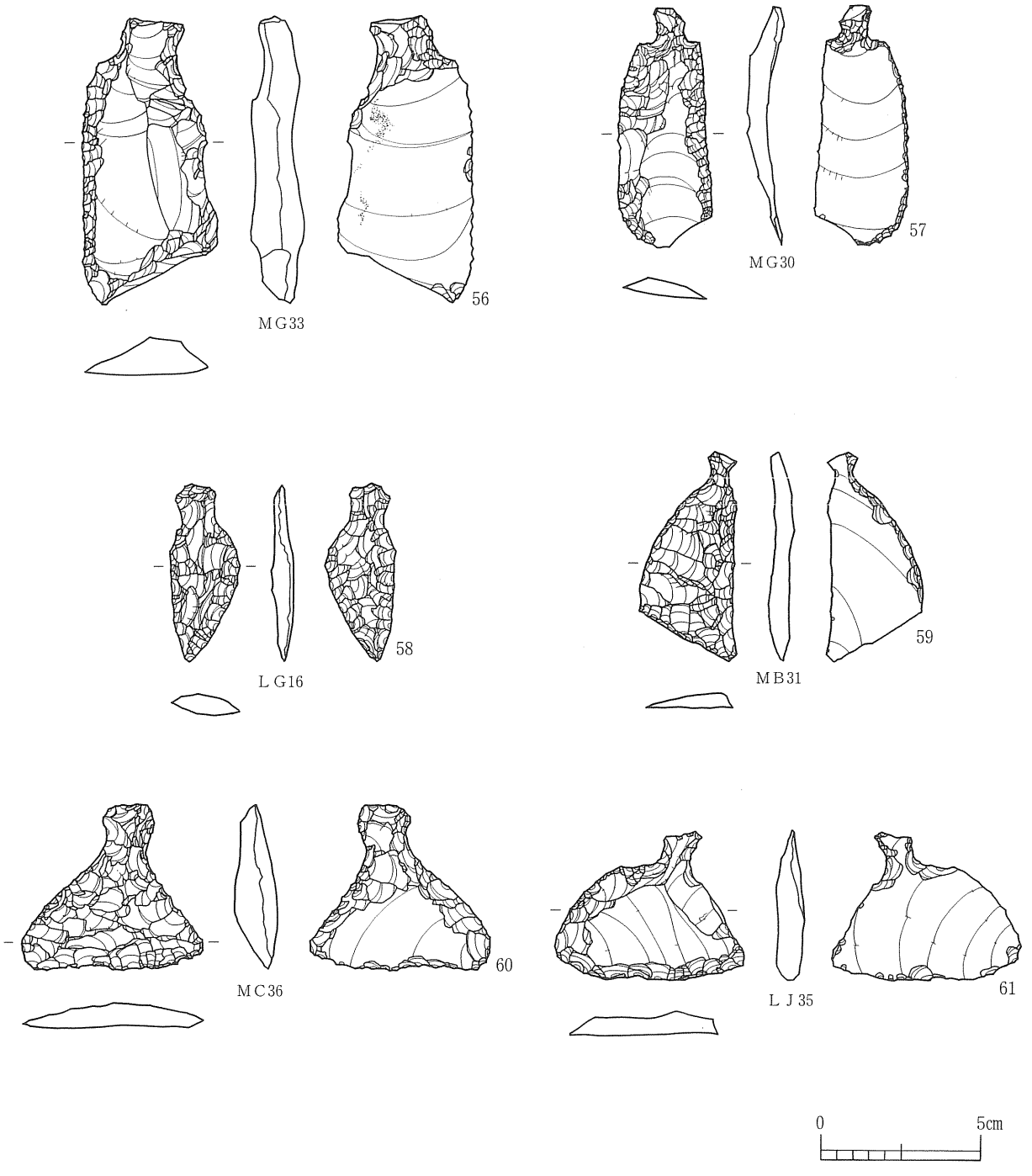
番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)
40	―	6.6	(12.0)

第20図　縄文時代遺構外出土遺物(1)



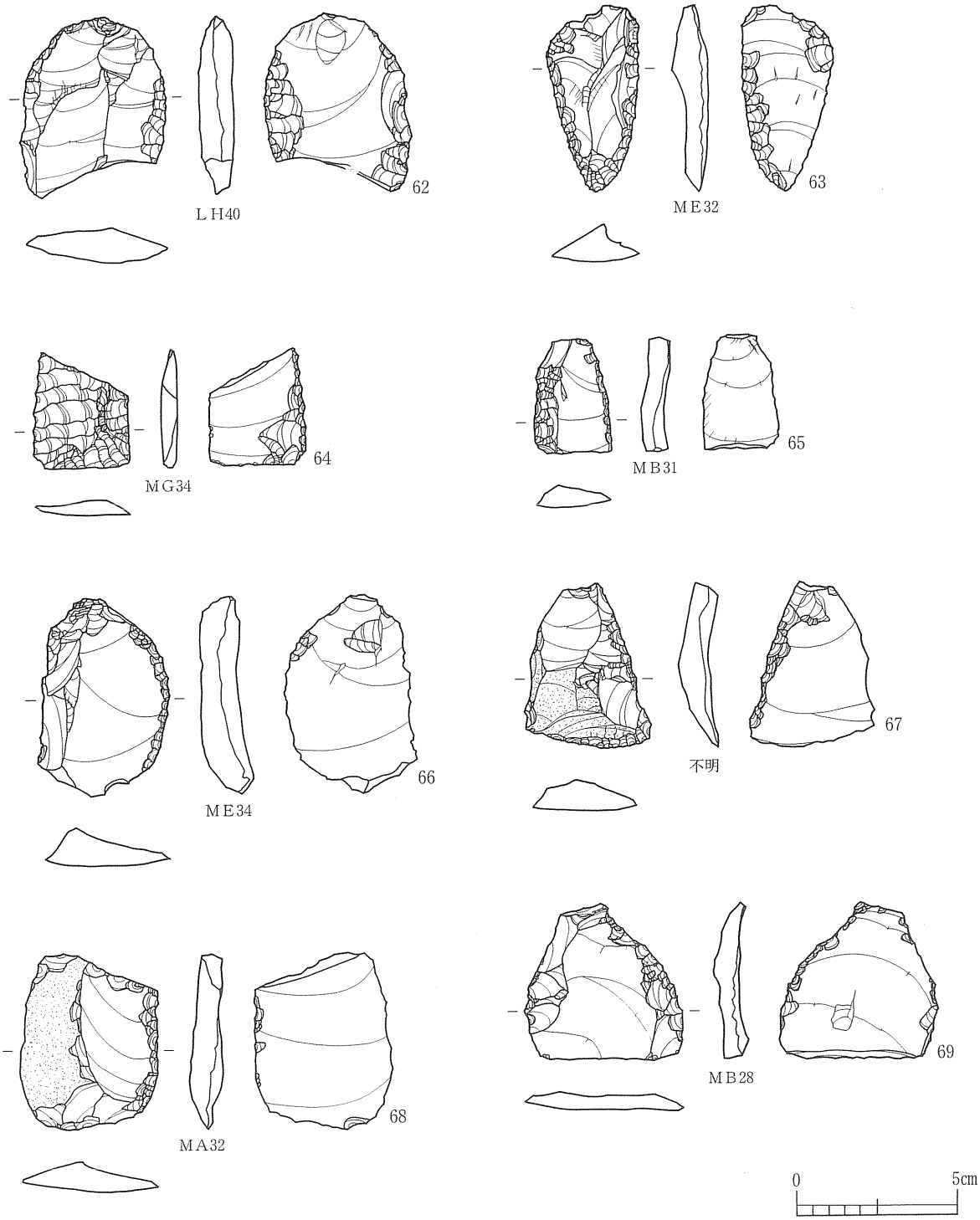
番号	グリッド	層　位	器　種	大きさ（cm） 長軸	幅	厚さ	重量(g)	石　質	備　考
41	LA34		石　鏃	4.15	1.65	0.45	3.3	頁　岩	
42	LH32		石　鏃	3.6	1.55	0.5	2.5	頁　岩	
43	LB34		石　鏃	3.9	1.5	0.5	2.6	頁　岩	
44	MG35	Ⅲ	石　鏃	4.0	1.35	0.6	2.2	頁　岩	
45	LD35	表　土	石　鏃	2.95	1.55	0.4	1.6	頁　岩	
46	MB37		石　鏃	2.75	1.6	0.4	1.2	頁　岩	
47	MH35	Ⅲ	石　鏃	2.55	1.55	0.5	1.5	頁　岩	
48	LE38		石　鏃	3.15	1.75	0.45	1.4	頁　岩	
49	LF38		石　鏃	2.8	1.3	0.35	1.3	頁　岩	
50	LH21	Ⅲ	石　鏃	2.85	1.55	0.5	1.5	頁　岩	
51	LJ30		石　鏃	2.9	1.25	0.45	1.3	頁　岩	
52	LF16	Ⅱ	石　鏃	2.45	1.0	0.3	0.5	頁　岩	
53	LG38	Ⅱ	石　鏃	2.2	1.35	0.3	0.7	玉　髄	
54	LJ33	Ⅱ	石　鏃	2.5	1.3	0.5	1.7	頁　岩	
55	MC31		石　鏃	2.65	1.05	0.35	0.9	黒曜石	

第21図　縄文時代遺構外出土遺物(2)



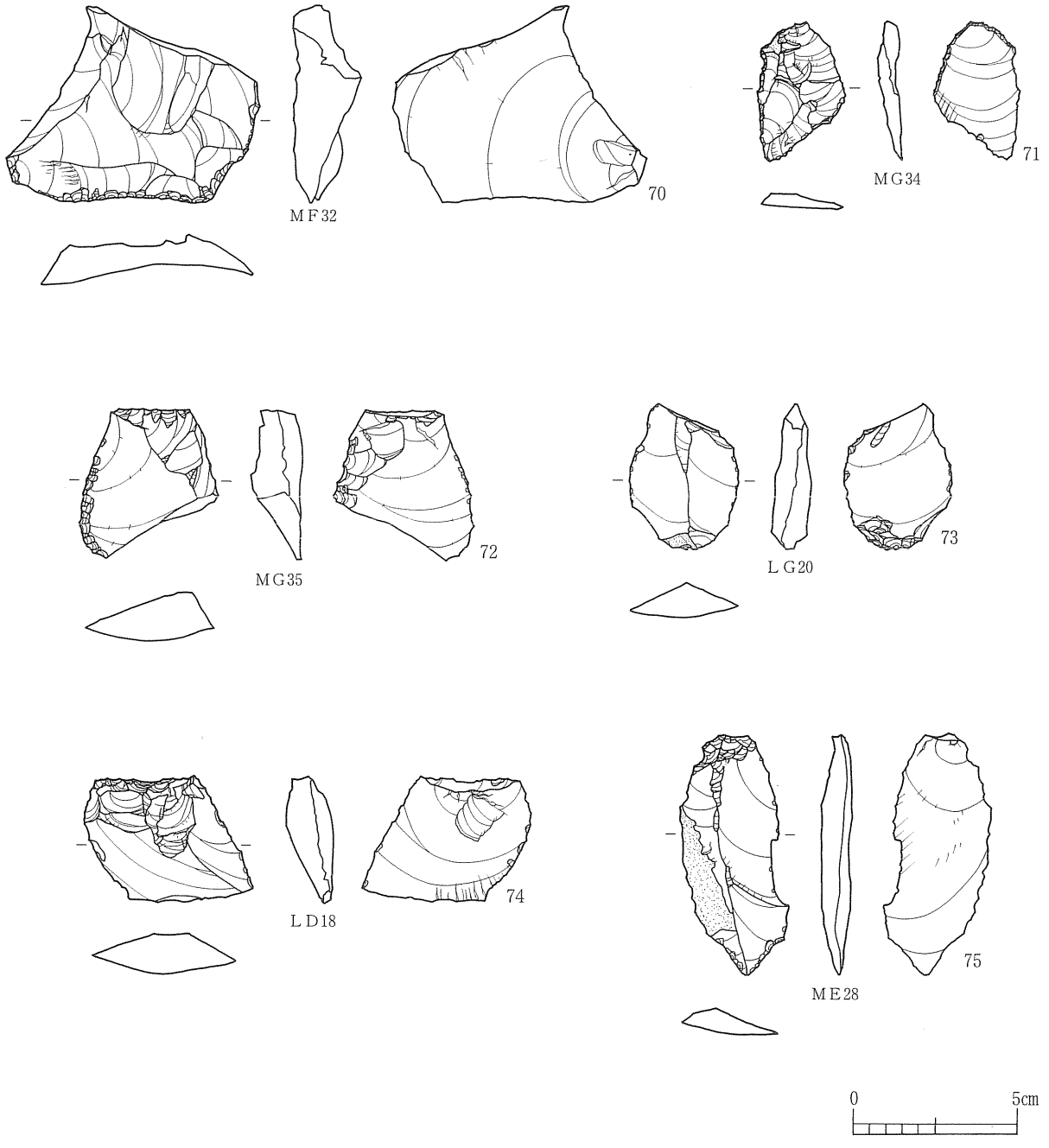
番号	グリッド	層　位	器　種	大きさ（cm）			重量(g)	石　質	備　考
				長軸	幅	厚さ			
56	MG33		石　匙	9.0	4.25	1.55	48.8	頁　岩	
57	MG30		石　匙	7.55	2.9	0.75	13.3	頁　岩	
58	LG16	Ⅱ	石　匙	5.5	2.2	0.7	6.7	頁　岩	
59	MB31		石　匙	6.6	3.0	0.6	10.8	頁　岩	
60	MC36		石　匙	5.2	5.65	1.3	25.6	頁　岩	
61	LJ35	Ⅱ	石　匙	4.7	5.9	0.8	21.3	頁　岩	

第22図　縄文時代遺構外出土遺物(3)



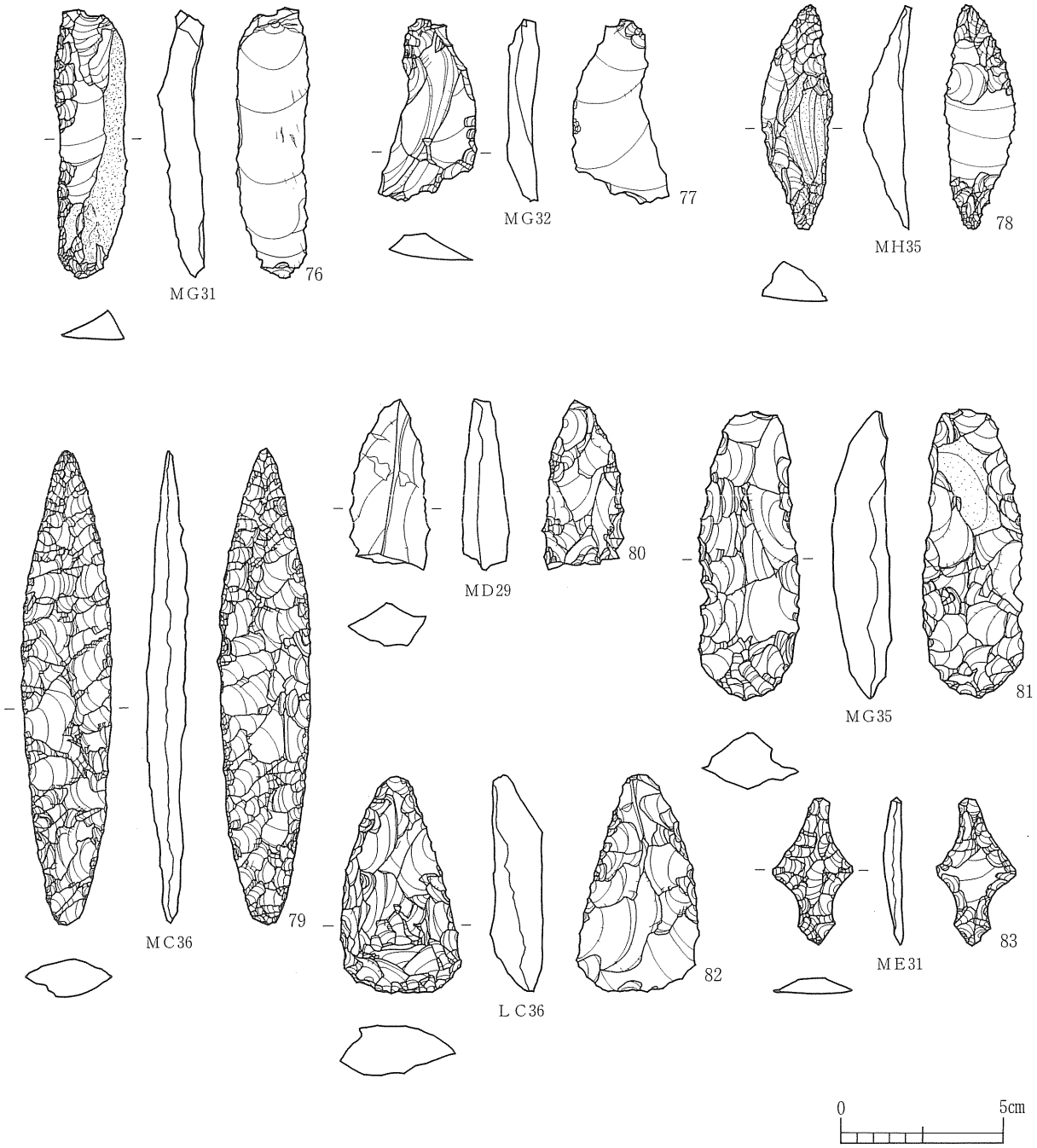
番号	グリッド	層　位	器　種	大きさ（cm）			重量（g）	石　質	備　考
				長軸	幅	厚さ			
62	LH40	Ⅲ	スクレイパー	5.65	4.65	1.05	26.4	頁　岩	
63	ME32		スクレイパー	5.55	4.35	1.0	22.1	頁　岩	
64	MG34		スクレイパー	3.7	3.05	0.45	6.5	頁　岩	
65	MB31		スクレイパー	3.6	2.4	0.75	7.2	頁　岩	
66	ME34		スクレイパー	6.25	4.2	1.3	31.7	頁　岩	
67	不　明	表　採	スクレイパー	5.2	3.9	0.95	17.0	頁　岩	
68	MA32	Ⅲ	スクレイパー	5.9	2.9	1.2	14.9	頁　岩	
69	MB28		スクレイパー	5.0	4.95	0.75	18.4	石　英	

第23図　縄文時代遺構外出土遺物(4)



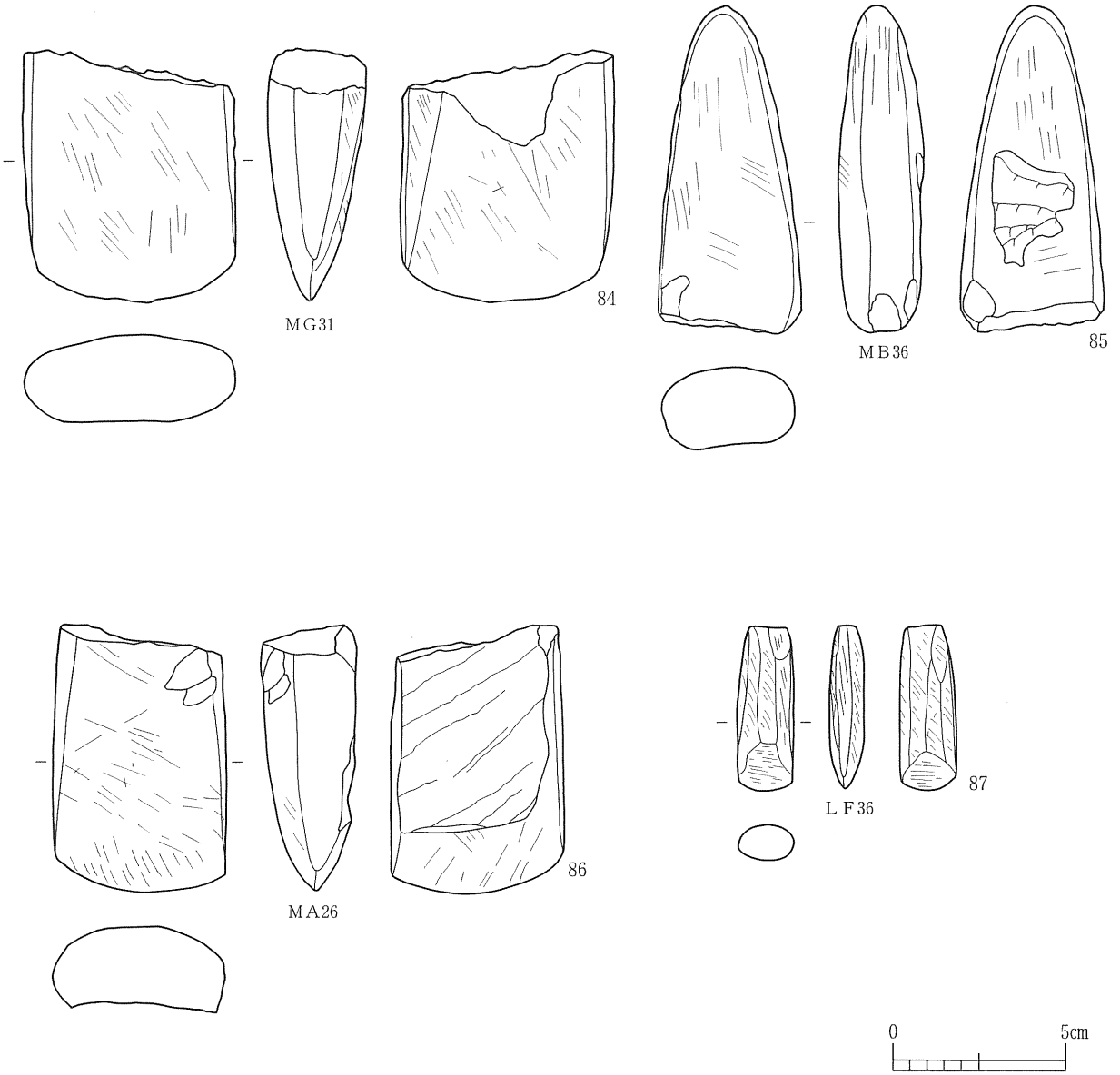
番号	グリッド	層　位	器　種	大きさ（cm）			重量(g)	石　質	備　考
				長軸	幅	厚さ			
70	MF32		スクレイパー	6.0	7.75	1.3	43.6	頁　岩	
71	MG34		スクレイパー	4.2	2.65	0.5	5.0	頁　岩	
72	MG35		スクレイパー	4.55	4.25	1.3	21.3	頁　岩	
73	LG20	Ⅱ	スクレイパー	4.45	3.3	1.1	13.0	頁　岩	
74	LD18		スクレイパー	3.85	5.15	1.25	24.5	頁　岩	
75	ME28		スクレイパー	7.35	3.3	0.8	15.4	頁　岩	

第24図　縄文時代遺構外出土遺物(5)



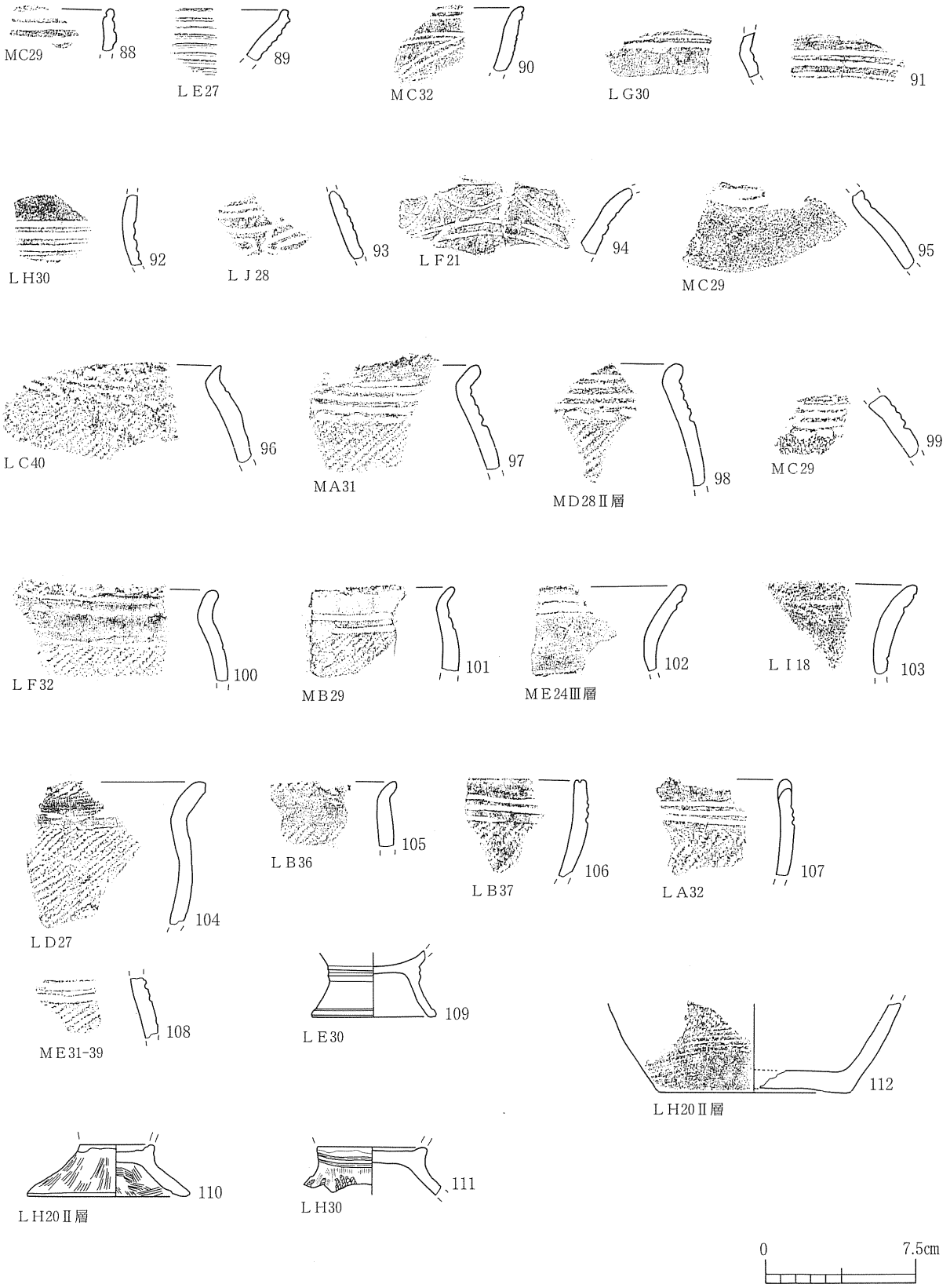
番号	グリッド	層　位	器　種	大きさ（cm）			重量(g)	石　質	備　考
				長軸	幅	厚さ			
76	MG31		スクレイパー	8.3	2.25	1.1	21.9	頁　岩	
77	MG32		スクレイパー	5.65	3.0	0.8	10.1	頁　岩	
78	MH35	Ⅲ	石　槍	6.9	2.2	1.15	14.0	頁　岩	
79	MC36		石　槍	14.7	2.85	1.2	44.7	頁　岩	
80	MD29	Ⅲ	石　槍	5.3	2.5	1.5	15.3	石　英	
81	MG35		石　箆	8.9	3.15	1.85	45.6	頁　岩	
82	LC36	Ⅲ	石　箆	6.7	3.8	1.55	35.9	頁　岩	
83	ME31		異形石器	4.55	2.5	0.6	3.7	頁　岩	

第25図　縄文時代遺構外出土遺物(6)



番号	グリッド	層　位	器　種	大きさ（cm）			重量(g)	石　質	備　考
				長軸	幅	厚さ			
84	MG31		磨製石斧	7.3	6.1	2.75	188.5	閃緑岩	
85	MB36		磨製石斧	9.5	4.2	2.3	143.7	礫質砂岩	
86	MA26	Ⅲ	磨製石斧	7.8	5.0	2.7	164.7	石英安山岩	
87	LF36		磨製石斧(擦切)	4.8	1.7	1.0	15.2	頁　岩	

第26図　縄文時代遺構外出土遺物(7)



番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)
112	—	(9.8)	(4.55)

第27図　縄文時代晩期末～弥生時代遺構外出土遺物

〈埋　　土〉５層に分けられたが、いずれにも炭化物または焼土を多量に含み、黒色の埋土であった。床面には、広範囲に１～２㎝の厚さで炭化物が堆積し、上位の層にも炭化物が団塊状に混入していた。焼土は主に床面近くに堆積していたが、壁沿いに盛り上がるような状態で検出された。これらのことから、焼失家屋であると判断され、上位の層に混じる炭化物は壁周辺の炭化物が中央部の凹みに流入、堆積したものと推定する。

〈　壁　〉急角度に立ち上がる。壁高は４方向いずれも0.35～0.42mの範囲に収まる。

〈壁　　溝〉北西側・南西側及び北東側・南東側の一部に壁溝を検出した。幅11～30㎝、深さ５㎝程度である。南東隅では検出できなかったが、極く浅いため、出入り口などの施設があったかは不明である。

〈床　　面〉ほぼ平坦である。

〈カ マ ド〉床面・壁面に多量の焼土が貼り付いていたが、炉またはカマドと判断できる部分は検出できなかった。

〈柱　　穴〉中央に１基、壁溝内に小柱穴５基を検出した。中央の１基は、径20㎝、床面からの深さ17㎝で、主柱穴と思われる。壁溝内から検出した柱穴は、径７～20㎝、深さ７～14㎝である。

〈遺　　物〉（第49図）埋土より土師器甕胴部破片が出土した。他に埋土上位より石鏃（144、145）、磨製石斧（146）が出土した。

〈構築時期〉確認面の層位と出土した土器片から、古代と思われる。

〈そ の 他〉周囲の竪穴住居跡及び竪穴状遺構と長軸方向は同じであるが、平面形が異なる。南東壁中央外側部分に付属施設と思われる、確認面から深さ８㎝の落ち込み部を検出した。これは出入り口と推定する。

ＳＩ04　竪穴住居跡(第29図)

〈位　　置〉ＬＦ17・18、ＬＧ17・18・19、ＬＨ18グリッドに位置する。

〈確　　認〉Ⅱ層下面で、黒色土の方形の落ち込みとして確認した。

〈重　　複〉なし。

〈形　　態〉方形を呈する。長軸方向は、Ｎ－52°－Ｅである。

〈規　　模〉開口部は、長軸（北東一南西）4.74m×短軸（北西一南東）4.63m、南東壁4.36m、南西壁4.58m、北西壁4.40m、北東壁4.15mを測る。推定床面積は18.48㎡である。壁高は、南西壁0.04～0.18m、南東壁0.03～0.16mである。

〈埋　　土〉10層に分けられたが、極薄い埋土で５～19㎝の厚さであった。全体にわたって焼土・炭化物が混入していたが、特に中央部に多かった。焼土・炭化物の著しい堆積状況から焼失家屋と判断され、中央付近に崩れ落ちながら燃えたものと推定される。

〈　壁　〉外傾しながら立ちあがる。

〈壁　　溝〉北西側及び北東側に壁溝を検出したが、幅20～38㎝、深さは５㎝程度である。南西側及び南東側では検出できなかったが、極浅いためか、その有無は不明である。

〈床　　面〉多少の凹凸はあったが、ほぼ平坦である。

〈カ マ ド〉南東壁の南側、南東隅に近いところからカマドの痕跡を検出した。袖部を構成していたと思われる褐色土の塊を２カ所で検出し、袖部分の残痕と判断した。その中央部には浅い掘り込みがあり、土師器の甕が倒立で据えられていた。この甕は原位置でないが、支脚の機能を有したものと考えられる。

〈柱　　穴〉床面から14基の柱穴を検出した。主柱穴は、Ｐ３・５・11・13と思われる。

〈遺　　物〉須恵器坏１点（第45図113）、須恵器台付坏１点（第45図116）、土師器坏２点（第49図114・115）、土師器甕５点（第149図118・119、第46図120～122）、紡錘車１点（第49図147）、須恵器水瓶１点（第45図117）が出土した。須恵器坏は墨書土器で、読みは「宍人（ししひと）」である。

〈構築時期〉確認面の層位と出土した土器から、古代と思われる。

〈そ の 他〉同時期と思われる他の竪穴住居跡に比較すると、カマドの位置がやや異なることがわかる。いずれも東側にあることに変わりはないが、他は北東側に位置し、本住居跡は南東側に位置している。

ＳＩ12　竪穴住居跡(第32図)

〈位　　置〉ＭＥ28・29、ＭＦ28・29グリッドに位置する。

〈確　　認〉遺構確認のためⅡ層を掘り下げ中、ＭＥ29、ＭＦ29グリッドの高い斜面上の窪みに、不整方形の黒色土を確認した。

〈重　　複〉ＳＫ33と重複し、本遺構と同時期と考えられる。

〈形　　態〉隅丸方形を呈する。

〈規　　模〉床面は南北4.70m、東西4.40m、深さ0.40mを測る。北西部の掘りこみを含めると北側0.40m、西側0.60mほど広がり、掘りこみの深さは0.10mを測る。

〈埋　　土〉７層に分けられた。自然堆積である。

〈　壁　〉壁面は底面からほぼ垂直に立ち上がる。南・東側の立ち上がりは不明であるが、ピットの位置関係から壁を推定した。

〈床　　面〉平坦である。

〈カ マ ド〉北東隅にある。東壁の外側に掘り込みをもつが、袖口は壁より内側である。煙道は不明。また、燃焼部を切る形でＳＫ33があり、そこは炭を含んだ黒色土溜りとなっていた。焼石は支脚の可能性が考えられる。

〈遺　　物〉66点出土した。斜面からの流れ込みによるものが殆どである。そのうちカマドの燃焼部に伏せられた状態で出土した土師器甕（第46図122）の底部は平底で、木葉底である。

〈構築時期〉カマドや遺物から見て、古代と思われる。

〈そ の 他〉北・西壁上の掘り込みには、屋根の覆いのような支柱と思われる小ピットを検出した。

ＳＩ20　竪穴住居跡(第33図)

〈位　　置〉ＬＩ26・27、ＬＪ26・27グリッドに位置する。

〈確　　認〉当初、Ⅱ層下面で柄鏡形に広がる焼土を検出し、焼土遺構としたが、黒褐色土の隅丸長

方形の落ち込みに接することを確認し、この焼土が竪穴住居跡に伴うカマド跡と判断した。

〈重　　複〉ＳＤ55溝跡の東側を壊して構築されている。また、重複はないが、周囲にＳＤ31溝跡が巡るような形で存在する。

〈形　　態〉隅丸長方形を呈する。長軸方向は、Ｎ－58°－Ｅである。南東壁東寄りにカマドの付設されている竪穴住居跡である。

〈規　　模〉長軸(北西－南東)4.30m×短軸(北東－南西)3.85mで、南東壁3.91m、南西壁4.16m、北西壁3.62m、北東壁4.24mを測る。壁溝部を除く底面部は、長軸(北西－南東)4.10m×短軸(北東－南西)3.50mで、推定床面積は14.35m²である。壁高は、南東壁0.03～0.24m、南西壁0.03～0.07m、北西壁0.07～0.22m、北東壁0.24～0.22mである。南西側に向かって傾斜するため、北東 壁付近の遺存状態は良いが、南西側は大部分の壁の本来の高さが失われているものと思われる。

〈埋　　土〉５層に分けた。埋土も大部分が流失しているものと思われるが、床面付近には炭化物、または焼土を多量に含む場所があり、その出土状況から焼失家屋と判断した。焼土は主に床面中央付近に堆積していたが、壁溝付近でもやや多く検出された。南東部の焼失部分に比較すると、炭化物・焼土の量が少ない。埋土とともに遺構外の南西斜面に流出したものと推定する。

〈　壁　〉南西側は遺存状態が悪く、緩やかに立ち上がる極低い壁を検出したが、掘り過ぎの部分もあるものと思われる。北東側は壁溝を伴い、急角度に立ち上がる。

〈壁　　溝〉北東側及び北西側の一部に壁溝を検出したが、幅26cm以下、床面からの深さは９cm以下である。その他の部分では検出できなかったが、流失のためか、出入り口などの施設があったためかは不明である。

〈床　　面〉ほぼ平坦であるが、所々に凹凸があった。草木の根による撹乱の為と考えられる。

〈カ マ ド〉上部は流失したものと思われるが、袖部・煙道部ともに確認できた。焚口部は、中央部に向かって傾斜し、中央部には浅い掘り込みがあった。土製支脚と判断できる遺物は確認できなかった。煙道部に近い位置から出土した倒立の土師器甕と須恵器坏がこの機能を有した可能性も考えられるが、これら倒立で出土した土器とその他カマドにかけられたと思われる砲弾形の土師器甕の出土状況からは断定し難い。袖部は、地山の褐色土で構築していたが、締まりの良い部分が残り、そうでない部分は失われていた。煙道部は、1.12mにわたる痕跡を検出した。本遺跡でカマドの煙道部まで検出できたのは本住居跡だけである。

〈柱　　穴〉床面から13基、壁溝内に小柱穴３基を検出した。本住居跡の周囲からも柱穴が検出されていることから、すべてが本住居跡に伴うかどうかは不明であが、Ｐ３・４・８・９が主柱穴と思われる。床面から検出した柱穴は、径18cm～40cm、深さ９cm～36cmであり、壁溝内から検出した柱穴は、径16～24cm、深さ12～37cmであった。

〈遺　　物〉カマド内部から砲弾形の土師器甕１点（第46図125)、須恵器坏２点（第46図123・124）が出土した。住居埋土から土師器甕が４点（第46図）出土している。

〈構築時期〉出土した土器から、古代と思われる。

〈そ の 他〉同時期と考えられる竪穴住居跡及び竪穴状遺構と向きは同じであるが、長軸方向・短軸方向が逆になる。ＳＤ31溝跡は、本住居跡と同一面での確認であり、同時存在の可能性が高いと判断した。すなわち、ＳＤ31溝跡は本住居跡の南東側を除く周囲に巡り、本住居跡に付属する施設と思われる。

ＳＩ25　竪穴住居跡(第35図)

〈位　　置〉ＭＣ29グリッドに位置する。

〈確　　認〉Ⅱ層中で黒色土の円形の広がりとして確認した。

〈重　　複〉なし。

〈形　　態〉方形を呈する。長軸方向はＮ－42°－Ｅである。

〈規　　模〉長軸（北東－南西）2.88m×短軸（北西－南東）2.13m、深さ0.28m。

〈埋　　土〉12層に分けられた。

〈　壁　〉少し開きぎみに立ち上がる。

〈床　　面〉ほぼ平坦である。南西から東側にかけて、溝が巡っていた。
溝の幅は0.10～0.30mで、深さは床面から0.10mである。

〈カ マ ド〉確認時は「Ｕ」字形の暗褐色土の落ち込みとして検出した。カマドは底面から壁にかけて赤く焼けていた。

〈柱　　穴〉検出できなかった。

〈遺　　物〉縄文土器と土師器が46点、石器が２点出土した。縄文土器片は埋土の上層部（１・２層）で出土し、ほとんど小破片である。カマドからはほぼ完形の土師器の杯（ＲＰ113）が出土した。カマドの第６層を中心にして多くの遺物が出土した。

土師器坏（第47図130）、土師器甕（第47図131）、弥生土器（第47図132・133）を図示した。

〈改　　築〉溝が南東側で２つに分かれること、焼土が２ヵ所にあること、大きさの違う壁が２辺確認できたことと平面図・断面図から、次のように推定する。

まず、大きい方形プランの壁とカマドをもつ遺構が構築される。

次に、焼土Ａ・Ｂと「Ｌ」字形に巡る溝が同時に存在した。

次に、小さい方形プランの壁と「Ｕ」字形の溝が同時に存在した。

よって、最低でも２回の改築があった可能性が有る。しかし、柱穴が確認されていないなど、改築については推定の域を出ていない。

また、一応住居跡としたものの、普通の住居跡と形態が異なるため、別の機能をもっていたのかも知れない。

〈構築時期〉確認面の層位と出土遺物から、古代と推定する。

ＳＩ44　竪穴住居跡(第36図)

〈位　　置〉ＭＤ40・41、ＭＥ40・41・42、ＭＦ40・41・42グリッドに位置する。

〈確　　認〉Ⅱ層掘り下げ中、方形で長径約4.50m、短径約4.00mの黒色土の広がりとして確認した。

〈重　　複〉なし。
〈形　　態〉方形を呈する。長軸方向はＮ－22°－Ｗである。
〈規　　模〉北西－南東軸8.33m、南西－北東軸は不明。深さ0.80m
〈埋　　土〉３層に分けられた。自然堆積である。
〈　壁　〉残存部分に関しては、外側へわずかに開きながら立ち上がる。
〈床　　面〉第１層の下面が床面と思われる。ほぼ平坦である。
〈カ マ ド〉底面には薄くぼんやりとしているが、径0.70mに広がる赤褐色の焼土があり、これを炉と判断した。
〈柱　　穴〉主柱穴はＰ１・２・４・５・６・33と推定されるが判然としない。
〈遺　　物〉外側の壁溝から土師器が６片出土した。
〈改　　築〉壁溝が２重となっていることから１回の建て替えの可能性がある。
〈構築時期〉確認面の層位と出土遺物から古代と思われる。
〈壁　　溝〉南西側で２重となっている。これは全体に巡ると思われるが、他では検出出来なかった。外側の壁溝は拡張して建て替えをした時のものと思われる。また、浅いが壁溝に伴う柱穴が12基存在する。しかし、柱穴の全体的な配置は不明である。

(２)土坑

ＳＫ13　土坑(第37図)
〈位　　置〉LD30・31、LE30・31グリッドに位置する。
〈確　　認〉Ⅱ層中で、暗褐色土の楕円形の落ち込みとして確認した。
〈重　　複〉なし。長軸方向はＮ－25°－Ｗである。
〈形　　態〉不整楕円形を呈する。
〈規　　模〉開口部　長軸（北西－南東）4.77m×短軸（北東－南西）3.72m、
底面　長軸3.18m×短軸2.84m、深さ0.67m。
〈埋　　土〉２層に分けられた。土粒が水平方向に流れていたことから、自然堆積と判断した。
〈　壁　〉南西側はやや外傾しながら、他は大きく外傾しながら立ち上がる。一部凹凸がある。
〈底　　面〉大小の凹凸があり、特に北東側の凹みは16cm落ち込む。
〈遺　　物〉出土しなかった。
〈構築時期〉確認面の層位から、古代と思われる。
〈そ の 他〉不整形であり、壁・底面ともに凹凸が激しいことから、土取り用の土坑と思われる。

ＳＫ17　土坑(第38図)
〈位　　置〉ＬＤ33、ＬＥ33グリッドに位置する。
〈確　　認〉遺構検出のためⅡ層下面を精査中、円形の黒褐色土の広がりとして確認した。
〈重　　複〉なし。
〈形　　態〉円形を呈する。
〈規　　模〉開口部　長軸（南－北）0.68m×短軸（東－西）0.67m、

底面　長軸0.54m×短軸0.54m、深さ0.24m。

〈埋　　土〉２層に分けられた。土粒が水平方向に流れていたことから、自然堆積と判断した。

〈　壁　〉側面は外側に少し開き気味に開きながら立ち上がる。

〈底　　面〉ほぼ平坦である。

〈遺　　物〉出土しなかった。

〈構築時期〉基本層位Ⅱ層で検出されたので、出土遺物はないが、古代のものと思われる

ＳＫ19　土坑(第38図)

〈位　　置〉ＭＢ30グリッドに位置する。

〈確　　認〉Ⅱ層中で黒褐色土の円形の広がりとして確認した。その黒褐色土には、炭化物・焼土粒が混入し、南側では多量の焼土粒を確認した。

〈重　　複〉なし。

〈形　　態〉円形を呈す。

〈規　　模〉開口部　長軸（南－北）0.44m×短軸（東－西）0.43m、
底面　長軸(東－西）0.32m×短軸（南－北）0.30m、深さ0.20m。

〈埋　　土〉Ⅰ層である。炭化物・焼土・地山土粒が多量に混入しているが、平面的な広がりはなく斑状であることから、人為的に埋められたものと考えられる。

〈　壁　〉壁はほぼ垂直に立ち上がる。

〈底　　面〉底面は平坦である。

〈遺　　物〉土師器甕（第48図134）が出土した。

〈構築時期〉確認面の層位、出土遺物から古代と推定する。

ＳＫ24　土坑(第38図)

〈位　　置〉ＭＢ28グリッドに位置する。

〈確　　認〉Ⅲ層中で、地山土魂の混入した暗褐色土の円形の広がりとして確認した。

〈重　　複〉なし。

〈形　　態〉円形を呈する。

〈規　　模〉開口部　長軸（南－北）0.87m×短軸（東－西）0.83m、
底面　長軸0.67m×短軸0.67m、深さ0.28m。

〈埋　　土〉２層に分けられた。第１層に地山土魂が混入していて、全体的に締まりがあることから人為的に埋め戻されたものと考えられる。

〈　壁　〉壁は少し開きぎみに立ち上がる。

〈底　　面〉底面は平坦である。

〈遺　　物〉遺物は土師器の破片12点、石器３点である。そのほとんどが第１層の東側から出土している。土師器片の混入した土を埋め戻したと考えられる。土師器甕（第48図）、弥生土器（第48図）を図示した。

〈構築時期〉古代と思われる。

ＳＫ33　土坑(第38図)

〈位　　置〉ＳＩ12内のＭＥ29グリッドに位置する。

〈確　　認〉ＳＩ12床面を精査中、北東隅に、円形の木炭塊を伴う黒色土の広がりとして確認した。

〈重　　複〉ＳＩ12と本遺構は同時期と考えられる。

〈形　　態〉円形を呈する。

〈規　　模〉開口部　長軸（東－西）0.88m×短軸（南－北）0.85m、
底面　長軸0.78m×短軸0.75m、深さ0.26m。

〈埋　　土〉５層に分けられた。土は木炭塊・炭を多く含んでおり、５層はそれが顕著である。黒色土溜りとなっていた。第３層はＳＫ内流入後、既に堆積していた土の影響を受けて、黒色が強くなったものと思われる。

〈　壁　〉少し開き気味に立ち上がる。

〈底　　面〉平坦である。

〈遺　　物〉出土しなかった。

〈構築時期〉古代と思われる。

〈そ の 他〉ＳＩ12のカマドの燃焼部を、平面的には、切る形で存在している。それに接する東側口縁部～側面～底面にかけては炭化物・焼土(10ＹＲ4/8赤)が硬化し、貼りついている。その状況と埋土から、本遺構はカマドの灰掻き出し穴(捨て穴)と考えられる。

ＳＫ35　土坑(第39図)

〈位　　置〉ＭＣ30グリッドとＭＣ31グリッドに位置する。

〈確　　認〉Ⅱ層中で黒色土の円形の広がりとして確認した。

〈重　　複〉なし。

〈形　　態〉隅丸長方形を呈する。長軸方向はＮ－47°－Ｅである。

〈規　　模〉長軸（北東－南西）286cm×短軸（北西－南東）194cm、深さ44cm。

〈埋　　土〉２層に分けられた。

〈　壁　〉壁はほぼ垂直に立ち上がる。

〈底　　面〉底面は平坦である。第２層の下は地山土混じりの褐色土であったため、貼り床の可能性がある。

〈遺　　物〉縄文土器片と土師器片10点、石器１点が出土した。そのほとんどが第１層から出土していて、流れ込んだものと考えられる。石器のスクレイパー（第49図151）を図示した。

〈構築時期〉確認面の層から古代と推定する。

〈そ の 他〉具体的な性格は不明である。

ＳＫ37　土坑(第39図)

〈位　　置〉ＬＡ32グリッドに位置する。

〈確　　認〉暗褐色土の円形の落ち込みとして確認した。

〈重　　複〉なし。

〈形　　態〉円形を呈する。長軸方向はＮ－１°－Ｅである。
〈規　　模〉開口部　長軸（東－西）0.93m×短軸（南－北）0.92m、深さ0.62m。
〈埋　　土〉４層に分けられた。自然堆積と判断した。
〈　壁　〉底面周辺はやや外傾気味に立ち上がるが、底面より0.20mほどのところから上部はやや内傾し、開口部はほぼ垂直に立ち上がる。
〈底　　面〉平坦である。
〈遺　　物〉出土しなかった。
〈構築時期〉土層ベルトの観察から、掘り込みがⅡ層からであることを確認し、古代と判断した。

ＳＫ38　土坑(第38図)
〈位　　置〉ＬＥ19グリッドに位置する。
〈確　　認〉Ⅱ層下面で、黒褐色土の円形プランとして確認した。
〈重　　複〉なし。
〈規　　模〉長軸（南－北）0.72m×短軸（東－西）0.71m、深さ0.20m。
〈平 面 形〉円形である。
〈断 面 形〉外傾しながら立ち上がる。
〈埋　　土〉２層に分けられた。１層は人為堆積、２層は自然堆積と思われる。
〈底　　面〉中央部が窪むがほぼ平坦である。
〈遺　　物〉なし。
〈時　　期〉確認面の層位と、周辺の遺構の検出状況から古代と思われる。

ＳＫ39　土坑(第40図)
〈位　　置〉ＬＦ29、ＬＦ30のグリッドに位置する。
〈確　　認〉遺構検出のためⅡ層を精査中、円形で黒色土の広がりとして検出した。
〈重　　複〉なし。
〈形　　態〉ほぼ円形を呈する。
〈規　　模〉開口部　長軸（南－北）2.62m×短軸（東－西）2.62m、
底面部　長軸（東－西）2.04m×短軸（南－北）1.83m、深さ0.66m。
〈埋　　土〉５層に分けられた。自然堆積である。
〈　壁　〉外側に少し開いて立ち上がる。北東、南西側に比べ、北西、南東側の開き具合は大きい。
〈底　　面〉平坦ではなく、６箇所の窪みがある。
〈遺　　物〉長径26cmの炭化材が埋土から出土した。
〈構築時期〉確認面の層位から、古代と思われる。
〈そ の 他〉壁面、底面とも凹凸があることから、土の採取を目的とした土坑と思われる

ＳＫ40　土坑(第40図)

〈位　　置〉ＬＩ29グリッドとＬＪ29グリッドに位置する。

〈確　　認〉Ⅱ層の中で土器の破片がまとまってあらわれ、黒褐色土の円形の広がりとして確認した。

〈重　　複〉柱穴と重複する。確認状況から本遺構が新しい。

〈形　　態〉ほぼ円形を呈する。

〈規　　模〉開口部　長軸（東－西）0.64m×短軸（南－北）0.62m、
底面　長軸0.49m×短軸0.49m、深さ0.08m。

〈埋　　土〉２層に分けられた。

〈　壁　〉壁は少し開きぎみに立ち上がる。

〈底　　面〉底面はほぼ平坦で堅くしまっている。

〈遺　　物〉遺物は、土師器の破片10点が北側からまとまって出土した。

〈構築時期〉確認の層位と出土遺物から、古代と推定する。

〈そ の 他〉遺物とそれに伴う埋土を取り除くと、その下が底面であった。そのため、本遺構より北側の斜面を遺物が土とともに流れて、窪んでいたこの地に溜まったか、あるいはⅡ層上面を確認面とする土坑であった可能性もある。

ＳＫ41　土坑(第40図)

〈位　　置〉ＬＧ29グリッドに位置する。

〈確　　認〉Ⅱ層中で、褐色土の落ち込みとして確認した。

〈重　　複〉なし。

〈形　　態〉平面形は円形を呈し、断面形は袋状を呈する。

〈規　　模〉開口部　長軸（東－西）0.77m×短軸（南－北）0.76m、
底面　長軸0.62m×短軸0.62m、深さ0.16m。

〈埋　　土〉１層である。上面には炭化物が厚く堆積し、下面には焼土が広がっていた。炭層は西側と東側に分かれて、それぞれ楕円形状と円形状に存在し、その直下よりドーナツ状に付着する焼土を検出した。

〈　壁　〉壁はやや外傾気味に立ち上がる。壁面下部から底面にかけて赤変が認められた。

〈底　　面〉底面は平坦である。

〈遺　　物〉埋土から土師器の破片１点が出土した。

〈構築時期〉確認面の層位から古代と推定する。

〈そ の 他〉内部で火を焚いていることから、土器焼成遺構の可能性も考えられる。

ＳＫ43　土坑(第41図)

〈位　　置〉ＬＨ29グリッドに位置する。

〈確　　認〉Ⅱ層下面で、黒褐色土の不整楕円形プランとして確認した。

〈重　　複〉なし。

〈規　　模〉西端はトレンチに切られているが、開口部長軸（東－西）2.82m×短軸（南－北）0.74m、

底面　長軸0.74m×短軸0.50m、深さ0.20mと推定される。

〈平 面 形〉長楕円形である。長軸方向はN－90°－Eである。

〈断 面 形〉南・北側はやや外傾しながら立ち上がる。西側は大きく外傾しながら立ち上がる。東側は３段の段差をもつが、いずれも緩やかに立ち上がる。東側、底面から２段目には浅い落ち込みが伴い、一旦下り傾斜となった後再び外傾しながら立ち上がる。

〈埋　　土〉３層に分けられたが、いずれにも地山土・炭化物が混入する。人為堆積と思われる。

〈底　　面〉中央部西よりと東側中央部の２カ所が緩やかに窪む。

〈遺　　物〉土師器甕胴部破片、弥生土器破片、縄文土器破片が出土した。

〈時　　期〉確認面の層位と、出土した土器片から古代と思われる。

ＳＫ47　土坑(第41図)

〈位　　置〉ＬＡ42グリッドに位置する。

〈確　　認〉Ⅲ層上面で検出したがこの位置ではプランは不明確で、確認できたのは地山上である。

〈重　　複〉なし。

〈形　　態〉円形を呈する。長軸方向はN－２°－Wである。

〈規　　模〉開口部径1.06m、底面　東西軸0.88m×南北軸0.71m、深さ0.22m。

〈埋　　土〉２層に分けられた。焼土と炭化物は断面図に表現出来る程の厚さをもっていない。

〈　壁　〉外に開いて立ち上がる。

〈底　　面〉ほぼ平坦である。底面の2/3弱に炭が薄く広がっていた。

〈遺　　物〉出土しなかった。

〈構築時期〉検出位置から古代と考えられる。

〈そ の 他〉遺構の性格は土器などの焼成遺構の可能性も考えられる。

(３)竪穴状遺構

ＳＫＩ02　竪穴状遺構(第42図)

〈位　　置〉ＬＣ16・17、ＬＤ16・17グリッドに位置する。

〈確　　認〉Ⅱ層中で、黒褐色土の方形の落ち込みとして確認した。

〈重　　複〉なし。

〈形　　態〉方形を呈する。長軸方向はN－41°－Eである。

〈規　　模〉開口部　長軸（北東－南西）2.89m×短軸（北西－南東）2.56m、深さ0.24m。推定床面積6.99㎡である。

〈埋　　土〉９層に分けられた。炭化物は南西側底面に堆積していた。焼土は極くわずか底面に広がっていた。第２・３には地山塊が混じっているが、堆積状況はレンズ状であり、自然堆積と思われる。

〈　壁　〉北側と南西側では急に立ち上がるが、北西側と南東側ではやや外傾しながら立ち上がる。壁高は0.16～0.24㎝である。

〈底　　面〉平坦である。

〈カ マ ド〉焼土の残存状態もごくわずかであり、炉またはカマドと判断できる部分は検出できなかった。

〈柱　　穴〉なし。

〈遺　　物〉土師器甕（第48図143）が出土した。

〈構築時期〉確認面の層位から古代と思われる。

ＳＫＩ03　竪穴状遺構(第42図)

〈位　　置〉LD16・17、ＬＥ16・17グリッドに位置する。

〈確　　認〉Ⅱ層中で、黒褐色土の方形の落ち込みとして確認した。

〈重　　複〉なし。

〈形　　態〉方形を呈する。長軸方向はＮ－49°－Ｅである。

〈規　　模〉開口部　長軸（北東－南西）1.96m×短軸（北西－南東）1.76m、深さ0.50m。推定床面積2.98㎡である。

〈埋　　土〉６層に分けられた。その50％を炭化物が占める第5層は、床面上に広がり、厚さは10～15㎝に及ぶ。第1層は焼土であるが、1度土が堆積した後、上で火を焚いたものである。

〈　壁　〉ほぼ垂直に立ち上がる。北西側はやや外傾しながら立ち上がる。壁高は50～55㎝である。

〈底　　面〉平坦である。

〈カ マ ド〉カマドと判断できる部分は検出されなかったが、床面に焼土を検出し、地床炉と判断した。

〈柱　　穴〉なし。

〈遺　　物〉須恵器坏片10点が出土した。須恵器坏（第48図142）が出土した。

〈構築時期〉確認面の層位や遺構配置状況から古代と思われる。

〈そ の 他〉炭化物が床一面に広がり、その厚さが10～15㎝もあることから、本遺構は焼失したものと考えられる。

(４)焼土遺構

ＳＮ42　焼土遺構(第39図)

〈位　　置〉ＬＨ38のグリッドに位置する。

〈確　　認〉遺構検出のためⅡ精査中、円形で径50㎝ほどの焼土の広がりとして確認した。

〈重　　複〉なし。

〈形　　態〉ほぼ円形を呈する。長軸方向はＮ－90°－Ｅである。

〈規　　模〉長軸（東－西）0.51m×短軸（南－北）0.34m、深さ0.10m。

〈遺　　物〉出土しなかった。

〈時　　期〉確認面の層位から、古代と考えられる。

(５)土器埋設遺構

ＳＲ29　土器埋設遺構(第39図)

〈位　　置〉ＬＨ34グリッドに位置する。長軸方向はＮ－53°－Ｅである。

〈確　　認〉ＳＮ28の周辺を精査中、Ⅱ層でプランを検出した。

〈重　　複〉なし。

〈規　　模〉上端部　長軸（南西－北東）0.31m×短軸（北西－南東）0.30m、底部径0.09m、深さ0.17m。

〈土　　器〉埋設土器は土師器甕である。

〈埋　　土〉３層に分層した。第３層は埋設した土器を安定させるための土である。

〈遺　　物〉第48図141は埋設されていた土師器甕である。土器内部から遺物は検出されなかった。

〈時　　期〉基本層位Ⅱ層で検出し、埋設されていたのが土師器だったことから古代と思われる。

〈そ の 他〉掘り込み面や土器の外側が焼けていることもなかったので炉とは考えられない。

(６)掘立柱建物跡

ＳＢ30　掘立柱建物跡(第43図)

〈位　　置〉ＬＩ30・31、ＬＪ30・31グリッドに位置する。

〈確　　認〉当初、Ⅱ層下面で、北壁に伴う壁溝を溝跡として検出したが、柱穴の配列から掘立柱建物跡と判断した。

〈重　　複〉なし。

〈桁行方位〉Ｎ－89°－Ｅ

〈規　　模〉東西－南北棟３間×２間の総柱の掘立柱建物跡である。全体の規模は6.8m×4.5m。
桁行は北側6.59m（西から2.46＋2.12＋2.01m）、中央6.58m（西から2.60＋1.92＋2.06m）、南側6.26m（西から2.25＋1.99＋2.02m）、梁行は、西側3.93m（北から1.97＋1.96m）、西側２列目4.26m（北から2.20＋2.06m）、西側から３列目4.22m（北から2.44＋1.78m）、東側3.92m（北から1.96＋1.96m）。

〈埋　　土〉壁溝は３層、柱穴は３層に分けられたが、いずれにも地山土・炭化物が混入する。人為堆積と思われる。

〈遺　　物〉土師器甕胴部破片、弥生土器破片、縄文土器破片が出土。

〈時　　期〉確認面の層位と、出土した土器片から古代と思われる。

(７)溝跡

ＳＤ31　溝跡(第44図)

〈位　　置〉ＬＨ25・26・27、ＬＩ27・28、ＬＪ28、ＭＡ27・28グリッドに位置する。

〈確　　認〉Ⅱ層下面で、筋状に伸びる暗褐色土の落ち込みとして確認した。

〈重　　複〉ＳＤ14溝跡と重複する。本溝跡が新しい。

〈形　　態〉ほぼ弧状で、東から西に伸びる。

〈傾　　斜〉北東側から西と東にそれぞれ傾斜する。

〈規　　模〉総延長18.56m、上端部幅0.20m～0.34m、下端部幅0.08m～0.22㎝、深さ0.20m～0.44m。
〈埋　　土〉４層に分けられた。自然堆積と思われる。
〈遺　　物〉出土しなかった。
〈構築時期〉確認面の層位から古代と思われる。
〈そ の 他〉確認状況からＳＩ20竪穴住居跡と同時存在と思われる。内部に水の流れた痕跡もなく柱穴痕もないが、形態や占地状況から排水施設の可能性が考えられる。

ＳＤ55　溝跡(第44図)
〈位　　置〉ＬＧ25、ＬＨ25・26、ＬＩ25、ＬＪ25グリッドに位置する。
〈確　　認〉Ⅱ層下面で、筋状に伸びる暗褐色土の落ち込みとして確認した。
〈重　　複〉ＳＤ31溝跡と重複する。本溝跡が古い。
〈形　　態〉北側で屈曲し南東と南西に伸びる。南東側は沢に向かって伸びるが、漸次消滅する。南西端は屈曲していたが、斜面のためその先は確認できなかった。
〈傾　　斜〉北側から南東と南西にそれぞれ傾斜する。
〈規　　模〉全長13.12m、上端部幅0.24m～0.34m、下端部幅0.12m～0.02㎝、深さ0.16m。
〈埋　　土〉１層である。自然堆積と思われる。
〈遺　　物〉出土しなかった。
〈構築時期〉確認面の層位から古代と思われる。
〈そ の 他〉内部に水の流れた痕跡もなく柱穴痕もないが、形態から排水施設や区画施設の可能性が考えられる。

ＳＤ56　溝跡(第44図)
〈位　　置〉ＬＪ27、ＭＡ27グリッドに位置する。
〈確　　認〉Ⅱ層下面で、筋状に伸びる黒色土の落ち込みとして確認した。
〈重　　複〉ＳＩ20竪穴住居跡、ＳＤ31溝跡と重複する。これらの遺構に壊されている。
〈形　　態〉全容は不明であるが、確認できた部分はほぼ直線状で、南東から北西に伸びる。
〈傾　　斜〉南東から北西に傾斜する。
〈規　　模〉全長3.44m、上端部幅0.18m～0.30m、下端部幅0.06m～0.16㎝、深さ0.12m。
〈埋　　土〉１層である。自然堆積と思われる。
〈遺　　物〉出土しなかった。
〈構築時期〉確認面の層位から、古代と思われる。
〈そ の 他〉南東側はＳＩ20竪穴住居跡に壊されているが、ＳＤ14溝跡の南西端が屈曲していることからこれに続いていた可能性もある。内部に水の流れた痕跡もなく柱穴痕もないが、形態から排水施設や区画施設の可能性が考えられる。

第３節　遺構外出土遺物

遺構外からは縄文時代の土器・石器、縄文時代晩期末～弥生時代にかけての土器、古代の須恵器、中世の陶磁器が出土している。

（１）縄文時代（第20図～第26図）

土器（第20図）はほとんどが小破片で、全体の文様構成の不明なものが多い。器種は深鉢形土器が多いが浅鉢形土器もあり、口縁部が外反するもの、内傾するもの、直立気味に立ち上がるものがある。時期は中期中葉～後葉と推定される。

26～33はいづれも縄文地で、26は口縁部の１条の平行沈線下に２状の連弧様の文様を施文する深鉢形で、中期中葉の大木8b式期の土器であろう。27は口頸部に横位の細かい粘土紐を貼付し、その上下に押圧縄文を施文する浅鉢形土器である。28～31は細い隆沈線で斜位に区画文を施文する土器である。28は口縁部に刺突文、29は刻目文を施文している。32は胴部の細い隆線間に隆沈線による渦巻状文を施文する土器である。33は口縁部がやや肥厚し、口縁部のやや下に１条の細い粘土紐を横位に貼付し、粘土紐の上下に平行する沈線で調整し隆沈線様にしたものである。26～33の時期は中期中葉に推定される。

34～36は縦位の沈線で楕円形文を施文する土器である。34は縄文地で２本の沈線間を磨り消している。35・36は楕円形文に刺突を施文する土器である。34～36の時期は中期後葉の大木９式期に比定される。37～40は粗製の深鉢形土器で、いづれも縄文地である。37・38は口唇部がやや肥厚し、38は、剥落しているが、口唇部に細い粘土紐を山形状に貼付した痕跡が残る。40は小形で、胴部下半のみの残存である。底部から緩やかに外反しながら立ち上がる器形で、外面は加熱による風化が激しい。内面は胴下半部のほぼ全体に煤状炭化物が付着する。

石器は石鏃（第21図41～55）、石匙（第22図56～61）、スクレイパー（第23～25図62～78）、石槍（第25図79・80）、石篦（第25図81・82）、異形石器（第25図83）、磨製石斧（第26図84～87）が出土している。

（２）縄文時代末～弥生時代の土器（第27図）

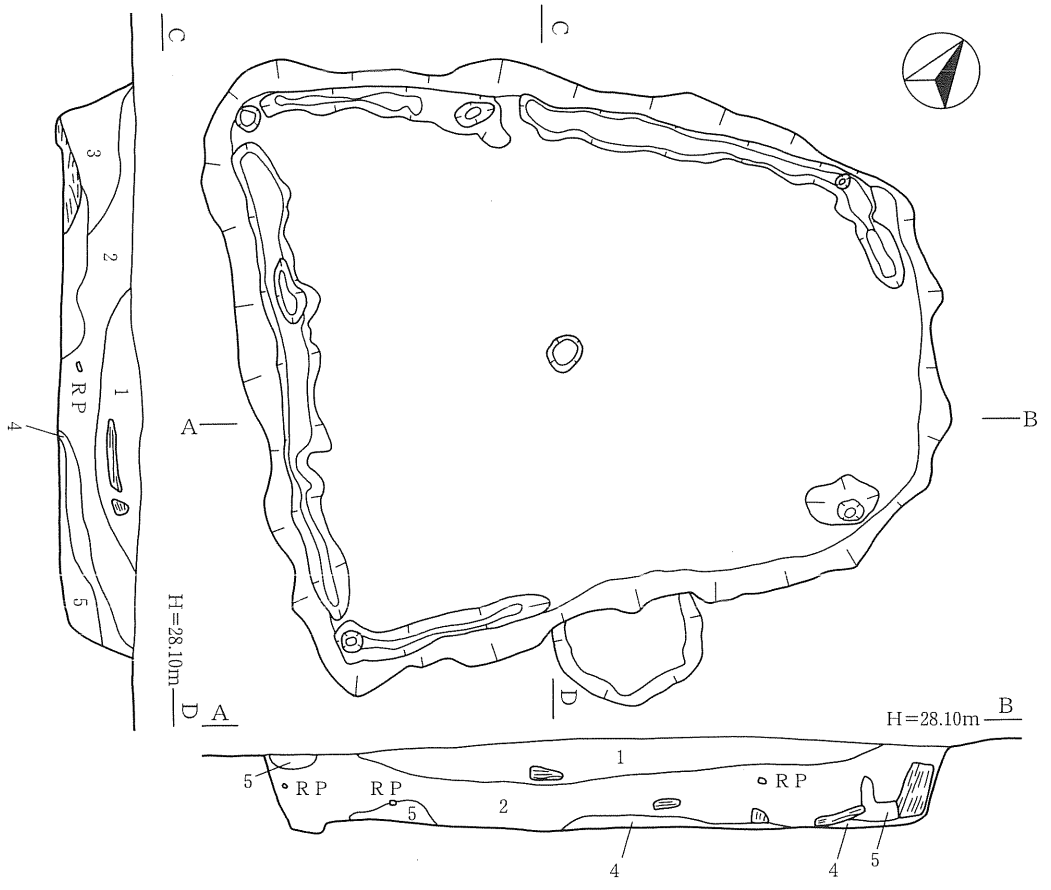
土器は26点図示（88～112）した。88～108はいづれも小破片であるが、器形は深鉢形土器や壺形土器である。88・89・91・92・101～103・106～108は縄文地で、口縁部から胴部間に横位に平行する沈線を数条施文し、胎土はやや細砂粒を含み、色調は赤褐色～暗褐色である。93は沈線間に変形工字文を施文する土器である。96～99は数条の平行沈線下に刺突文を施文する土器である。100・102・103は口縁部もしくは口頸部に刷毛目を施文する土器である。109は高台で横位に沈線が巡る。110・111は蓋である。110は内外面に刷毛目が見られる。111は外面に横位に２条の沈線、その下に細かい単節斜縄文と縦位の刷毛目が見られる。112は深鉢形土器の底部で、細かい単節斜縄文の後に横位に刷毛目を施文している。

（３）古代の土器（第50図）

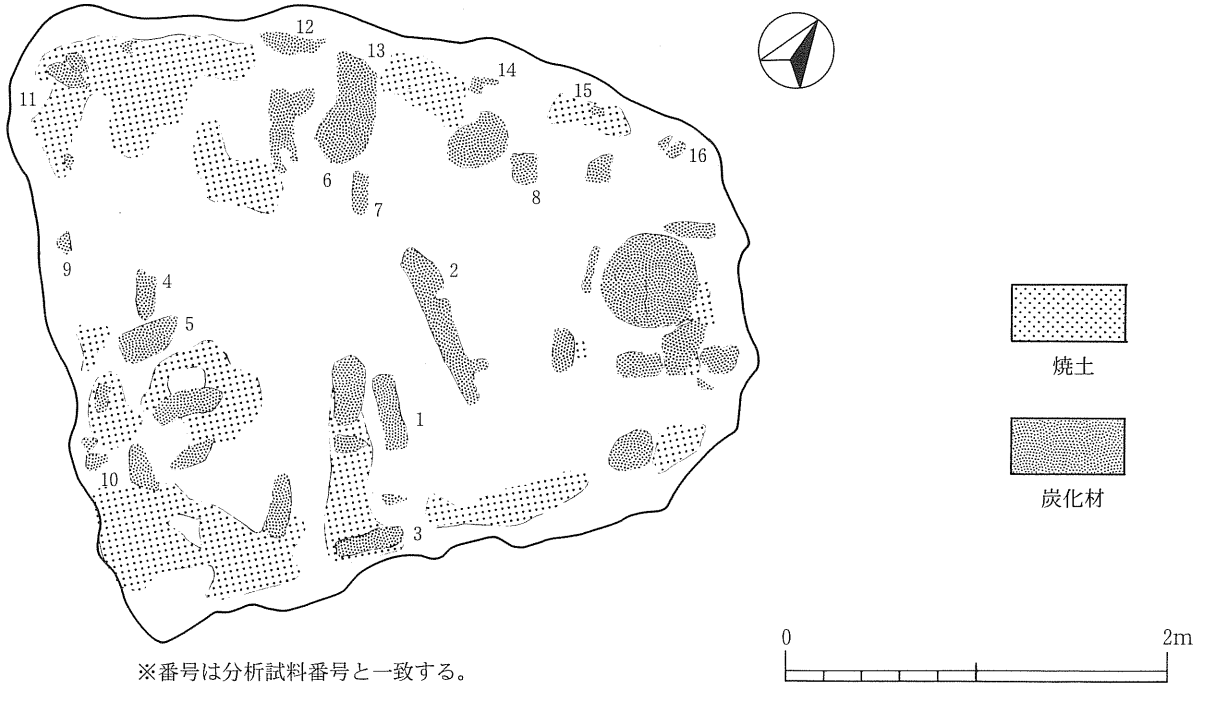
いづれも須恵器で、154～158は坏である。158以外は内外面ともロクロ調整で、外底面は回転ヘラ切りである。158は底面のみの残存で、底面は回転ヘラ切りである。時期は器形・成形や調整技法から８世紀末葉～９世紀初めの所産であろう。152・153・159は台付坏で、内外面ともロクロ調整で、外底面は回転ヘラ切りである。坏に比較し底部からの立ち上がりがやや急で直線的である。160は甕で、胴下半部のみの残存である。外面に叩き目、内面にロクロ調整痕が残る。

（４）中世の遺物（第50図）

舶載陶磁器の破片が１点出土（162）した。中国・竜泉窯系の鎬蓮弁文碗で、13～14世紀の所産と思われる。

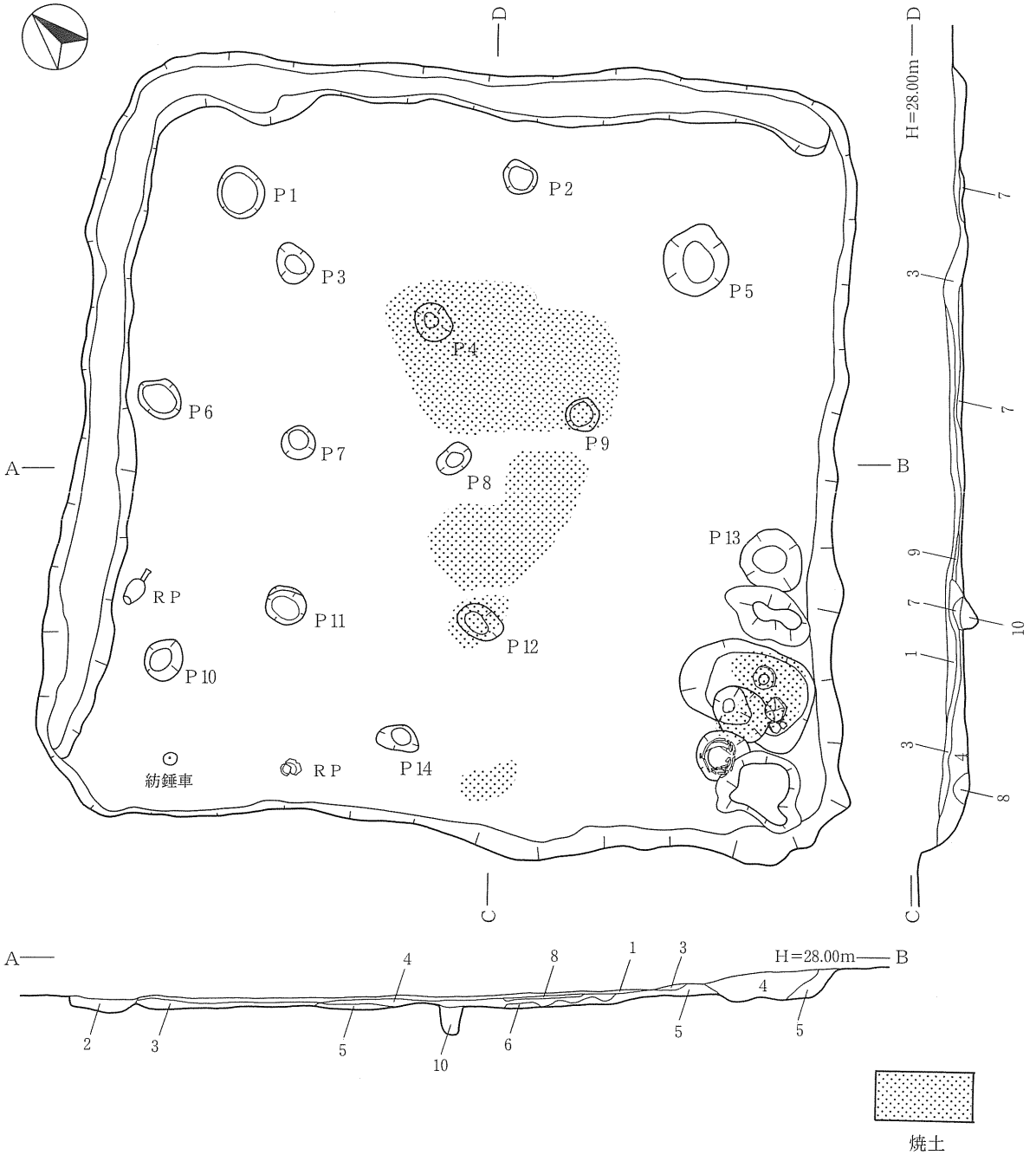


ＳＩ01
1　黒褐色土(5ＹＲ2/1)　炭化物多量に混入、しまりやや強
2　黒褐色土(5ＹＲ2/2)　炭化物多量・地山塊(7.5ＹＲ7/8)混入、しまりあり
3　褐色土(7.5ＹＲ4/4)　炭化物少量混入、しまりあり
4　黒色土(7.5ＹＲ2/1)　しまりあり、地山との境界付近から厚さ１～２㎝程は炭化物の堆積
5　にぶい赤褐色土(2.5ＹＲ4/4)　炭化物少量混入、しまりやや強、焼土



※番号は分析試料番号と一致する。

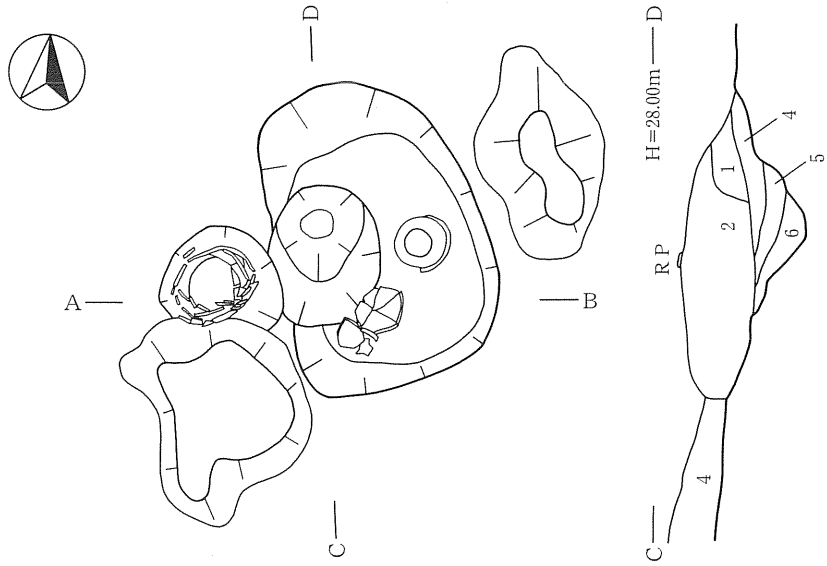
第28図　ＳＩ01竪穴住居跡



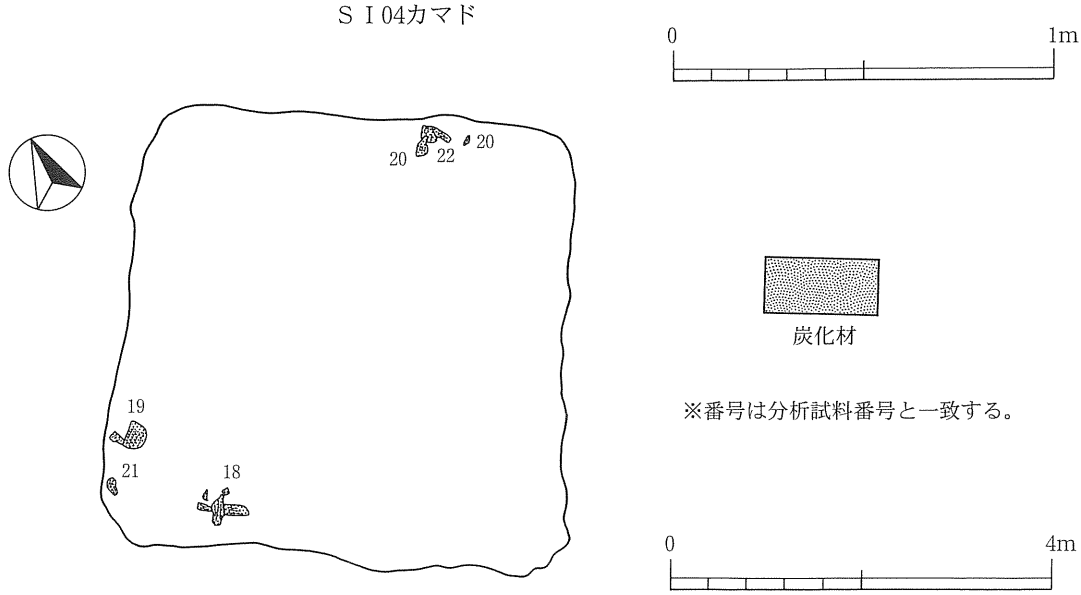
ＳＩ04
1　赤褐色土(2.5ＹＲ4/8)　しまりやや弱い
2　黒色土(7.5ＹＲ2/1)　炭化物混入、しまりあり
3　黒褐色土(7.5ＹＲ3/1)　炭化物少量混入、しまりあり
4　灰褐色土(7.5ＹＲ4/2)　炭化物少量混入、しまりやや強
5　黄橙色土(7.5ＹＲ7/8)　しまり強
6　橙色土(2.5ＹＲ6/8)　２～５㎜程度の小石混入、しまりあり、焼土
7　赤色土(10Ｒ5/8)　しまり強、焼土
8　赤褐色土(10Ｒ4/4)　６の土が５～10㎜の塊状に混入、しまりやや強、焼土
9　暗赤色土(7.5Ｒ3/6)　２～５㎜程度の小石混入、しまりあり、焼土
10　黒褐色土(7.5Ｒ2/2)

0　2m

第29図　ＳＩ04竪穴住居跡

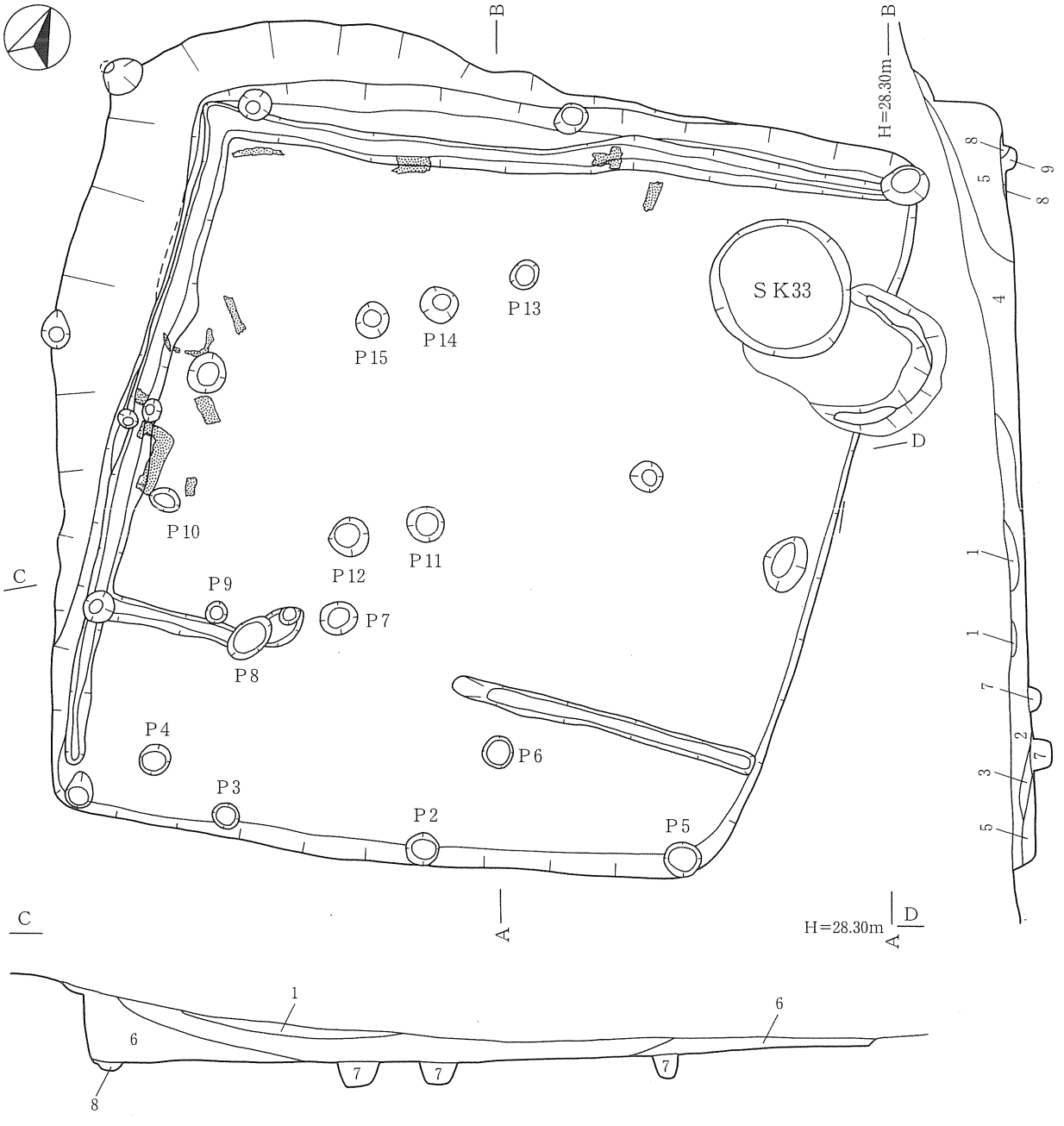


ＳＩ04カマド



ＳＩ04炭化材・焼土検出状況

第30図　ＳＩ04竪穴住居跡カマド、炭化材出土状況

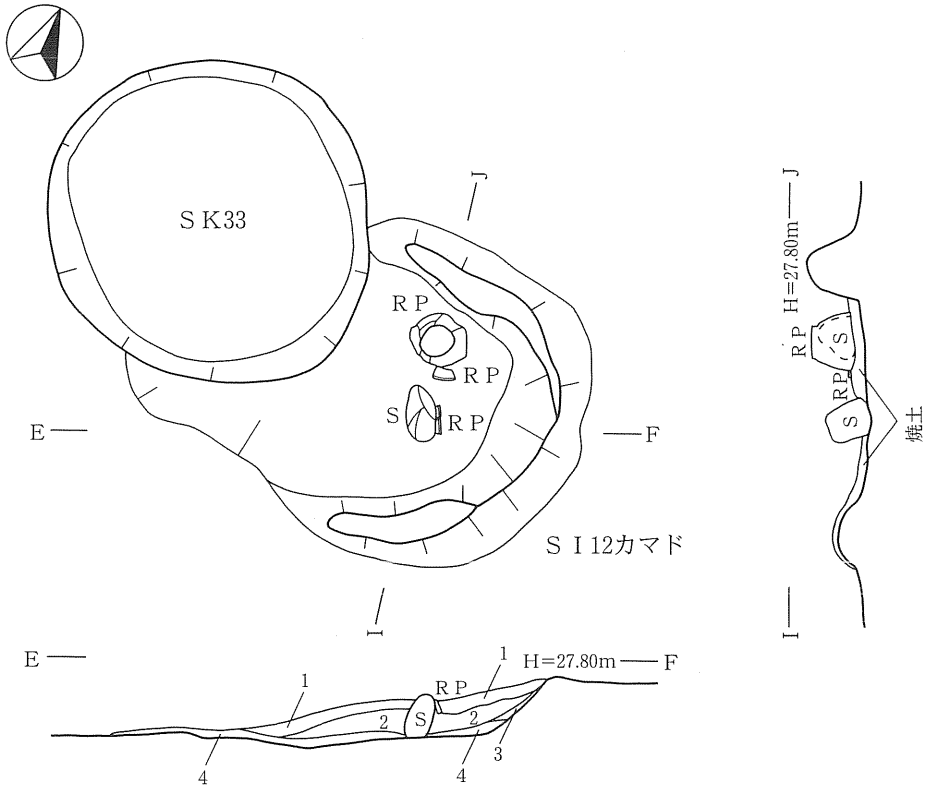


ＳＩ12
1　黒色土(7.5ＹＲ2/1)　しまり弱
2　黒褐色土(10ＹＲ2/2)　しまりやや強
3　にぶい黄褐色土(10ＹＲ5/4)　しまり強
4　褐色土(10ＹＲ4/4)　しまりやや強
5　褐色土(10ＹＲ4/6)　しまり強
6　黒色土(10ＹＲ1.7/1)　炭化物３％混入、しまりやや弱
7　暗褐色土(10ＹＲ3/3)　地山土が全体的に極少量含む、しまりやや弱
　地山土～黄褐色土(10ＹＲ5/6)　しまりややあり
8　黒色土(10ＹＲ2/1)　しまり弱、炭化物30％混入
9　黒色土(10ＹＲ1.7/3)　しまり弱、炭化物70％混入

炭化材

0　2m

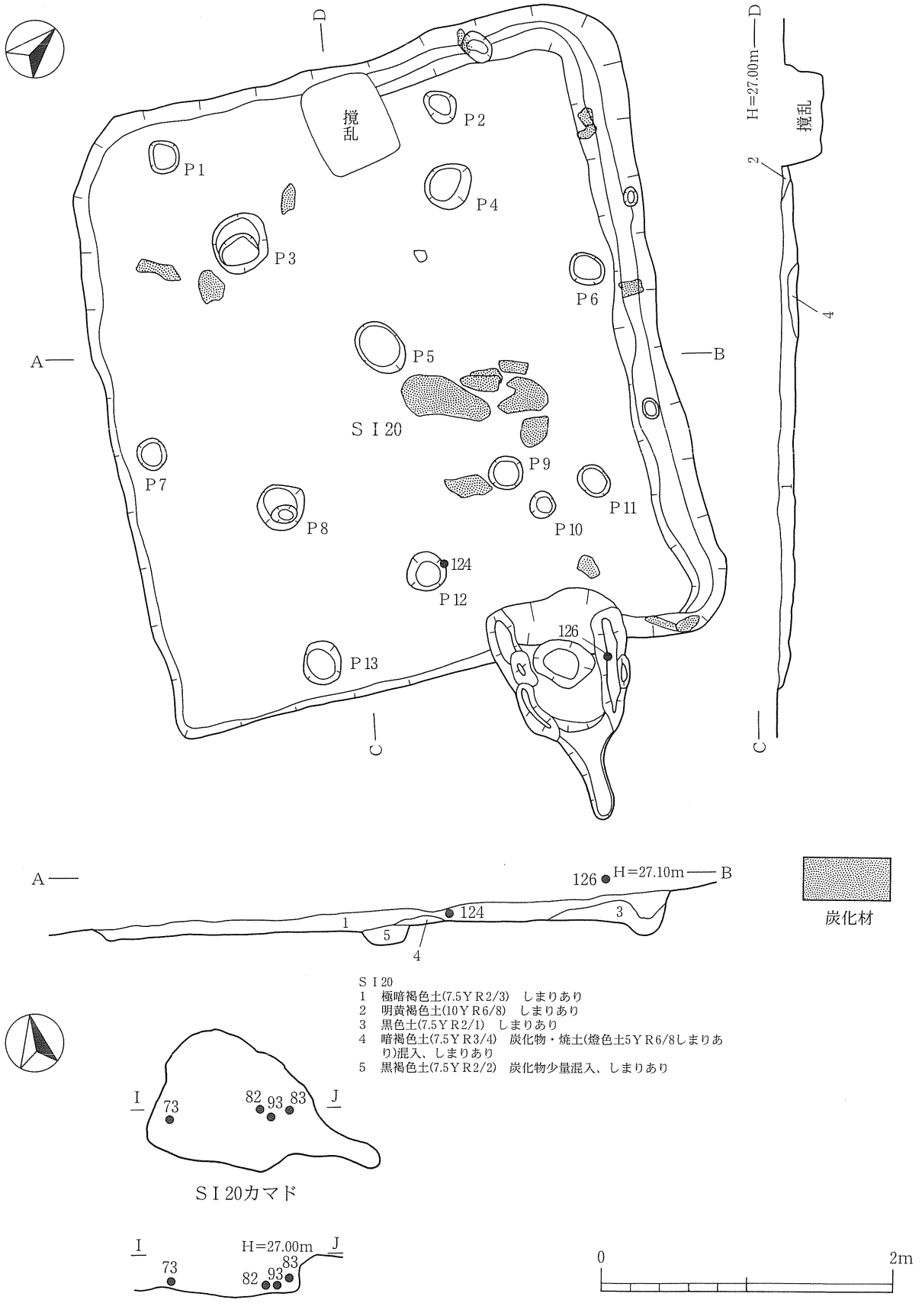
第31図　ＳＩ12竪穴住居跡



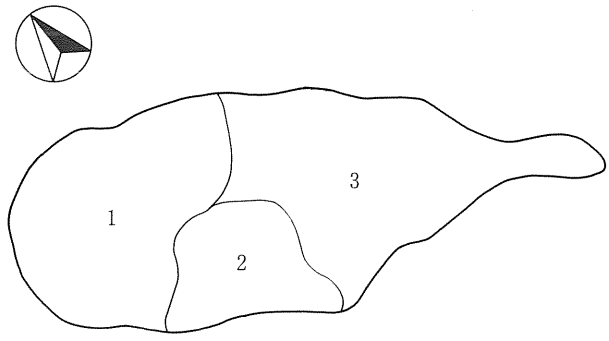
ＳＩ12カマド
1　暗赤褐色土(5ＹＲ3/4)　炭化物少量混入、しまりやや弱
2　暗赤褐色土(5ＹＲ3/3)　炭化物少量・焼土塊混入、しまりやや弱
3　赤色土(10Ｒ5/8)　しまりやや強
4　赤褐色土(2.5ＹＲ4/8)　炭化物少量混入、しまり強、炭化物１％、焼土塊７％混入

0　1m

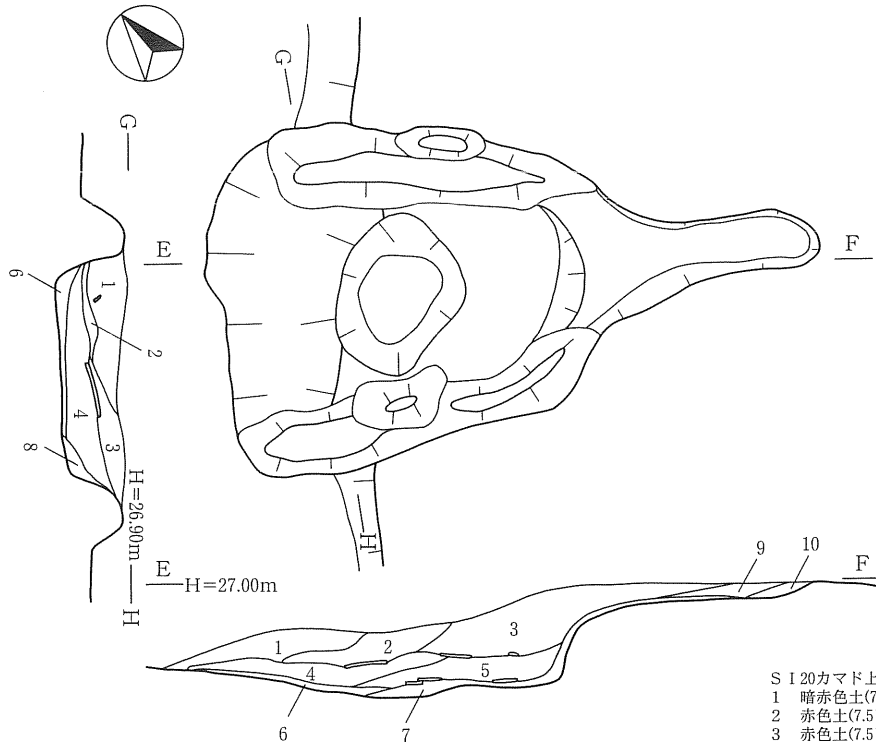
第32図　ＳＩ12カマド



第33図　ＳＩ20竪穴住居跡・カマド内遺物分布図



ＳＩ20カマド上面確認状況

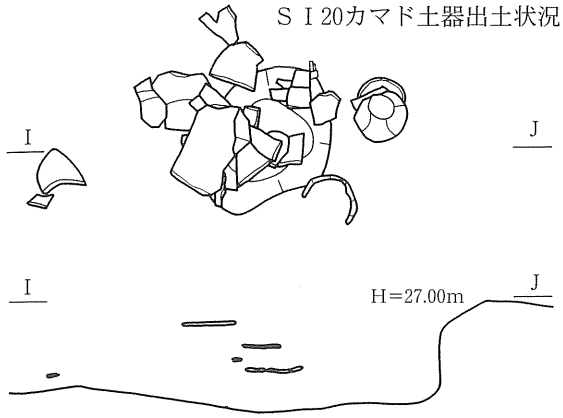


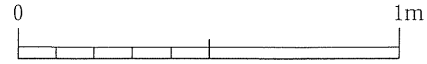
ＳＩ20カマド

ＳＩ20カマド上面確認状況
1　暗赤色土(7.5ＹＲ3/6)　炭化物混入、しまりあり
2　赤色土(7.5ＹＲ4/6)　炭化物混入、しまりあり
3　赤色土(7.5ＹＲ4/8)　炭化物少量混入、しまりあり

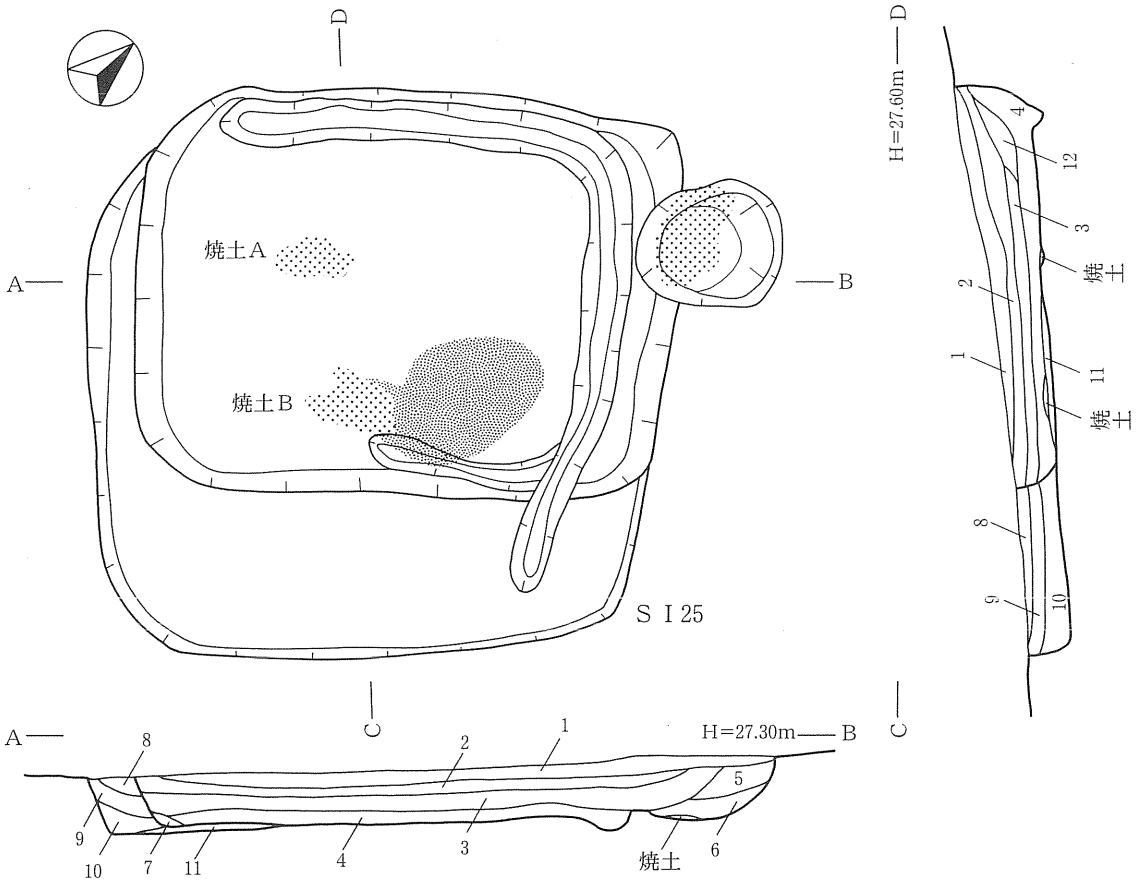
ＳＩ20カマド
1　暗赤褐色土(5ＹＲ3/3)　炭化物少量混入、しまりあり
2　黄橙色土(10ＹＲ7/8)　炭化物少量混入、しまりあり
3　極暗赤褐色土(2.5ＹＲ2/2)　炭化物少量混入、しまりあり
4　赤色土(10Ｒ5/8)　しまりあり、焼土
5　赤黒色土(10Ｒ1.7/1)　しまりあり、炭化物の堆積
6　赤黒色土(10Ｒ2/1)　しまりあり、焼土
7　赤色土(7.5Ｒ4/8)　しまりやや強、焼土
8　暗赤色土(7.5Ｒ3/6)　炭化物混入、しまりあり、焼土
9　赤色土(10Ｒ5/8)　しまりあり、焼土
10　黒褐(5ＹＲ3/1)　しまりやや強、炭１％混

ＳＩ20カマド土器出土状況

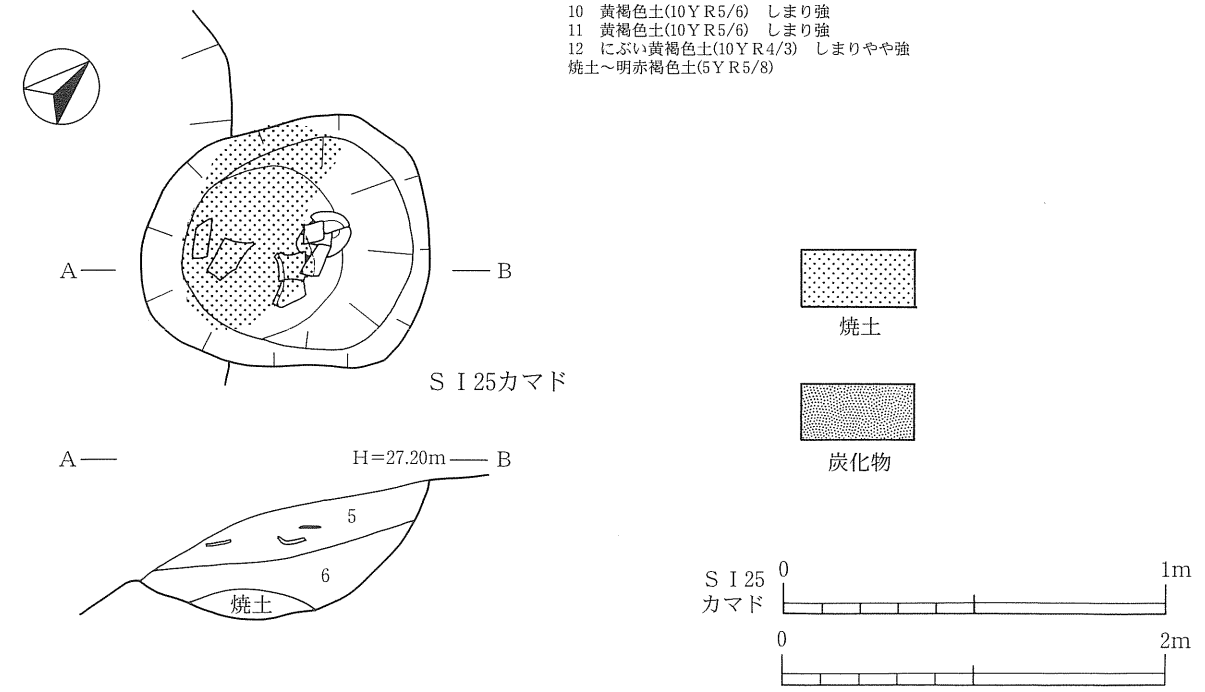




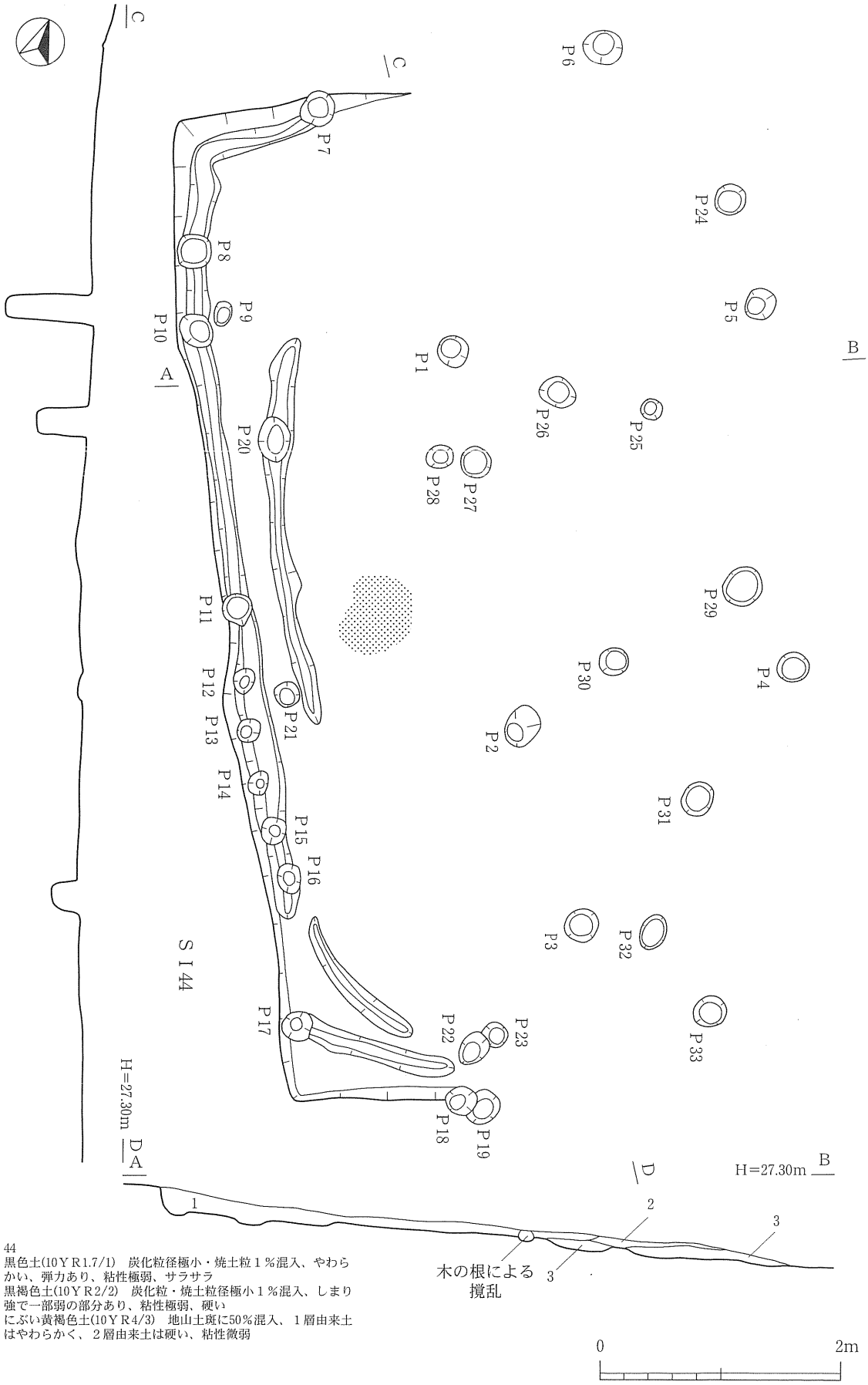
第34図　ＳＩ20カマド



ＳＩ25
1　黒色土(10ＹＲ2/1)　しまりやや弱
2　暗褐色土(10ＹＲ3/3)　炭化物微量混入、しまりやや強
3　褐色土(10ＹＲ4/6)　しまりやや強
4　褐色土(10ＹＲ4/4)　炭化物微量混入、しまりやや強
5　褐色土(10ＹＲ4/4)　焼土少量混入、しまりやや弱
6　明褐色土(10ＹＲ3/4)　炭化物少量・焼土多量混入、しまりやや弱
7　にぶい黄褐色土(10ＹＲ5/4)　しまり強
8　暗褐色土(10ＹＲ3/3)　しまりやや強
9　褐色土(10ＹＲ4/4)　しまりやや強
10　黄褐色土(10ＹＲ5/6)　しまり強
11　黄褐色土(10ＹＲ5/6)　しまり強
12　にぶい黄褐色土(10ＹＲ4/3)　しまりやや強
焼土～明赤褐色土(5ＹＲ5/8)

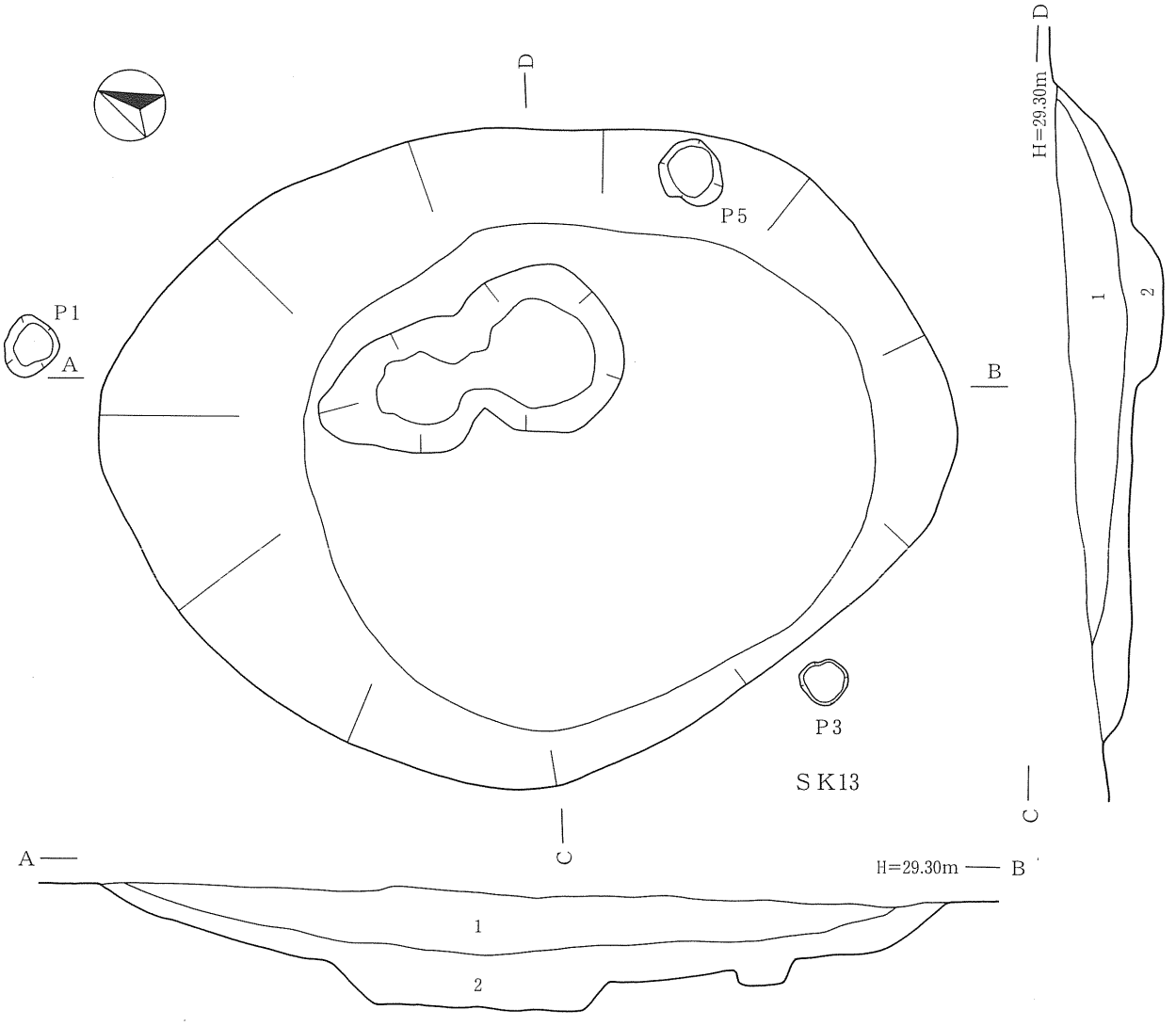


第35図　ＳＩ25竪穴住居跡・カマド



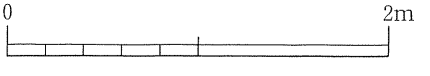
SI44
1　黒色土(10YR1.7/1)　炭化粒径極小・焼土粒1％混入、やわらかい、弾力あり、粘性極弱、サラサラ
2　黒褐色土(10YR2/2)　炭化粒・焼土粒径極小1％混入、しまり強で一部弱の部分あり、粘性極弱、硬い
3　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　地山土斑に50％混入、1層由来土はやわらかく、2層由来土は硬い、粘性微弱

第36図　SI44竪穴住居跡

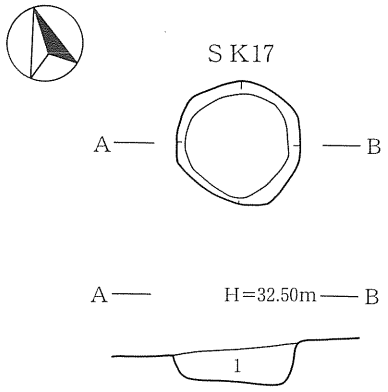


ＳＫ13
1　暗褐色土(10ＹＲ3/3)　炭化粒２％・地山粒２％混入、しまり弱、粘性極弱
2　黒褐色土(10ＹＲ2/2)　炭化粒３％・地山粒１％混入、しまり弱、粘性極弱

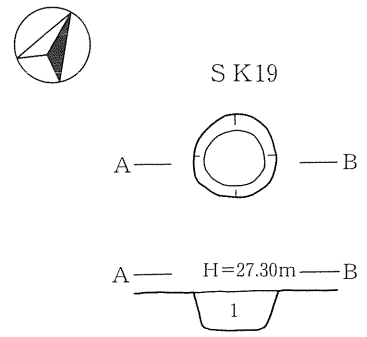
ＳＫ13のpit
pit1　黒褐色土(10ＹＲ2/3)　炭１％・地山粒・地山塊３％混入、しまり弱、粘性弱
pit3　暗褐色土(10ＹＲ3/4)　炭１％・地山粒・地山塊７％混入、しまり弱、粘性弱
pit5　黒褐色土(10ＹＲ2/3)　炭１％・地山粒・地山塊３％混入、しまり弱、粘性弱



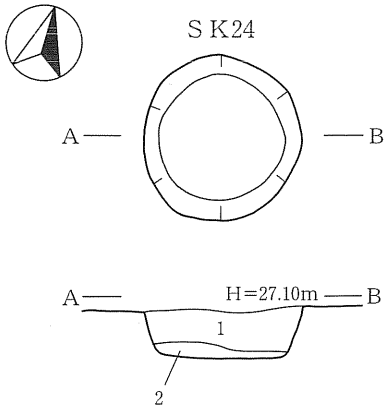
第37図　ＳＫ13土坑



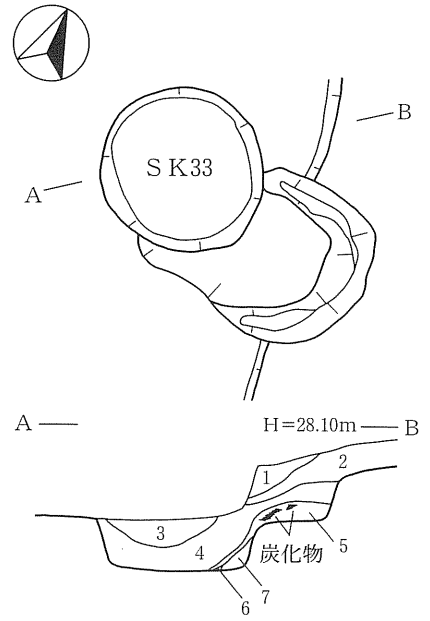
ＳＫ17
1　黒色土（N2/0）炭層、しまりごく弱、粘性ごく弱
　黒褐色土(10ＹＲ3/2)２％が上層に侵入



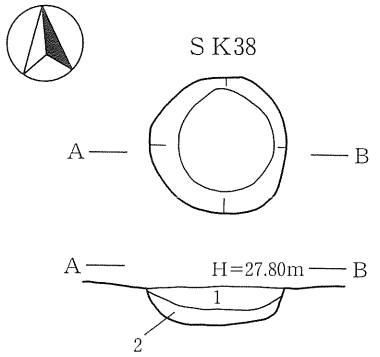
ＳＫ19
1　黄褐色土(10ＹＲ5/8)　炭化物・焼土やや多量混入、しまりやや弱
　焼土～明褐色土(5ＹＲ5/6)



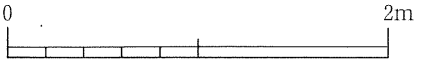
ＳＫ24
1　暗褐色土(10ＹＲ3/3)　炭化物少量・地山塊多量・礫少量混入、しまりやや強
2　にぶい黄褐色土(10ＹＲ5/4)　しまりやや強
　地山土～黄橙色(10ＹＲ7/8)



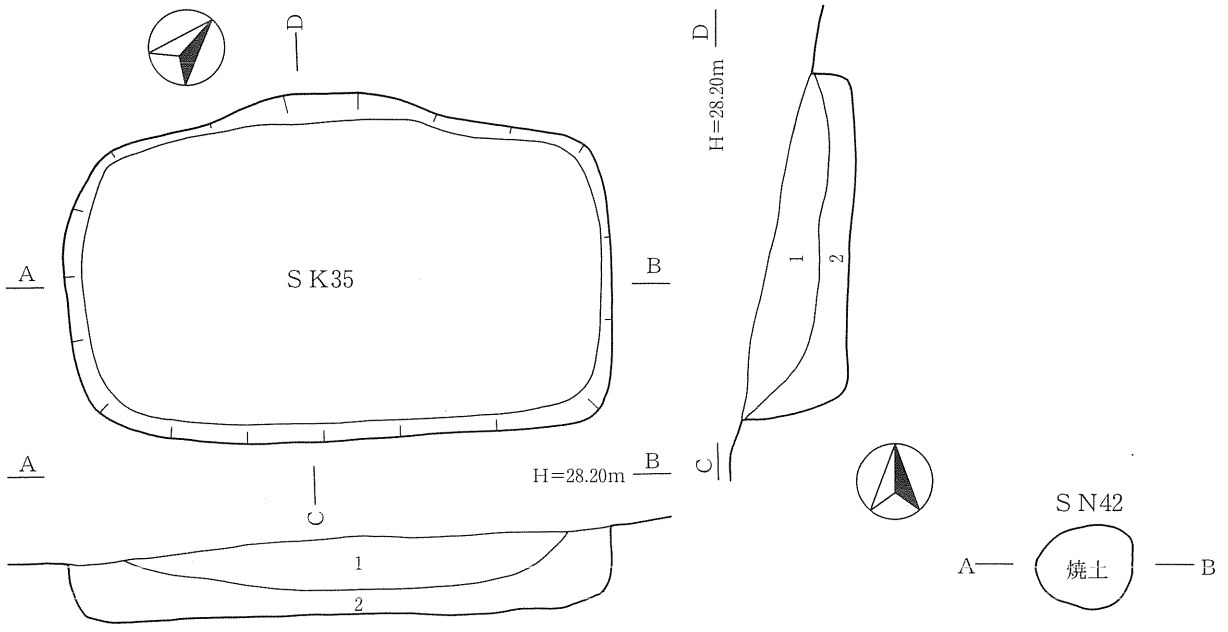
ＳＫ33
1　黒褐色土(10ＹＲ2/2)　しまりやや強
2　褐色土(10ＹＲ4/4)　しまりやや強
3　黒色土(10ＹＲ2/1)　しまり弱、弾力あり
　１の土が流れ込み、ＳＫ33東から南側の炭が混ざり、黒色が強くなっている
4　暗褐色土(10ＹＲ3/3)　木炭片10％混入、地山土が西側に７％にじむ、しまりややあり
5　黒色土(10ＹＲ1.7/1)　木炭塊混入(30％)、しまり弱
　地山土～黄褐色土(10ＹＲ5/6)　しまりややあり
6　黒色土(7.5ＹＲ1.7/1)　しまりやや弱、炭化物50％、焼土粒５％
7　赤色土(10Ｙ5/8)　しまりやや強、炭化物粒１％



ＳＫ38
1　黒褐色土(7.5ＹＲ3/2)　地山塊(7.5ＹＲ6/8)多量混入、しまりやや強
2　明褐色土(7.5ＹＲ5/6)　炭化物少々・１の土混入、しまりやや強

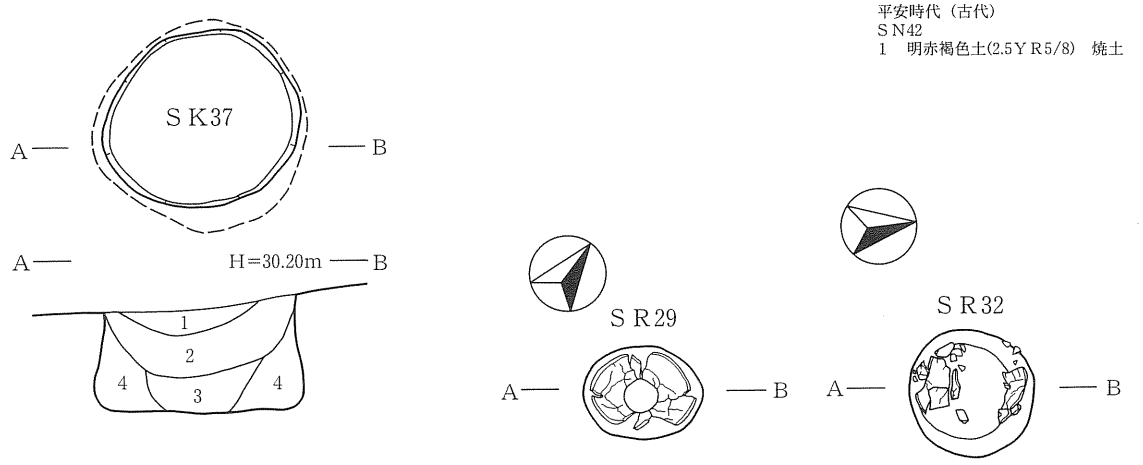


第38図　ＳＫ17・19・24・33・38土坑



ＳＫ35
1　黒色土(10ＹＲ2/1)　しまりやや弱
2　褐色土(10ＹＲ4/4)　炭化物微量混入、しまりやや弱

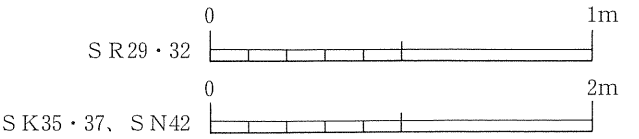
平安時代（古代）
ＳＮ42
1　明赤褐色土(2.5ＹＲ5/8)　焼土



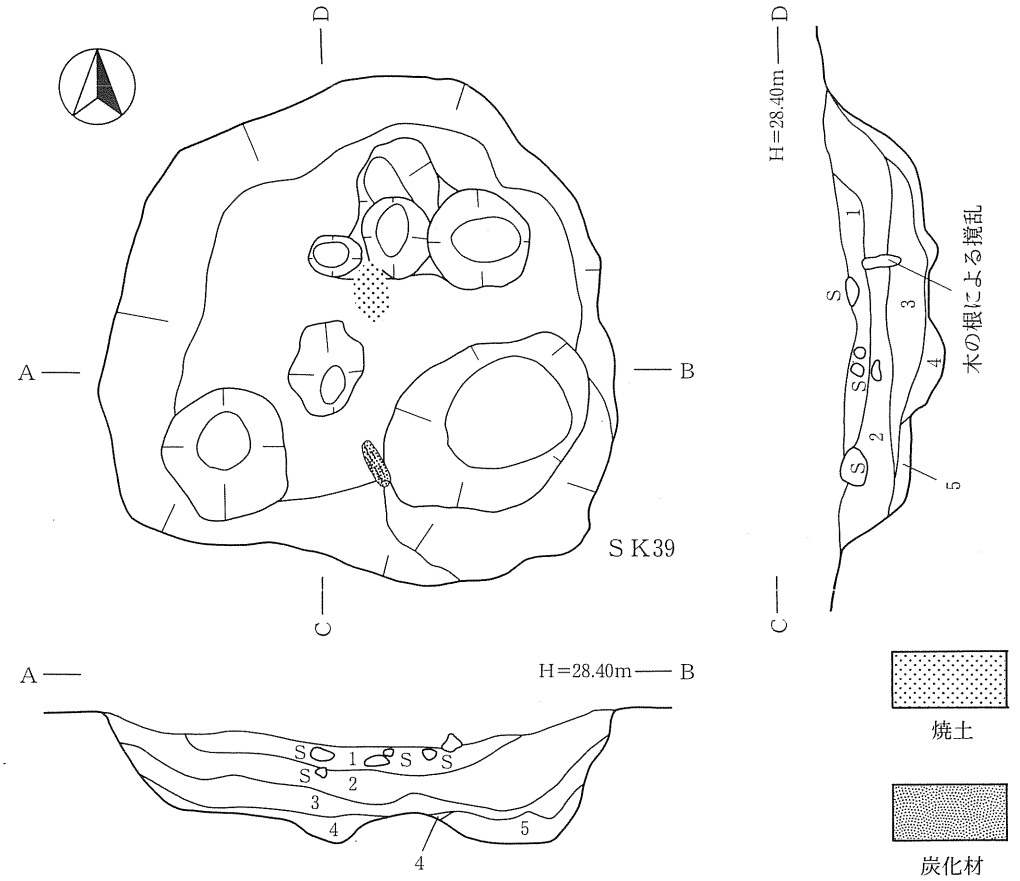
ＳＫ37
1　暗褐色土(10ＹＲ3/3)　炭化粒径約３㎜が１％混入、柔らかくしまりなし、粘性微弱、やや砂質
2　褐色土(10ＹＲ4/4)　炭化粒径約２㎜１％混入、硬くしまりあり、粘性微弱、やや砂質
3　暗褐色土(10ＹＲ3/3)　炭化粒径約３㎜が２％混入、柔らかくしまりなし、粘性微弱、やや砂質
4　黄褐色土(10ＹＲ5/6)　しまりあり、弾力あり、粘性微弱、やや砂質

ＳＲ29
1　暗褐色土(10ＹＲ3/3)　しまり極弱、粘性やや強
2　褐色土(10ＹＲ4/6)　しまりやや強、粘性やや強
3　褐色土(10ＹＲ4/4)　しまり強、粘性やや強

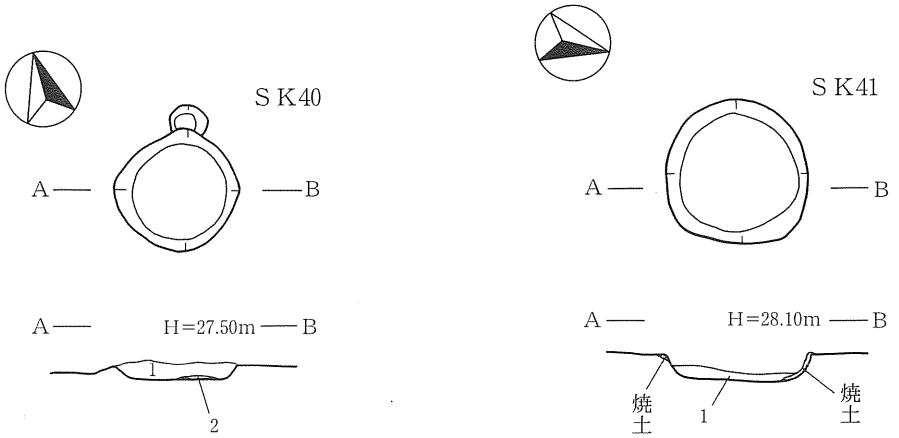
ＳＲ32
1　暗褐色土(10ＹＲ3/3)　炭化物１％・地山粒１％混入、しまりやや弱、粘性弱
2　暗褐色土(10ＹＲ3/3)　炭化物１％混入、しまり極弱



第39図　ＳＫ35・37土坑、ＳＮ42焼土遺構、ＳＲ29・32土器埋設遺構



S K39
1　黒色土(10Y R1.7/1)　炭化物径小２％・焼土塊１％混入、しまり弱、粘性微弱
2　黒褐色土(10Y R3/2)　炭化物１％混入、しまり弱、粘性やや強
3　褐色土(10Y R4/6)　褐色の粘土質の土と黒褐色土(10Y R3/3)のやわらかい土が50％ずつ斑に混入、炭化物粒極小１％混入、しまり強
4　暗褐色土(10Y R3/2)　炭化物粒極小２％・地山土塊３つ混入、しまり極弱、やわらかい
5　褐色土(10Y R4/4)　炭化物１％含む、しまり強、弾力あり、粘性ややあり



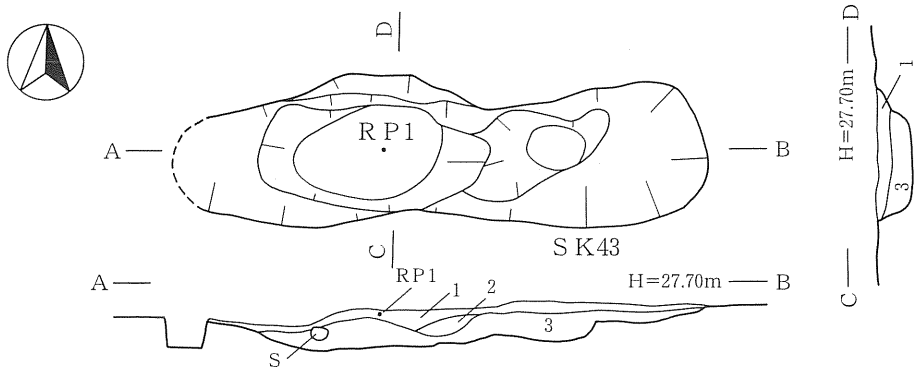
S K40
1　黒褐色土(10Y R2/3)　炭化物少量・礫少量・２の土少量混入、しまり強
2　褐色土(10Y R4/6)　しまり強

S K41
1　褐色土(10Y R4/4)　炭化物多量・地山土少量混入、しまり強
地山土～明黄褐色土(10Y R6/8)　しまり強

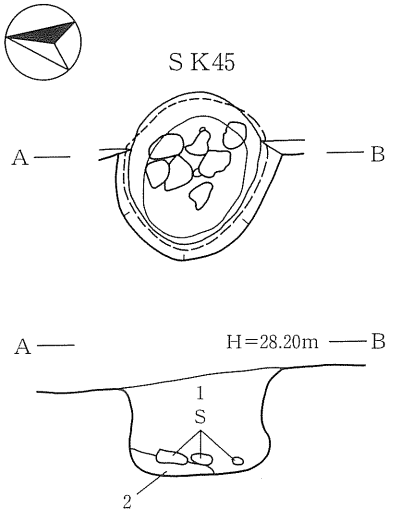
S K41の焼土
焼土～明赤褐色土(5Y R5/8)　炭化物少量混入、しまりやや強

0　2m

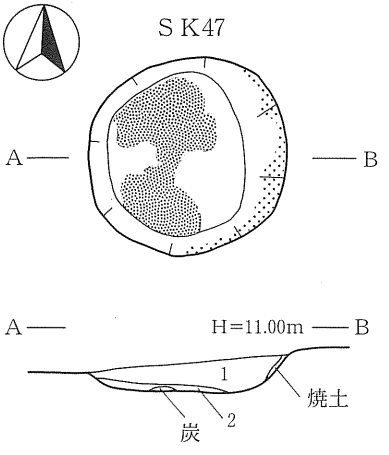
第40図　S K39・40・41土坑



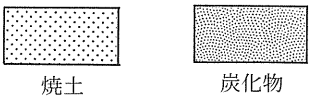
SK43
1　黒褐色土(7.5YR3/2)　炭化物２％・焼土粒・塊３％・地山塊10％混入、しまり極弱、粘性弱
2　黒褐色土(10YR3/2)　炭化物１％・地山粒３％混入、しまり弱、粘性弱
3　暗褐色土(10YR3/3)　炭化物１％・地山粒・塊５％混入、しまりやや弱、粘性弱



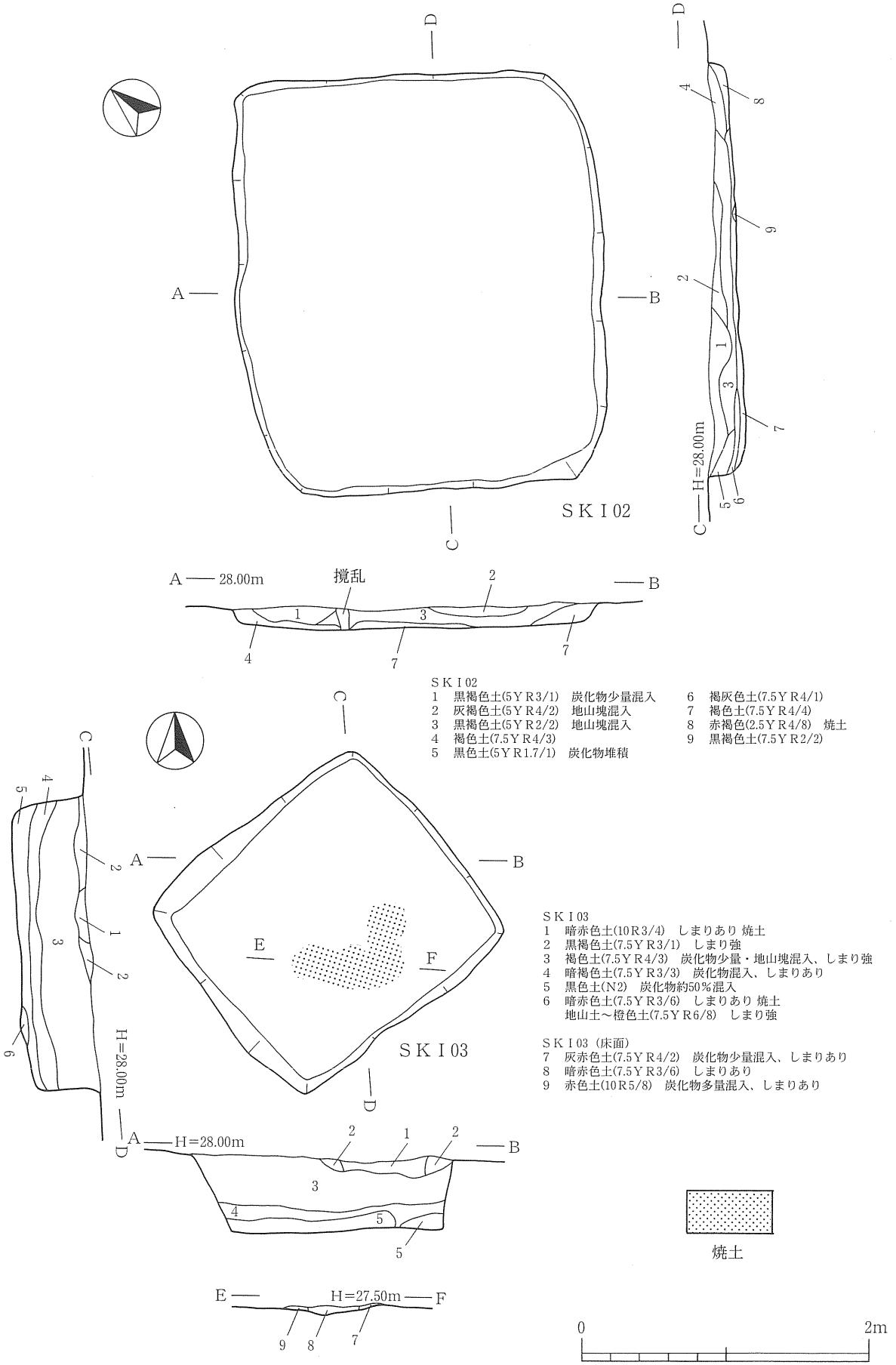
SK45
1　黒色土(10YR1.7/1)　炭化粒径極小１％・焼土粒径極小１％混入、しまり弱、粘性ややあり、やわらかい
2　黒色土(10YR1.7/1)　炭化粒・焼土粒径極小１％混入、地山土斑に50％混入、しまりあり、粘性ややあり



SK47
1　黒褐色土(10YR2/3)　炭化物１％混入、しまり中
2　黒褐色土(10YR2/2)　炭化物30％混入、しまり中



第41図　ＳＫ43・45・47土坑

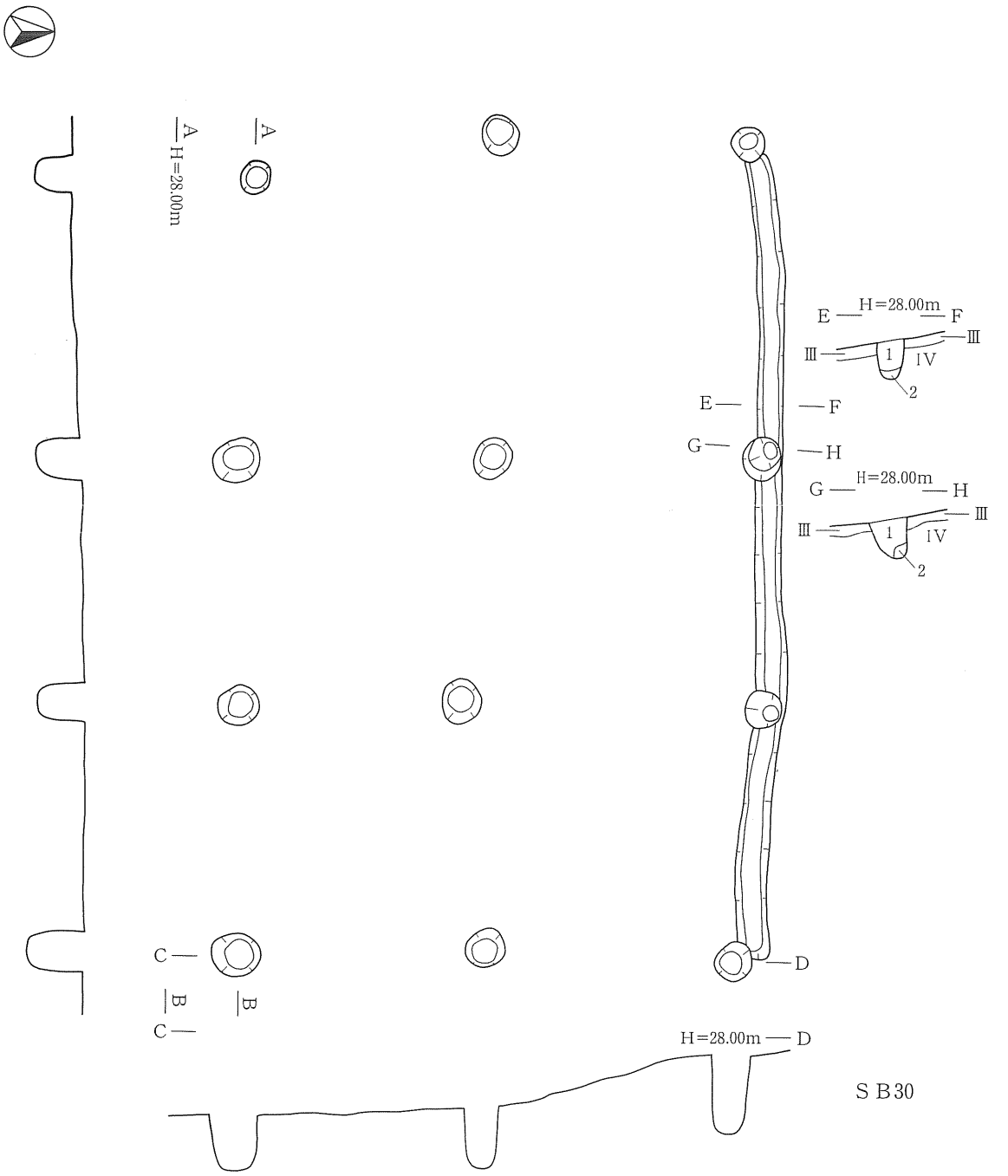


SKI02
1 黒褐色土(5YR3/1) 炭化物少量混入
2 灰褐色土(5YR4/2) 地山塊混入
3 黒褐色土(5YR2/2) 地山塊混入
4 褐色土(7.5YR4/3)
5 黒色土(5YR1.7/1) 炭化物堆積
6 褐灰色土(7.5YR4/1)
7 褐色土(7.5YR4/4)
8 赤褐色(2.5YR4/8) 焼土
9 黒褐色土(7.5YR2/2)

SKI03
1 暗赤色土(10R3/4) しまりあり 焼土
2 黒褐色土(7.5YR3/1) しまり強
3 褐色土(7.5YR4/3) 炭化物少量・地山塊混入、しまり強
4 暗褐色土(7.5YR3/3) 炭化物混入、しまりあり
5 黒色土(N2) 炭化物約50%混入
6 暗赤色土(7.5YR3/6) しまりあり 焼土
地山土～橙色土(7.5YR6/8) しまり強

SKI03（床面）
7 灰赤色土(7.5YR4/2) 炭化物少量混入、しまりあり
8 暗赤色土(7.5YR3/6) しまりあり
9 赤色土(10R5/8) 炭化物多量混入、しまりあり

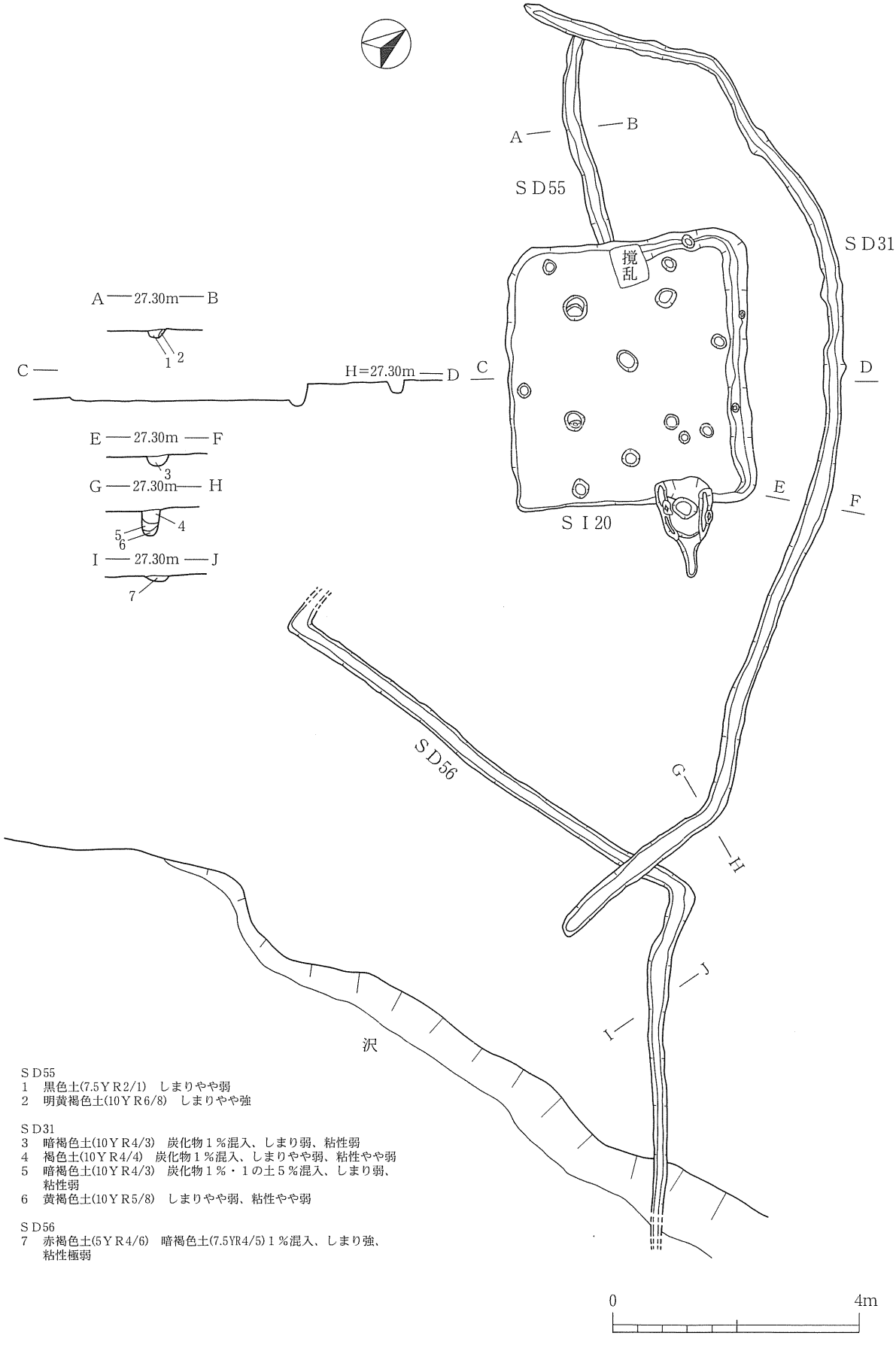
第42図　SKI02・03竪穴状遺構



ＳＢ30
1　暗褐色土(10ＹＲ3/3)　炭化物１％・地山粒７％混入、しまり弱、粘性やや弱
2　暗褐色土(10ＹＲ3/3)　炭化物１％・地山粒塊40％混入、しまりやや弱、粘性中

0　2m

第43図　ＳＢ30建物跡

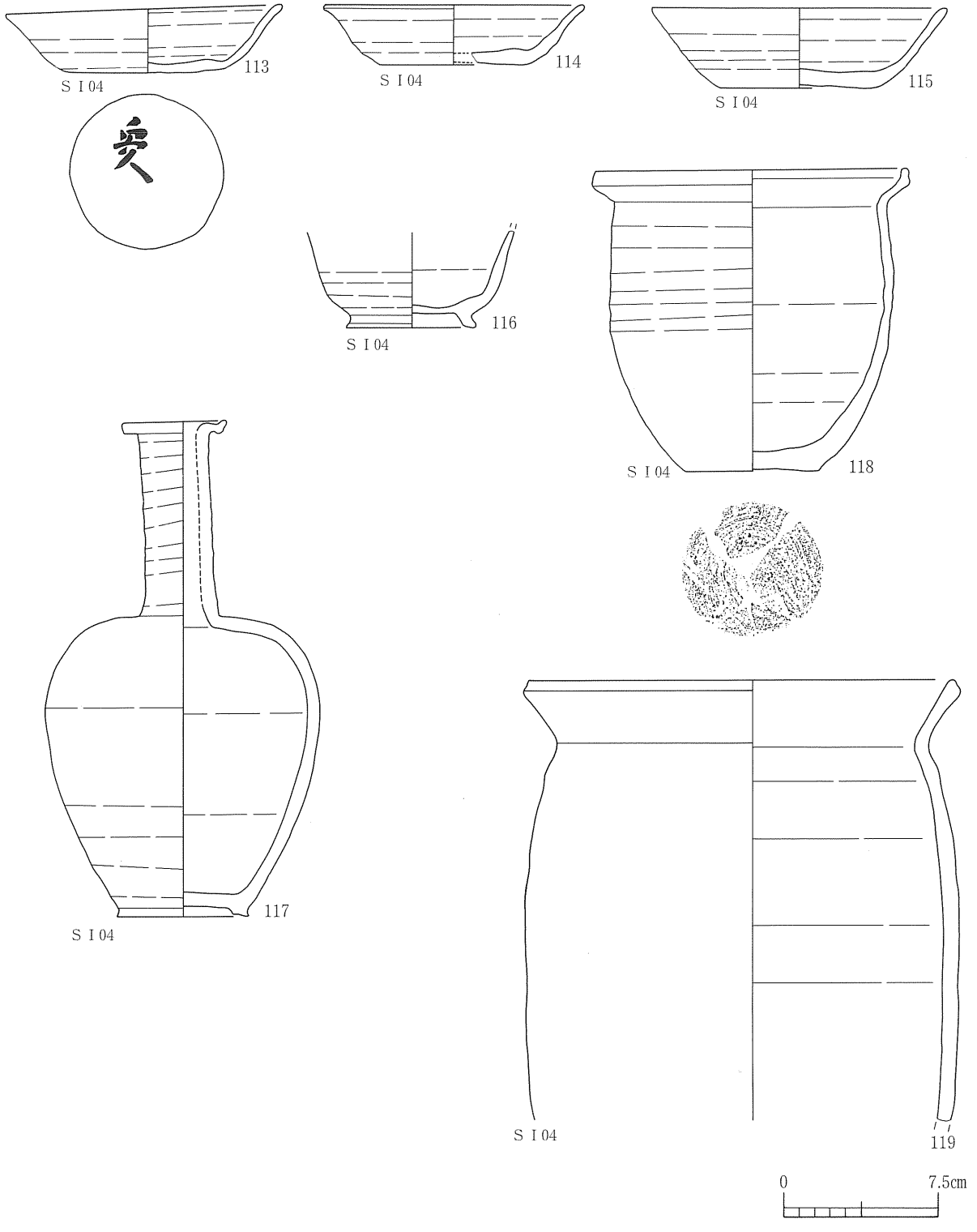


SD55
1　黒色土(7.5YR2/1)　しまりやや弱
2　明黄褐色土(10YR6/8)　しまりやや強

SD31
3　暗褐色土(10YR4/3)　炭化物1％混入、しまり弱、粘性弱
4　褐色土(10YR4/4)　炭化物1％混入、しまりやや弱、粘性やや弱
5　暗褐色土(10YR4/3)　炭化物1％・1の土5％混入、しまり弱、粘性弱
6　黄褐色土(10YR5/8)　しまりやや弱、粘性やや弱

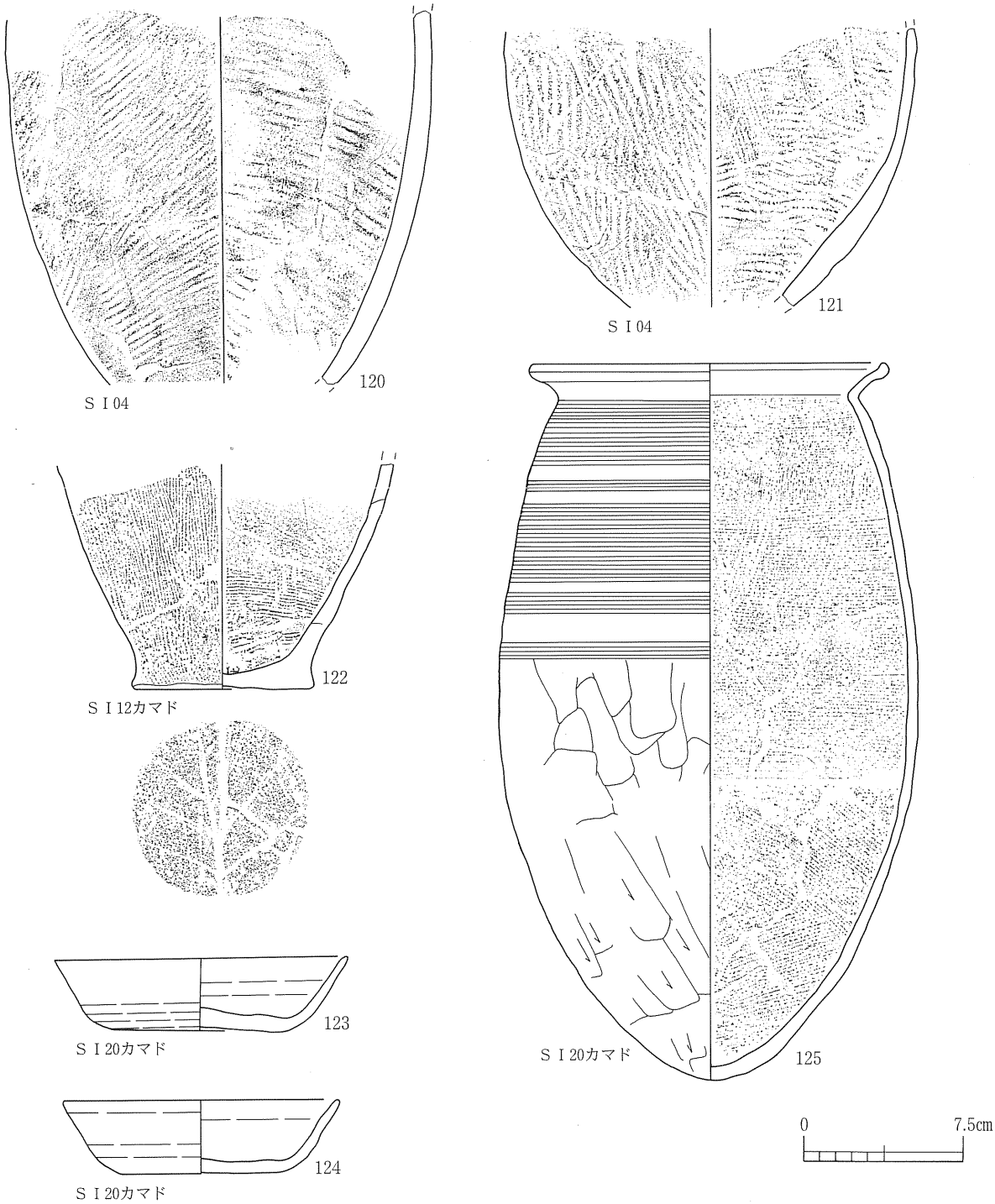
SD56
7　赤褐色土(5YR4/6)　暗褐色土(7.5YR4/5)1％混入、しまり強、粘性極弱

第44図　SD31・55・56溝跡



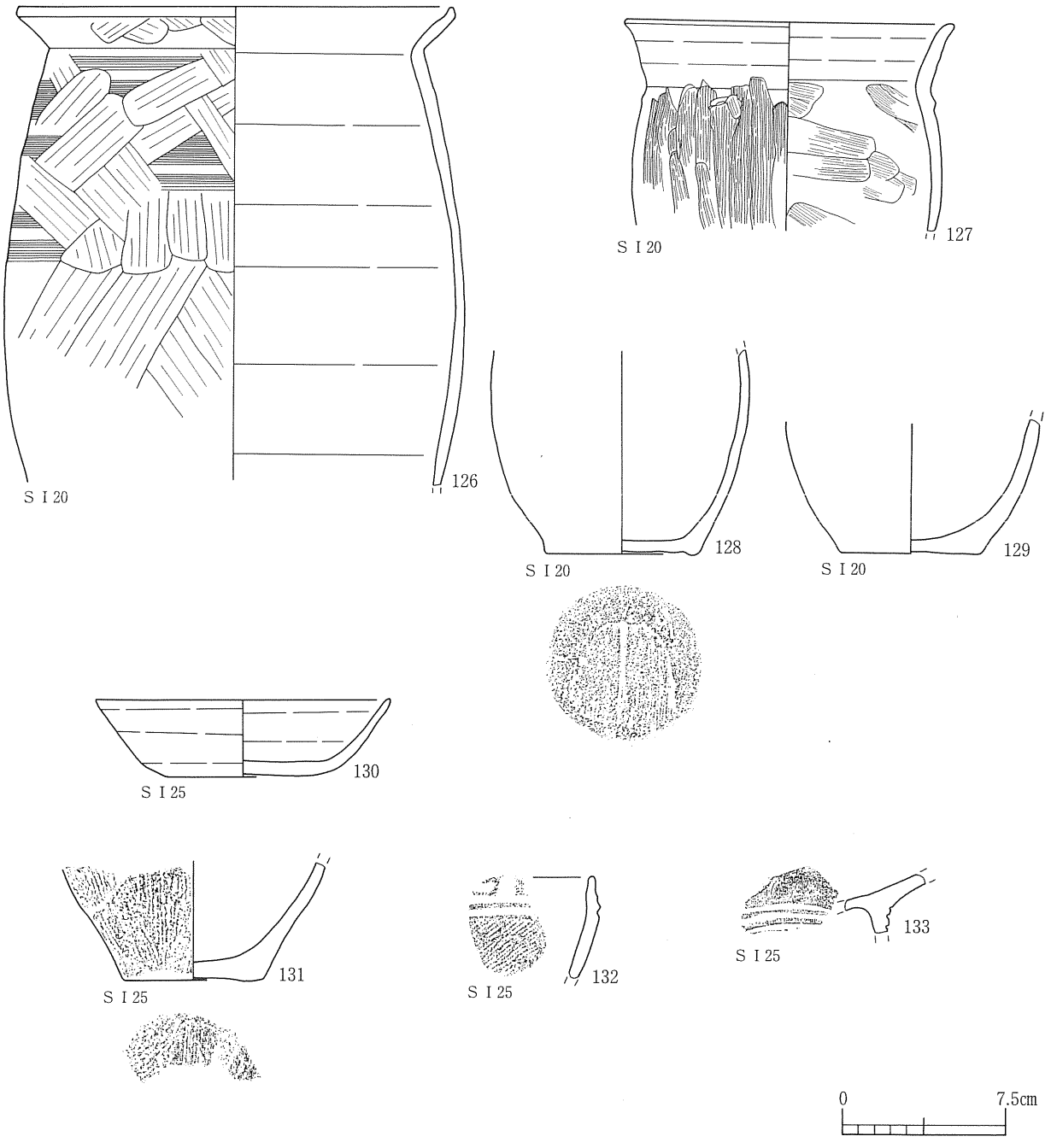
番号	種別	器形	特　　徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度
113	須恵器	坏	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り	13.6	7.6	3.5	0.59	25.7	44°
114	須恵器	坏	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り	12.7	7.6	2.95	0.6	23.2	39°
115	須恵器	坏	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り	14.2	7.8	4.0	0.55	28.2	37°
116	須恵器	台付坏	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り	－	6.2	(4.7)	－	－	18°
117	須恵器	水瓶	内外：ロクロ調整、底：高台付	5.1	－	24.4	－	－	－
118	土師器	甕	内外：ロクロ調整、底：回転糸切り	15.2	6.5	14.9	－	－	－
119	土師器	甕	内:ロクロ調整、外:上 ロクロ調整、下 叩き目、底部 砲弾形?	20.8	－	(21.7)	104.3	－	－

第45図　古代遺構内出土遺物(1)



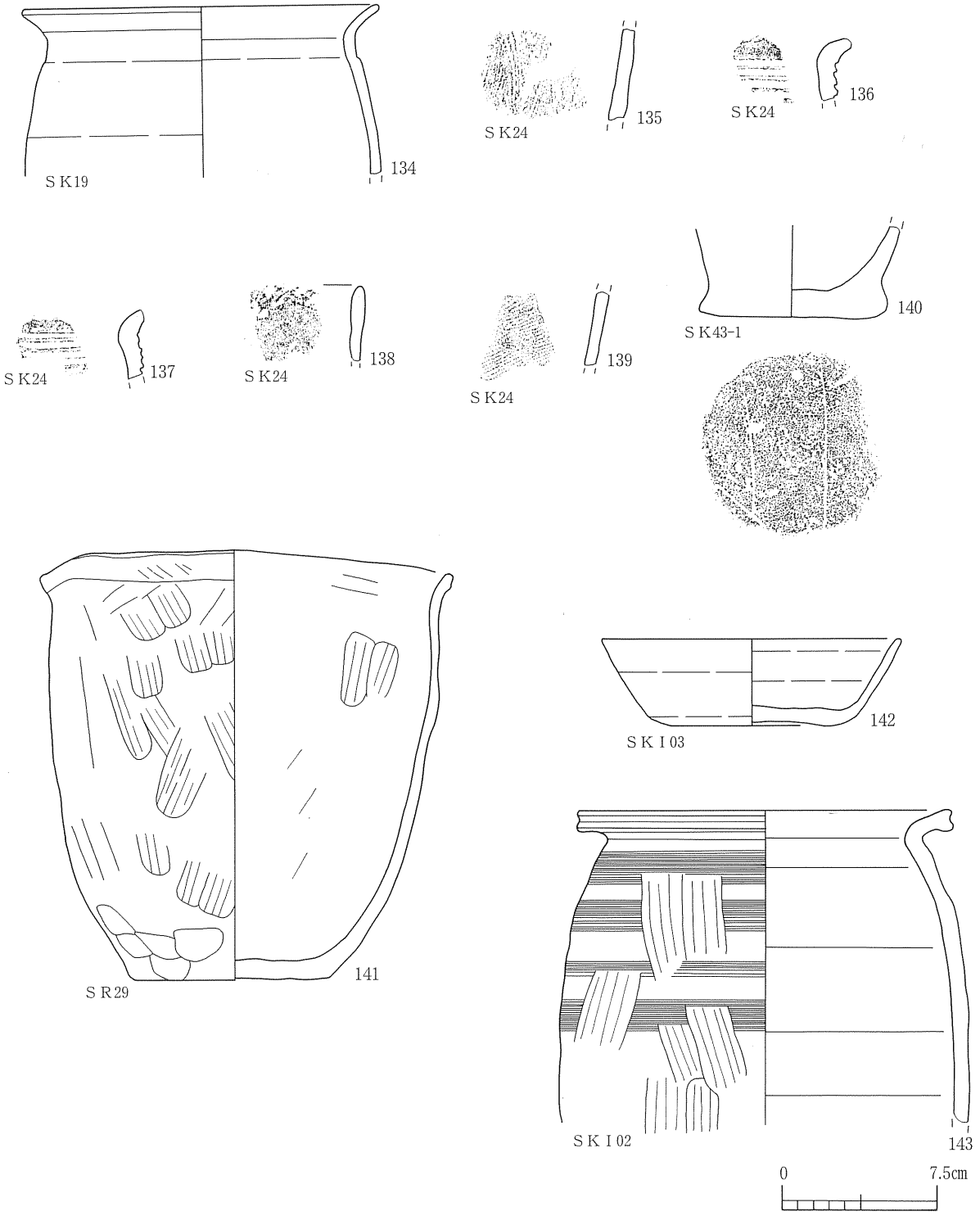
番号	種別	器形	特　　徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度
120	土師器	甕	内外：叩き目	－	－	(17.5)	－	－	－
121	土師器	甕	内外：叩き目	－	－	(13.3)	－	－	－
122	土師器	甕	内外：ハケ目、底部 木葉痕	－	8.5	－	－	－	－
123	須恵器	坏	内外：ロクロ調整	13.9	7.8	3.7	0.56	26.6	31°
124	須恵器	坏	内外：ロクロ調整	13.2	8.0	3.5	0.6	26.5	31°
125	土師器	甕	内：ハケ目、外：上 ロクロ調整、下 ヘラケズリ	16.6	－	34.3	－	206.6	－

第46図　古代遺構内出土遺物(2)



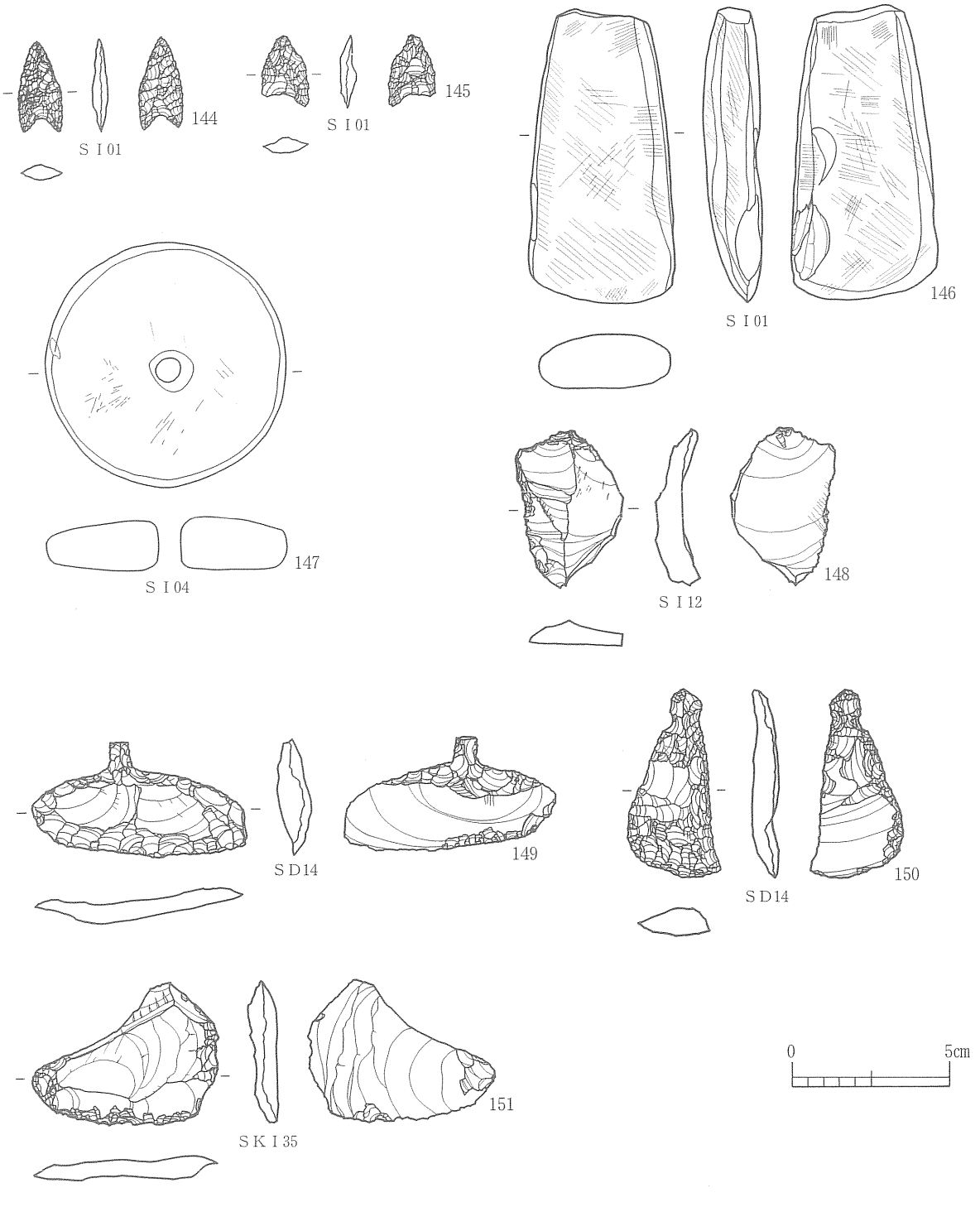
番号	種別	器形	特　　徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度
126	土師器	甕	内外：ロクロ調整、外：ヘラケズリ	－	－	(17.5)	－	－	－
127	土師器	甕	内外：ロクロ調整、内：ヘラミガキ、外：ヘラケズリ	－	－	(13.3)	－	－	－
128	土師器	甕	内外:ロクロ調整?、内:ヘラミガキ、外:ヘラケズリ、底:笹葉痕	－	8.5	－	－	－	－
129	土師器	甕	内外：調整なし、底：笹葉痕	13.9	7.8	3.7	0.56	26.6	31°
130	土師器	坏	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り？	13.2	8.0	3.5	0.6	26.5	31°
131	土師器	甕	外：ハケ目、底：笹葉痕	16.6	－	34.3	－	206.6	－

第47図　古代遺構内出土遺物(3)



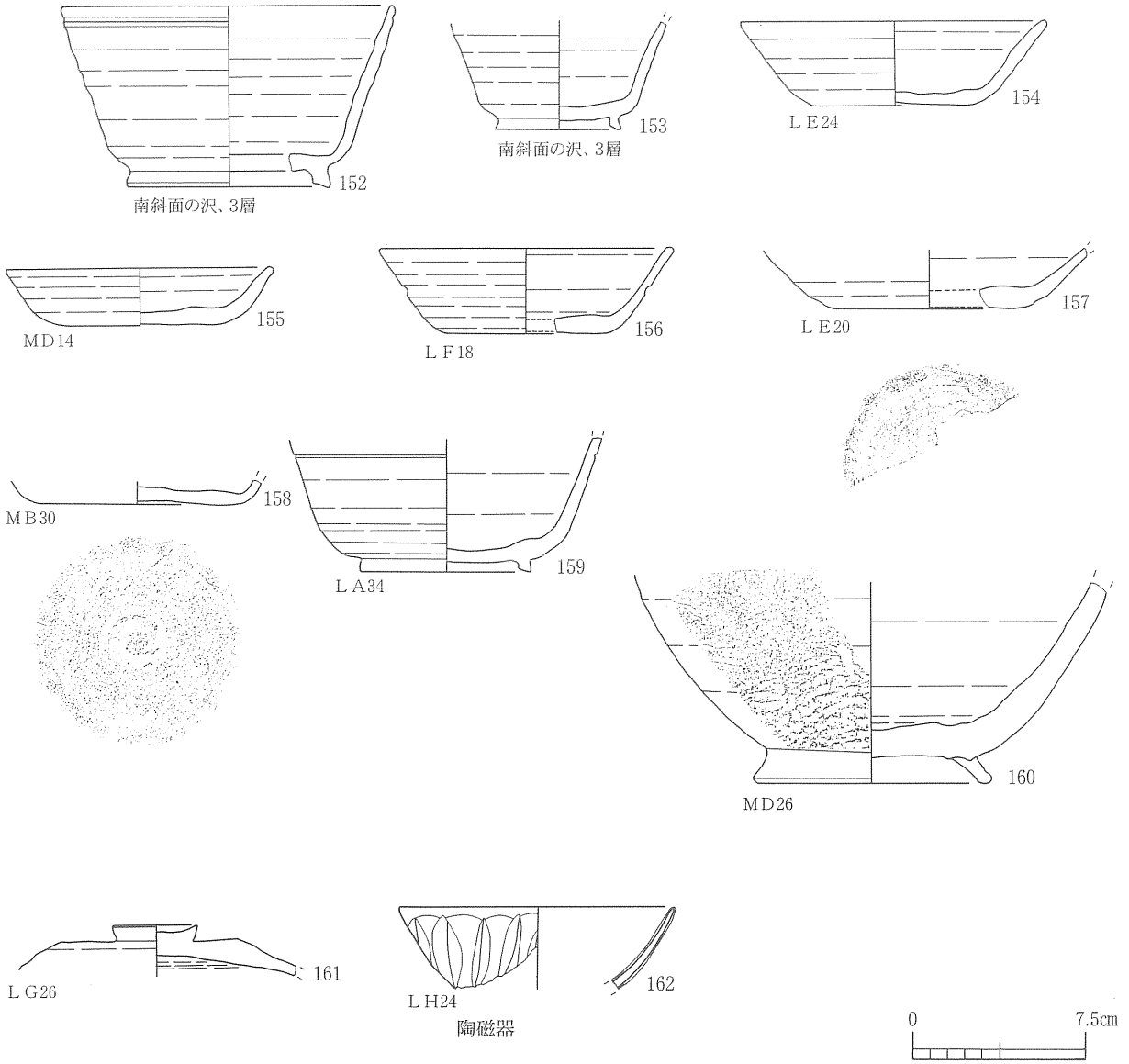
番号	種別	器形	特　　徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度
134	土師器	甕	内外：ロクロ調整、内：横ナデ、外：ハケ目	17.2	－	(7.8)	－	－	－
140	土師器	甕	内外：ハケ目、底：木葉痕	－	9.0	(4.55)	－	－	－
141	土師器	甕	内：ハケ目、外：ヘラケズリ	19.5	9.6	20.95	0.5	107.4	－
142	須恵器	坏	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り	14.4	7.8	4.3	0.54	29.9	30°
143	土師器	甕	内外：ロクロ調整、外：ヘラケズリ、内：不明	(18.0)	－	－	－	－	－

第48図　古代遺構内出土遺物(4)



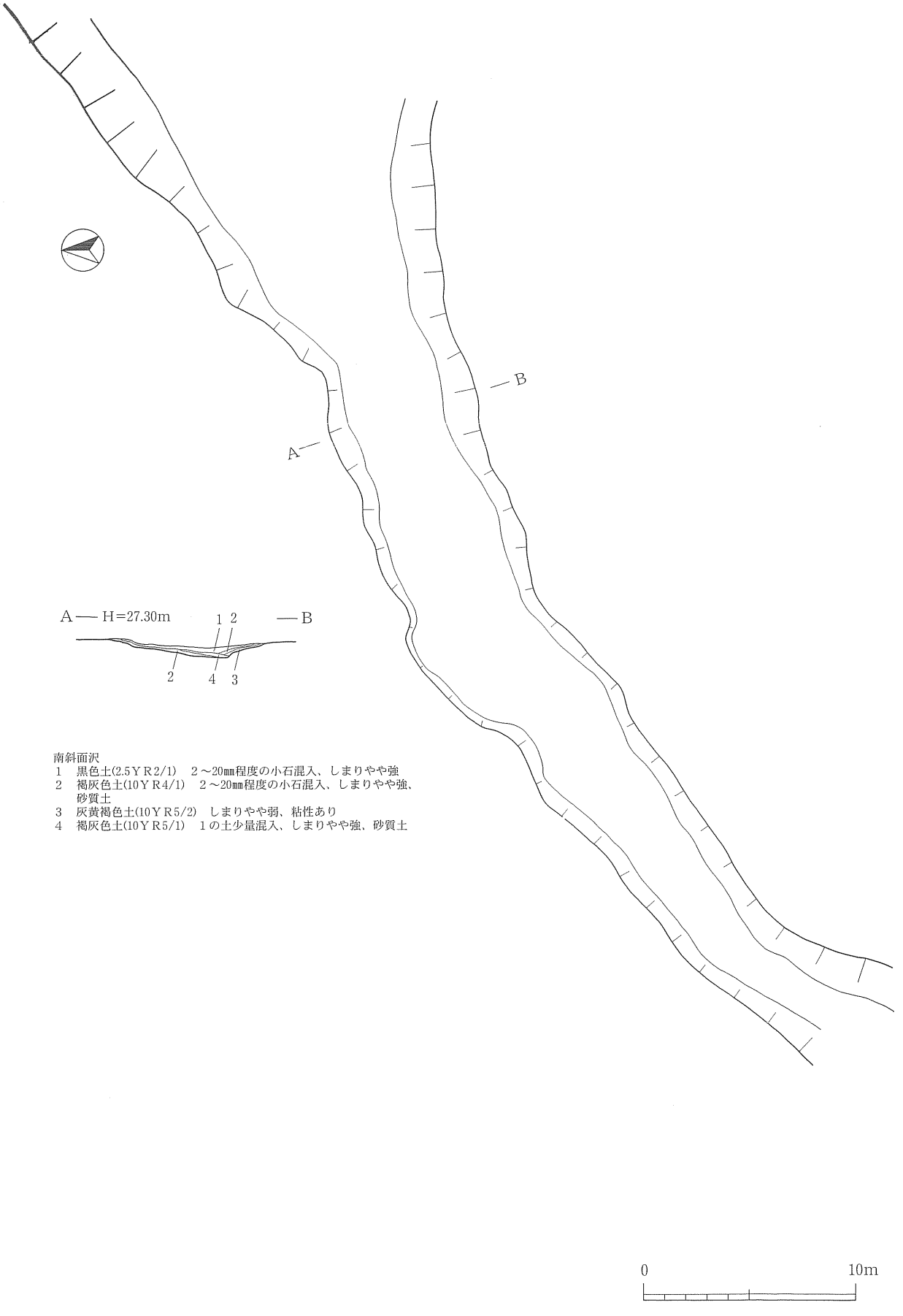
番号	グリッド	器　種	大きさ（cm）			重量(g)	石　質	備　考
			長軸	幅	厚さ			
144	ＳＩ01	石　鏃	2.95	1.4	0.45	1.6	頁　岩	ＲＱ14
145	ＳＩ01	石　鏃	2.3	1.5	0.45	1.0	頁　岩	ＲＱ81
146	ＳＩ01	石　斧	9.4	4.6	1.8	120.1	頁　岩	ＲＱ69
147	ＳＩ04	紡錘車	径7.85	0.8	1.65	64.2	泥　岩	ＲＱ9
148	ＳＩ12	石　匙	5.0	3.35	0.9	12.7	頁　岩	ＲＱ39
149	ＳＤ14	石　匙	3.65	6.8	0.9	15.4	頁　岩	ＲＱ1
150	ＳＤ14	石　匙	6.0	2.95	0.8	11.8	頁　岩	ＲＱ20
151	ＳＫＩ35	スクレイパー	4.55	5.9	0.8	19.2	頁　岩	ＲＱ7

第49図　古代遺構内出土遺物(5)

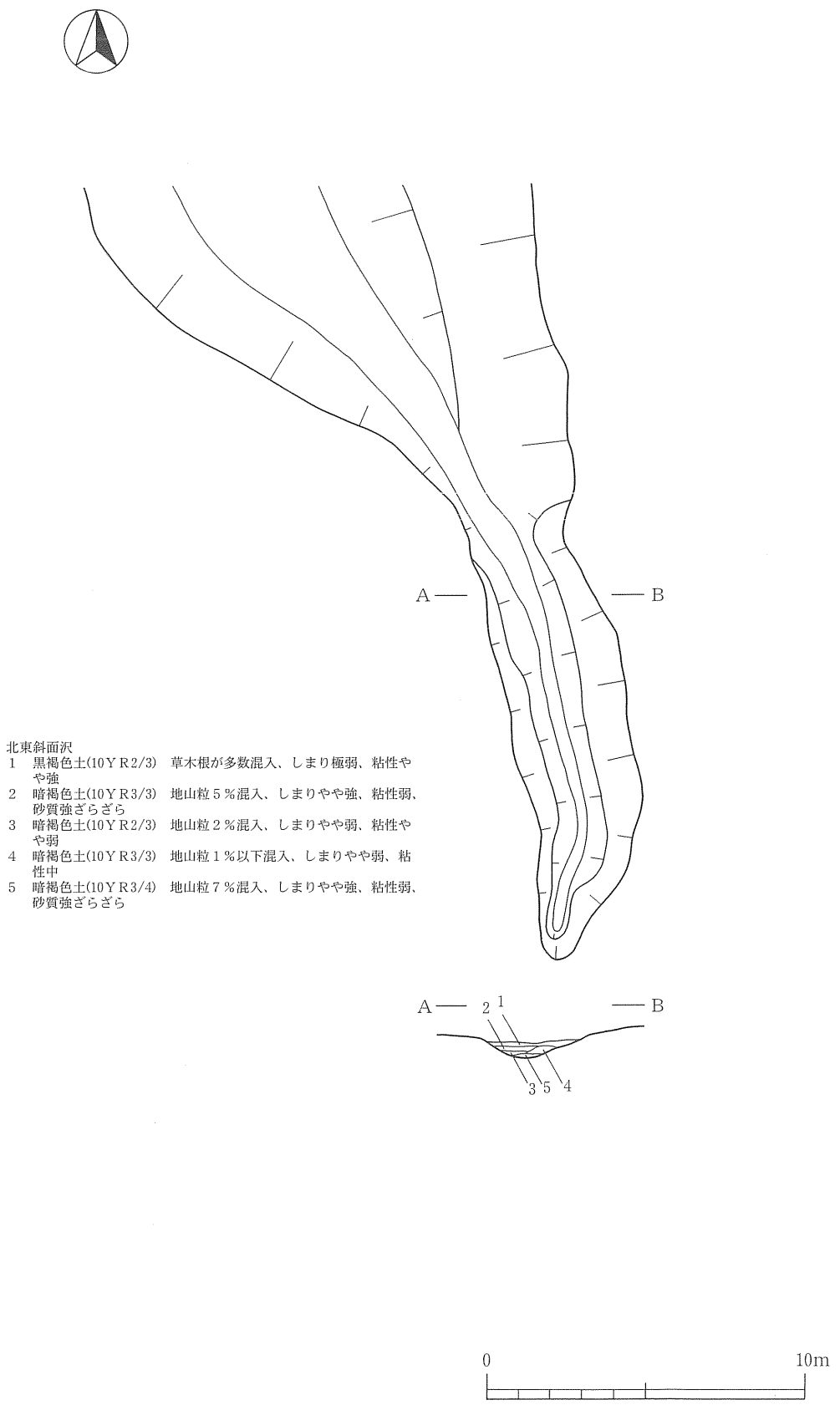


番号	種別	器形	特徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度
152	須恵器	台付坏	内外：ロクロ調整	(14.2)	(8.7)	7.9	0.6	55.6	18°
153	須恵器	台付坏	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り	−	5.5	(4.7)	−	−	20°
154	須恵器	坏	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り	(13.2)	(7.6)	3.65	0.6	27.7	37.5°
155	須恵器	坏	内外：ロクロ調整、底：	11.2	7.6	2.5	0.7	22.3	32.5°
156	須恵器	坏	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り	12.5	6.9	3.8	0.5	30.4	33.5°
157	須恵器	坏	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り	−	9.0	−	−	−	41°
158	須恵器	坏	底：回転ヘラ切り、周縁打欠き	−	9.0	(1.1)	−	−	−
159	須恵器	台付坏	内外：ロクロ調整、底：回転ヘラ切り	−	7.4	(5.8)	−	−	−
160	須恵器	甕	内：ロクロ調整、外：叩き目	−	−	(9.1)	−	−	−
161	須恵器	蓋	内外：ロクロ調整、外：ケズリ、周縁打欠き	−	−	−	−	−	−

第50図　古代遺構外出土遺物(1)、中世陶磁器


A
B
A — H=27.30m
1 2
— B
2
4 3
南斜面沢
1　黒色土(2.5ＹＲ2/1)　２～20㎜程度の小石混入、しまりやや強
2　褐灰色土(10ＹＲ4/1)　２～20㎜程度の小石混入、しまりやや強、砂質土
3　灰黄褐色土(10ＹＲ5/2)　しまりやや弱、粘性あり
4　褐灰色土(10ＹＲ5/1)　１の土少量混入、しまりやや強、砂質土
0
10m

第51図　南斜面の沢


A
B
北東斜面沢
1　黒褐色土(10ＹＲ2/3)　草木根が多数混入、しまり極弱、粘性やや強
2　暗褐色土(10ＹＲ3/3)　地山粒５％混入、しまりやや強、粘性弱、砂質強ざらざら
3　暗褐色土(10ＹＲ2/3)　地山粒２％混入、しまりやや弱、粘性やや弱
4　暗褐色土(10ＹＲ3/3)　地山粒１％以下混入、しまりやや弱、粘性中
5　暗褐色土(10ＹＲ3/4)　地山粒７％混入、しまりやや強、粘性弱、砂質強ざらざら
A
B
2
1
3
5
4
0
10m

第52図　北東斜面の沢

SKP	検出グリッド	平面形	大きさ(cm)			床面の標高(m)	SKP	検出グリッド	平面形	大きさ(cm)			床面の標高(m)
			長軸	短軸	深さ					長軸	短軸	深さ	
1	ＬＦ16	楕円形	31	22	10.4	27.75	51	ＬＨ28	円形	16	16	14.3	27.18
2	ＬＦ17	円形	15	14	7.5	27.08	52	ＬＨ28	円形	18	16	8.9	27.16
3	ＬＦ17	円形	23	22	29.9	27.67	53	ＬＨ28	楕円形	36	26	19.2	27.02
4	ＬＥ16	楕円形	24	18	8.2	27.85	54	LH28,LI28	楕円形	38	32	18.7	27.04
5	ＬＥ17	円形	22	20	25.1	27.71	55	LH28,LI28	円形	22	20	14.6	27.02
6	ＬＥ17	円形	24	20	9.5	27.88	56	ＬＨ28	円形	24	20	10.6	27.18
7	ＬＥ17	円形	23	23	16.4	27.78	57	ＬＩ28	円形	22	20	14.1	27.15
8	ＬＥ16	円形	22	22	18	27.72	58	ＬＩ28	円形	22	22	12.8	27.16
9	ＬＥ17	円形	21	21	17	27.75	59	ＬＩ28	楕円形	18	12	10	27.14
10	ＬＥ17	円形	14	14	10.2	27.85	60	ＬＩ28	円形	20	18	14.6	27.02
11	ＬＤ17	円形	23	23	17.2	27.76	61	ＬＩ28	円形	28	28	10.4	27.09
12	ＬＤ17	円形	27	24	9.7	27.79	62	ＬＩ28	円形	32	28	13.7	27.02
13	ＬＤ18	円形	30	22	8.2	27.7	63	ＬＩ28	円形	26	22	26.8	26.65
14	ＬＥ21	円形	20	16	17.2	26.28	64	ＬＩ28	円形	23	20	11	26.86
15	ＬＥ21	円形	22	20	16.8	27.28	65	ＬＪ28	円形	17	12	12.5	26.76
16	ＬＥ21	楕円形	26	20	14.5	27.11	66	ＬＪ28	円形	26	24	22.3	26.72
17	ＬＥ20	円形	18	18	7.3	27.21	67	ＬＪ28	円形	22	20	13	26.83
18	ＬＥ20	円形	30	30	5.5	27.21	68	ＬＪ28	円形	24	20	10.5	26.83
19	ＬＥ20	楕円形	30	20	16.2	27.27	69	ＬＪ28	円形	24	22	15.6	26.73
20	ＬＥ20	楕円形	26	20	19.7	27.21	70	ＬＪ28	円形	26	26	21.1	26.52
21	ＬＥ20	円形	24	23	17.9	27.27	71	ＭＡ28	円形	24	23	14.6	26.42
22	ＬＩ26	円形	22	22	22.5	26.78	72	ＭＡ29	円形	38	34	9.8	26.61
23	ＬＩ26	円形	26	24	20	26.78	73	ＭＡ29	楕円形	38	24	10.7	26.67
24	ＬＩ26	円形	22	20	23.5	26.66	74	ＭＡ29	円形	24	24	8.4	26.82
25	ＬＩ26	円形	24	20	8.1	26.79	75	ＬＪ29	円形	22	22	11.4	26.82
26	ＬＩ26	円形	24	22	6.7	26.75	76	ＬＪ29	円形	30	26	26.8	26.85
27	ＬＩ26	円形	26	26	5.3	26.76	77	ＬＩ29	円形	24	24	17	27.09
28	ＬＪ26	楕円形	30	24	3.3	26.62	78	ＬＩ29	円形	18	12	19.5	27.03
29	ＬＪ26	円形	24	24	3.9	26.51	79	ＬＩ29	円形	24	22	13.1	27
30	ＬＪ27	円形	32	30	12.8	26.48	80	ＬＩ29	円形	34	32	15.1	27.02
31	ＬＪ27	円形	30	28	19.9	26.47	81	ＬＩ29	楕円形	36	22	4.2	27.27
32	ＬＪ27	円形	28	28	14.3	25.75	82	ＬＩ29	円形	22	18	8.6	27.32
33	ＬＪ27	円形	21	21	8.8	26.75	83	LH29,LI29	円形	24	24	10.6	27.31
34	ＬＪ28	円形	26	24	8.8	26.71	84	LH29,LI29	円形	48	48	12.8	27.28
35	ＬＪ28	円形	28	28	28.1	26.67	85	ＬＨ29	円形	26	22	9.7	27.31
36	ＬＩ27	円形	36	34	23.1	26.76	86	ＬＨ29	円形	32	28	9	27.36
37	ＬＩ27	円形	16	16	20.1	26.81	87	ＬＨ29	楕円形	40	32	10.6	27.48
38	ＬＩ27	円形	26	24	13.6	26.85	88	ＬＥ30	円形	34	32	12	28.49
39	ＬＩ27	楕円形	28	22	18.9	26.83	89	ＬＧ30	楕円形	48	36	13.6	27.04
40	ＬＩ27	円形	22	22	17.5	26.83	90	ＬＧ30	円形	28	24	8.8	27.69
41	ＬＩ27	円形	24	20	18.3	26.88	91	ＬＧ30	楕円形	40	34	7.9	27.79
42	ＬＩ27	円形	18	14	14.5	26.95	92	ＬＧ31	楕円形	26	20	9.8	28.34
43	ＬＩ27	円形	13	12	20.8	26.88	93	ＬＨ30	円形	22	20	17.3	27.63
44	ＬＩ27	円形	22	20	12.2	26.96	94	ＬＨ30	楕円形	44	32	13	27.55
45	ＬＩ28	円形	22	22	18.6	26.9	95	ＬＨ30	円形	16	16	5.5	27.53
46	ＬＩ28	円形	20	20	8.6	27.11	96	ＬＨ30	楕円形	60	24	17.7	27.32
47	ＬＨ27	円形	22	20	13.9	27.11	97	ＬＨ30	円形	20	20	7.6	27.58
48	ＬＨ28	円形	26	22	13	27.2	98	ＬＨ30	円形	16	14	4.9	27.58
49	ＬＨ28	円形	20	16	6.9	27.36	99	ＬＨ31	円形	22	20	11.3	27.68
50	ＬＨ28	円形	18	14	11.5	27.33	100	ＬＨ31	円形	20	18	8.7	27.81

第３表　柱穴様ピット一覧（１）

SKP	検出グリッド	平面形	大きさ(cm)			床面の標高(m)
			長軸	短軸	深さ	
101	ＬＨ31	円形	26	26	11.1	28.03
102	ＬＩ30	円形	23	23	19.4	27.11
103	ＬＩ30	楕円形	46	36	14.8	27.17
104	ＬＩ30	円形	42	40	33.1	27.15
105	ＬＪ30	円形	24	22	15.2	27.11
106	ＬＪ30	楕円形	30	24	12.4	27.05
107	ＭＡ30	円形	22	22	7.6	27.08
108	ＬＪ30	楕円形	30	24	7.7	27.45
109	ＬＪ30	円形	32	30	7.7	27.79
110	ＬＪ31	円形	22	22	12.1	27.7
111	ＬＪ31	円形	32	28	17.5	27.7
112	ＬＪ31	円形	24	24	21.2	27.76
113	ＬＪ31	円形	28	28	16.0	28.19
114	MB30,MC30	円形	20	18	9.6	27.31
115	ＭＣ30	円形	18	18	5.2	27.43
116	ＭＣ30	円形	22	22	2.9	27.43
117	ＭＣ30	円形	20	18	5.0	27.39
118	ＭＣ30	円形	20	18	11.0	27.32
119	ＬＩ33	円形	28	28	15.1	29.73
120	ＭＡ32	円形	22	22	17.2	28.81
121	ＭＡ32	円形	20	20	8.8	28.66
122	ＭＡ32	円形	16	16	3.4	28.44
123	ＭＡ32	円形	28	28	7.5	28.28
124	ＭＢ31	円形	24	24	12.3	26.97
125	ＭＢ32	円形	22	22	11.3	28.57
126	ＭＢ32	円形	26	26	31.6	27.78
127	ＭＢ32	円形	26	26	11.3	28.92
128	ＭＢ32	円形	18	16	26.3	28.64
129	ＭＢ32	楕円形	40	28	30.3	28.67
130	ＭＢ32	円形	26	26	13.0	28.89
131	ＭＣ32	楕円形	58	38	17.3	28.44
132	ＭＣ32	円形	28	26	30.0	28.73
133	ＭＣ32	円形	26	26	30.8	27.74
134	ＭＤ32	円形	22	22	37.5	27.45
135	ＭＤ32	円形	48	48	12.8	28.03
136	ＭＤ33	円形	32	32	14.0	28.12
137	ＭＣ33	円形	18	18	8.9	28.36
138	ＭＣ33	円形	22	22	23.1	28.19
139	ＭＣ33	円形	22	22	25.6	28.04
140	ＭＣ33	円形	26	26	25.2	27.99
141	ＭＣ33	円形	22	22	61.7	27.65
142	ＭＣ34	円形	36	34	74.0	27.67
143	ＭＢ35	楕円形	46	36	9.0	29.34
144	ＭＨ40	円形	28	24	29.4	29.13
145	ＭＨ40	円形	50	50	6.8	29.41
146	ＭＨ40	円形	30	28	26.3	29.17
147	ＭＨ41	円形	32	32	16.3	28.91
148	ＭＨ41	円形	26	26	18.9	29.02
149	ＭＩ41	円形	24	24	31.3	28.9
150	ＭＩ41	円形	28	24	19.6	29.04
151	ＭＩ41	円形	30	28	21.3	29.06
152	ＭＪ40	円形	26	24	28.1	29.24
153	ＭＪ40	円形	26	22	23.7	29.22
154	ＭＩ40	円形	32	28	3.5	29.48

第４表　柱穴様ピット一覧（２）

第５章　自然科学的分析

第１節　大平遺跡から出土した炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

大平遺跡では、古代の竪穴住居跡が検出されている。このうち、ＳＩ01,04,12,20は、火災住居跡であり、床面からは住居構築材の一部と考えられる炭化材が出土している。住居構築材の用材選択については、縄文時代では多くの資料があり、クリが多いことが明らかになっている。しかし、古代については資料が少なく、現時点では詳細は不明である。

本報告では、各住居跡から出土した炭化材の樹種同定を行い、用材選択に関する資料を得る。

１．試料

試料は、各住居跡から出土した炭化材46点（試料番号１～46）である。このうち、試料番号５と13には、それぞれ遺物番号の異なる２試料があったため、それぞれについて同定を行う。したがって、合計点数は48点である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表１に記した。

２．方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

３．結果

樹種同定結果を表１に示す。試料番号18,19,20,24には、それぞれ複数の種類が認められた。また、試料番号43には炭化材の他に樹皮が認められた。これらの炭化材は、落葉広葉樹７種類（コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・ケヤキ・ヌルデ・トチノキ・ハリギリ・エゴノキ属）とイネ科タケ亜科に同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*）　　ブナ科

環孔材で、孔圏部はほぼ１列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　　ブナ科クリ属

環孔材で孔圏部は１～４列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高。

・ケヤキ（*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino）　　ニレ科ケヤキ属

環孔材で孔圏部は１～３列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が

認められる。放射組織は異性Ⅲ型、１～６細胞幅、１～30細胞高。しばしば結晶を含む。

・ヌルデ（*Rhus javanica* L.）

ウルシ科ウルシ属

環孔材で、孔圏部は２～４列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち漸減する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ～Ⅱ型、１～３細胞幅、１～20細胞高で、時に上下に連結する。

・トチノキ（*Aesculus turbinata* Blume）

トチノキ科トチノキ属

散孔材で、道管は単独または２～３個が複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、１～15細胞高で階層状に配列する。

・ハリギリ（*kalopanax pictus* (Thunb.) Nakai）　ウコギ科ハリギリ属

環孔材で、孔圏部は１列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、１～５細胞幅、１～30細胞高。

・エゴノキ属（*Styrax*）　エゴノキ科

散孔材で、道管は単独または２～４個が複合して散在し、年輪界付近で管径を減ずる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性II型、１～４細胞幅、１～30細胞高。

番号	遺構名	時期	検出番号	用途など	樹　種
1	ＳＩ01	古代	No.1	住居構築材	クリ
2	ＳＩ01	古代	No.2	住居構築材	クリ
3	ＳＩ01	古代	No.3	住居構築材	クリ
4	ＳＩ01	古代	No.4	住居構築材	クリ
5	ＳＩ01	古代	No.5	住居構築材	クリ
	ＳＩ04	古代	No.5	住居構築材	クリ
6	ＳＩ01	古代	No.8	住居構築材	クリ
7	ＳＩ01	古代	No.9	住居構築材	クリ
8	ＳＩ01	古代	No.10	住居構築材	クリ
9	ＳＩ01	古代	No.11	住居構築材	クリ
10	ＳＩ01	古代	No.12	住居構築材	クリ
11	ＳＩ01	古代	No.14	住居構築材	クリ
12	ＳＩ01	古代	No.16	住居構築材	クリ
13	ＳＩ01	古代	No.24	住居構築材	クリ
	ＳＩ01	古代	No.17	住居構築材	クリ
14	ＳＩ01	古代	No.18	住居構築材	クリ
15	ＳＩ01	古代	No.19	住居構築材	クリ
16	ＳＩ01	古代	No.20	住居構築材	クリ
17	ＳＩ01	古代	No.21	住居構築材	クリ
18	ＳＩ04	古代	No.1	住居構築材	クリ
					エゴノキ属
19	ＳＩ04	古代	No.3	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
					クリ
					エゴノキ属
20	ＳＩ04	古代	No.4	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
					クリ
					ケヤキ
					エゴノキ属
21	ＳＩ04	古代	No.2	住居構築材	クリ
22	ＳＩ04	古代	No.6	住居構築材	イネ科タケ亜科
23	ＳＩ12	古代	No.1	住居構築材	クリ
24	ＳＩ12	古代	No.2	住居構築材	クリ
					トチノキ
25	ＳＩ12	古代	No.3	住居構築材	クリ
26	ＳＩ12	古代	No.4	住居構築材	クリ
27	ＳＩ12	古代	No.5	住居構築材	クリ
28	ＳＩ12	古代	No.6	住居構築材	クリ
29	ＳＩ12	古代	No.7	住居構築材	ヌルデ
30	ＳＩ12	古代	No.8	住居構築材	クリ
31	ＳＩ20	古代	No.1	住居構築材	クリ
32	ＳＩ20	古代	No.2	住居構築材	クリ
33	ＳＩ20	古代	No.3	住居構築材	クリ
34	ＳＩ20	古代	No.4	住居構築材	クリ
35	ＳＩ20	古代	No.5	住居構築材	ハリギリ
36	ＳＩ20	古代	No.6	住居構築材	クリ
37	ＳＩ20	古代	No.7	住居構築材	クリ
38	ＳＩ20	古代	No.8	住居構築材	クリ
39	ＳＩ20	古代	No.9	住居構築材	クリ
40	ＳＩ20	古代	No.10	住居構築材	クリ
41	ＳＩ20	古代	No.11	住居構築材	クリ
42	ＳＩ20	古代	No.12	住居構築材	クリ
43	ＳＩ20	古代	No.13	住居構築材	クリ
					樹皮
44	ＳＩ20	古代	No.14	住居構築材	クリ
45	ＳＩ20	古代	No.15	住居構築材	クリ
46	ＳＩ20	古代	No.18	住居構築材	クリ

第５表　樹種同定結果

・イネ科タケ亜科（Gramineae subfam. Bambusoideae）

維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱が認められ、放射組織は認められない。タケ亜科は、タケ・ササ類であるが解剖学的特徴では区別できない。

４．考察

各住居跡から出土した炭化材には、合計８種類が認められ、クリが最も多い。各住居跡の出土状況

を見ると、ＳＩ01では試料番号１,２,５,６,７,８が壁から住居中央に向かって倒れたような状況で出土している。また、試料番号９,10,11,14,15,16,17は壁内に一部が残存した状態で出土している。試料番号３,４,12は、壁に平行の状況で出土している。これらは、いずれも垂木に由来すると考えられる。樹種は全てクリであった。

ＳＩ04では、住居の西隅の床面から試料番号18が出土しているが、２点の炭化材が交差するように出土している。樹種がクリとエゴノキ属であることから、垂木と横木など、異なる部材に由来すると考えられる。また、西隅の壁からは試料番号19と21が出土している。試料番号21は、出土状況から垂木に由来すると考えられる。試料番号19は、異なる形状の２点がある。樹種同定では３種類（コナラ節・クリ・エゴノキ属）が認められていることから、実際には３点以上の部材が重なっていると判断できる。垂木などを含むと考えられるが、詳細は不明である。住居東隅付近からは、試料番号20と22が重なって出土している。試料番号22はタケ亜科であることから、屋根を葺いていた一部が炭化・残存したものと考えられる。試料番号20には４種類（コナラ節・クリ・ケヤキ・エゴノキ属）が認められており、複数の部材が重なっていると判断できる。

ＳＩ12では、住居の西辺と北辺の壁際、北西隅と南西隅からそれぞれ炭化材が出土している。出土状況から、いずれも垂木に由来すると考えられる。このうち、試料番号24は２種類（クリ・トチノキ）が認められたことから、少なくとも２点の部材が混ざっていると考えられる。その槍ｼの試料は、１点がヌルデで、他は全てクリであった。

ＳＩ20では、住居の床面と壁際から炭化材が出土している。壁際のものはいずれも垂木と考えられる。床面上の炭化材は、試料番号33,34,35,38が壁から住居中央に向かって倒れたような状況を示しており、垂木に由来すると考えられる。しかし、他の試料についは、垂木以外の部材も含まれている可能性がある。１点がハリギリで、他は全てクリであった。

各住居跡の種類構成を見ると、クリが多くを占める。秋田県内では、上野遺跡や池内遺跡で平安時代の住居構築材と考えられる炭化材について樹種同定が行われている。その結果では、上野遺跡でイヌエンジュ属とカツラ、池内遺跡でクリとスギが確認されている。また、払田柵跡では、門柱などの部材にクリが認められており（パリノ・サーヴェイ株式会社，1991,1993）、クリが柱材など強度を有する部材に利用されていたことがうかがえる。しかし、いずれも調査点数が少ないため、住居構築材全体の構成については不明である。一方、青森県では、永野遺跡、板留(2)遺跡等でクリ材が住居構築材に多く利用されており（嶋倉，1980a,1980b）、今回の結果とも一致する。

各住居別に種類構成を見ると、ＳＩ01,12,20ではクリが多く認められることから、基本的にはクリを主とした用材選択が行われていた可能性が高い。一方、ＳＩ04では、クリが多い点は他の住居跡と一致するが、クリ以外の種類も多く、他の住居跡と種類構成に若干の違いが認められる。遺跡内の住居跡によって種類構成が異なる例はこれまでにも各地で報告されている。このうち、群馬県渋川市中筋遺跡では、住居の構造や使用目的などによる用材選択の違いが指摘されている（橋本ほか，1996）。今回の住居跡を見ると、全て竪穴住居跡であり、規模はSI01がやや小型であるが、他はほぼ同じ規模である。したがって、住居跡の構造や規模による用材選択の違いは考えにくい。建物の用途によって異なる用材選択が行われていた可能性があるが、詳細は不明である。また、炭化材は、燃焼とその後の埋積過程を経て残存したものである。そのため、各住居跡における燃焼時の状況の違い等によって

燃え残り方が異なることが推定される。このような違いも種類構成の違いに反映されている可能性がある。今後さらに多くの資料を蓄積すると同時に、それぞれの出土状況を含めた解析を行うことで用材選択や種類構成の詳細を明らかにしたい。

引用文献

パリノ・サーヴェイ株式会社（1991）樹種鑑定．秋田県文化財調査報告書第216集・払田柵跡調査　事務所年報1990「払田柵跡　－第84～87次調査概要－」，p.64-65，秋田県埋蔵文化財振興会．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1993）花粉分析および樹種鑑定．秋田県文化財調査報告書第238集・払田柵跡調査　事務所年報1992「払田柵跡　－第92･93次調査概要－」，p.85-89，秋田県埋蔵文化財振興会．

嶋倉巳三郎（1980a）永野遺跡出土の炭化材．青森県埋蔵文化財調査報告書第56集「永野遺跡　発掘調査報告書　昭和54年度」，p.370-371，青森県教育委員会．

嶋倉巳三郎（1980b）板留(2)遺跡から出土した炭化材の樹種．青森県埋蔵文化財調査報告書第59集「板留(2)遺跡　発掘調査報告書」，p.１－２，青森県教育委員会．

第6章　まとめ

大平遺跡は、平成元年度の範囲確認調査の結果11,500㎡が遺跡範囲として確定されている。平成11年度の大平遺跡発掘調査（以下、第２次調査とする）は、日本海沿岸東北自動車道建設事業に係った6,900㎡について実施した。これは遺跡推定面積の60％にあたる。しかし、すでに平成６年度に現インターチェンジのループ部分1,300㎡(11％)が調査されている。この結果、完全に発掘調査の行われた範囲は8,200㎡、遺跡推定面積の71％となった。

平成６年度調査（以下、第１次調査とする）では、縄文土器５点・石器６点も出土しているが、主に土師器・須恵器が出土している。遺構は、炭焼窯跡２基、竪穴住居跡１軒、土坑３基が検出されている。その構築年代は、遺物、形態、切り合い関係、磁気年代測定・放射性炭素年代測定などから、炭焼窯跡２基が８世紀第３四半期から第４四半期、竪穴住居跡及び土坑は８世紀第２四半期から第３四半期と考えられている。

今回の調査では、縄文時代中期後半～末葉の土器、縄文時代晩期末葉～弥生時代の土器、古代の土師器・須恵器などが出土している。遺構は、縄文時代の竪穴住居跡６軒（その内、中期後半～末葉と時期の明らかな竪穴住居跡３軒）、土坑３基、フラスコ状・袋状土坑２基、土器埋設遺構１基、焼土遺構９基で計21遺構と柱穴様ピット３基である。古代の遺構は竪穴住居跡５軒、竪穴状遺構２基、掘立柱建物跡１軒、土坑14基（この内、土器焼成遺構の可能性のあるもの２基）、土器埋設遺構１基、焼土遺構１基、溝跡３条の計27遺構と柱穴様ピット151基が検出された。他に縄文時代末～弥生時代の土器埋設遺構１基、竪穴住居跡１軒が検出された。

竪穴住居跡の分布をみると、縄文時代と古代のそれは標高27mライン付近を境にして、縄文時代のものはそのラインより上に、古代のものはそのラインの下に分布している。

以下においては今回検出された縄文時代や古代の竪穴住居跡、特徴ある遺物を中心にその性格と年代について述べてまとめとしたい。

縄文時代の竪穴住居跡６軒のうち、出土遺物から詳しい時期が明らかになったのはＳＩ18・21・52竪穴住居跡である。ＳＩ18竪穴住居跡は、直径5.66mで、中央部のやや東側に石囲土器埋設炉が位置し、南東側にわずかな落込み部がある。土器内部には炭が詰まった状態で検出された。ＳＩ52竪穴住居跡は直径5.52mで、やや南東側に土器埋設炉が位置し、南東壁側が燃焼部であるが、壁には接していない。また、北西部が出入口と推定される。両住居跡はいずれも中期後半の大木９式期に構築されたものである。ＳＩ21竪穴住居跡は直径3.0mで、中央部に地床炉が位置する。中期末の大木10式期に構築されたものである。

古代の竪穴住居跡は、ＳＩ01・04・12・20・25の５軒を検出した。なお、形態的には掘立柱建物跡に近いと思われる、壁・壁溝・焼土(地床炉)・柱穴が検出されたＳＩ44も竪穴住居跡として扱った。また、ＳＫＩ02・03竪穴状遺構も同時期のものと推定される。ＳＩ20竪穴住居跡は外側３方向に溝を伴うもので、流水の痕跡は確認できなかったものの、住居に水が流入しないようにした排水溝と推定される。秋田市の諏訪ノ沢遺跡に類例が有る。

また、これらの住居跡・竪穴状遺構の内５遺構(ＳＩ01・04・12・20、ＳＫＩ03)は焼失したものであ

る事がわかった。このうち、ＳＩ01・04とＳＫＩ03・02の４遺構については、確認状況や占地状況、遺構の方位から、同時存在の可能性が高いと考えられる。

本遺構群に伴う土器は、土師器甕、須恵器坏が主体で、それらに、坏に比べて底部から口縁部の立ち上がりが急で、器高の高い須恵器高台付坏が混じる。ＳＩ04・12竪穴住居跡のカマドや埋土出土の須恵器坏は、秋田市の古城廻３号窯跡や大沢Ｉ遺跡２号窯跡出土土器などに比定される土器で、年代は９世紀第２四半期と考えられている。

ＳＩ04竪穴住居跡の須恵器水瓶は、灰釉陶器の愛知県猿投窯編年の「折戸－10窯式」の水瓶に器形が類似している。山形県富山２遺跡では該期の原始灰釉陶器水瓶が出土しており、その年代は８世紀第４四半期から西暦800年前後ととらえられている。また、ＳＩ12竪穴住居跡カマドやＳＫ43土坑出土の、外底面が張り出し、底部に木葉痕が認められる土師器甕の初現は、秋田城跡では８世紀第３四半期から第４四半期とされているように、古い様相を呈しており、それはＳＲ29土器埋設遺構に埋設されていた非ロクロの土師器甕からも看取される。

以上のことから、今回出土した古代土器の年代は、古い様相を加味して、８世紀末から９世紀前半ととらえておくことにする。

前述のように第１次調査と第２次調査の２回にわたる調査で、縄文時代中期後半～中期末・縄文時代末～弥生時代・８世紀第２四半期～第３四半期・８世紀末～９世紀前半に集落が形成されていた事がわかった。

また、第１次調査では８世紀第３四半期～第４四半期の炭焼窯跡が検出され、範囲確認調査では鉄滓が出土しており、須恵器窯跡や製鉄関連遺構の存在が推測される。今回の第２次調査では、土器焼成遺構の可能性のある土坑や粘土を採取した土坑も検出され、集落内で生産活動をしていたこともわかった。

大平遺跡は、地理的に秋田城に比較的近く、秋田城方面を良く望める高台にあり、墨書土器も出土していることから、古代においては秋田城と係わっていた工人集団が居住していた集落であった可能性が高いと思われる。

参考文献

１．秋田県教育委員会 『秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－大平遺跡－』秋田県文化財調査報告書264集 1996(平成８年)

２．秋田市教育委員会 『宅地造成計画に伴う緊急発掘調査報告書－秋田市諏訪ノ沢遺跡－』 1993(平成５年)

３．秋田市史編さん室 『秋田市史叢書１ 古城廻窯跡発掘調査報告』1997年(平成９年)

４．伊藤武士「秋田城跡周辺須恵器窯の動向について」 『秋田考古学 第46号』秋田考古学協会 1998(平成10年)

５．日本考古学協会 1997年度秋田大会実行委員会 『蝦夷・律令国家・日本海 －シンポジウムⅡ・資料集－』 1997(平成９年)

６．山形県埋蔵文化財センター『富山２遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第41集 1996(平成８年)

1　調査区遠景（北→）

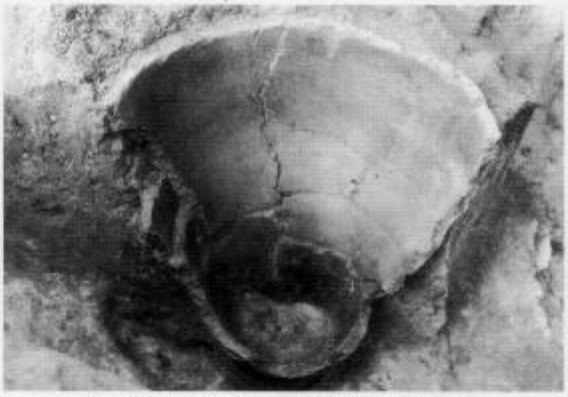
2　調査区遠景（南→）

1　調査区南側全景（南東→）

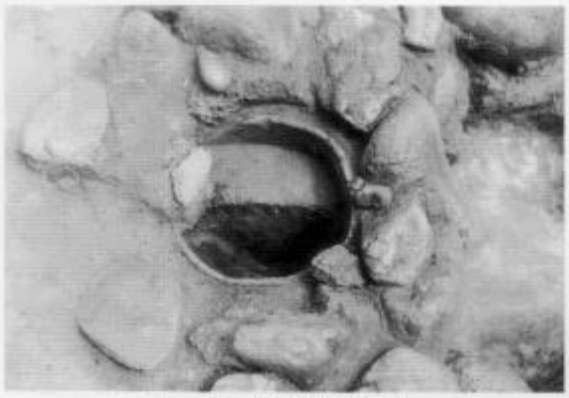
2　作業風景－調査区南側－（北西→）

1　ＳＩ18完掘（北→）

2　ＳＩ18炉確認（南→）

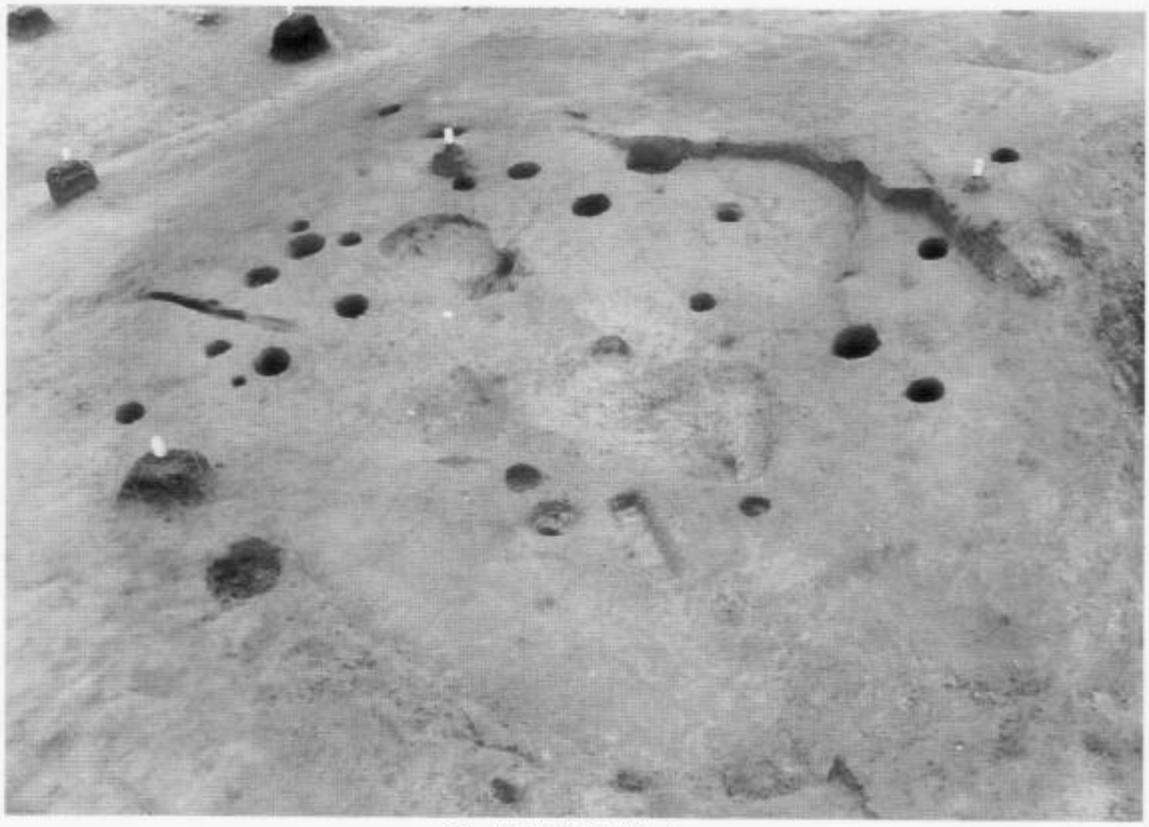


3　ＳＩ18炉の土器埋設状況（南西→）



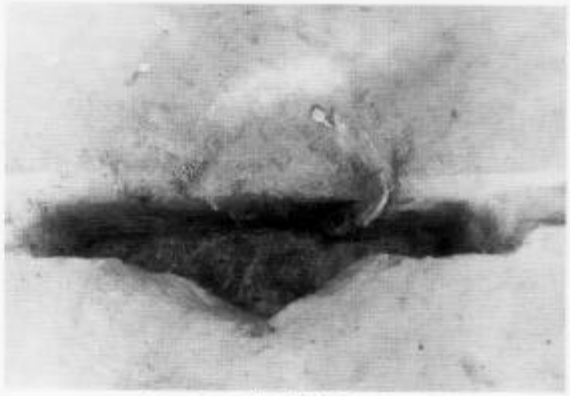
4　ＳＩ18炉断面（南→）

5　ＳＩ18出土土器（南→）

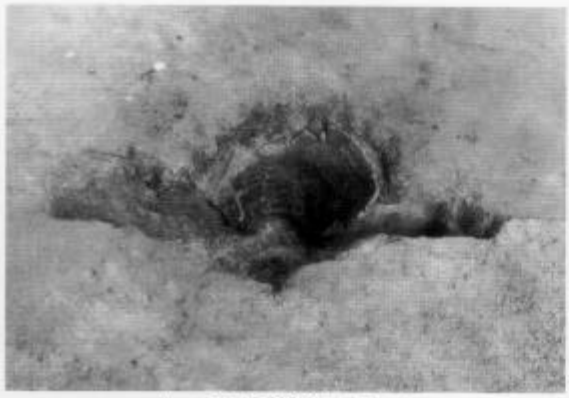


1　ＳＩ18完掘（北→）

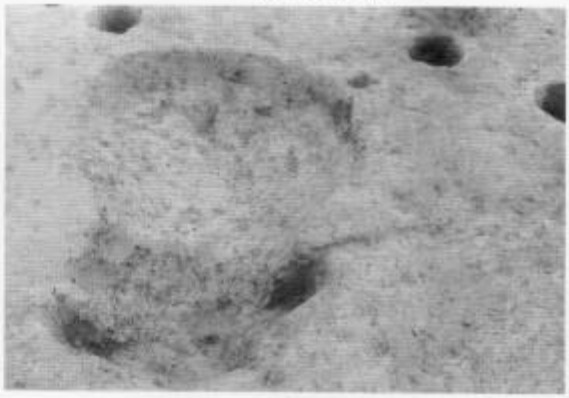
2　ＳＩ18焼土半截途中（東→）



3　ＳＩ18焼土断面（西→）

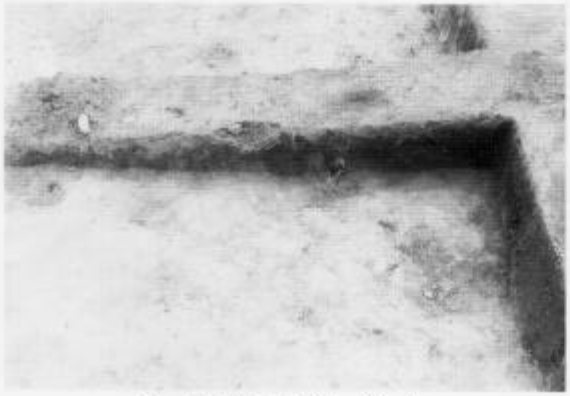


4　ＳＩ18炉断面（西→）

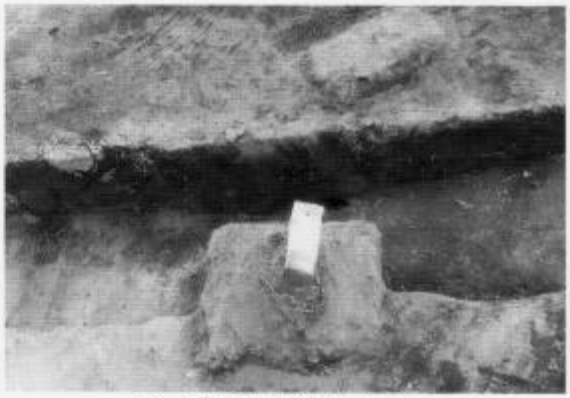


5　ＳＩ18炉完掘（西→）

1　ＳＩ21完掘（南→）

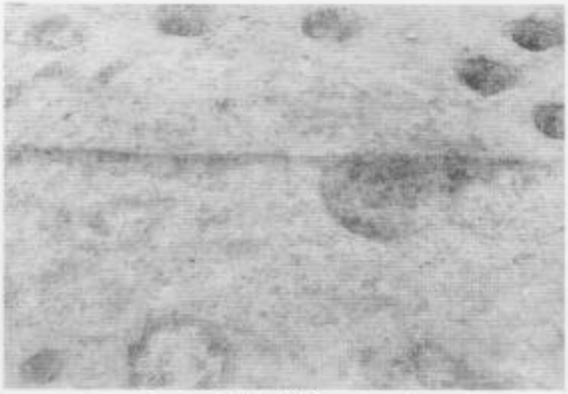


2　ＳＩ21土層断面（東→）

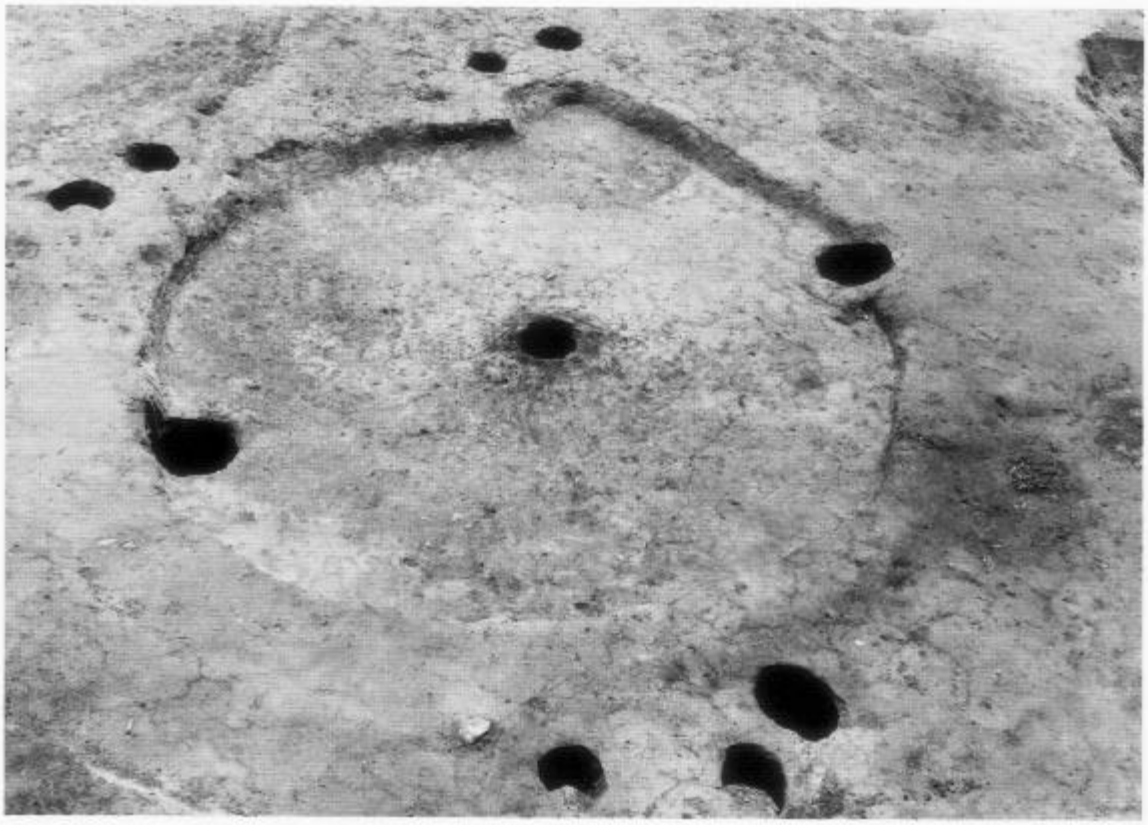


3　ＳＩ21土層断面（東→）

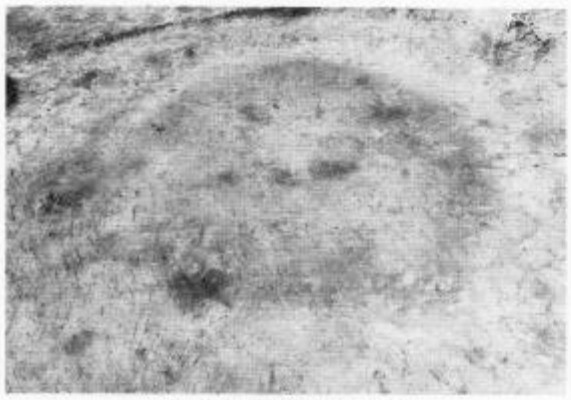
4　ＳＩ21焼土確認（南東→）



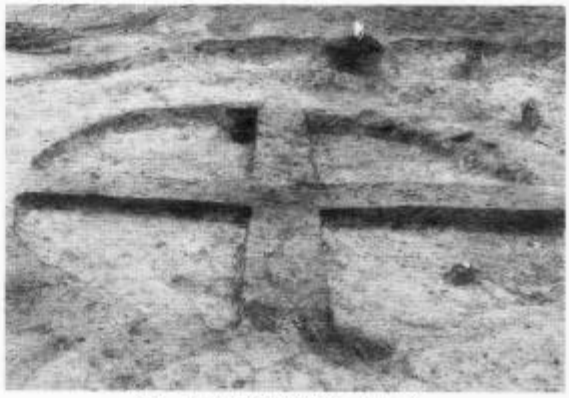
5　ＳＩ21焼土断面（東→）



1　ＳＩ27完掘（北→）



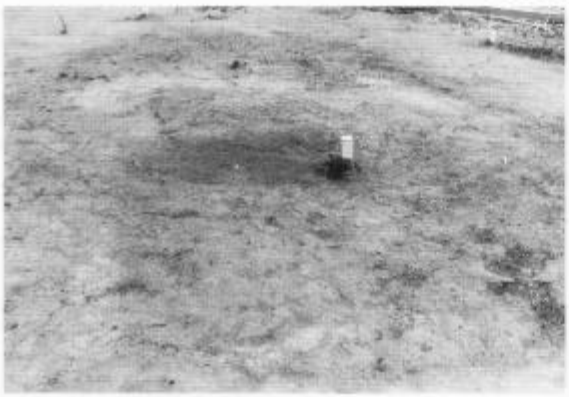
2　ＳＩ27確認（南→）



3　ＳＩ27東西断面（南→）

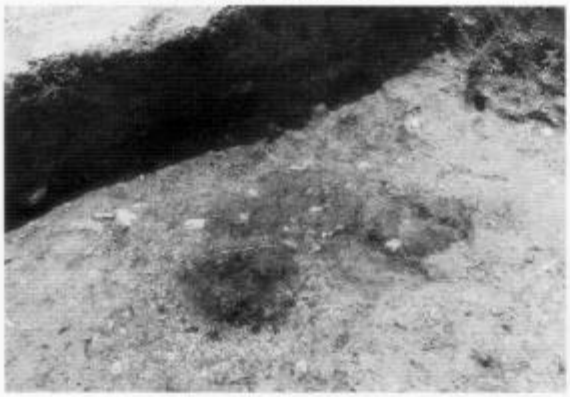
4　ＳＩ27炉（南→）

1　ＳＫＩ03完掘（西→）



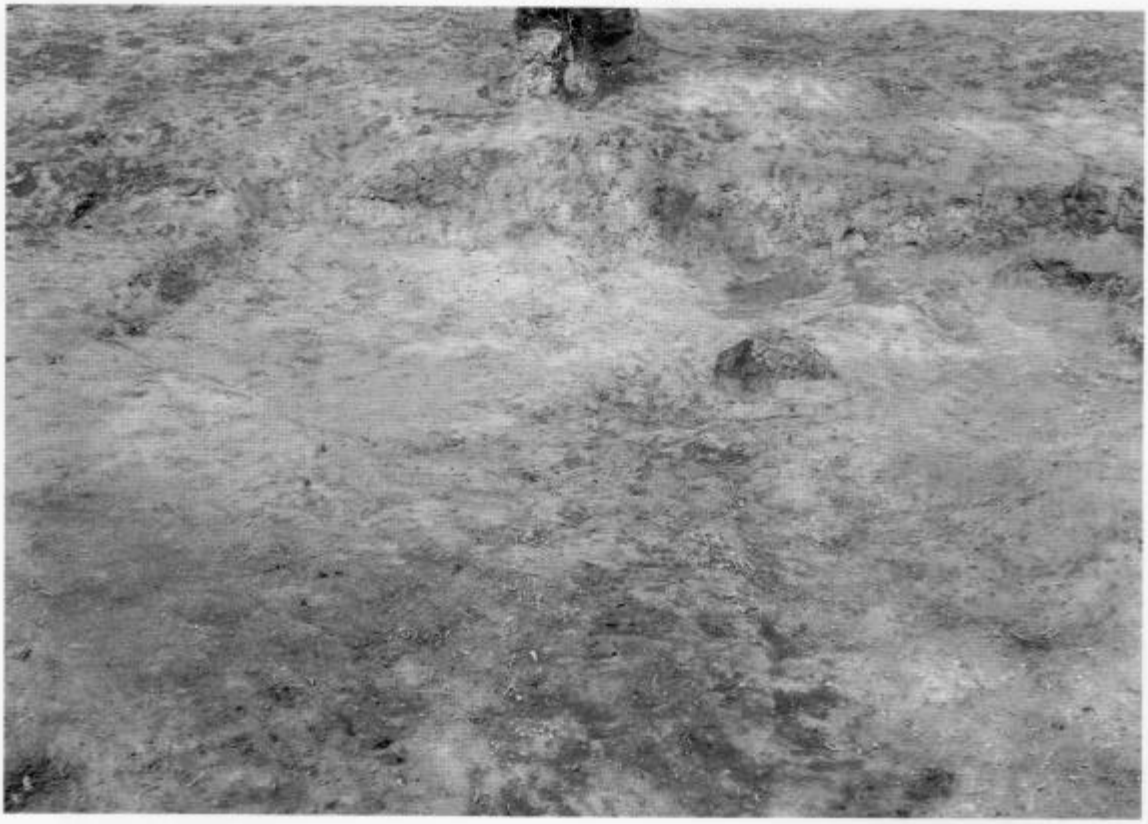
2　ＳＫＩ03確認（西→）

3　ＳＫＩ03土層断面（西→）



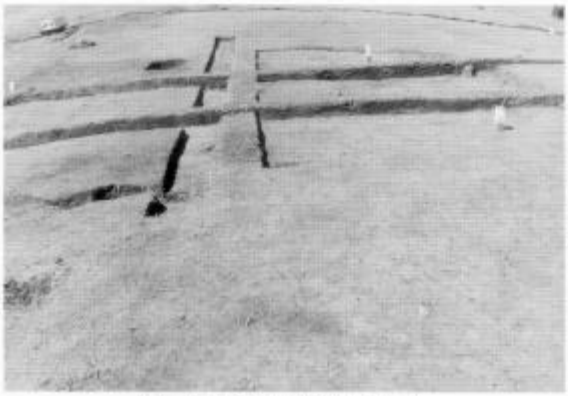
4　ＳＫＩ03床面焼土（北→）

1　ＳＫＩ02完掘（西→）

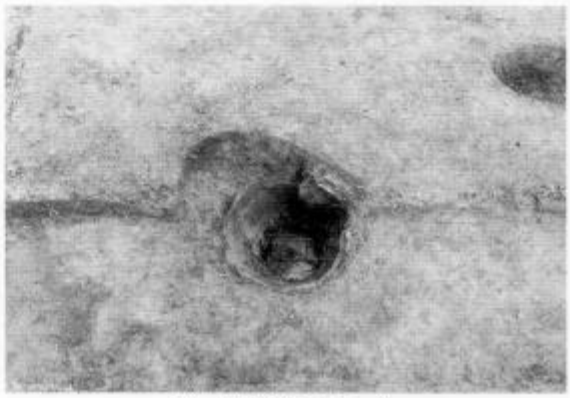


2　ＳＫＩ35完掘（南東→）

1　ＳＩ46完掘（東→）

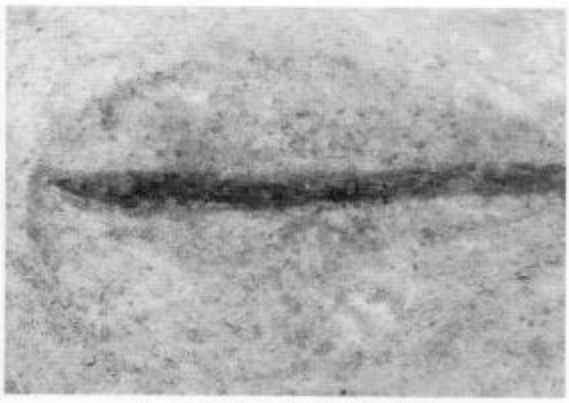


2　ＳＩ46土層断面（東→）

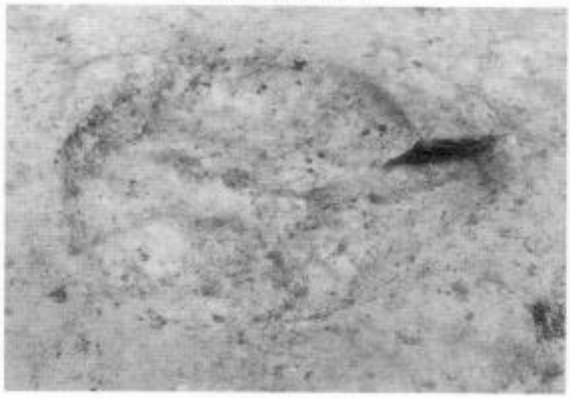


3　ＳＩ50炉（南→）

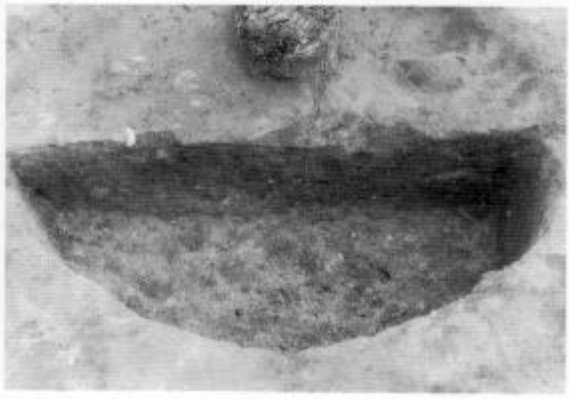
1　ＳＫ13完掘（南→）



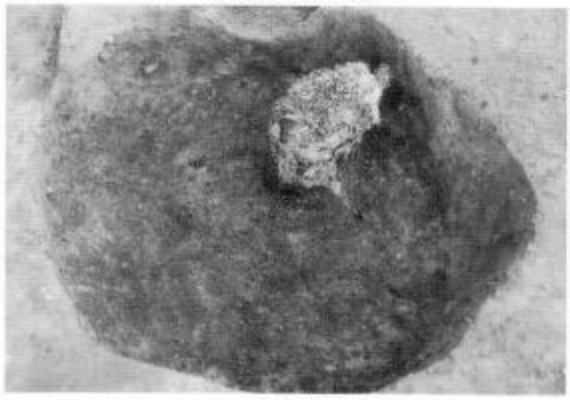
2　ＳＫ34土層断面（南東→）



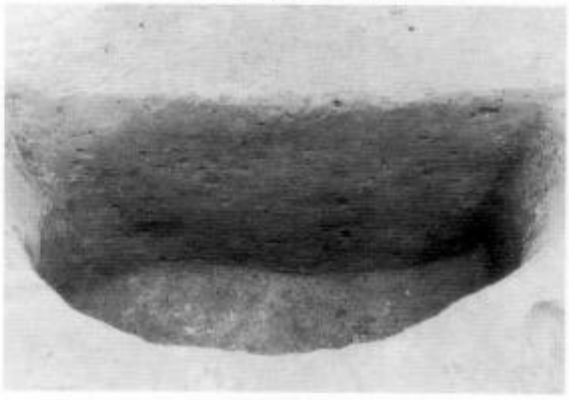
3　ＳＫ34完掘（南東→）



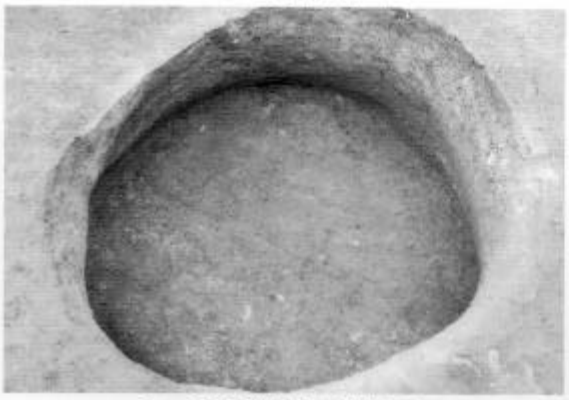
4　ＳＫ36土層断面（北→）



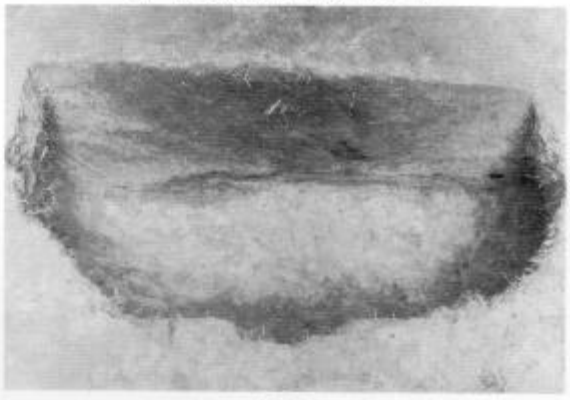
5　ＳＫ36完掘（北→）



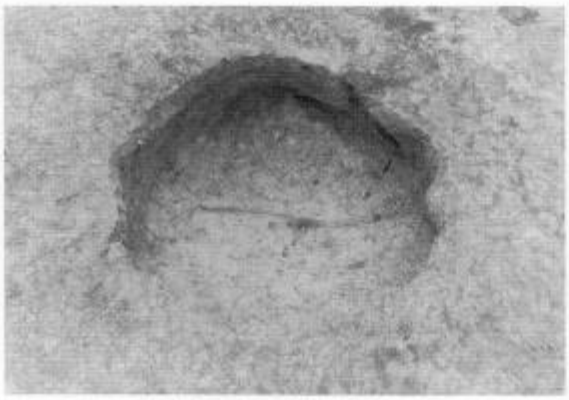
6　ＳＫＦ37土層断面（東→）



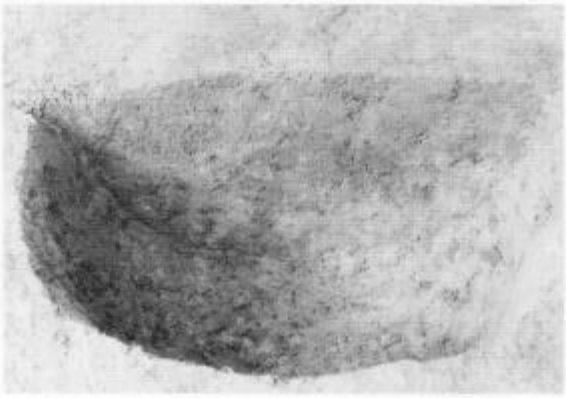
7　ＳＫＦ37完掘（南東→）



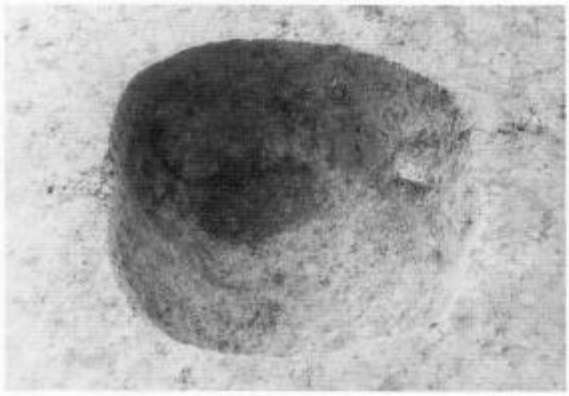
8　ＳＫ48土層断面（南→）



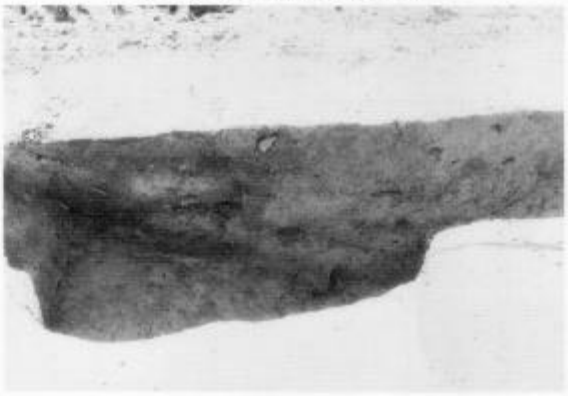
1　ＳＫ48完掘（南→）



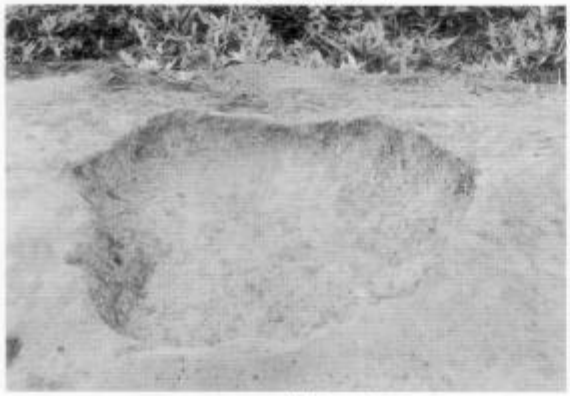
2　ＳＫ51土層断面（東→）



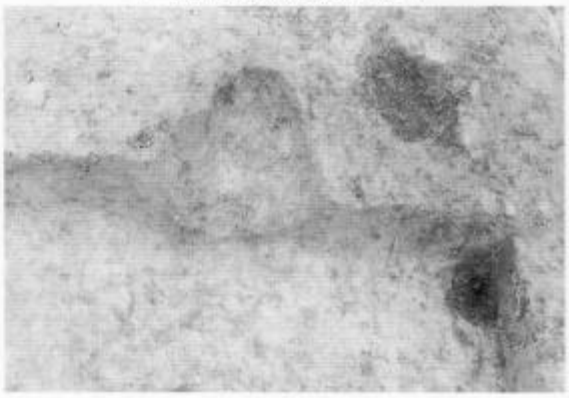
3　ＳＫ51完掘（東→）



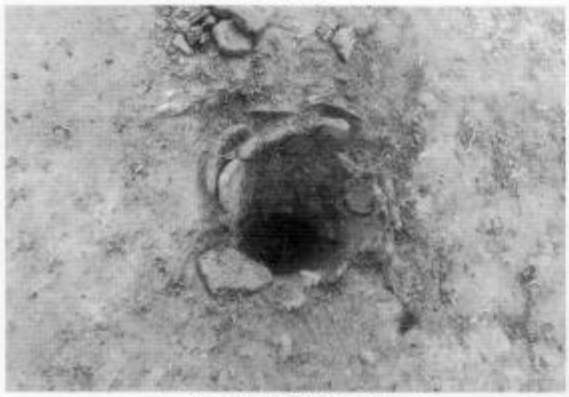
4　ＳＫＦ23土層断面（東→）



5　ＳＫＦ23完掘（東→）



6　ＳＲ49完掘（南→）

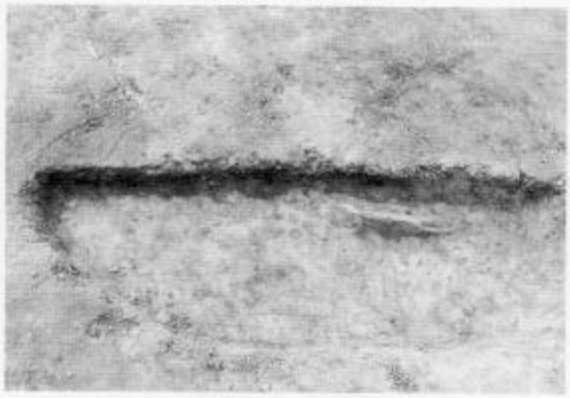


7　ＳＲ49土器検出（南→）

8　ＳＲ49土層断面（南→）

1　ＳＮ05土層断面（東→）

2　ＳＮ07堆積状況（東→）

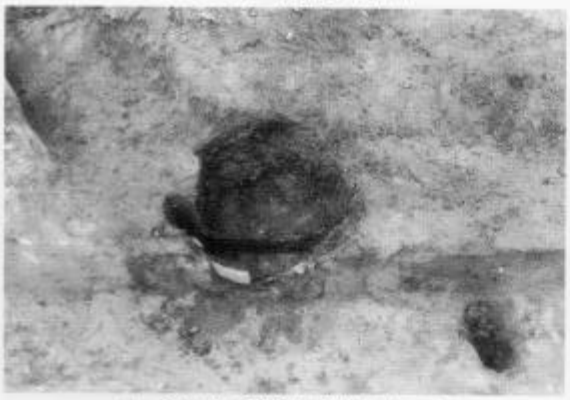


3　ＳＮ08土層断面（北→）

4　ＳＮ09堆積状況（北→）

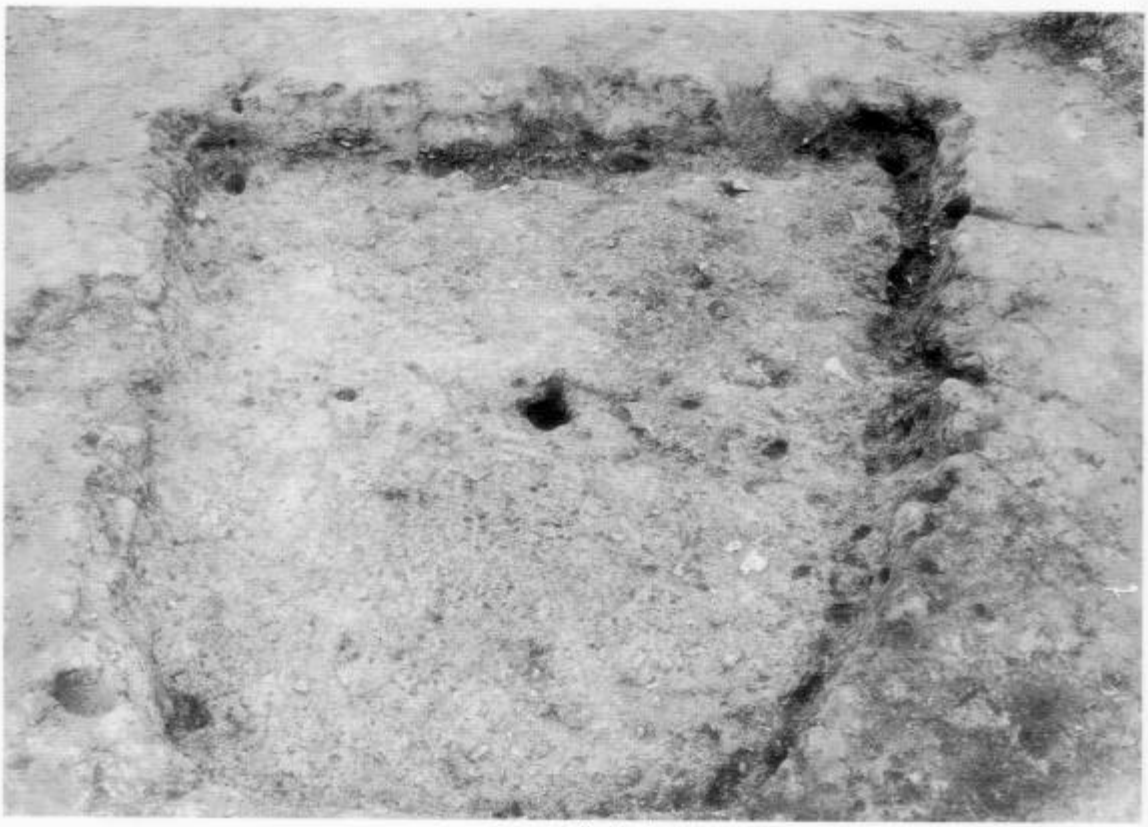
5　ＳＮ10土層断面（北→）

6　ＳＮ11土層断面（南西→）



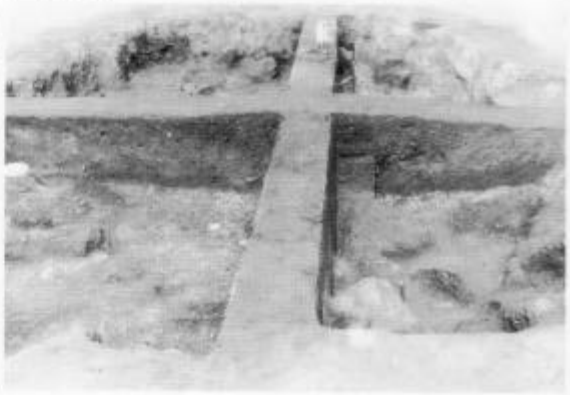
7　ＳＮ11土器出土状況（南→）

8　ＳＮ11完掘（南→）



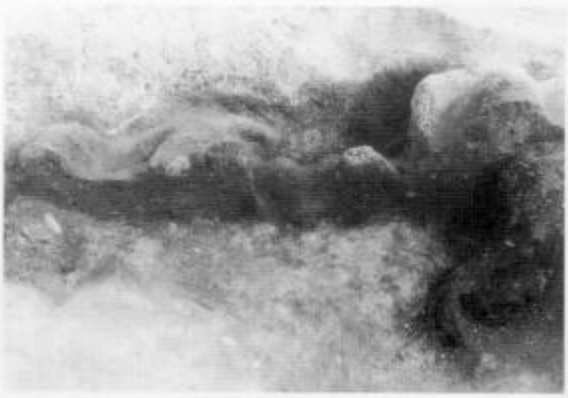
1　ＳＩ01完掘（北東→）

2　ＳＩ01確認（南西→）



3　ＳＩ01土層断面（西→）

4　ＳＩ01炭化材・焼土全景（北東→）



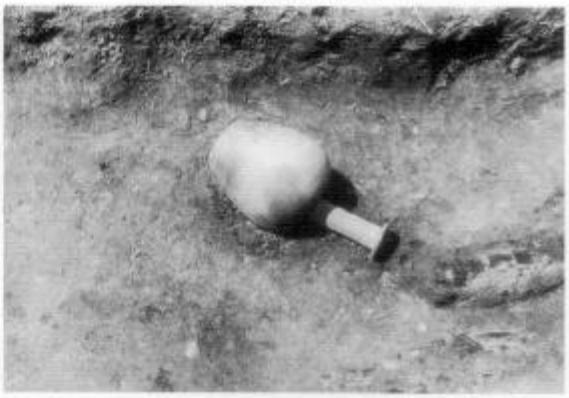
5　ＳＩ01炭化材・焼土（北→）

1　ＳＩ64完掘（北→）

2　ＳＩ04確認（南西→）

3　ＳＩ04完掘（南東→）

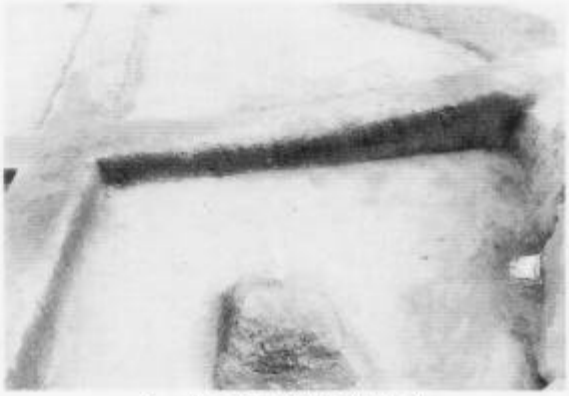
4　ＳＩ04炭化材・焼土検出状況（北東→）



5　ＳＩ04水瓶出土状況（東→）

1　ＳＩ12完掘（南→）

2　ＳＩ12確認（南→）

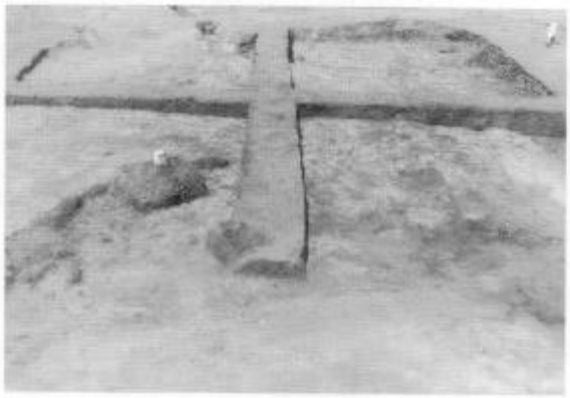


3　ＳＩ12土層断面（北→）

4　ＳＩ12カマド土器出土状況（南西→）

5　ＳＩ12カマド完掘（西→）

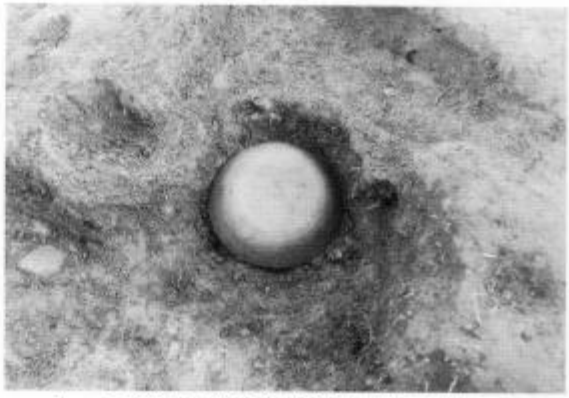
1　ＳＩ20完掘（北西→）



2　ＳＩ20土層断面（南東→）

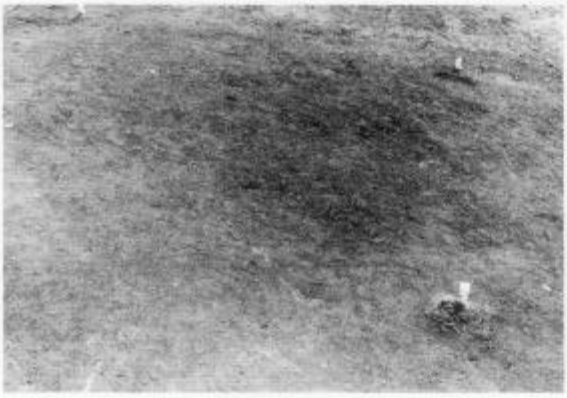
3　ＳＩ20土層断面（北→）

4　ＳＩ20カマド内土器出土状況（南→）

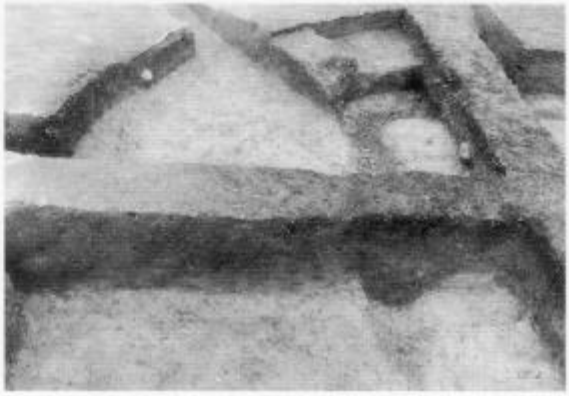


5　ＳＩ20カマド内須恵器出土状況（南東→）

1　ＳＩ25完掘（真上）



2　ＳＩ25確認（西→）



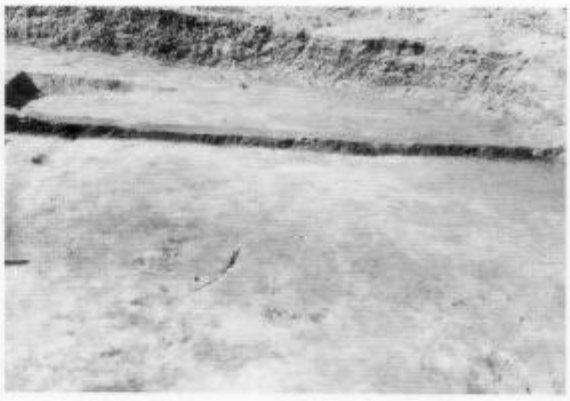
3　ＳＩ25土層断面（南西→）

4　ＳＩ25カマド完掘

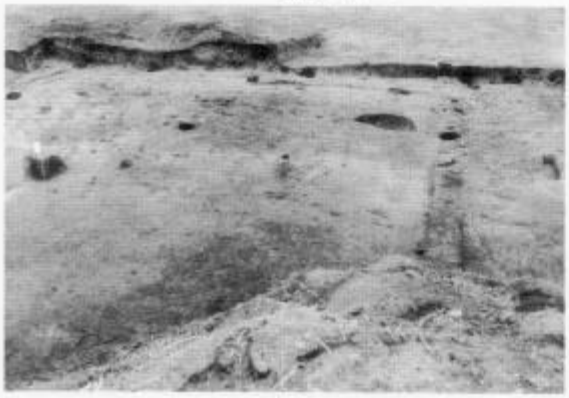
5　ＳＩ25焼土（南→）

1　ＳＩ44完掘

2　ＳＩ44確認（西→）

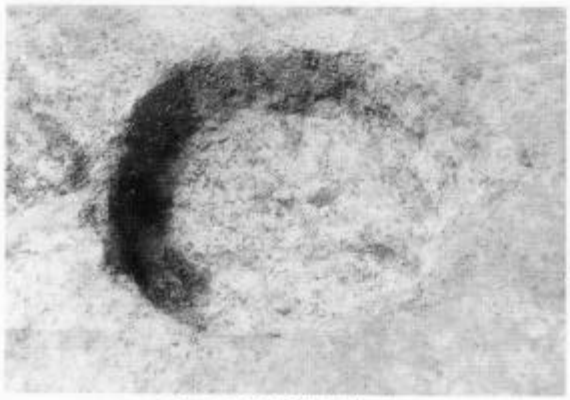


3　ＳＩ44土層断面（南→）

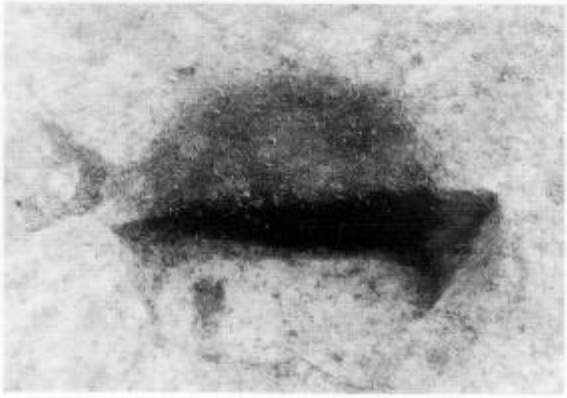


4　ＳＩ44完掘（東→）

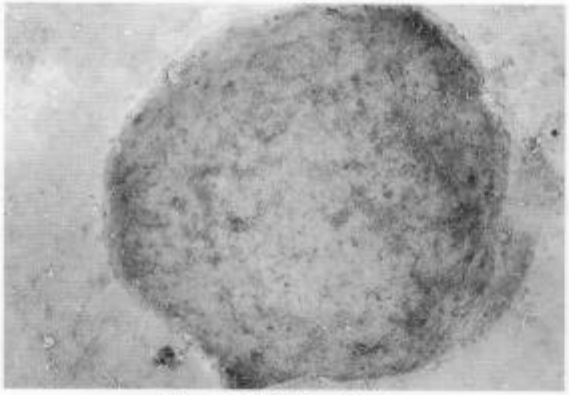
5　ＳＩ44完掘（北→）



1　ＳＫ17完掘（北→）

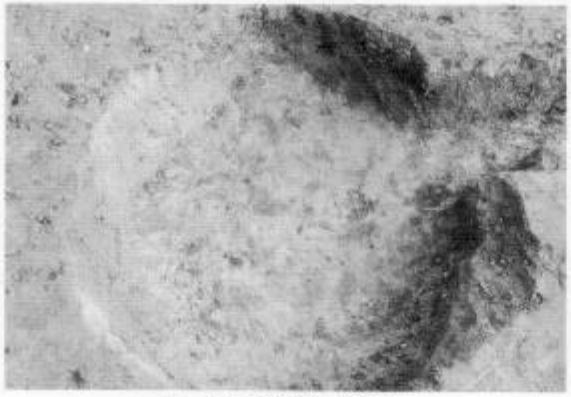


2　ＳＫ17半截（北→）

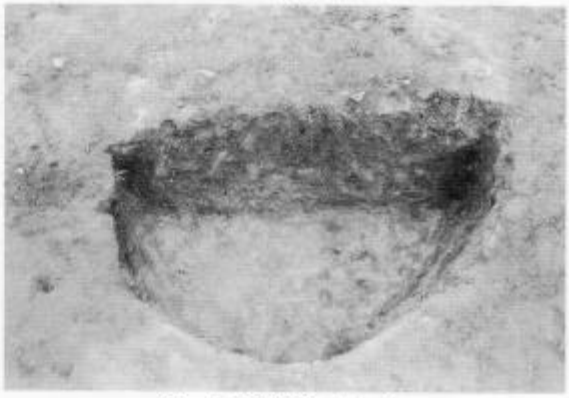


3　ＳＫ19完掘（南→）

4　ＳＫ33完掘（西→）

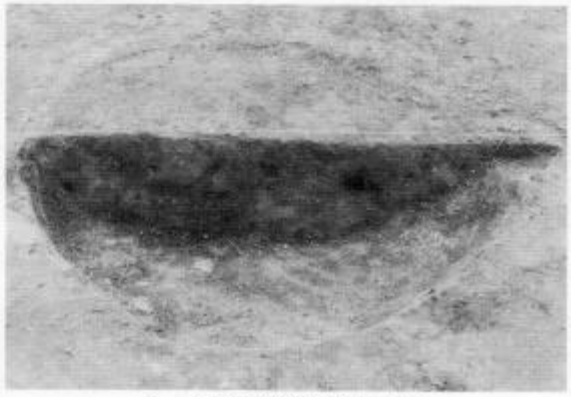


5　ＳＫ24完掘（北→）

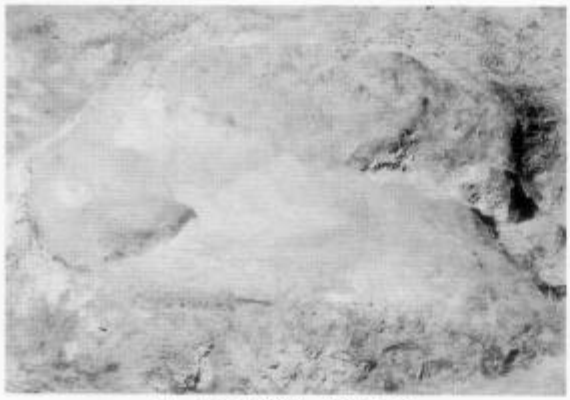


6　ＳＫ24半截（南→）

7　ＳＫ38完掘（北→）

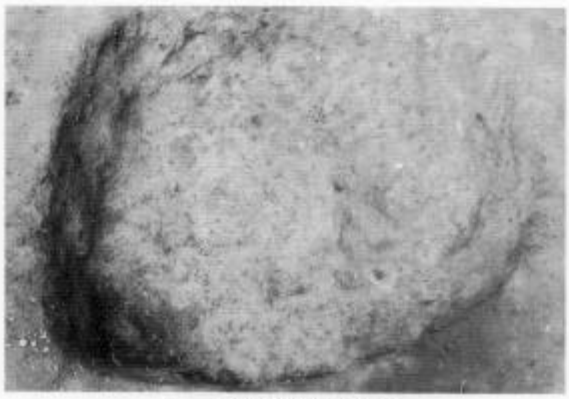


8　ＳＫ38土層断面（北→）



1　ＳＫ39完掘（北西→）

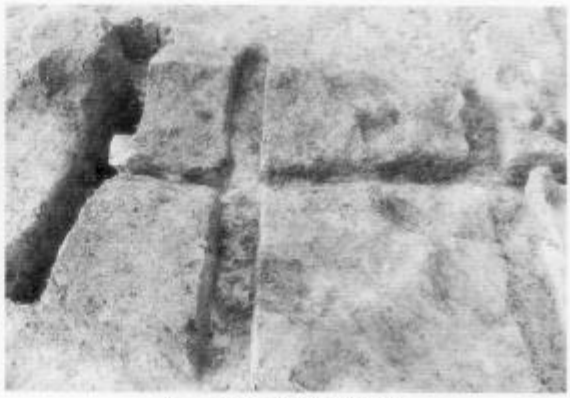
2　ＳＫ39完掘（北西→）



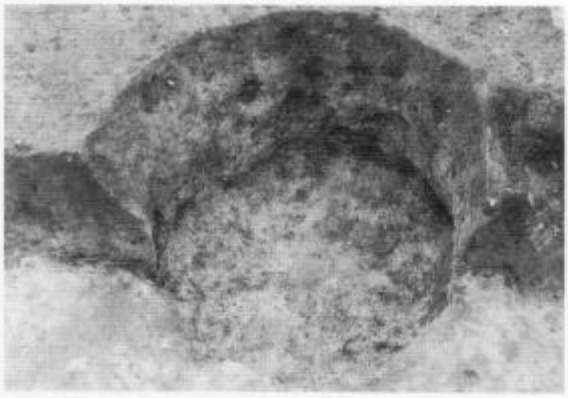
3　ＳＫ41完掘（東→）

4　ＳＫ41炭確認（南→）

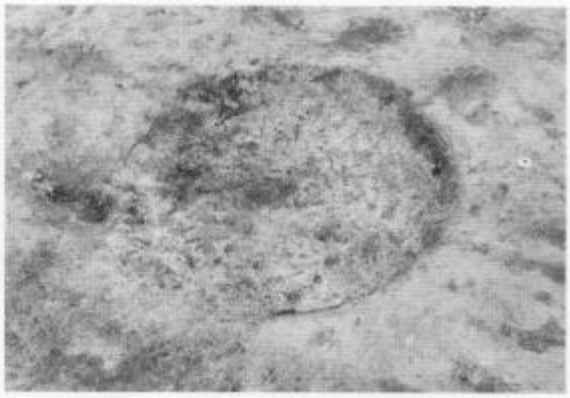
5　ＳＫ40完掘（北→）



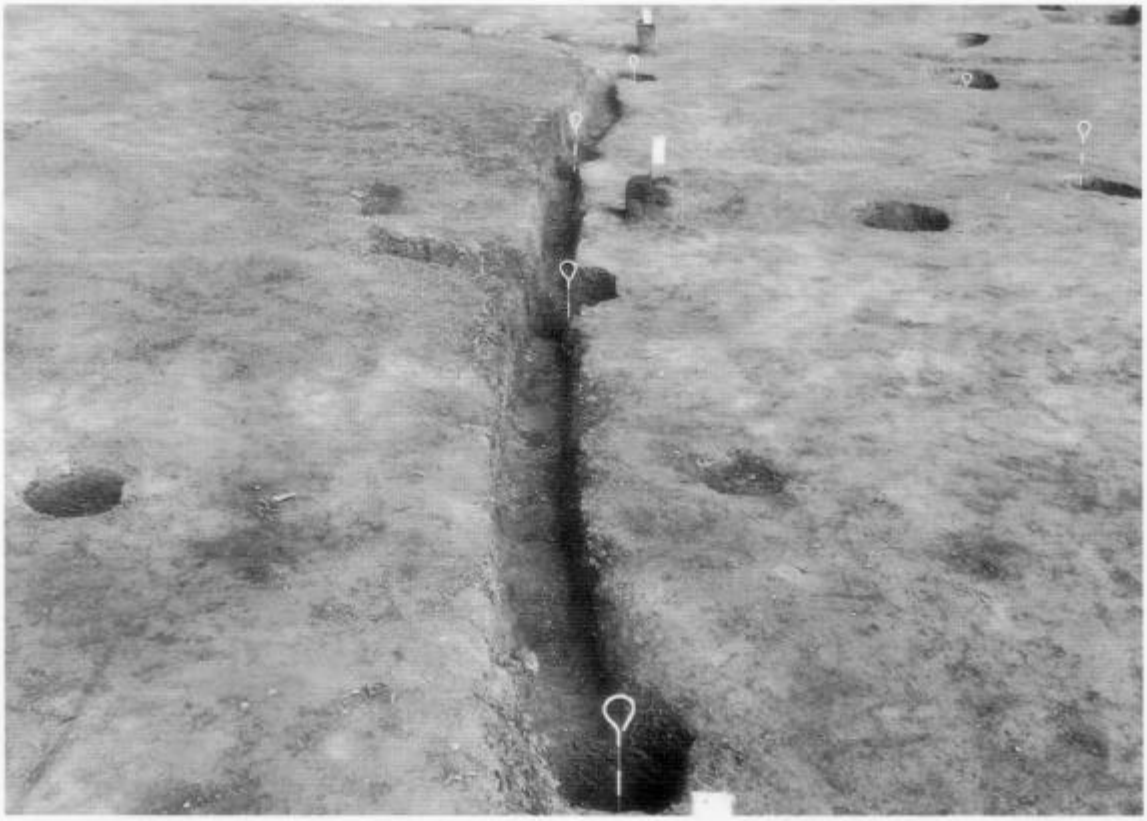
6　ＳＫ43完掘（南→）



7　ＳＫ45完掘（東→）



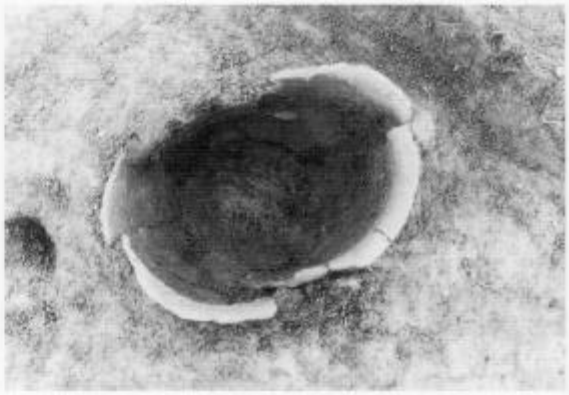
8　ＳＫ47完掘（南→）



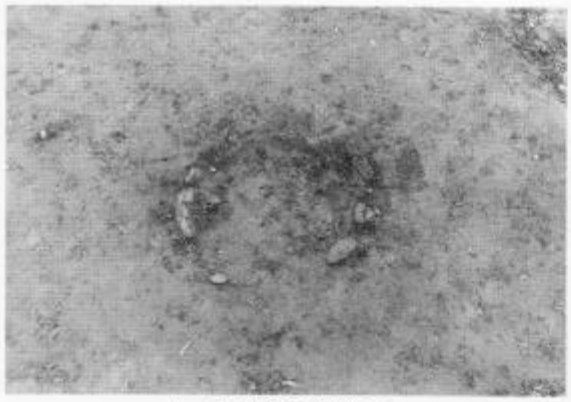
1　ＳＢ30柱穴と溝（西）

2　ＳＤ30土層断面（東→）

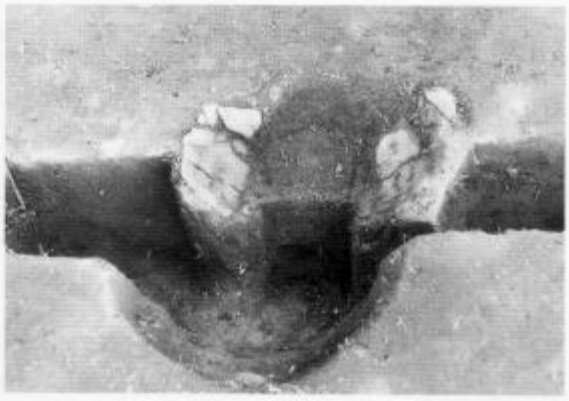
3　ＳＲ29埋設土器（北→）



4　ＳＲ29土器埋設完掘（真上）

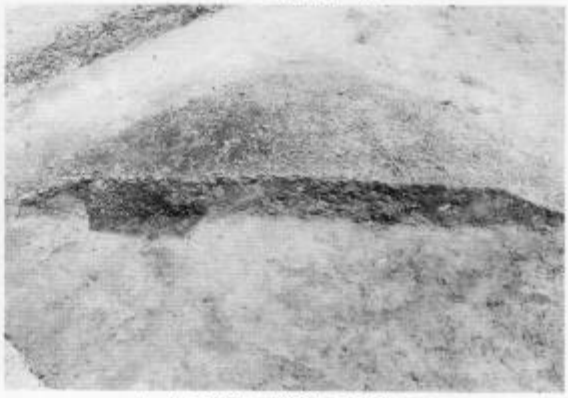


1　ＳＲ32確認（西→）



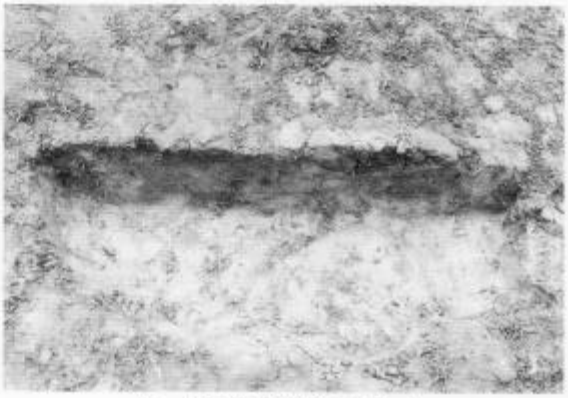
2　ＳＲ32土層断面（西→）

3　ＳＮ28内ピット（東真上）



4　ＳＮ28土層断面（南東→）

5　ＳＮ42確認（南東→）

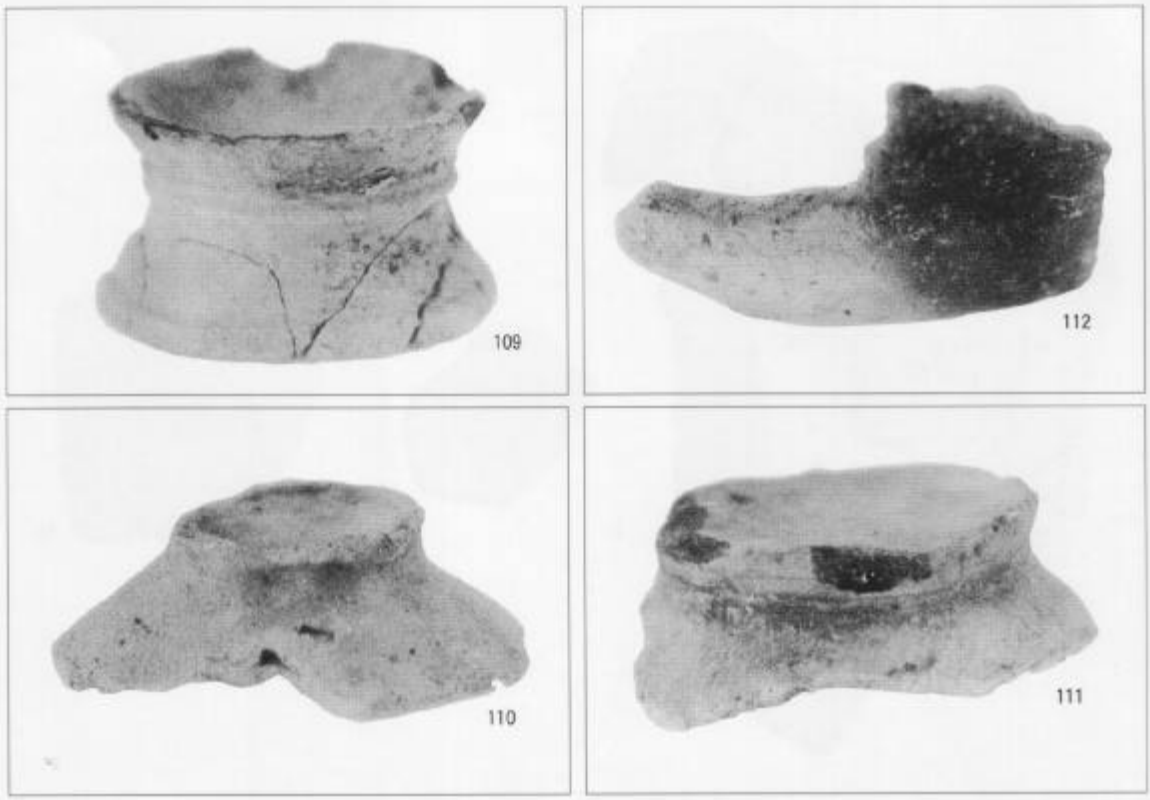


6　ＳＮ42土層断面（北→）

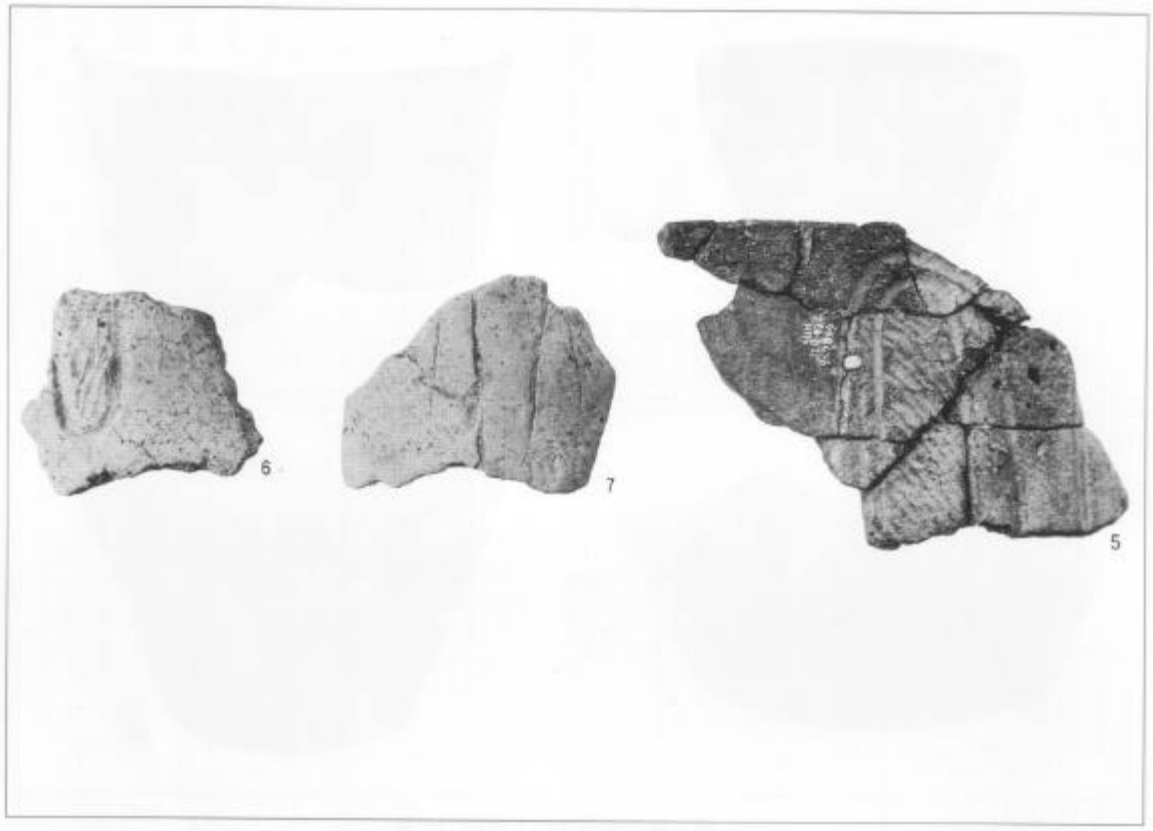
7　北東斜面の沢 土層断面（北→）

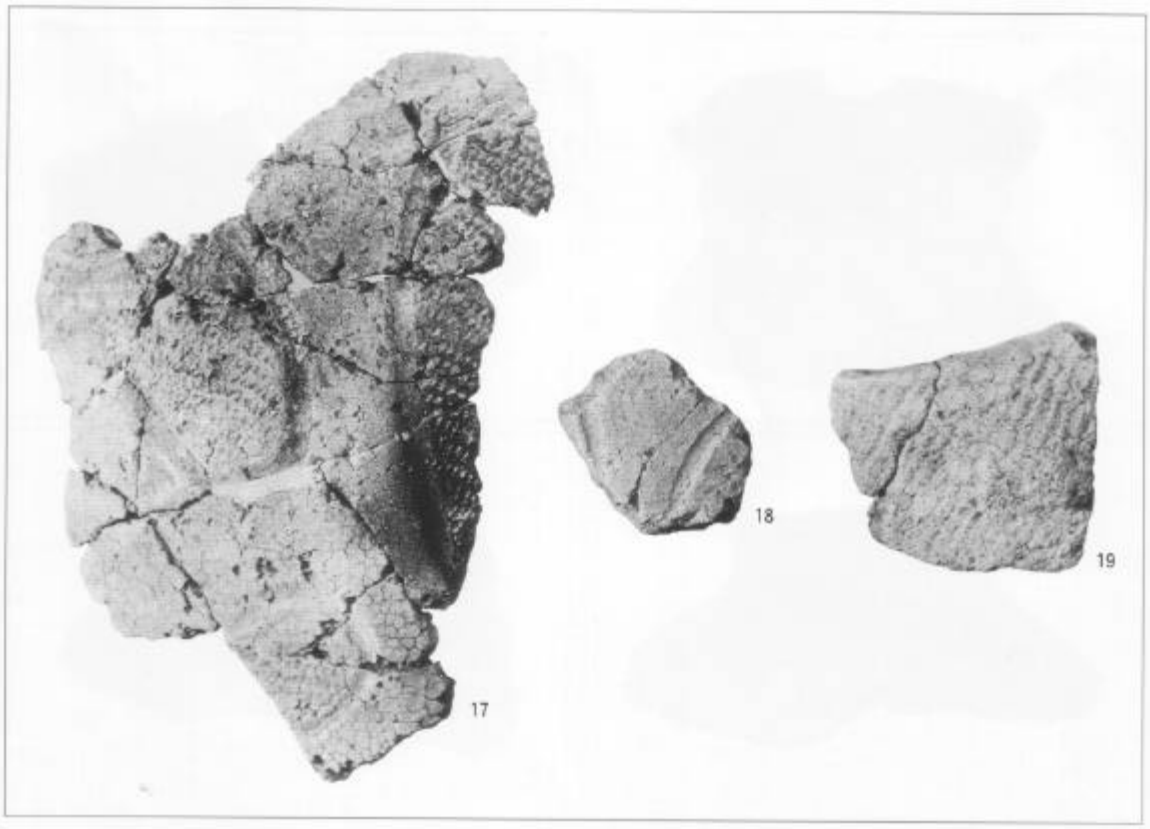
8　南斜面の沢 須恵器出土状況（北東→）

1　縄文時代遺構内出土遺物(1)土器

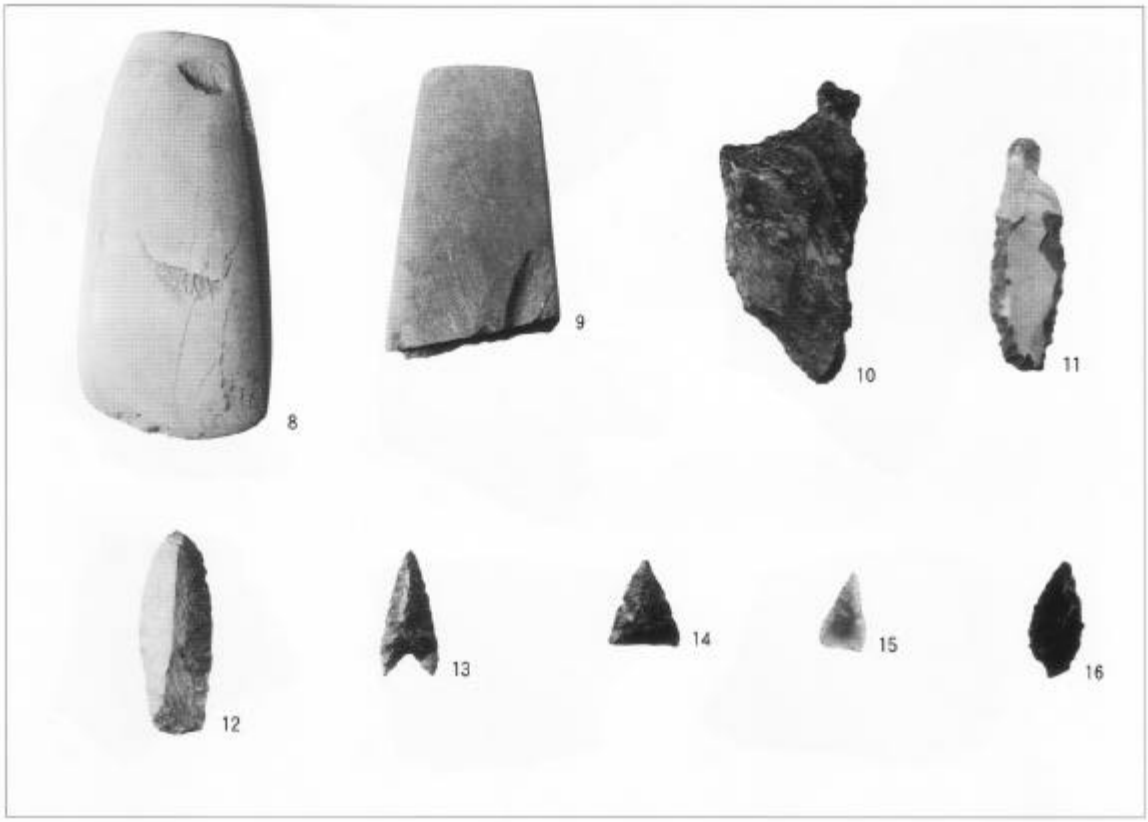


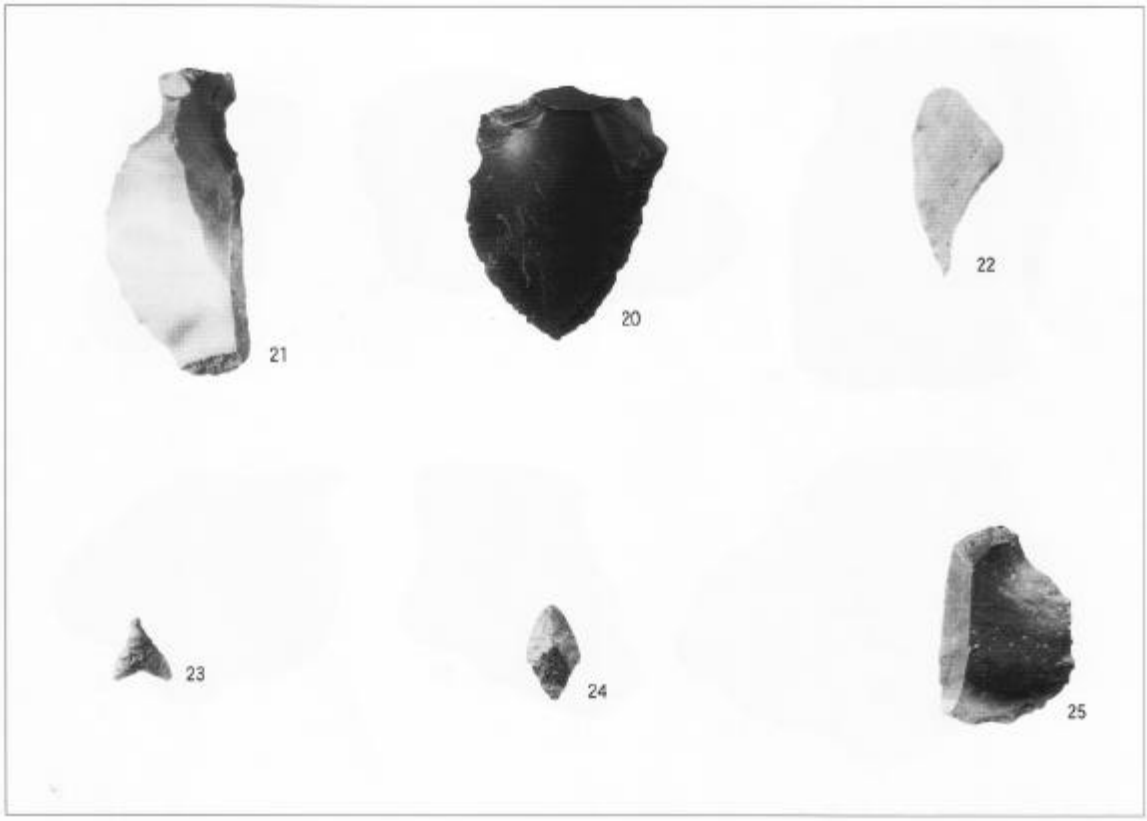
2　縄文時代晩期末～弥生時代遺構外出土遺物　土器



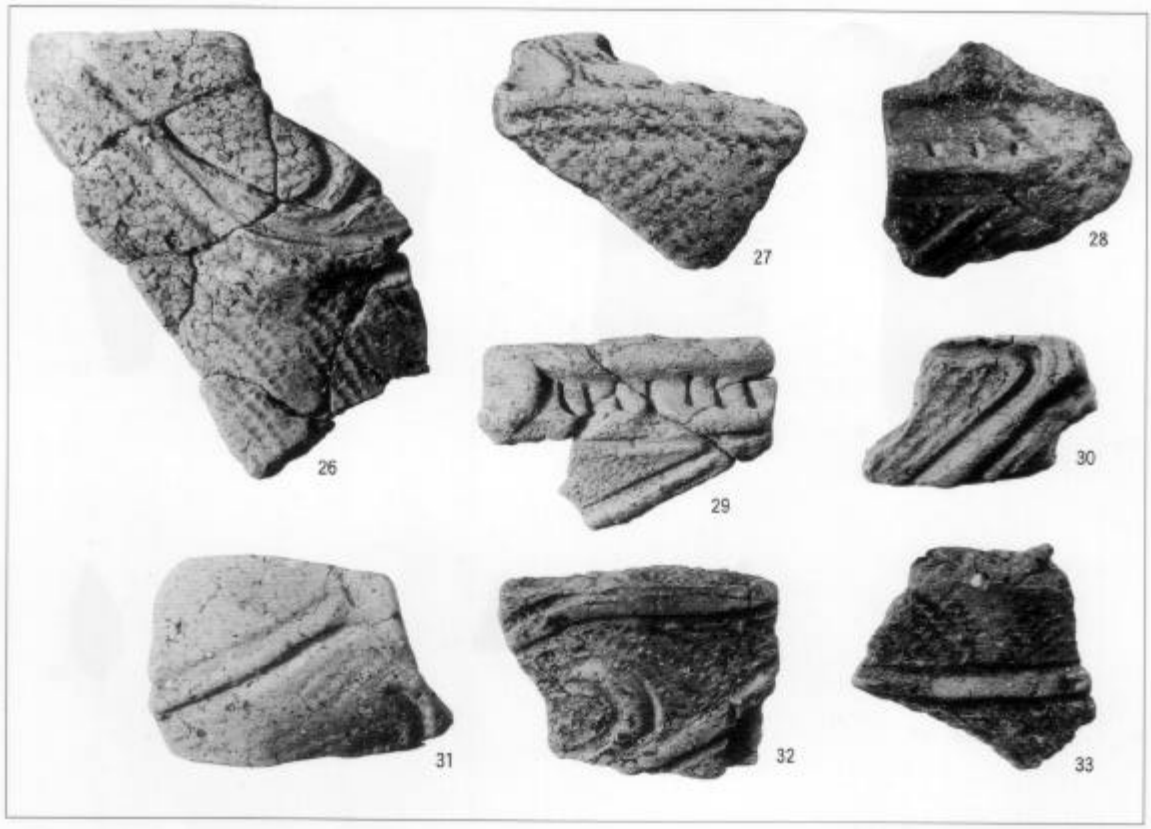


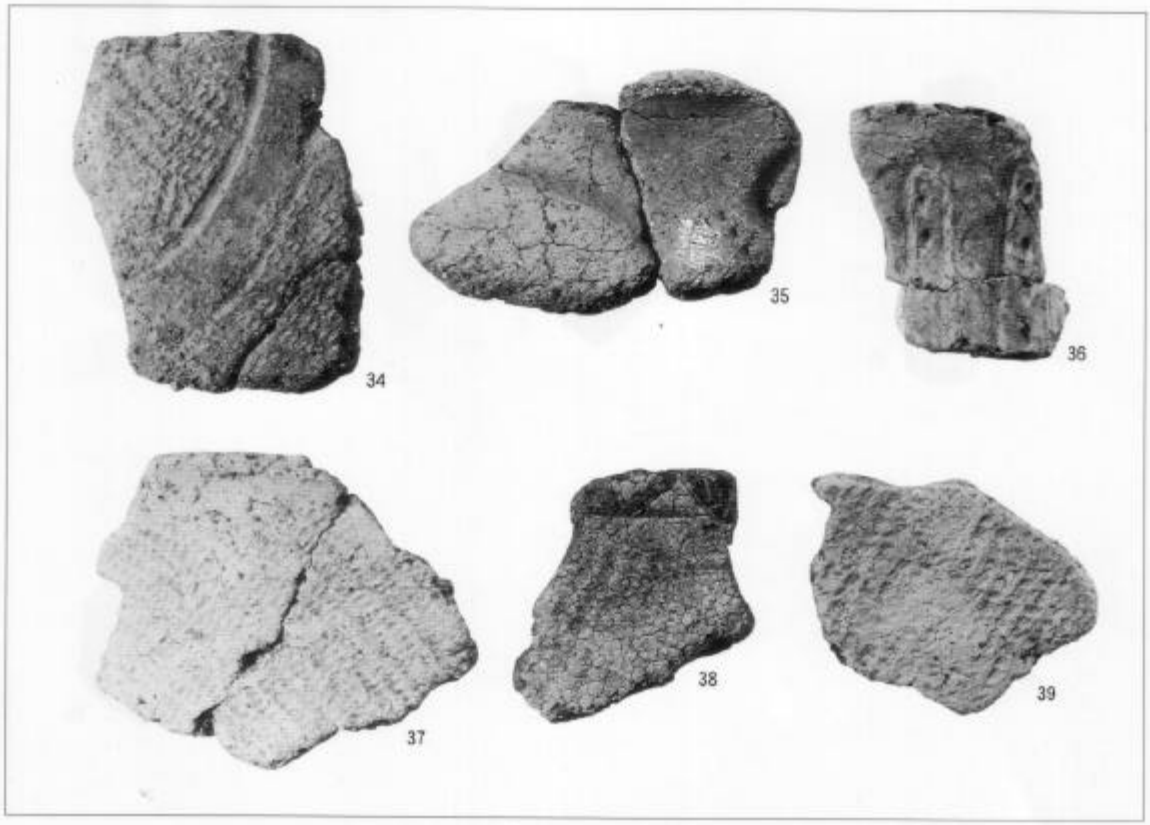
縄文時代遺構内出土遺物(2)土器



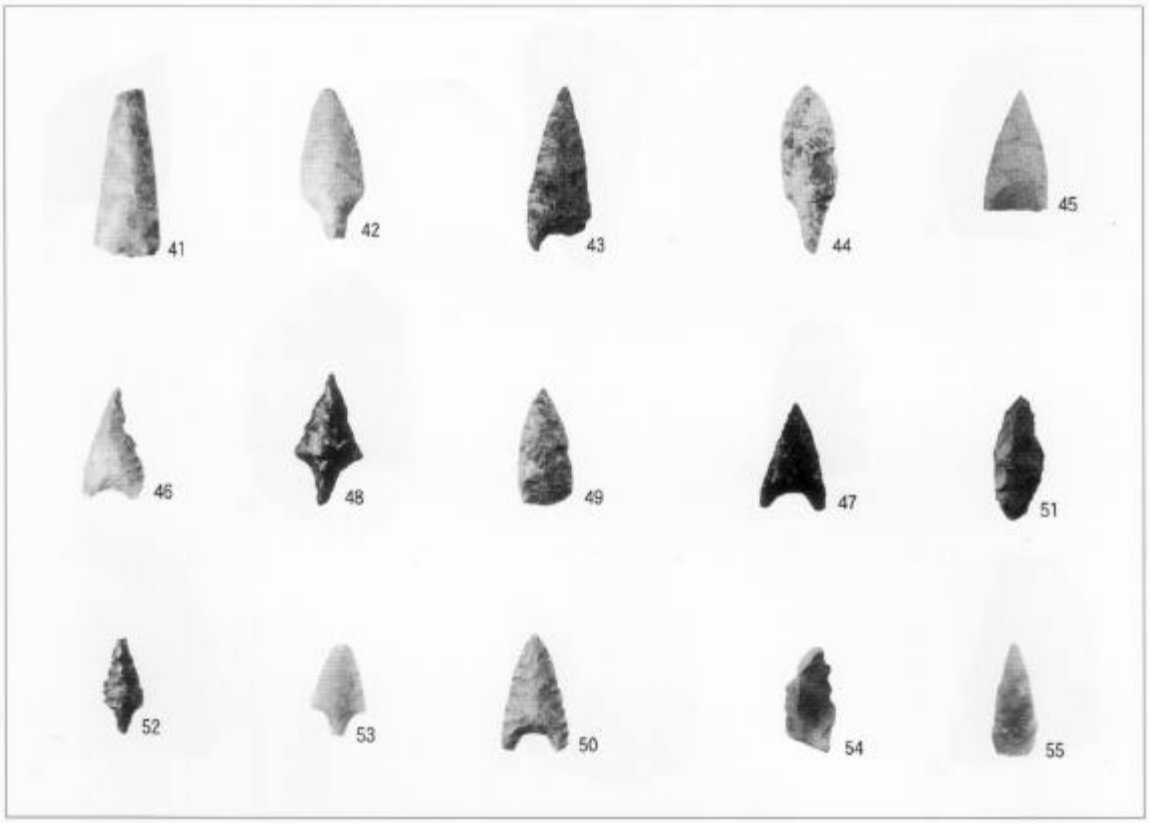


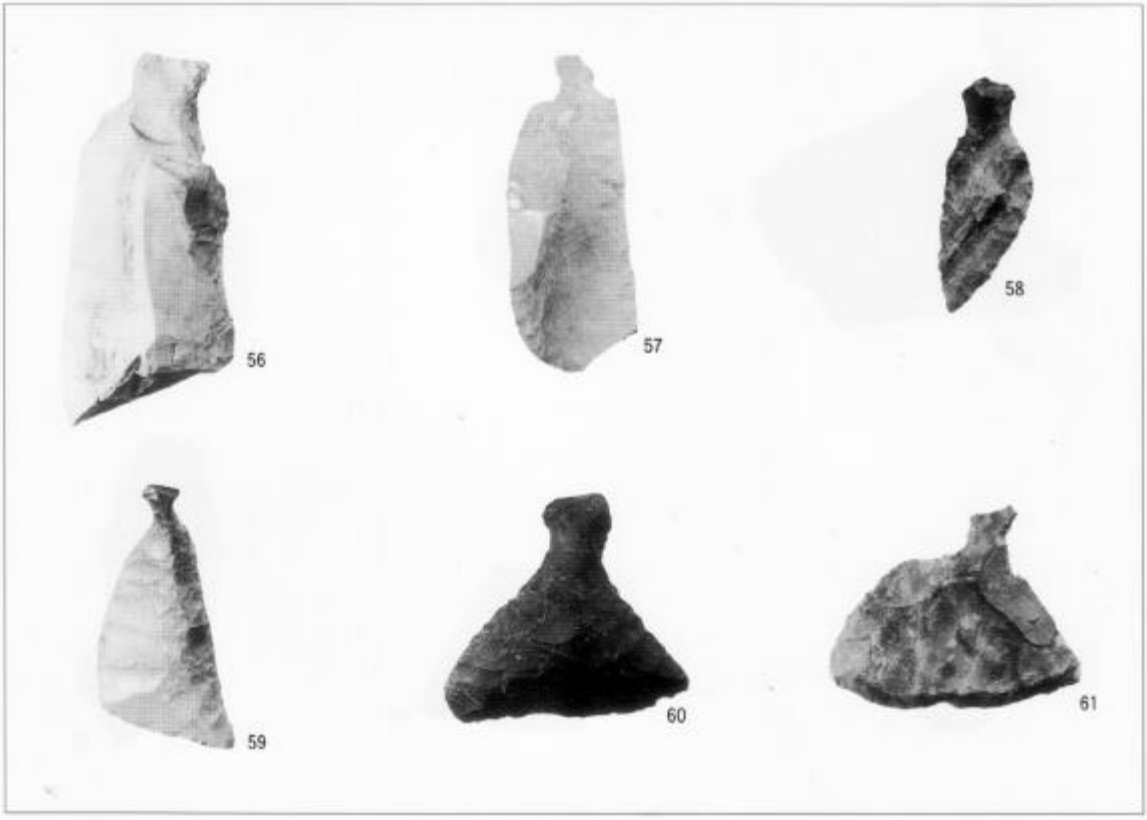
縄文時代遺構内出土遺物(3)石器



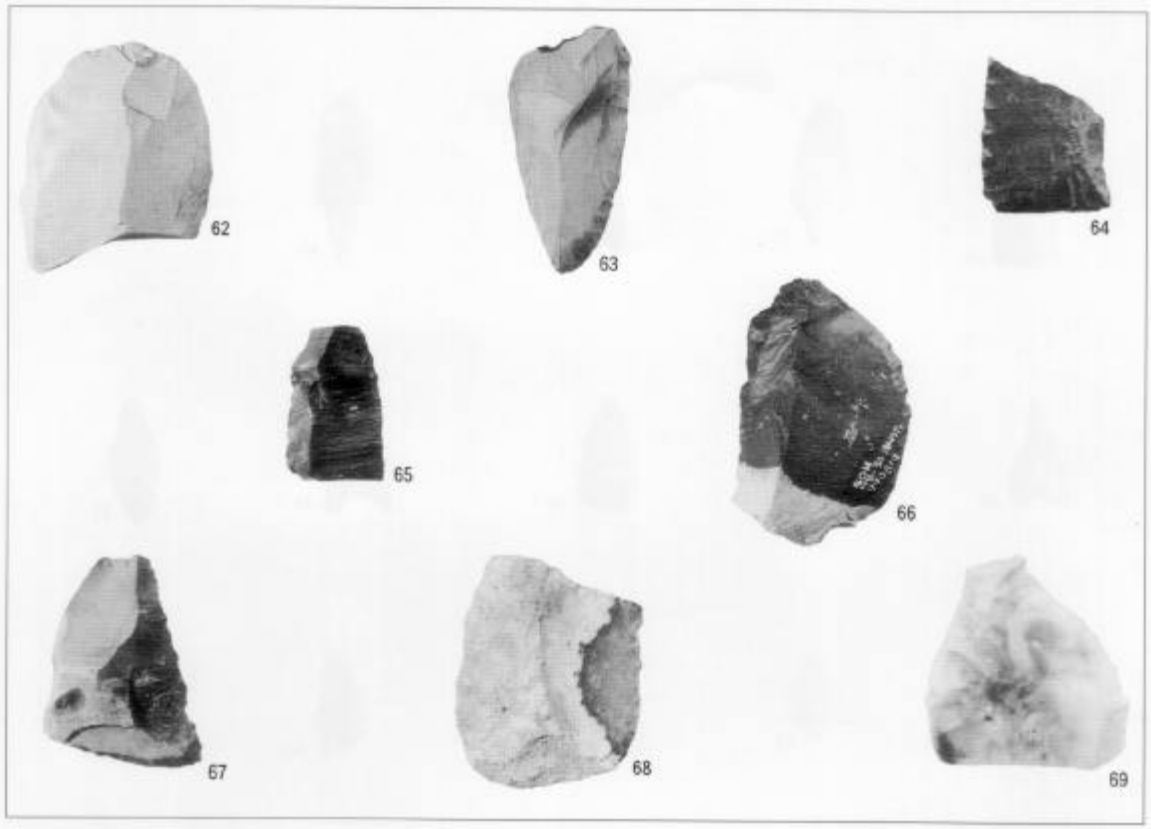


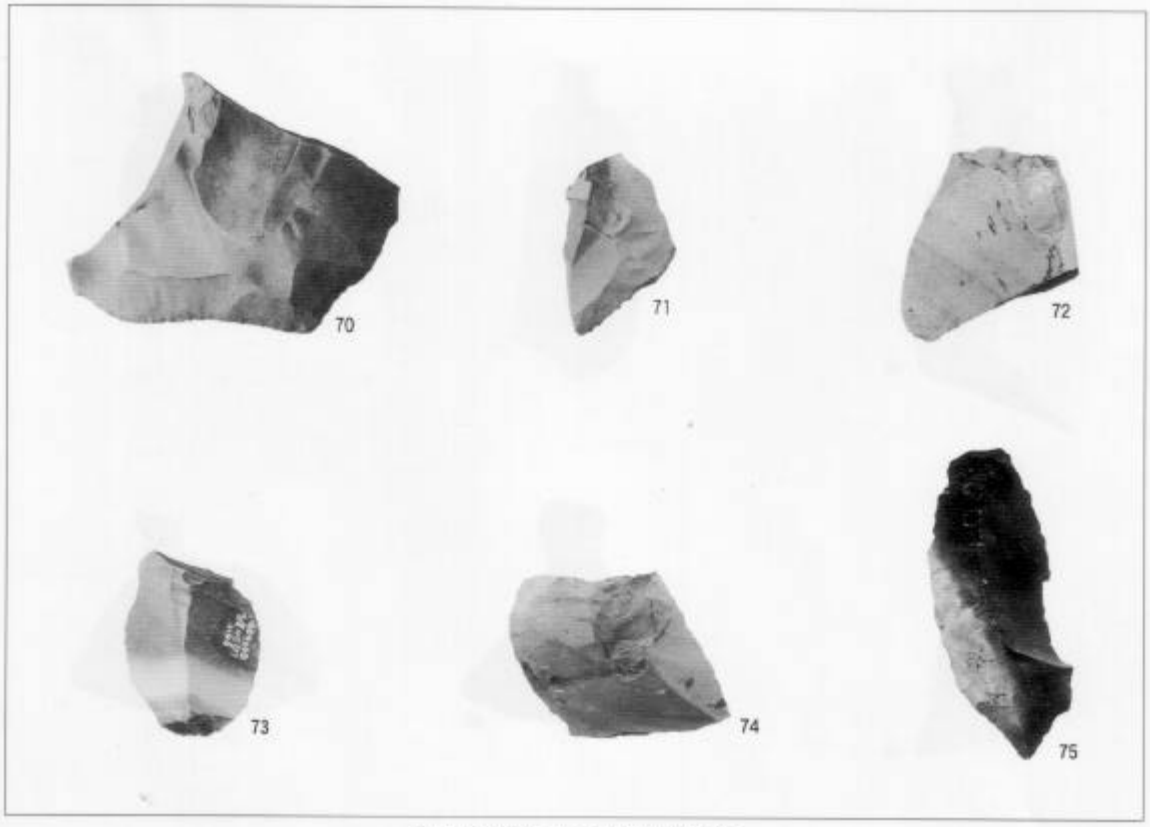
縄文時代遺構外出土遺物(1)土器



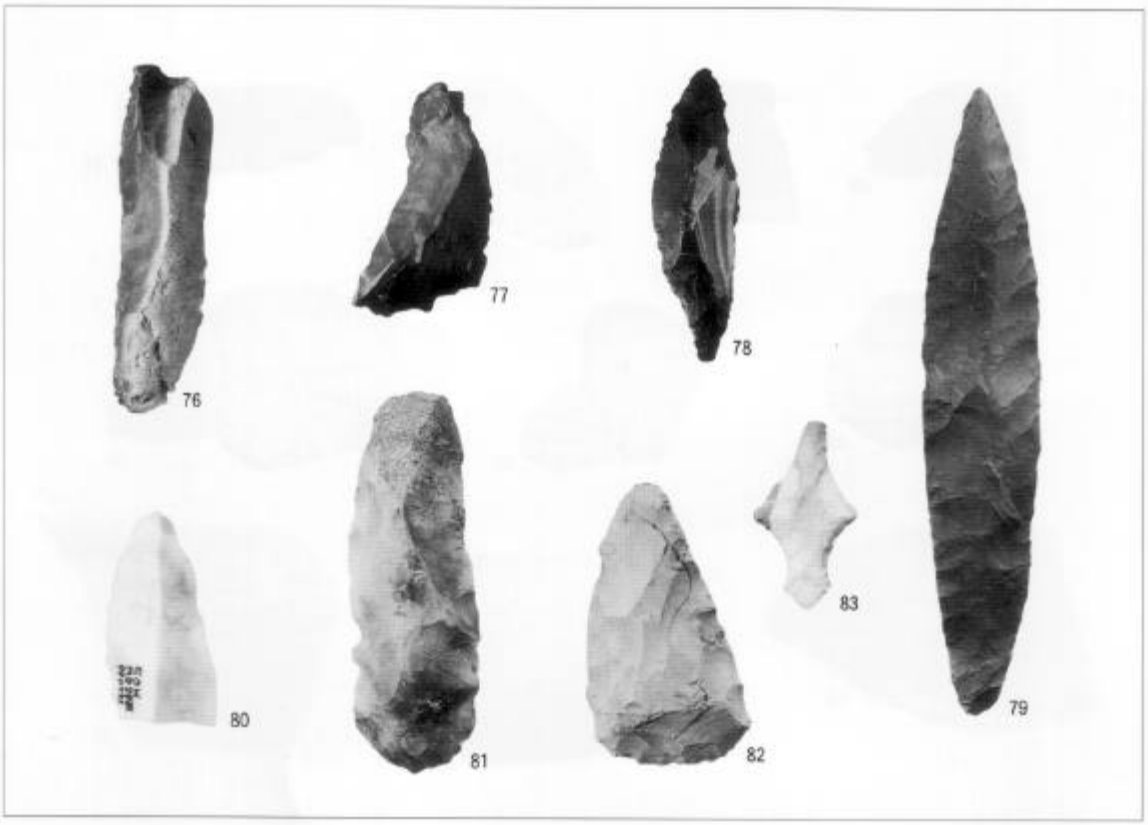


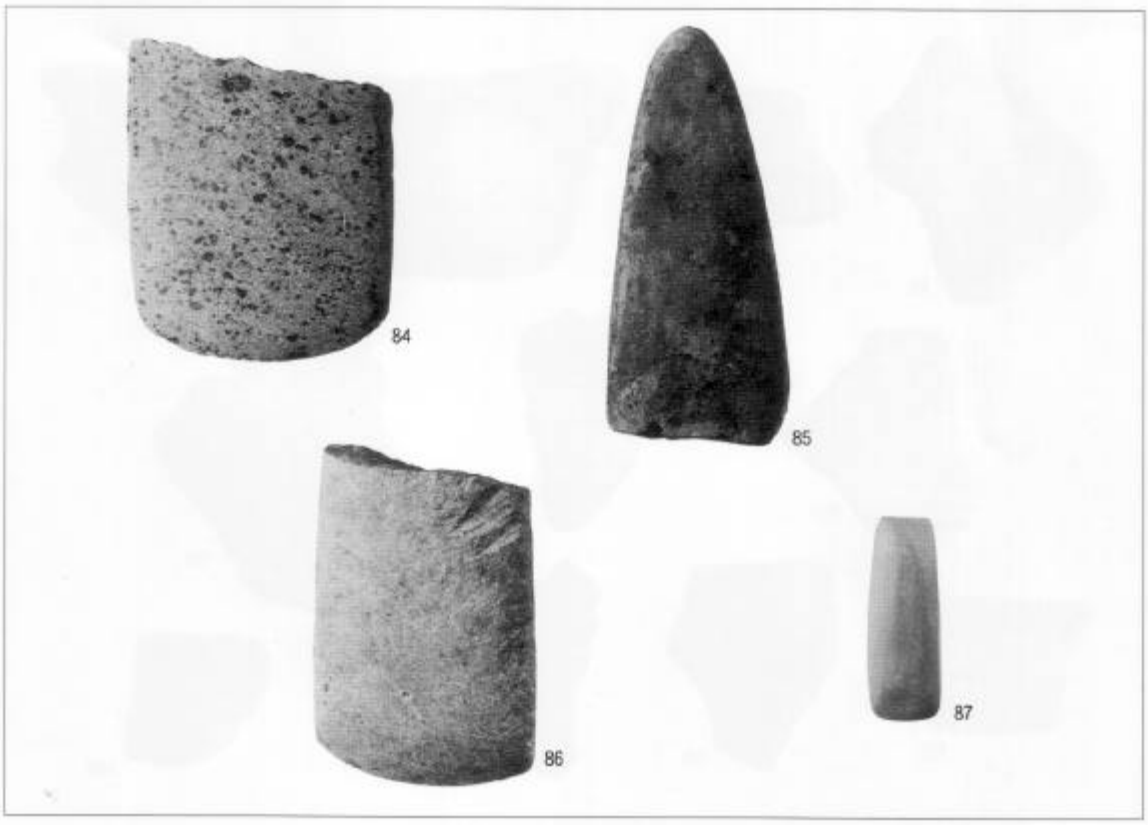
縄文時代遺構外出土遺物(2)石器



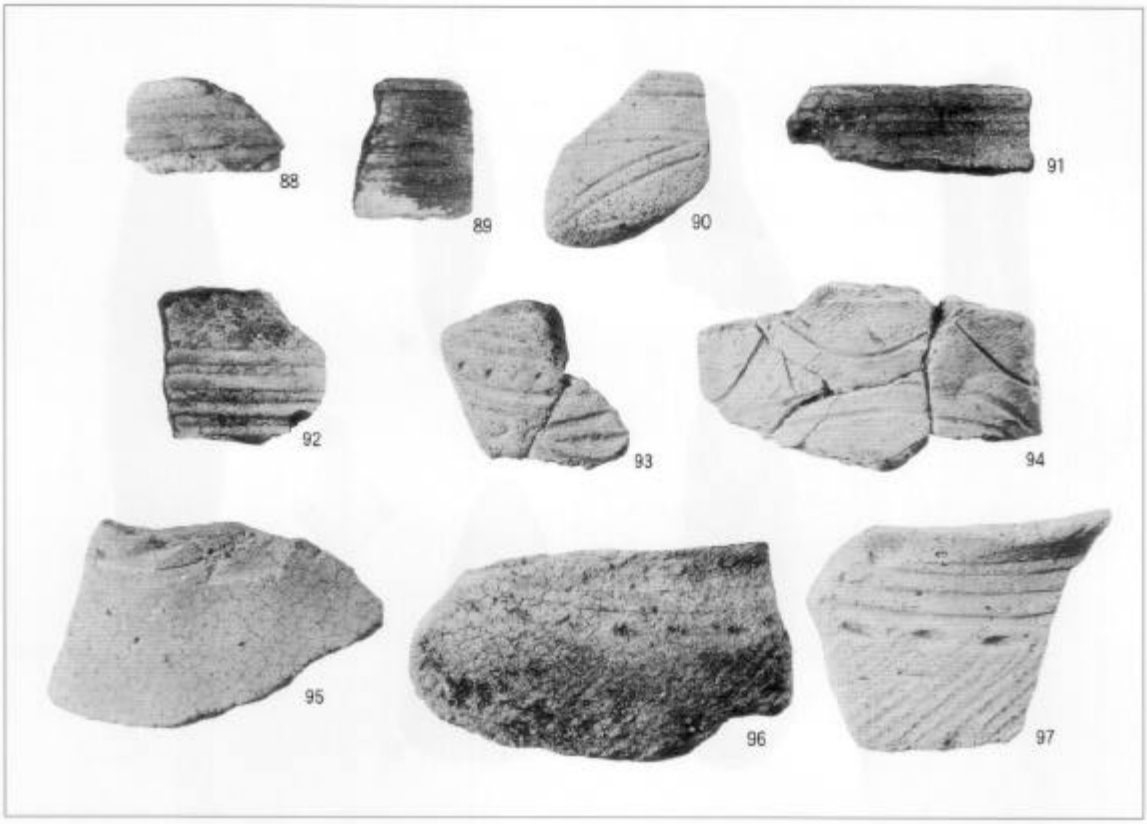


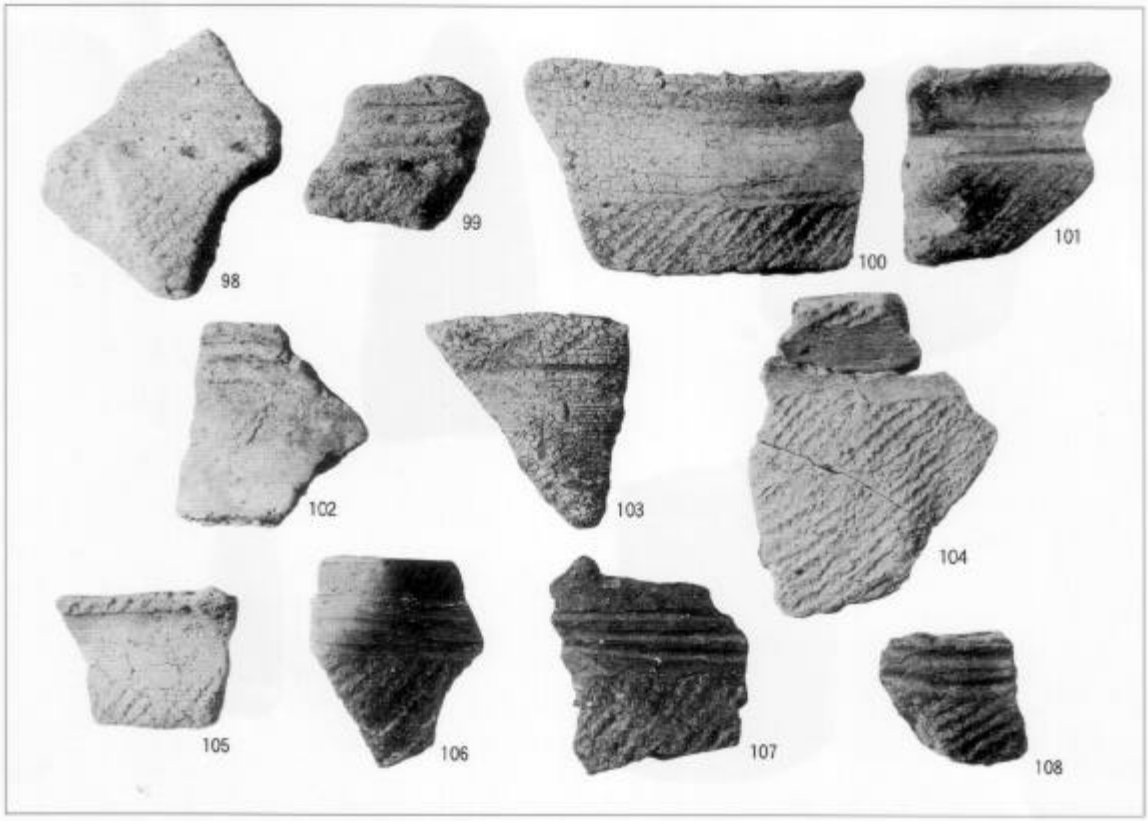
縄文時代遺構外出土遺物(3)石器



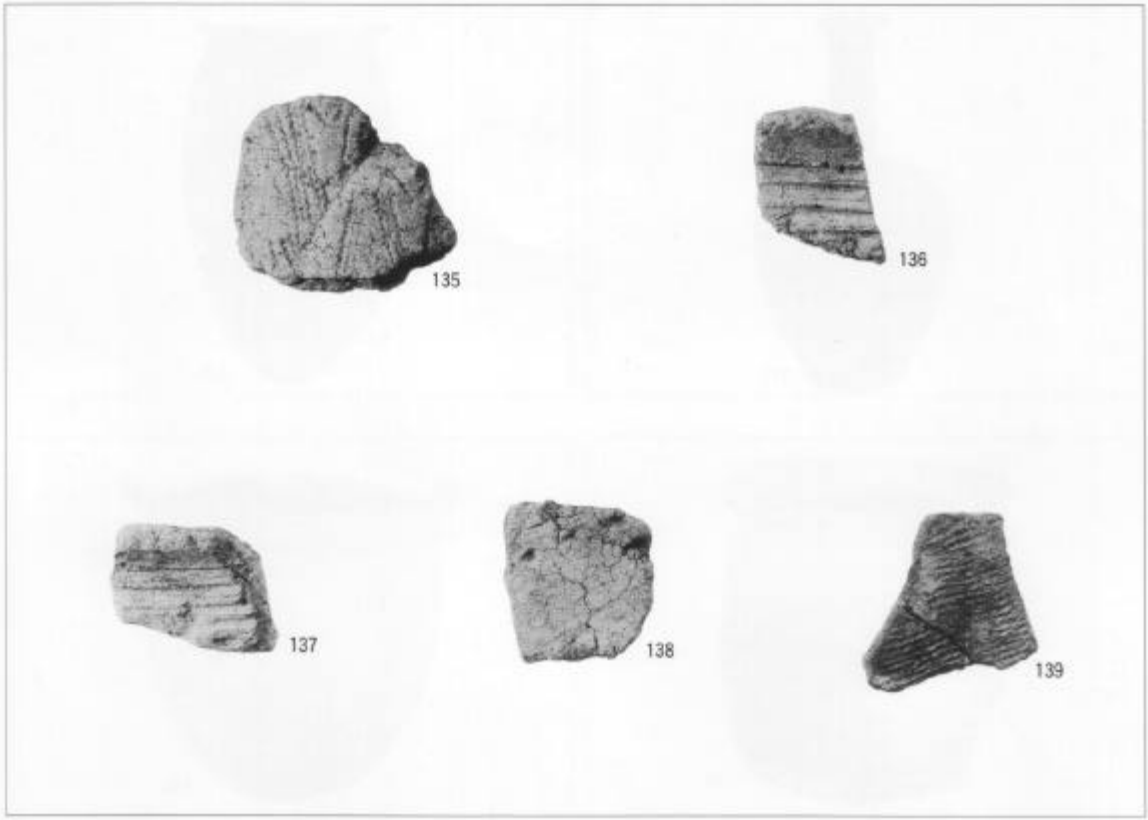


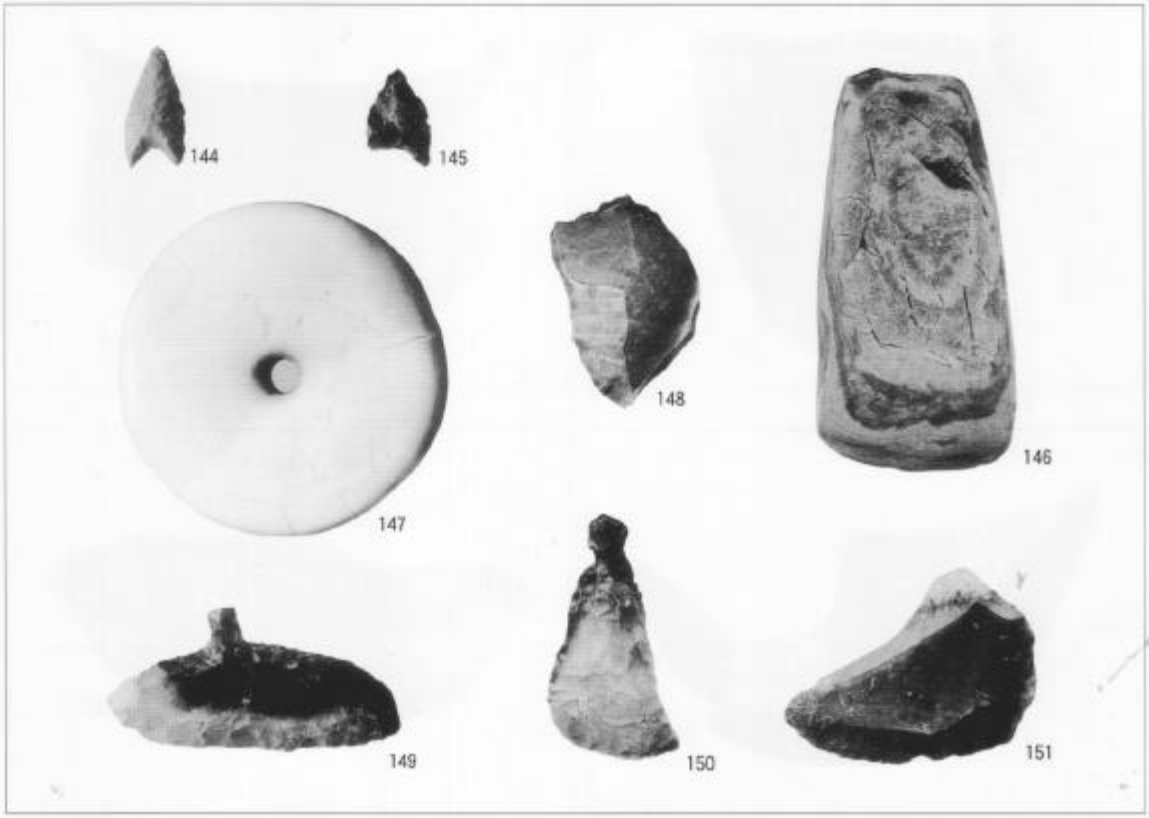
縄文時代遺構外出土遺物(4)石器





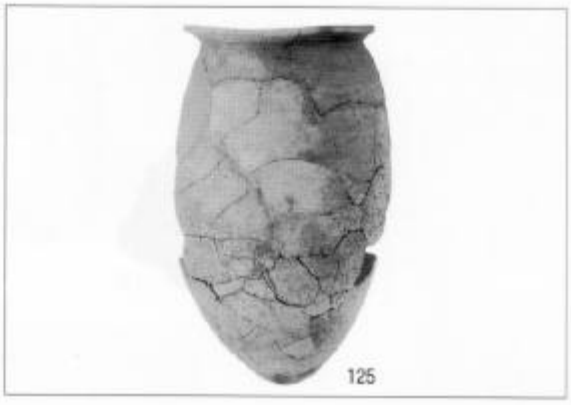
弥生時代遺構外出土遺物　土器





古代遺構内出土遺物　土器・石器

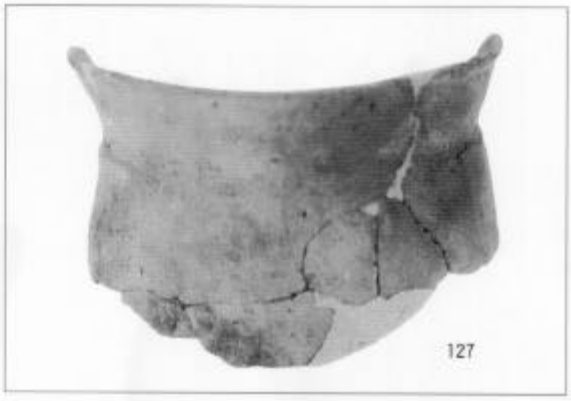
117


125

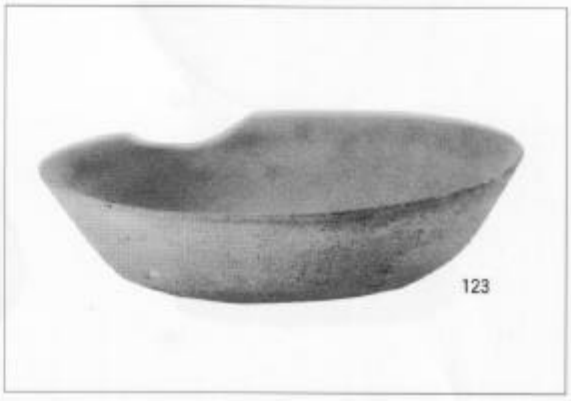
119

118

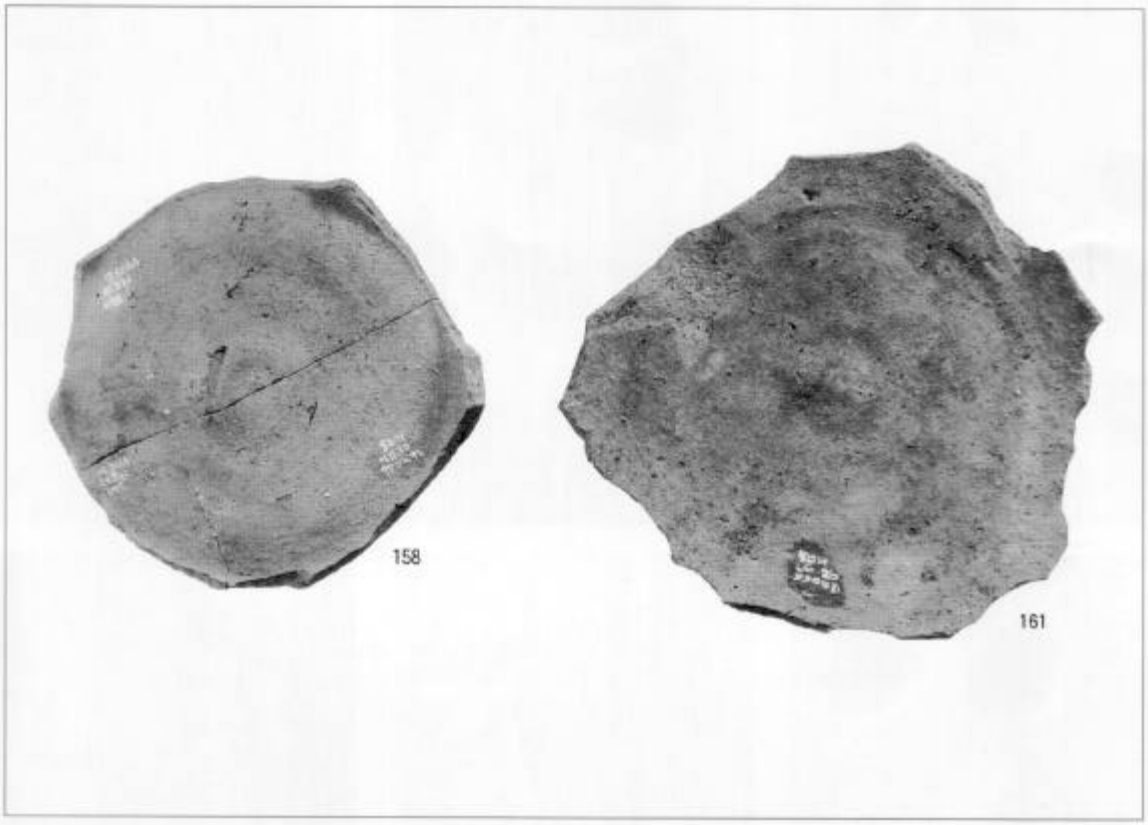
142

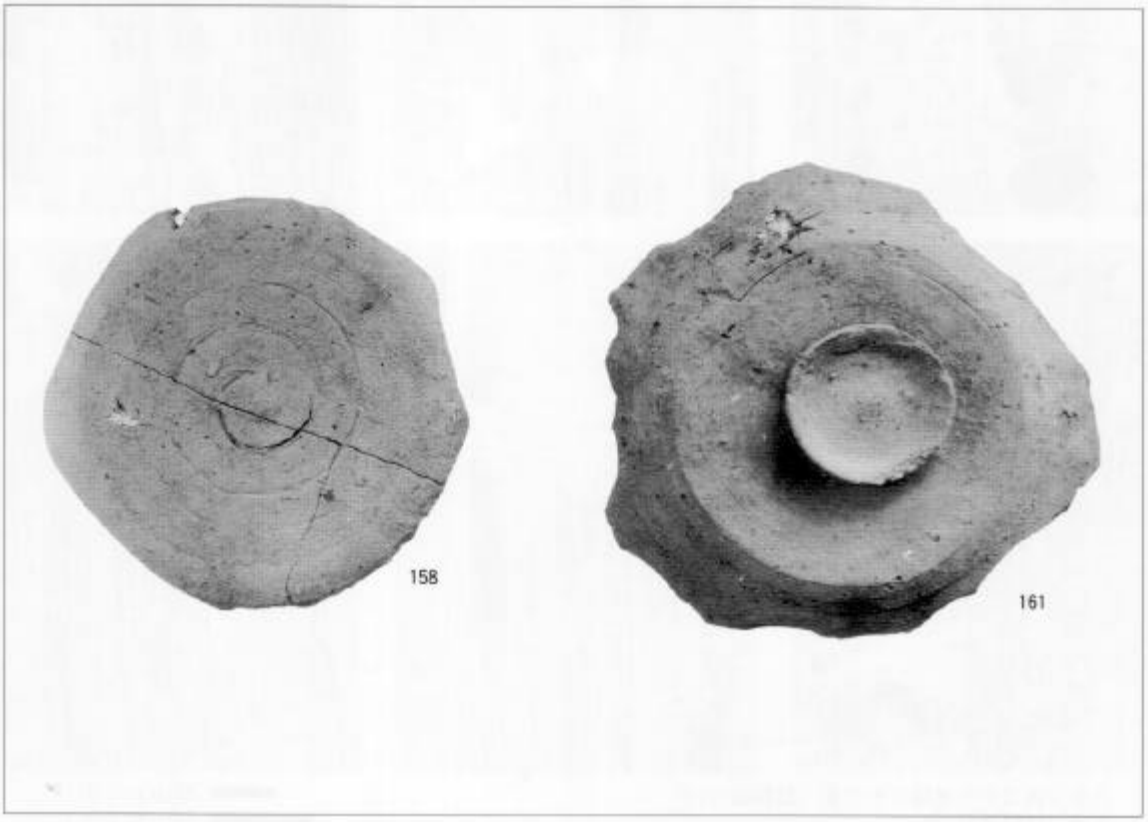

127

152


123

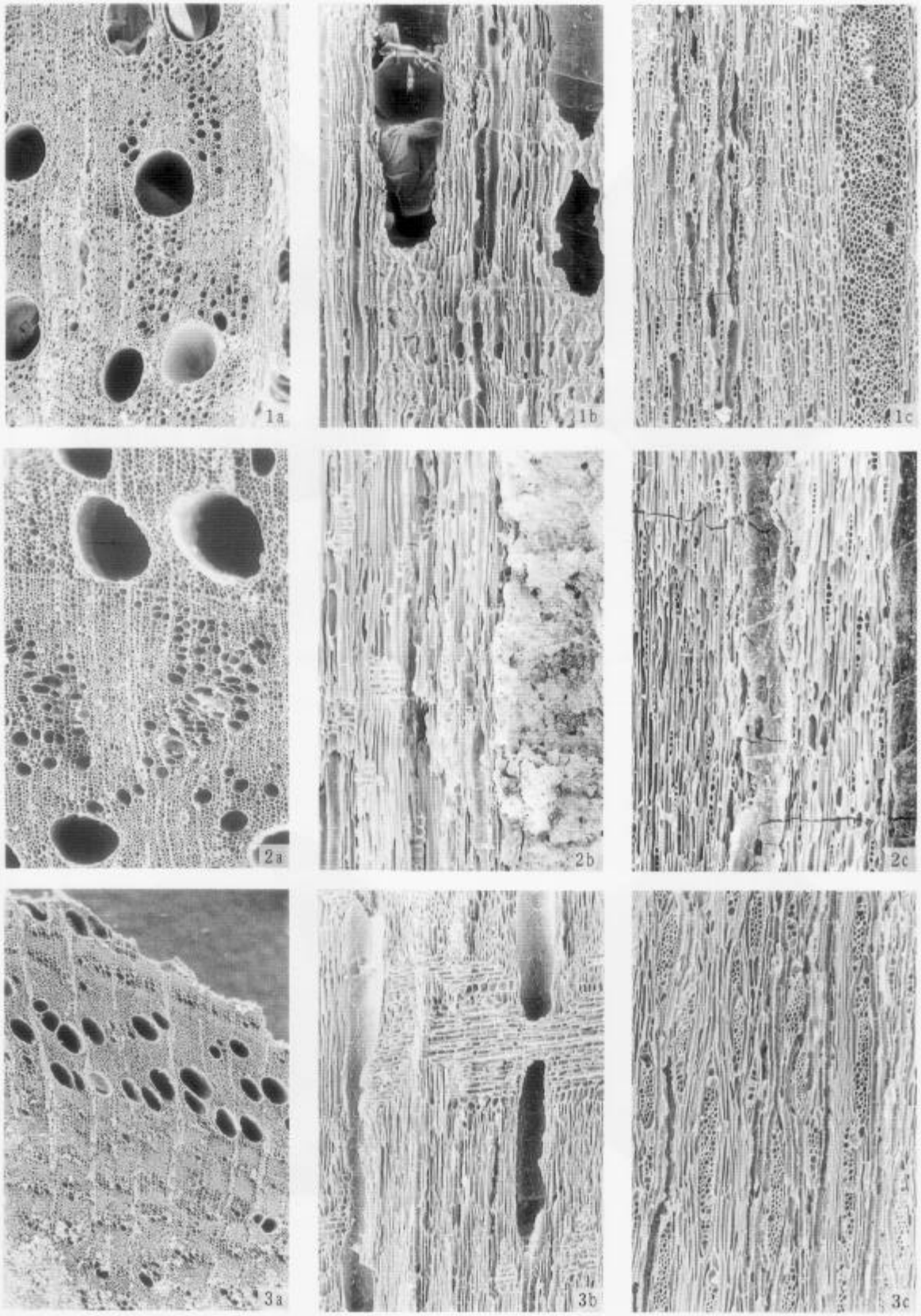
古代遺構内・遺構外出土遺物　土器





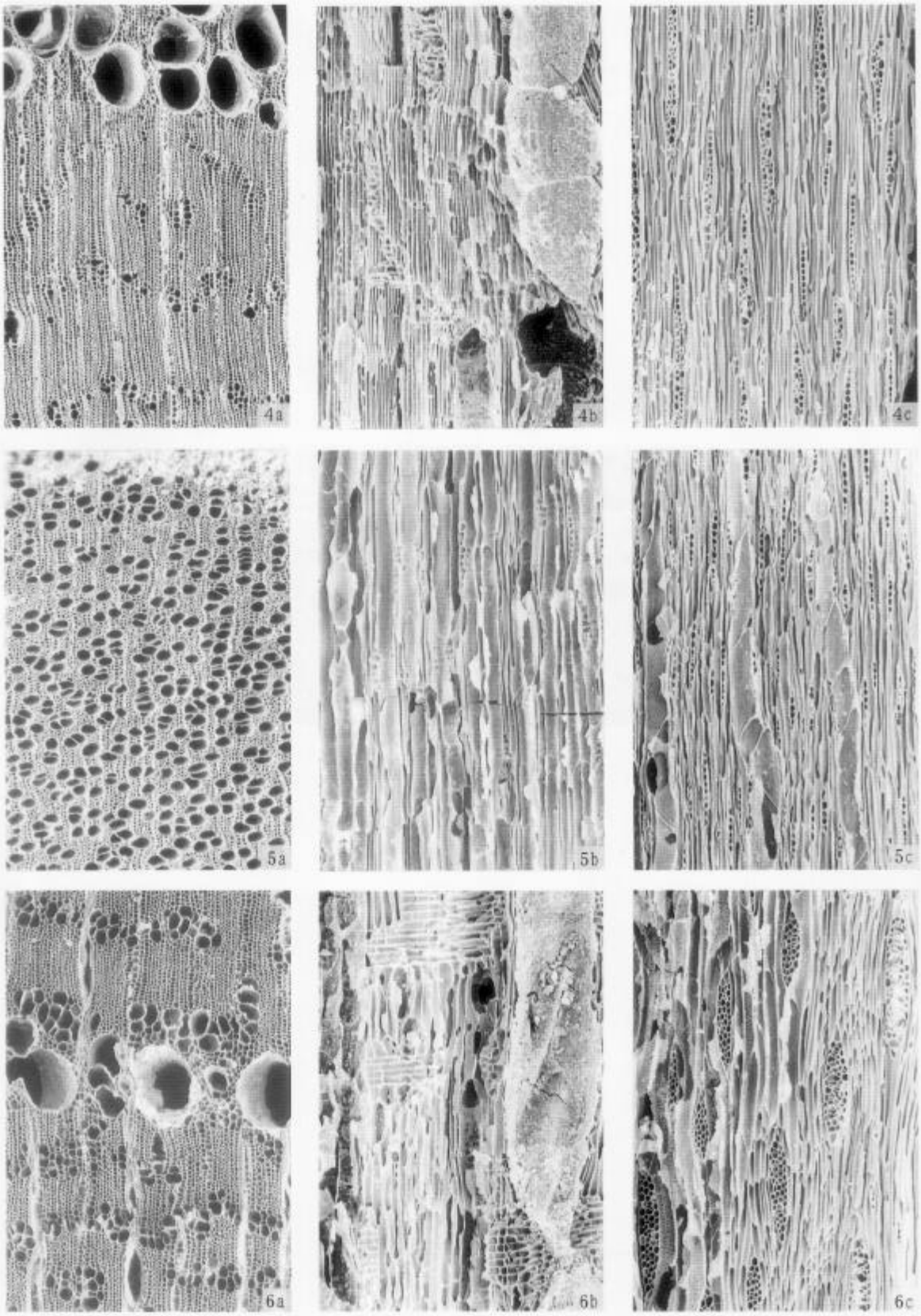
古代遺構外出土遺物　土器

図版34　炭化材(1)



1. コナラ属コナラ亜属コナラ節（試料番号19）
2. クリ（試料番号32）
3. ケヤキ（試料番号20）
　a：木口，b：柾目，c：板目

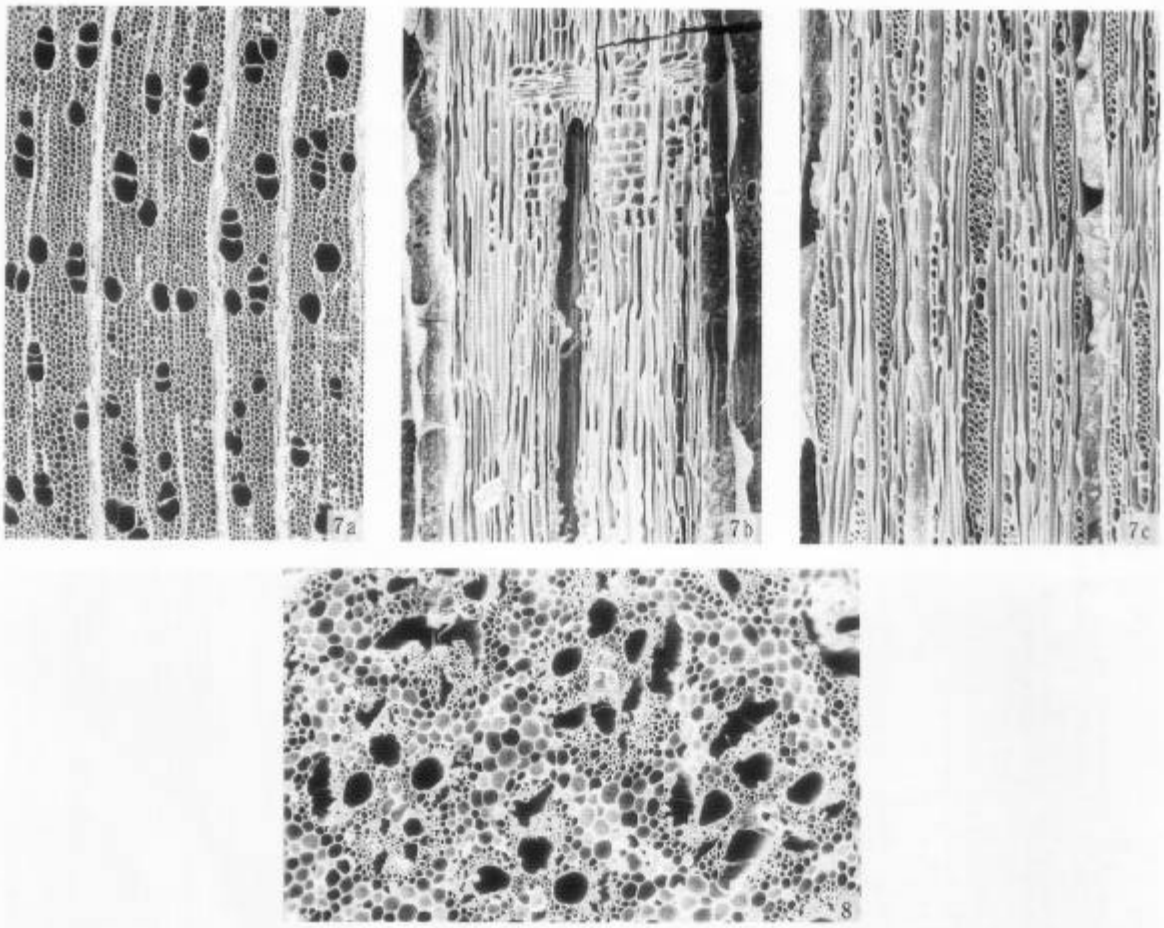
200μm：a
200μm：b, c



4. ヌルデ（試料番号29）
5. トチノキ（試料番号24）
6. ハリギリ（試料番号35）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b, c

図版36　炭化材(3)



7. エゴノキ属（試料番号19）
8. イネ科タケ亜科（試料番号22）
　a：木口，b：柾目，c：板目

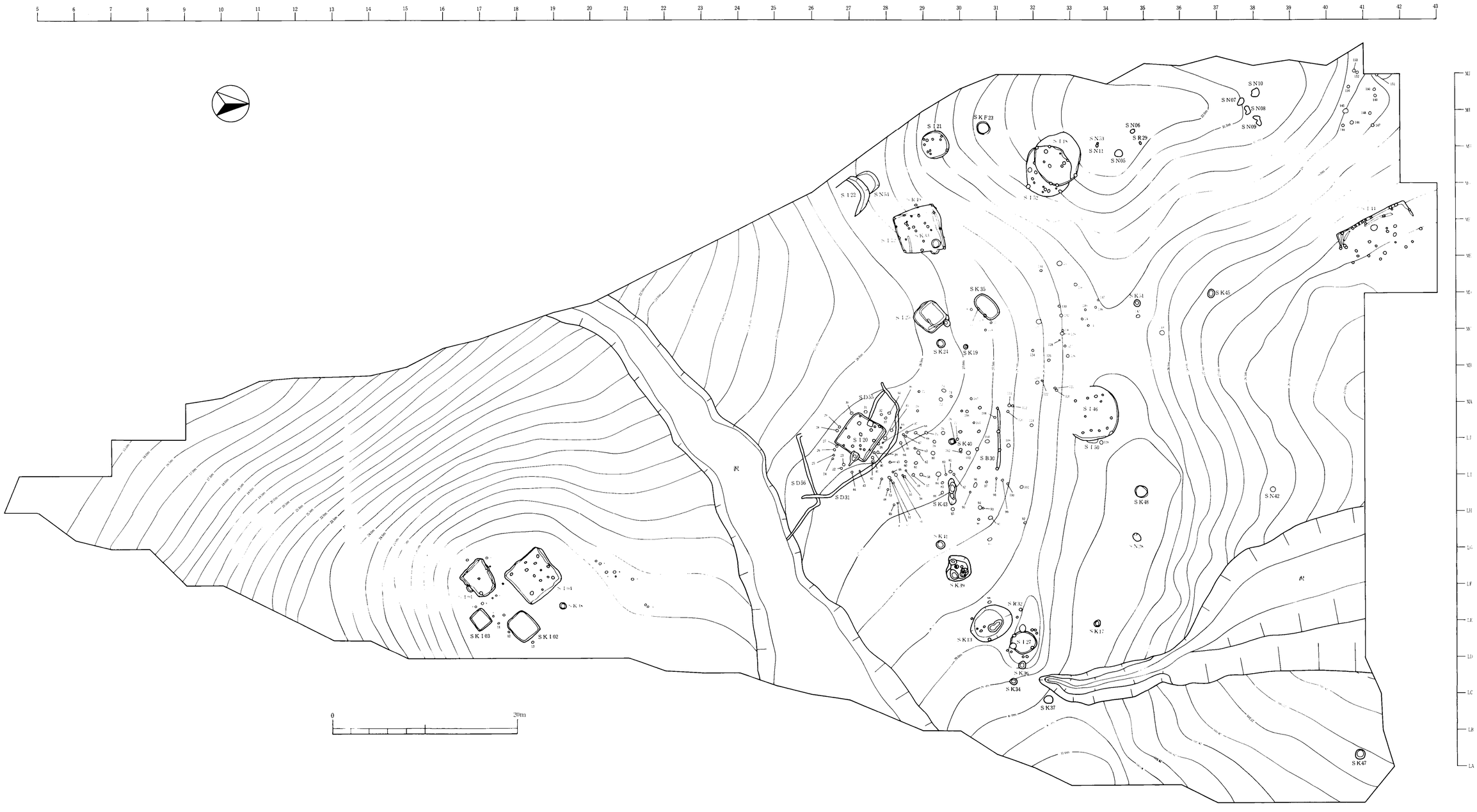
200 μm：7a, 8
200 μm：7b, 7c

報告書抄録

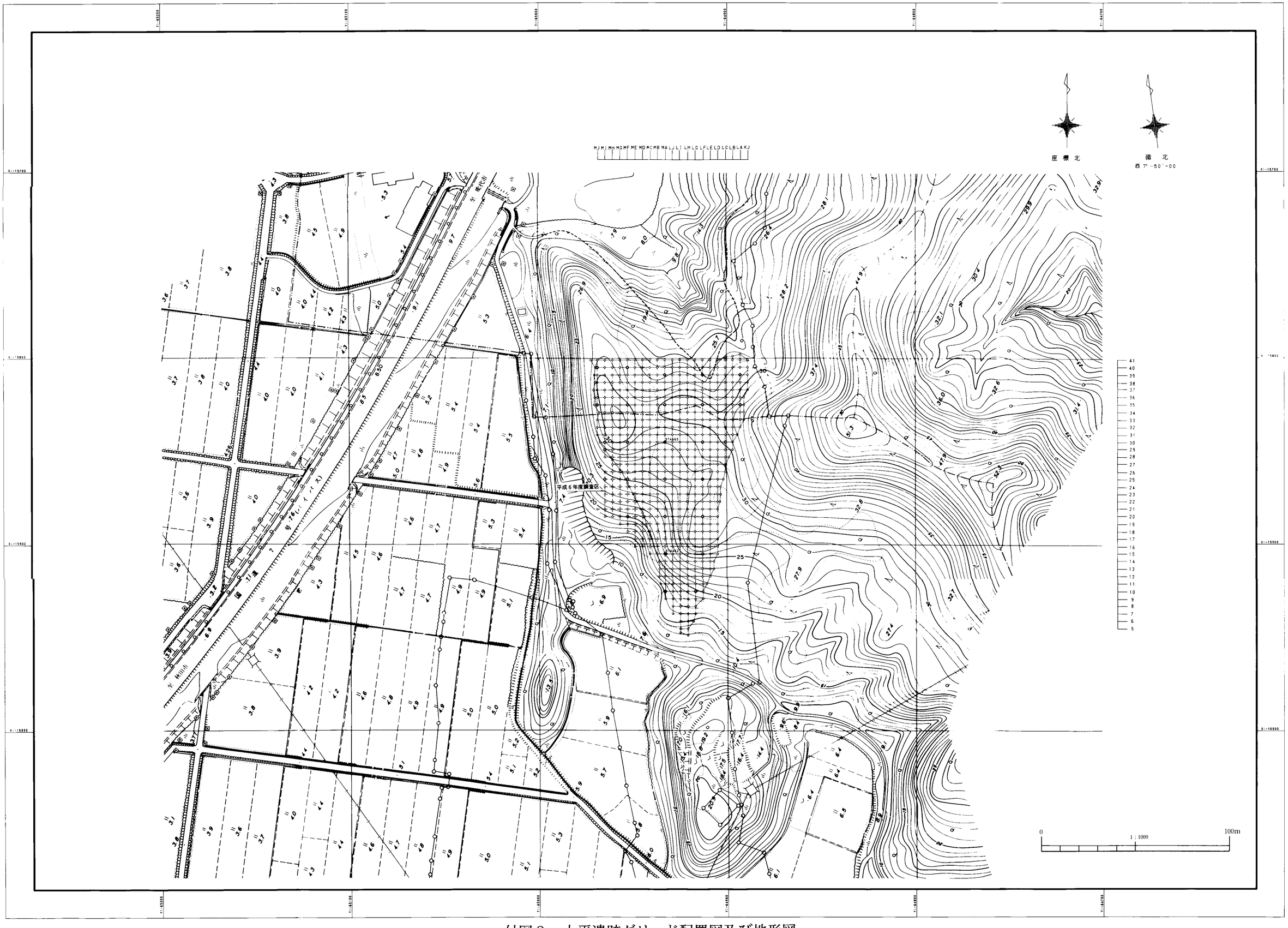
ふりがな	おおひらいせき
書名	大平遺跡
副書名	日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	X
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	329集
編著者名	柴田陽一郎・松本昌樹
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014-0802　秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20　TEL　0187-69-3331
発行年月日	西暦2001年10月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
おおひらいせき 大平遺跡	あきたけんあきたし 秋田県秋田市 かなあしいわせあざ 金足岩瀬字 まつだておおひら 松館大平 28-5外	52201 53362		39° 51′ 20″	140° 4′ 24″	19990517 ～ 19990910	6,900㎡	日本海沿岸 東北自動車道 建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大平遺跡	集落跡 集落跡	縄文時代 縄文時代末～弥生時代	竪穴住居跡、土坑 竪穴住居跡、土坑	土器・石器 弥生土器	時期は中期後半
	集落跡 散布地	奈良時代末～平安時代初め（８世紀末～９世紀前半） 中世（13～14世紀）	竪穴住居跡、土坑 竪穴状遺構 掘立柱建物跡	須恵器、土師器 須恵器は水瓶と墨書土器も出土 中国龍泉窯系の鎬蓮弁文碗１点	竪穴住居跡４軒は焼失家屋、うち１軒は周囲に溝を伴う



付図１　大平遺跡遺構配置図



付図２　大平遺跡グリッド配置図及び地形図

秋田県文化財調査報告書第329集
大平遺跡
日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書X